

札幌市文化財調査報告書

XIII

1976

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XIII

T210 遺 跡

1976・7

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和50年4月15日～5月31日まで実施した札幌市豊平区西岡の株式会社じょうてつ宅地造成予定地内に所在するT 210遺跡の発掘調査報告書である。
地番は、462-4番地である。
- 2 本調査は、加藤邦雄、高橋和樹、内山真澄、土田亜佐子の協力を得て札幌市教育委員会の上野秀一が担当した。
- 3 本書の編集は上野が担当したが、執筆は上野のほか加藤邦雄、高橋和樹、土田亜佐子で分担し、各文末に文責を明記した。
- 4 発掘調査、整理において下記の人々より助言と協力を賜った。
札幌商科大学教授
札幌市文化財保護委員 大場利夫
北海道教育委員会振興部文化課
北海道開拓記念館 野村 崇
北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 5 発掘調査には、下記の人々が従事した。
笠井衛二、長谷川克浩、山下芳教、藤井則明、市瀬知子、横地桂子、伊藤加代子、小尾栄子、佐々木裕美子、酒井洋子
- 6 挿図浄書には、小尾栄子（図面トレース）、佐々木裕美子（石器・土器実測・トレース）、長谷川克浩、藤井則明、山下芳教、伊藤加代子、齊藤みち子、右衛門佐時雄、岩川ひろみ、岡田知子（土器復元・拓本・写植・原稿清書その他）らが当った。
- 7 石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館赤松守雄氏にお願いした。
- 8 放射性炭素による年代測定は、学習院大学理学部木越邦彦研究室に依頼した。
- 9 図版1の航空写真は、札幌市企画調整局都市計画課より借用したものである。
- 10 発掘期間中、整理、報告書出版まで、(株)じょうてつ、東急建設には、たえざるご協力とご理解を賜ったことを記し、感謝の意を表する次第である。

凡 例

- (1) 挿図のピット実測図縮尺 20 分の 1, 炭焼窯址実測図縮尺 40 分の 1
- (2) 土器実測図縮尺 4 分の 1, 土器拓影図縮尺 3 分の 1, 土製品実測図縮尺 2 分の 1, 石器実測図縮尺 2 分の 1, 3 分の 1, 4 分の 1 (第 42 図)。
- (3) 石器説明中 a 面とは, 背面ないし実測図中の左側正面図をさし, b 面とは腹面ないし右側正面図をいう。
- (4) 石器の実測図の中で, 側縁に沿って実線を入れたものは, この部分が繰り返しの使用で摩減ないし細かい刃つぶれを生じていることを示しており, また図中の稜線とか剝離面に細線で示した部分は, 使用による擦痕とか磨耗部分を示したものである。
- (5) 遺構の表と図版の凡例に関しては, 各々に明記した。

目 次

第1章	発掘調査に至る経過	15
第2章	遺跡の位置と環境	17
第3章	発掘調査の方法と層準	
第1節	調査の方法	19
第2節	層準と遺物の出土状態	19
第4章	遺 構	28
第1節	土壌・石組・溝状遺構（表記載）	28
第2節	遺構の分類	
第1項	土 壌（墓）	95
第2項	石 組	112
第3項	溝状遺構	114
第3節	総括と問題点	
第1項	総 括	115
第2項	分布とグルーピング	124
第3項	比較考察	132
第4節	炭焼窯址	144
第5章	遺 物	151
第1節	土器群について	151
(1)	縄文早期～前期初頭（第Ⅰ群）	151
(2)	縄文中期（第Ⅱ群）	165
(3)	縄文晩期末～続縄文期（第Ⅲ，Ⅳ群）	172
第2節	土製品について	187
第3節	石器群について	189
(付)	T 210 遺跡A・B区表採の石器について	228
結 語		230
引用・参考文献		

挿図目次

巻首図版	13
第1図 遺跡付近地形図および試掘配置図(1:1000)	21
第2図 遺跡発掘区配置図および遺構関連図(1:200)	23
第3図 遺跡セクション図(Point A-D Line および Point E-H Line)	25
第4図 T 210 遺跡発掘区土器片出土分布図	27
第5図 第5, 18, 46, 67, 72, 91, 101, 155, 199号(A I型)ピット, 第55, 61号石組実測図	57
第6図 第48, 53, 66, 74, 79, 82, 99, 138, 163, 181号(A I型), 第80号(D型)ピット実測図	58
第7図 第6, 52, 59, 68, 77, 89, 119, 136, 192号(A I型)ピット実測図	59
第8図 第41, 85, 86, 123, 143, 157, 184号(A I型)ピット実測図	60
第9図 第118, 146, 147, 182, 195号(A I型), 第151号(A III型)ピット実測図	61
第10図 第185, 191, 193, 196号(A I型), 第15号(A II型)ピット, 第62号石組実測図	62
第11図 第8, 188号(A II型), 第2, 24, 30, 60, 71, 102, 142号(A III型)ピット実測図	63
第12図 第56, 90, 110, 112, 121, 124号(A III型), 第69, 129, 139, 150号(D型)ピット実測図	64
第13図 第9, 29, 111, 120, 145, 194号(A III型)ピット実測図	65
第14図 第44, 45, 65, 73, 113, 156, 158, 159, 178号(A III型)ピット実測図	66
第15図 第122号(A I型), 第7, 31, 160, 162, 189号(A III型), 第13, 103, 104号(A IV型)ピット実測図	67
第16図 第1, 105, 144, 190号(A IV型)ピット, 第54, 92号石組実測図	68
第17図 第49号(A I型), 第12, 38, 95, 98号(A IV型)ピット, 第11号石組実測図	69
第18図 第26号(A I型), 第4, 22, 25, 40, 114, 137, 149, 187号(A IV型)ピット実測図	70
第19図 第20号(A I型), 第16, 19, 21, 33, 50, 180, 197号(A IV型)ピット, 第42号石組実測図	71
第20図 第70, 78, 81, 133, 186号(A IV型)ピット実測図	72
第21図 第106, 107号(A I型), 第108号(A IV型), 第93, 100, 170号(B型) 第10, 83, 84, 134号(C型), 第47号(D型)ピット実測図	73
第22図 第14, 37, 51, 130, 131, 135, 140, 154, 168, 179, 198号(D型)ピット, 第35号石組実測図	74
第23図 第87, 88, 177号(D型), 第23, 58, 76, 116号(D型)ピット実測図	75
第24図 第17, 27, 28, 32, 34, 36, 39, 43, 57, 117, 172号石組実測図	76
第25図 第141, 167, 171号ピット(溝状遺構)実測図	77
第26図 遺構出土土器実測図(1)	78
第27図 遺構および発掘区出土土器実測図(2)	79
第28図 遺構出土土器拓影図(1)	80

第29図	遺構出土土器拓影図(2).....	81
第30図	遺構出土土器拓影図(3).....	82
第31図	遺構出土土器拓影図(4).....	83
第32図	遺構出土土器拓影図(5).....	84
第33図	遺構出土土器拓影図(6).....	85
第34図	遺構出土土器拓影図(7).....	86
第35図	遺構出土土器拓影図(8).....	87
第36図	遺構出土土器拓影図(9).....	88
第37図	遺構出土石器実測図(1).....	89
第38図	遺構出土石器実測図(2).....	90
第39図	遺構出土石器実測図(3).....	91
第40図	遺構出土石器実測図(4).....	92
第41図	遺構出土石器実測図(5).....	93
第42図	遺構出土石器実測図(6).....	94
第43図	T210遺跡土壌(墓)タイプ別分布図.....	117
第44図	T210遺跡焼土・焼石の分布図.....	120
第45図	T210遺跡の土壌(墓)の分布とグルーピング.....	126
第46図	X配石群遺構関連図(1:40).....	127
第47図	Y配石群遺構関連図(1:40).....	129
第48図	第1号炭焼窯址実測図.....	145
第49図	第2号炭焼窯址実測図.....	148
第50図	発掘区出土土器拓影図(1).....	152
第51図	発掘区出土土器拓影図(2).....	155
第52図	発掘区出土土器拓影図(3).....	163
第53図	発掘区出土土器拓影図(4).....	167
第54図	発掘区出土土器拓影図(5).....	174
第55図	発掘区出土土器拓影図(6).....	177
第56図	発掘区出土土器拓影図(7).....	179
第57図	発掘区出土土器拓影図(8).....	180
第58図	発掘区出土土器拓影図(9).....	181
第59図	発掘区出土土器拓影図(10).....	183
第60図	発掘区出土土器拓影図(11).....	184
第61図	土製品実測図.....	187
第62図	発掘区出土石器実測図(1).....	191
第63図	発掘区出土石器実測図(2).....	195

第64图	発掘区出土石器実測図(3)·····	196
第65图	発掘区出土石器実測図(4)·····	199
第66图	発掘区出土石器実測図(5)·····	201
第67图	発掘区出土石器実測図(6)·····	203
第68图	発掘区出土石器実測図(7)·····	206
第69图	発掘区出土石器実測図(8)·····	210
第70图	発掘区出土石器実測図(9)·····	213
第71图	発掘区出土石器実測図(10)·····	215
第72图	発掘区出土石器実測図(11)·····	217
第73图	発掘区出土石器実測図(12)·····	218
第74图	発掘区出土石器実測図(13)·····	220
第75图	発掘区出土石器実測図(14)·····	221
第76图	発掘区出土石器実測図(15)·····	223
第77图	発掘区出土石器実測図(16)·····	226
第78图	T210遺跡A・B区表採石器実測図·····	228

挿表目次

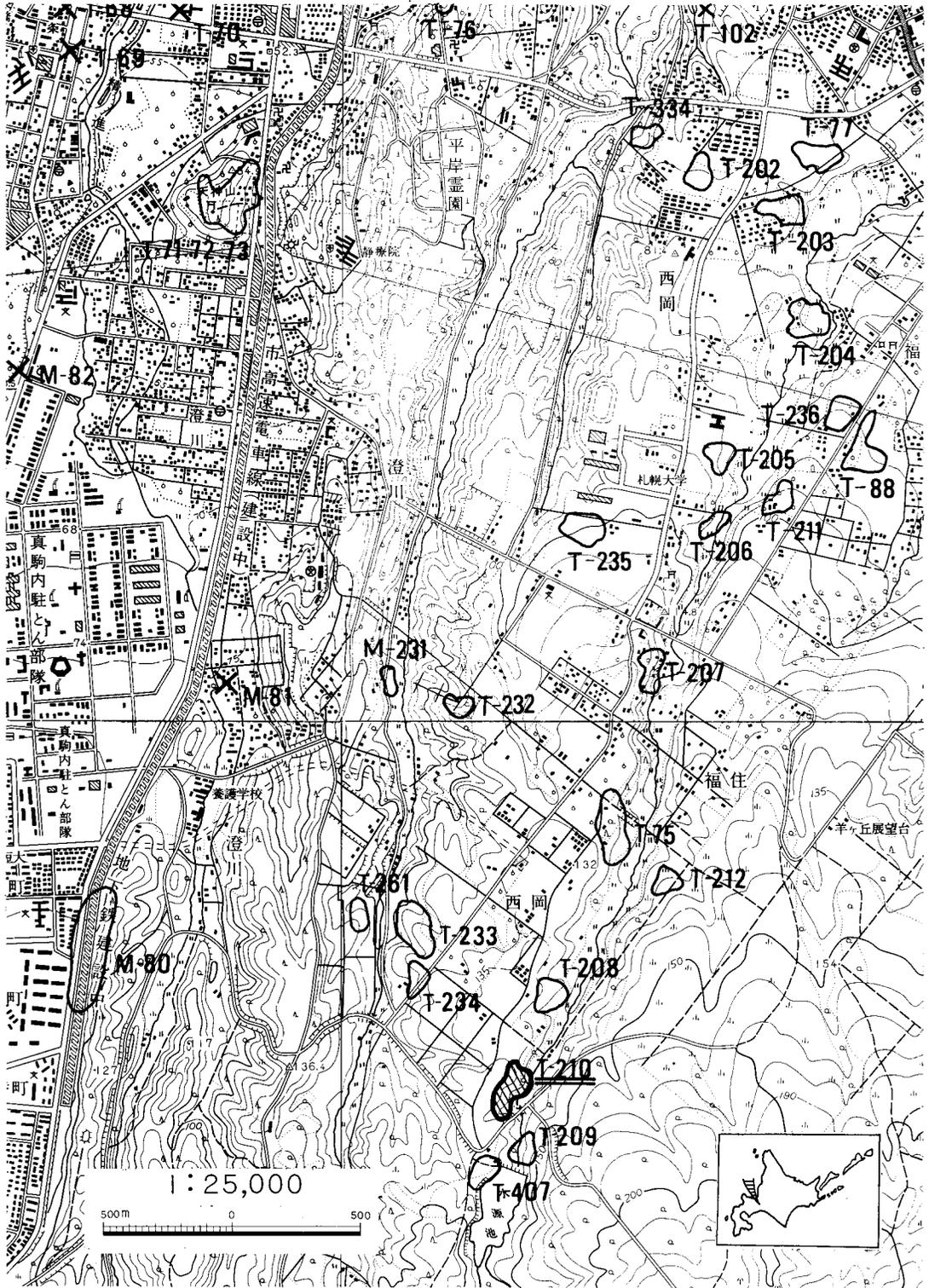
第1表	T 210 遺跡土壌層名一覧表	28
第2表	T210遺跡遺構スクリーン内訳表	29
第3表	T210遺跡焼土・赤色土一覧表	53
第4表	T210遺跡小ピット一覧表	55
第5表	T210遺跡のピットの形態と規模の分布図	116
第6表	T210遺跡遺構出土石器一覧表	233
第7表	T210遺跡発掘区出土石器一覧表	236
第8表	T210遺跡A・B区出土石器一覧表	245

図版目次

- 1 遺跡付近の航空写真（1：12,500）
- 2 A 遺跡遠景（南より）
B 遺跡全景（北西より）
- 3 A 遺構近景(1)（北東より，X配石群とS2，
S3群の一部）
B 遺構近景(2)（南東より，S1群）
- 4 A 遺構近景(3)（北西より，Y配石群の一部
とS5群）
B 遺構近景(4)（南西より，Y'群の一部）
- 5 A 遺構近景(5)（南西より，Z配石群とS7
群の一部）
B 遺構近景(6)（北西より）
- 6 A 第46号ピット（東より）
B 第101号ピット（南より）
C 第79号，第80号ピット（西より）
D 第5号ピット（北より）
- 7 A 第18号ピット，第61号石組（北より）
B 第82号ピット（南より）
C 第119号ピット（南より）
- 8 A 第143号ピット（南より）
B 第52号ピット（東より）
C 第184号ピット（南より）
D 第123号ピット（東より）
- 9 A 第196号ピット（東より）
B 第182号ピット（南より）
C 第2号ピット（南より）
D 第146号ピット（南より）
- 10 A 第15号ピット（北より）
B 第8号ピット（北より）
C 第188号ピット（北より）
- 11 A 第102号ピット（北より）
B 第56号ピット（北より）
C 第142号ピット（南より）
D 第30号ピット（北より）
- 12 A 第112号ピット（南より）
B 第90号ピット（東より）
C 第110号ピット（南西より）
D 第124号ピット（東より）
- 13 A 第111号ピット（西より）
B 第120号ピット（南より）
C 第9号ピット（北より）
D 第145号ピット（南より）
- 14 A 第158号ピット（南より）
B 第65号ピット（南より）
C 第73号ピット（南より）
D 第178号ピット（南東より）
- 15 A 第162号ピット（南より）
B 第160号ピット（南より）
C 第103号，第122号ピット（西より）
D 第189号ピット（南より）
- 16 A 第13号ピット（南より，ピット発掘前）
B 第13号，第31号ピット（北より）
C 第1号ピット（南より）
- 17 A 第105号ピット（南より）
B 第190号ピット（南より）
C 第95号ピット（南より）
D 第144号ピット（南より）
- 18 A 第11号石組，第12号ピット（東より）
B 第38号ピット（南より）
- 19 A 第98号ピット（南より）
B 第137号ピット（南より）
C 第187号ピット（南より）

- 20A 第40号ピット (東より, ピット発掘前) B 遺構出土土器片(7)
- B 第22号ピット (北より, ピット発掘前) 34A 遺構出土土器片(8)
- C 第4号ピット (北東より) B 遺構出土土器片(9)
- 21A 第22号ピット (東より) 35 遺構および発掘区出土土器(1) (Ⅰ, Ⅱ期)
- B 第149号ピット (南より) 36 遺構および発掘区出土土器(2) (Ⅲ期)
- C 第197号ピット (東より) 37 遺構出土土器(3) (Ⅲ期)
- 22A 第23号, 第50号, 第64号ピット (西より) 38 遺構出土土器(1)
- B 第19号, 第20号ピット (南東より) 39 遺構出土土器(2)
- 23A 第78号ピット (南より) 40 遺構出土土器(3)
- B 第70号ピット (西より) 41 遺構出土土器(4)
- 24A 第81号ピット (南より) 42 遺構出土土器(5)
- B 第133号ピット (南東より) 43 遺構出土土器(6)
- 25A 第180号ピット (南西より) 44A 遺構出土配石 (焼石)
- B 第58号ピット (北より) B 発掘区出土土器片(1) (第Ⅰ群)
- C 第76号ピット (南より) 45A 発掘区出土土器片(2) (第Ⅰ群)
- 26A 第170号ピット(1) (東より) B 発掘区出土土器片(3) (第Ⅱ群)
- B 第170号ピット(2) (南より) 46A 発掘区出土土器片(4) (第Ⅲ群)
- 27A 第100号ピット (北西より) B 発掘区出土土器片(5) (第Ⅲ群)
- B 第93号ピット (南より) 47A 発掘区出土土器片(6) (第Ⅲ群, 表面)
- 28A 第116号石組 (東より) B 発掘区出土土器片(6) (第Ⅲ群, 裏面)
- B 第32号石組 (北より) 48A 発掘区出土土器片(7) (第Ⅲ群)
- C 第28号石組 (西より) B 発掘区出土土器片(8) (第Ⅳ群)
- D 第27号石組 (北より) 49A 遺構および発掘区出土土製品(1)
- 29A 第57号石組 (南より) B 遺構および発掘区出土土製品(2)
- B 第43号石組 (南より) 50 発掘区出土土器(1)
- C 第62号, 第35号石組 (南より) 51 発掘区出土土器(2)
- D 第39号石組 (東より) 52 発掘区出土土器(3)
- 30A 第167号ピット (南西より) 53 発掘区出土土器(4)
- B 第171号ピット (西より) 54 発掘区出土土器(5)
- C 遺構出土土器片(1) 55 発掘区出土土器(6)
- 31A 遺構出土土器片(2) 56A 発掘区出土土器(7)
- B 遺構出土土器片(3) B 発掘区出土土器(8)
- 32A 遺構出土土器片(4) 57A 発掘区出土土器(9)
- B 遺構出土土器片(5) B 発掘区出土土器(10)
- 33A 遺構出土土器片(6) 58 発掘区出土土器(11)

- 59A 発掘区出土石器(2)
B 発掘区および遺構出土黒曜石棒状原石
- 60 石器拡大写真
- 61A 第2号炭焼窯址(1) (全景)
B 第2号炭焼窯址(2) (炊き口から煙道を望む)
- 62A 第1号炭焼窯址(1) (全景)
B 第1号炭焼窯址(2) (炊き口から煙道を望む)
- 63A 第1号炭焼窯址煙道(1) (正面より)
B 第1号炭焼窯址煙道(2) (上より)
C 第1, 2号炭焼窯址全景 (南より)



第1章 発掘に至る経過

札幌市教育委員会が埋蔵文化財に対する保護行政の体制を整備して、早くも3年が過ぎた。この間、教育委員会が主体となって発掘調査を実施した遺跡は、十数カ所にもものぼり、その調査結果を収録した『札幌市文化財調査報告書』もすでに12冊を公けにすることができた。

昭和48、49年の2年間は、各種開発事業に伴う工事中に見えられた遺跡の発掘、あるいは工事直前になって破壊される遺跡の存在を知るなど、調査員一同が東奔西走の毎日であった。さらに加えて保護行政の最も基本的な資料となる埋蔵文化財包蔵地台帳、ならびに分布図の作成など、身体が休まる間もない程の毎日であったといっても過言ではなかろう。このような過酷な任務にあって、調査員の中には数ヶ月の入院加療を余儀なくされたもの、あるいは入院直前に追い込まれる者などが続いた。しかしながら、このような激務を何とか乗り越えて埋蔵文化財分布調査を完了し、その台帳と分布図を公けにし、発掘調査結果のすべてを報告することができたのは、調査員一同が30才前の機動力あふれる年代で構成されていたことと、お互いの力強い結束によるものといえよう。

この厳しい2年間の努力の結果、大規模開発予定地内に存在する埋蔵文化財の取り扱いについては、工事着工前はかなり時間的余裕を見込んだ事前に、教育委員会に相談が持ち込まれるケースが多くなりつつある。本書に報告するT210遺跡についても、「株式会社じょうてつ」が、この遺跡を含む一帯に住宅団地を造成する計画を有し、昭和49年秋に、教育委員会にその取り扱いについて協議を求めてきたものである。教育委員会としては、当然のことながら、この遺跡一帯の現状保存について要望したのである。しかし附近一帯がかなりの傾斜地であるところから、遺跡部分を残して他の造成を実施することは、技術的に困難であること、造成工事を中止することは、種々なる社内事情から不可能であること等々により、次善の策として発掘調査を実施することもやむなしとの合議に達したのである。

ただ、実際の発掘調査にあたっては、調査員一同の若さに起因する手違いが随所に現れ、調査の進行に支障をきたしたところもある。その最も大きなものは、予備調査が不完全であったために、予想に反して多くの遺構が発見され、調査日数と調査費用に不足を生じ、かなり厳しい条件のもとで、調査を行なわざるをえなかったことである。

機動力にあふれる若さというものは、時として大きな誤りを犯すこともある。発掘調査そのものについては、調査員一同がある程度の力と認識をもっているとしても、行政調査にあたっては、それに加えて予算の積算、調査日数の予測、人員の動員計画等の総合的な資質が要求される。これらは、若さのみでは補えない大きな経験が必要とされよう。同じ誤ちを二度と犯さないように努力しながらも、今後とも幾多の試行錯誤を繰り返しながら前進しなければならぬものと覚悟している。大方の暖い御叱声と御指導を願ってやまない。

最後に本調査にあたって種々御援助賜わった「榊じょうてつ」，北海道教育委員会文化財保護主事の先生方をはじめ，多くの皆様方に衷心より謝意を表する次第である。 （加藤 邦雄）

第2章 遺跡の位置と環境

(巻首図版, 図版1, 2A)

本遺跡は、札幌市豊平区西岡 462 番地の 4 に所在する。

平岸から一般道々西野白石線を東へ進み、市道月寒西岡線と交わる所で北に折れ、この月寒西岡線の終わる市道月寒西岡線と澄川水源地連絡線の道路に挟まれた所に本遺跡はある。本遺跡の北側 300 m 程の所は、市水道局の西岡水源地である。

本遺跡をのせる台地一帯は、いわゆる「野幌丘陵」といわれるものの西端に当たっている。遺跡は、月寒川と望月寒川によって解析された台地上にあり、月寒川の左岸、東側向きの傾斜地上に立地している。この月寒川は、遺跡地付近で西に大きく蛇行しており、この部分にややせり出した暖傾斜の舌状台地状の所に今次発掘地点がある。

T 210 遺跡と称される遺跡は、前述した通り市道澄川水源地連絡線と月寒川とに挟まれた一帯をさす名称で、標高は 145~133 m である。今回調査した地区は、この内株式会社じょうてつ宅地造成予定地内の南東部の月寒川よりの部分の標高 139~133 m の範囲である。

なお、市道澄川水源地連絡線の南東部分——標高 145~140 m の所を仮に家を境に南西部分を A 地区、北東部分を B 地区とすると、両地区からも今次調査地点とほぼ同時代の遺物が出土している。ただ B 地区の方が分布の密度は濃い。両地区の資料の一部は第 78 図に示した。

この月寒川沿いには、巻首図版に示したように数多くの遺跡がある(札幌市教育委員会 1976)。左岸には、本遺跡のほか T 407, T 208, T 75, T 207, T 205, T 204, T 203, T 77 の諸遺跡、右岸には T 209, T 212, T 211, T 88, T 236 の諸遺跡がある。この内、時代の判明しているのは、T 75, T 206, T 203, T 77 の 4 遺跡で、各々縄文中~晩期、縄文中期、続縄文期、縄文早・中期である。また、巻首図版からはずれる下流の方にも、26 の遺跡が月寒川の段丘上にある。左岸に 24 ヲ所、右岸に 2 ヲ所である。時代は、縄文中期の例が 8 例で一番多く、縄文早、同後期、続縄文期、擦文期まで幅広い時代にわたっており、その内 S 299 遺跡は縄文早・中期、T 151 遺跡は縄文中・続縄文・擦文期の遺跡である。あと、昭和 47 年に調査した白石神社遺跡(S 94 遺跡)(加藤・上野・羽賀 1973)も、この川の左岸段丘上の上のっている。なお、S 91, S 96, S 103 遺跡では、狭長な石刃とか石刃槍が表採されていて、本地域に石刃鎌文化の遺跡があった可能性を示唆している。

この小河川によって細かに解析された野幌丘陵一帯は、市内域だけ 130 ヲ所余の遺跡を数えることができ、市内においても西区域をしのぐ最大の遺跡地が所在する。このことからこの丘陵とそこを流れる大小の河川が古代人にとって格好の生活の場を提供していたことが判る。

本遺跡一帯の表層地質は、月寒火山灰層〔TK〕であって、粘土化した火山灰層が分布する。この堆積物の年代は、上部洪積世末期あるいは沖積世の初期と考えられている(土居・小山内 1956)。

本遺跡は、後述する通り縄文晩期末~続縄文期初頭の土壌墓を中心とした遺跡で、これに縄文早期

～前期初頭の土壙墓と縄文中期の遺物が出土している。この縄文晩期末から続縄文期初頭頃の時代は、花粉分析では約2,500年B.P.頃から始まる *Quercus-Abies* 帯の時期に相当し、現在の札幌周辺と変らない植生であったようである（五十嵐・熊野 1974）。（上野 秀一）

第3章 発掘調査の方法と遺跡の層序

第1節 調査の方法（第1，2図，図版2B）

今回の調査は，株式会社じょうてつの宅地造成工事にもなう事前調査で，本調査に先だつて遺跡の掘り出しの範囲が明確でなかったため，工事予定地内の内，標高134 m以上の地域全面にわたりグリッドを組み，試掘調査を行った。グリッドの設定は，基本グリッドを10×10 mとし，これをさらに2×2 mに細分した。基線は，工事予定地の長軸側限界より約1 m程離れた所においており，N 49°Wをはかる。グリッドの各々の呼称は，第1，2図の通りである。

試掘調査は，10 mの基本グリッド内，2 m角の小グリッドを1，2個開ける密度で総数約90個を開けたが，その結果遺跡の主体部は，XIII～XVI-G～Kの21大グリッドであることが判明した。この範囲から縄文早期～前期初頭，縄文晩期末～続縄文期初頭の土壙墓などと縄文中期の遺物が多数検出されている。

これ以外にも，I-I-1，VII-B-1，XXII-E-21，XXIII-G-21区から続縄文期の土器片，V-H-1区から縄文中期と続縄文期の土器片が若干出土している。

なお，遺跡の主体部は，総面積にして約1,660 m²で，全面発掘している。また，第1図で目の荒いスクリーンをかけた所は，調査終了後，調査上の遺漏がないよう周辺をブルドーザーで削土した所である。この結果，その南西部分で幾つか土壙が検出された。

第2節 層準と遺物の出土状態（第3，4図）

今次調査地点の地形は，前述した通り，北進する月寒川がやや西に蛇行する所にせり出した暖傾斜の舌状台地である。標高にして，137.700 m～138.800 mの範囲であり，台地の上と下との比高は約4 mである。舌状地先端と月寒川との比高は約5～6 mである。細かくみると遺跡地は，北西から南東へと高さを減じると同時に中央部付近がややくぼんだ地形をしている。

第3図に示したのは，本遺跡の縦と横の縦断セクションである。1本は，XIV-G-5区南東壁からXIV-K-5区南東壁（Point A-Dセクション）までとっており，もう1本はそれに直交して，XIV-H-11区北西壁からXVIII-H-11区北西壁（Point E-Hセクション）までとっている。これをみると，本遺跡の基本的層堆積は，上から以下のように分層できる。

第I層：耕作土層

第II層：黒色土A層

第III層：暗黒褐色土層

第IV層：暗黄褐色粘質土層（漸移層）

第V層：黄褐色粘土層（地山）で、月寒火山灰層〔TK〕に相当すると思われる。

遺跡の北西部から南東部にかけてのPoint A-Dセクションでは、第V層上面も次第に高さを減じると同時に、その上に堆積している層も厚さが次第に薄くなり、XIV-I-15区付近ではほとんど耕作土のみになってしまう。一番厚いXIV-G-5区では、耕作土32cm、第II層17cm、第III層13cm程の厚さを測る。なお、XIV-K-5区の下部の攪乱は、第2号炭焼窯址によるものである。

Point E-Hセクションは、第II、III層は中央部に厚く、両端に行くに従い漸次厚さを減じている。北東端は、層厚が増すが、これはこの部分から北東側の谷に向ってまた下っているため、この部分では耕作土と第II層の間に白灰色の火山灰（二次堆積？）の堆積が認められる。

遺物は、I期の縄文早期～前期初頭とII期の縄文中期の資料は、確認された限りでは第IV層と第V層上面にかけて出土している。ただし、II期の資料の包含層準は、第III層まで及ぶ可能性もあるが、出土資料が少なかつたため明確ではない。III期の縄文晩期末～続縄文期初頭の資料は、第II層に一次的包含層準があると思われるが、第III層（上部）にも包含されているかどうかは確証は得ていない。Point E-Hセクションには、第170、3、10、1号のピットがかかっているが、このセクションでみると、その掘り込み面は第II層中ないしは第III層上面で、ここがIII期の生活面であつたろうことが推察される。後述する石組のあつたレベルもこの面である。

第4図は、発掘区出土の土器片を各区毎に時代別けして、その数を示したものである。表採・出土区不明を除いた破片総数は、約2,870片で、内

I期 縄文早期～前期初頭……237片

II期 縄文中期……319片

III期 縄文晩期末～続縄文期初頭……2,314片の内訳になる。

縄文早期～前期初頭では、その分布の傾向は、XIV-H-15、20、25区とXV-I-21区～XV-J-7、8区付近に分布の密度が濃く、それを中心に分布を拡げている。あとは散発的である。

縄文中期は、XVI-G-16区、XV-H～XV-I区にかけてに分布の中心があるが、ほかの区でも数少ないながら幅広く出土している。

縄文晩期末～続縄文期初頭の資料はXV-H、XV-I、XV-J区などに特に多いようである。しかし、前二期に比べてこれ以外の区からも数多くの資料を検出できた。

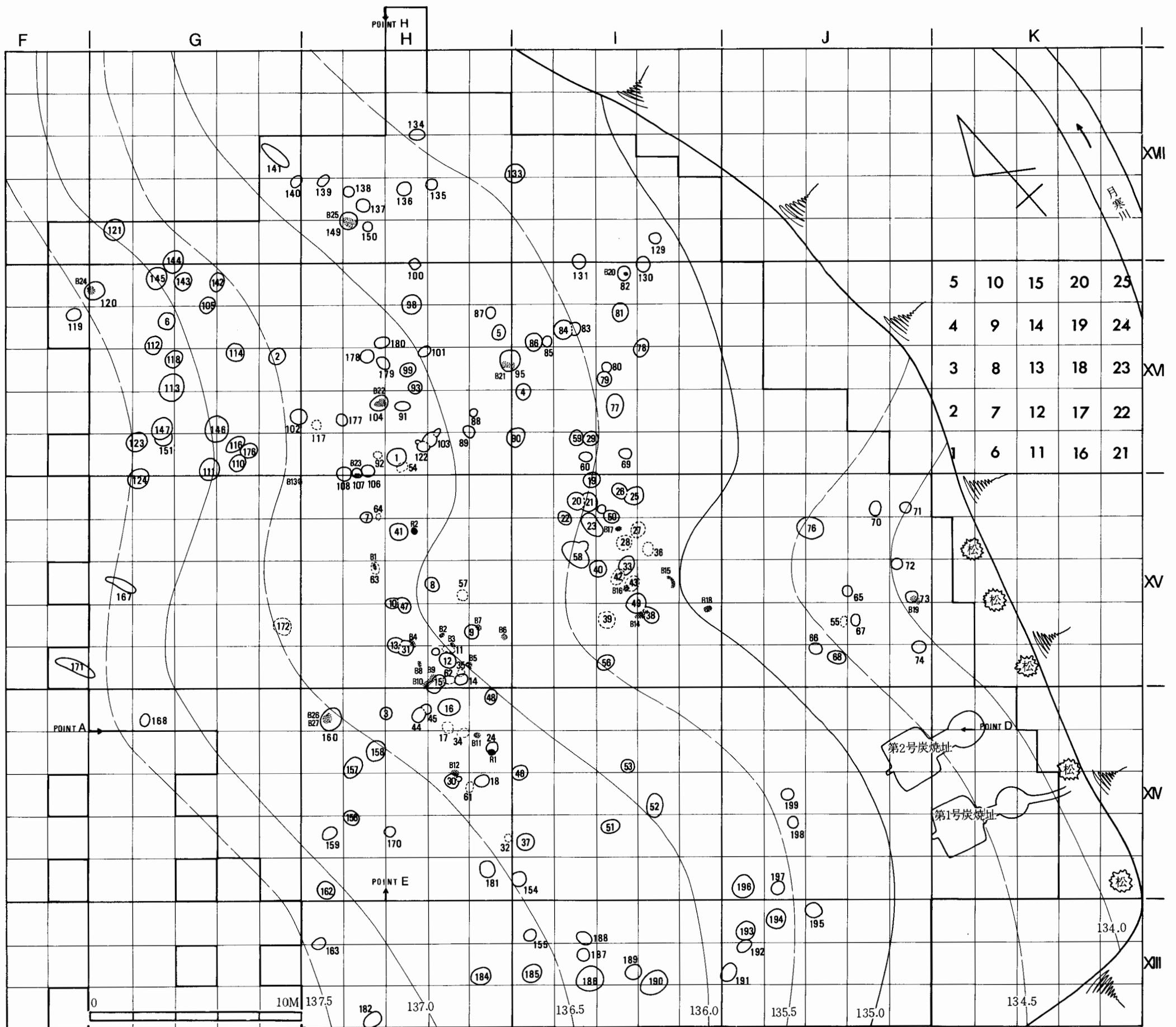
これらの遺物の密集状態は、後述するX、Y配石群と称した石組ないし配石を数多く有する土壌が集中した地区と一致している。

なお、XIII-H～J区においては、土器片の記載がないのは、前述の通りこの部分の上層をブルドーザーで削土したためである。

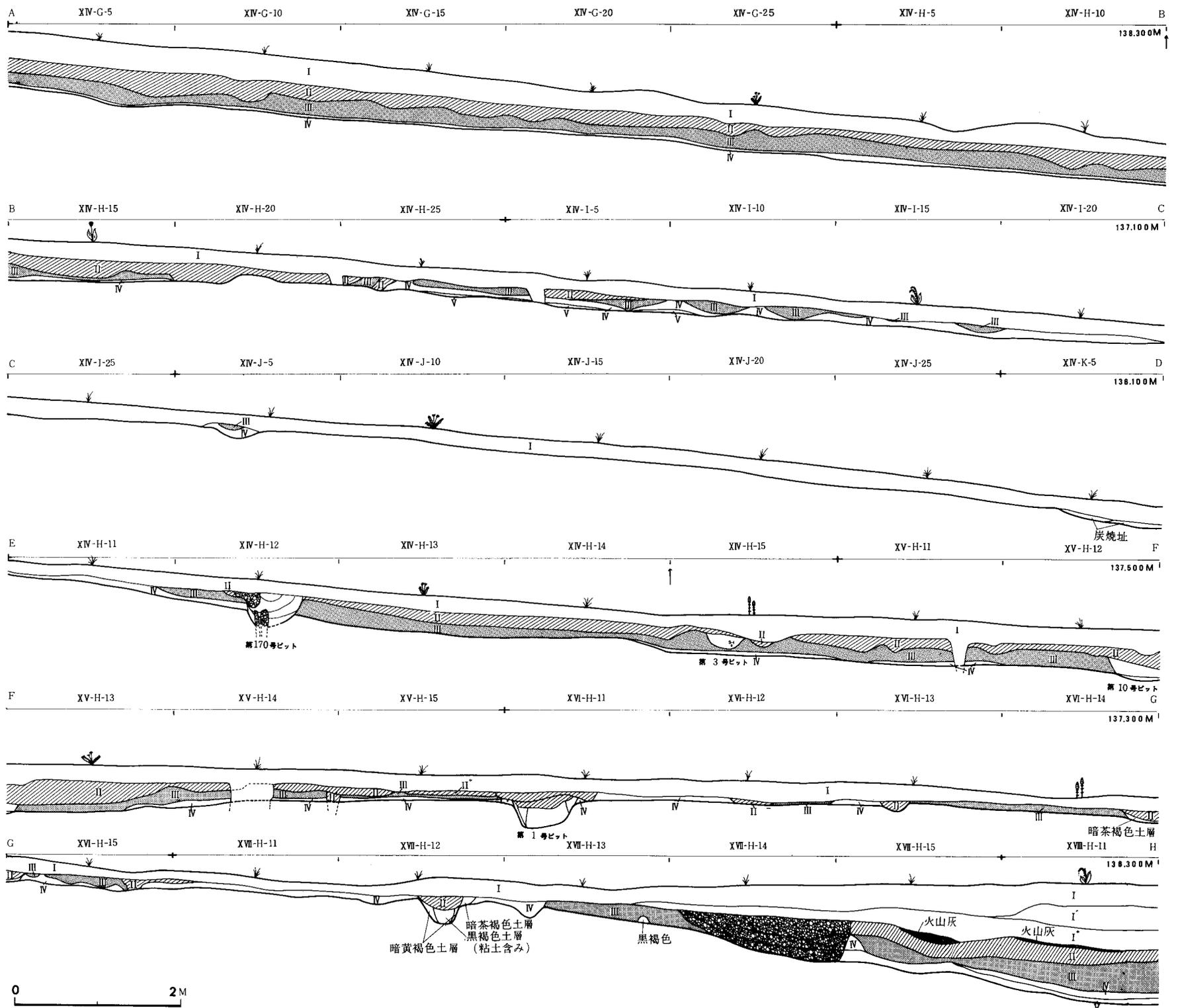
（上野 秀一）



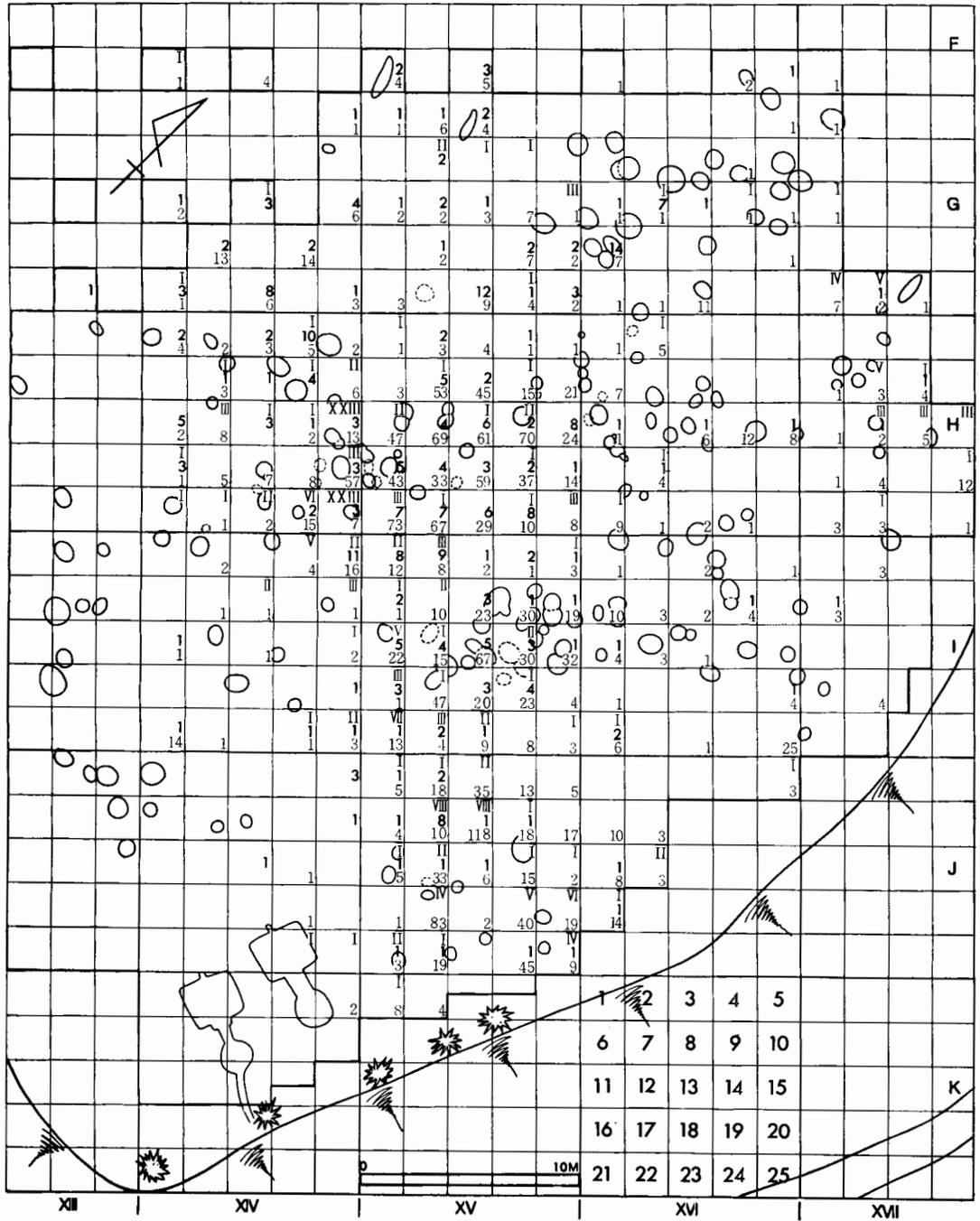
第1図 遺跡付近地形図および試掘配置図 (1:1000)



第2図 遺跡発掘区配置図および遺構関連図(1:200)(B番号:焼土, R番号:赤色土)



第3図 遺跡セクション図 (Point A-D Line および Point E-H Line)



凡例

Ⅶ	(ローマ数字)	----	I期(縄文早期)の出土土器片数
1	(アラビア数字,太字)	----	II期(縄文中期) "
13	(アラビア数字,細字)	----	III期(縄文晩期末~続縄文期初頭)の出土土器片数

(例 XV-1-21)

第4図 T210遺跡発掘区土器片出土分布図

第4章 遺 構

本遺跡からは、151基の土壇ないし土壇墓と21基の石組、3基の溝状遺構、それに近代の炭焼窯址2基がみつまっている(第2図)。土壇(墓)、石組、溝状遺構については、第1、2、3節において、炭焼窯址については第4節でそのあらましを述べる。なお、本遺跡の今次発掘地点からは住居址はみつかっていない。

第1節 土壇・石組・溝状遺構(第5~42図, 図版3~44A)

151基の土壇と21基の石組のすべてについての事実記載は、本節で表方式で記述を行った。なお、表記載方式および遺構・遺物の註記番号などについては、下記に示す要領で行っている。

- 1 土壇・石組と溝状遺構の遺構番号は、共通の通し番号で処理しており、第1号ピットから第199号ピットまでである。しかし、この内24個欠番がある。

欠番……75, 94, 96, 97, 109, 115, 125~128, 132, 148, 152, 153, 161, 164~166, 169, 173~176, 183

- 2 遺構のセクション図中の層名は、第1表に示した統一層番号で示してある。しかし、同一層名が各土壇毎に全く同一の層を示すとは限らず、特に違いのある層に関しては挿図中に註記した。

第1表 T210遺跡土壇層名一覧表

層番号		層名	層番号		層名
I	1	耕作土	IV	8	暗褐色土
	2	真黒色土		9	褐色土
II	3A	黒色土A	V	10	暗黄褐色土
	3B	黒色土B		11	黄褐色土
III	4	暗黒褐色土	VI	12	黒灰色土
	5	黒褐色土		13	灰色土
IV	6	暗茶褐色土	VII	14	焼土
	7	茶褐色土		15	赤色土

なお、第3層の黒色土層は、さらに粘質を帯びたA層としまりなくサラサラしたB層の2つに分層できるが、明瞭でない例が多く、この例に関しては単に第3層とのみ註記している。また、1~15までの層は、
 (I) 第1層：耕作土
 (II) 第2, 3A, B層：

真黒色~黒色土

(III) 第4, 5層：暗黒褐色~黒褐色土

(IV) 第6~9層：暗茶褐色~茶褐色土および暗褐色~褐色土

(V) 第10, 11層：暗黄褐色~黄褐色土

- (VI) 第12, 13層：黒灰色, 灰色土
 (VII) 第14, 15層：焼土および赤色土

の7つにまとめられる。この内、(II)は本来的には、第3図の縦断セクション図の第II層と同一のもので、自然堆積したものと考えられるが、幾つかの例に土壙内奥深くまで、あるいは間層としてあるものもある。これは、土壙を埋める際に、意識的にあるいは偶然に黒色土のみが入ったためかと思われるが、細かくみると土壙内のものには、細かい粘土粒が含まれている。(III), (IV)は、(II)の黒色土と地山の黄褐色粘土層とが混じりあった層で、すべて土壙の埋土である。(V)は、地山層が二次堆積したもので、多くは、壙底面および壁について堆積している。(VI)は、後述する溝状遺構にのみ認められるものである。なお、本章第2, 3節では、層名は、上記の7つにまとめた層の方を一般的に使っており、縦断セクションとの混同をさけるためゴシック体にしてカッコをつけて記載している。また、遺構の図面(第5~25図)中に示したスクリーンの内訳は、第2表の如くである。

- 3 遺構図面の中で、○印で示したのは石器、●印は土器の出土地点を示している。また、略号は、

- S : 河原石ないし石器
 P : 土器
 SP : 小ピット
 B : 焼土
 R : 赤色土

である。なお、焼土および赤色土と小ピットは、第3表、第4表にそれぞれ一覧表にして掲げた。

- 4 遺構出土の遺物の実測図、拓影図(第22~42図)の註記は

1.	P. 28.	2
⋮	⋮	⋮
通し番号	ピット番号	遺物番号

のように表記しており、遺物番号は、遺構図面中のS番号、P番号とそれぞれ一致する。壙底部ないしは壁出土の石器と完形・半完形土器については、表中に記載してあるが、これ以外のものは、すべて覆土中から出土したものである。なお、遺物番号のない例に関しても、すべて覆土中から出土している。

- 5 表中のピットのタイプの内、A型とB型に関しては、第2節第1項の分類に準ずるものであるが、それ以外の略号は以下の如くである。

C型：特徴(タイプ)不明の土壙(墓)

第2表 T210遺跡遺構スクリーン内訳表

	(註) 黒色土層 (第2, 3A・B層)
	焼土層
	赤色土層
	攪乱層
	焼けた河原石

(註) 間層としてある第2, 3層についてはスクリーンをかけていない。

D型：人為的な古い時代の土壙（墓）であるかどうか疑問のあるピット

S型：石 組（第2節第2項）

T型：溝状遺構（第2節第3項）

- 6 土器のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ期は、各々土器の時代を示したもので、詳細は本章第2節と第5章第1節に明記してある。 （上野 秀一）

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長軸 方向	ビットの タイプ	挿 番 号	図 番 号	ビット群
			開口	深さ							
1	XVI-H-11	円形	94×84	30	開口部3個, 境内8個 (内, 焼石3個)	境内SP-1~3 境外SP-4~8		ANa	3,16	16C	Z
2	XVI-G-23	円形	75×73	35	境内1個			AIII1	11	9C	S1
3	XIV-H-10, 15	円形	54×52	19.5				C	3		S2?
4	XVI-I-2, 3	円形	79×73	31	境内10個 (内, 焼石3個)	境外SP-1~4		ANb	18	20C	Y'
5	XVI-H-24	不整形円形	67×66	24				AIM	5	6D	Y'
6	XVI-G-9	円形	84×84	30				AII	7		S
7	XV-H-9, 10	不整形円形	53×52	9	境内3個			AIII3S	15,46		Z
8	XV-H-18	不整形円形	74×65	36	開口部1個			AII	11,46	10B	
9	XV-H-17, 21	円形	71×65	16	境内2個 (内, 焼石1個) 境外1個			AIII2	13,46	13C	X
10	XV-H-12, 13	円形	65×65	18	境内4個 (内, 焼石2個) 境外北側7個 (内, 焼石2個)			C	3,21,46		X
11	XV-H-16	石組	85×62		29個一塊, その横1個 (内, 焼石5個)			S	17,46	18A	X
12	XV-H-16	楕円形	89×72	15	境内4個 (内, 焼石2個) 境外3個	境外SP-1	N-S	ANb	17,46	18A	X
13	XV-H-11, 12	楕円形	82×73	10	境内7個 (内, 焼石1個)		NE -SW	ANa	15	16A, B	X
14	XV-H-16	不整形楕円形	66×49	18	境内1個 境外北側5個, 西側8個	境内SP-1	WNW -ESE	D	22, 46		X
15	XV-H-20 XIV-H-16	不整形楕円形	101×59	31.5	開口部, 境外各1個		ENE -WSW	AII	10,46	10A	
16	XIV-H-20	不整形楕円形	106×78	11	境内14個 (内, 焼石5個) 境外1個		NW -SE	ANc	19,46		X
17	XIV-H-19, 20	石組	59×58		15個 (内, 焼石6個)			S	24,46		X
18	XIV-H-23	不整形楕円形	76×51	11	境外南東に1個		NW -SE	AIM	5,46	7A	X
19	XV-I-10	楕円形	84×68	8	境内30個 (内, 焼石3個)		ENE -WSW	ANc	19,47	22B	Y
20	XV-I-10	不整形円形	81×65(75)	26				AII	19,47	22B	Y

土器型式	土器		挿函 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿函 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考	
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片							
Ⅲ-14(26-1, SP-4, P-2)、Ⅲ	1 (底部)	6	26-1 28-1, 2	37-9 30C									第54号石組が南側に一部重なって、第92号石組が北側に接してある	
I-2(5)、Ⅲ-6(3)、Ⅲ-10(4)		11	28-3 ~6	30C	有茎鎌(S-1, 底部)	1	2	37-5	38					
					大形無茎鎌(S-1, 底部)、 縦形掻器	2		37- 6, 7	38					
Ⅲ-10(8)、Ⅲ-14(26-2, P-1)、Ⅲ	1 (配石上)	26	26-2 28-7 ~13	37-5 30C	無茎鎌(S-11, 配石中)、 石銛	2	1	37- 8, 9	38		+	(3B, 4層)		
Ⅲ		2	28- 14, 15	30C									北西側一部攪乱	
Ⅱ-2(16)、Ⅲ		4	28-16 ~18	30C	円形掻器	1		37-10	38					
Ⅲ		5	28-19 ~20	30C	削器、石皿?(S-1, 配石)	1		37-11	38 42-2				南東部に第64号石組	
I-1(22)、I-2(21)、Ⅲ-4(23-26)		11	28-21 ~26	30C	ナイフ状石器、砥石(S- 1, 配石)	2		37-12 40-76	38 40B		B-7 (壕口~壕外)			
Ⅲ		2	28-27 28	30C	石皿(壕外, S-1)		1		41-4		R-4 (壕底, 東)		第47号と少し切合っているが新旧関係不明	
Ⅲ(SP-1)		5	28-31	30C	削器(S-1, SP-1 の底部)	(SP-1) 1		37-13	38					
Ⅲ-12(32)、Ⅲ		2	28-32 ~35	30C									第31号(旧)ピットと 切合い関係	
I-2(36)、Ⅱ		4	28-36 37	30C									第62号石組が西北西 にある	
I-2(P-1)	1		26-3	35-1	削器(底面)、砥石(S- 1, 底面)	2	1	37-14 40-77	38 40B		B-9, 10 (壕口~壕外)	+	(6, 7層)	第62号石組が東南東 にある
Ⅲ-14(26-6, P-6) (26-7, P-5+7)、Ⅲ	2 (配石中)	2	26-6, 7 28-38, 39	38-8 30C	円形掻器	1		37-15	38					
Ⅲ-5(41)、Ⅲ-12(42)、 Ⅲ		6	28-40 、42	30C										
		2											南東部に第61号石組 がある	
Ⅲ	1 (配石中)	27	26-4, 9 29-43, 44, 51-61	37-1.6 31A	削器(S-2, 底部)	1	1	37-16	38					
Ⅲ-10(51, 52)、 Ⅲ-13(56, 57)、Ⅲ	2 (配石中)		26-4, 9 29-45, 51-61	31A	削器(第19, 21号ピット の可能性もある)	1		37-17	38		B-29 (壕底)	+	(4層)	第21号(新)ピットと 切合い関係

ビット番号	区名	平面形	規模		配石	小ビット	長軸方向	ビットのタイプ	挿図番号	図版番号	ビット群
			開口	高さ							
21	XV-I-10	不整形	95×80	28	境内31個(内、焼石12個)	境内SP-1~2		AVc	19, 47		Y
22	XV-I-9, 10	円形	70×61	17	境内6個(内、焼石1個)		ENE-WSW	AVa	18, 47	20B 21A	Y
23	XV-I-9, 14	不明	121×78	52	境内、開口部7個(内、焼石1個) 境央部1個			D	23, 47	22A	Y
24	XIV-H-24	不整形	58×50	22	境内1個	境外SP-1	NW-SE	AIII S	11, 46		X
25	XV-I-15	楕円形	106×88	20.5	境内18個(内、焼石3個)		E-W	AVb	18, 47		Y
26	XV-I-15	楕円形	71(87)×76	14			N-S	AII L	18, 47		Y
27	XV-I-14, 19	石組	79×45		10個(内、焼石4個)			S	24, 47	28D	Y
28	XV-I-14	石組	65×36		6個(内、焼石1個)			S	24, 47	28C	Y
29	XVI-I-6	不整形楕円形	74×61	19	境内2個			AIII 2	13, 47		Y
30	XIII-H-18	円形	75×71	29	境内壁1個(焼石)	壁に接してSP-1		AIII M	11, 46	11D	X
31	XV-H-11, 12	円形	71×42(70)	12	境内1個			AIII M	15, 46	16B	X
32	XIV-H-22	石組	41×33		4個(内、焼石2個)			S	24	28B	X'
33	XV-I-13	不整形楕円形	90(97)×72	14	境内27個(内、焼石14個)	境内SP-1 境外SP-2	N-W	AVc	19, 47		Y
34	XIV-H-19, 20	石組	45×22		6個(内、焼石2個)	SP-1		S	24, 46		X
35	XV-H-16	石組	43×27		5個(内、焼石2個)			S	22, 46	29C	X
36	XV-I-19	石組	74×33		7個(内、焼石4個)			S	24, 47		Y
37	XIV-I-2	円形	84×75	31	境内1個			D	22		X'
38	XV-I-17	円形	89×79(86)	21	境内18個(内、焼石4個) 境外西側小ビットと接して2個	SP-1(第38号に 切られる関係にある)		AVb	17, 47	18B	Y
39	XV-I-12	石組	92×43		6個(内、焼石1個)			S	24, 47	29D	Y
40	XV-I-8, 13	円形	85×78	12	境内5個(内、焼石2個) 境外北側1個(焼石)			AVa	18, 47	20A	Y

土器型式	土器		裨図 番号	図版 番号	石器器種	石器		裨図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
Ⅲ-8(50)、Ⅲ-10(49)、 Ⅲ-12(48)、Ⅲ	1 (配石中)	69	26-4 29-46 ~61	37-1.6 31A	石皿(S-1+S-2、配石)、 石皿破片(S-3、配石)	2		40-78 41-79	41-1 42-1				第20号(旧)ピットと 切合い関係
Ⅲ-14(26-5、P-1)、 Ⅲ	1 (配石下)	31	26-5 29-62 ~66	37-7 31A									
I-1(67)、I-2(68)、 Ⅲ		4	29-67 ~69	31A	石錘(S-1、壁際)	1	1	37-18	38				一部「風倒木痕」で切ら れている可能性がある
Ⅲ		1	29-72	31A	両面体石器破片	1	1	37-19	38	R-1 (壊口~壊外)			
Ⅲ-10(71)、Ⅲ-10(76)、 Ⅲ		171	29-70 71 73~75	31A	削器(S-1、配石下)、 石皿破片(S-2、配石)	2		37-20 41-82	38 41-5		+	(3層)	第26号(旧)ピットと 切合い関係
		3			無茎鎌(S-1、底部)	2	1	37-21	38		+	(5層)	
Ⅲ-10(76)		2	29-76	31A			2						
Ⅲ-10(77、80)、Ⅲ-14(26- 8、P-1(+4))(26-10、 P-3)(26-11)、Ⅲ	3 (石組中)	11	26-8、 10、11 30-77 ~83	36-4 37-3 31B	削器、赤色土付着剥片(共に 配石中)、砥石?(S-1、 配石)	2		37-22	38	B-17 (石組外)			第33号ピットに接し ている
I-1(84、85)、Ⅲ-2(90、 94)、Ⅲ-9(95)、Ⅲ-10(89~ 93)、Ⅲ-12(96)、Ⅲ		15	30-84 ~99	31B			1						
I-1(100)、Ⅲ-13(101)、 Ⅲ-10(102)、Ⅲ-12(107)、 Ⅲ		8	30-100 ~107	31B			2			B-12 (壊口~壊外)			
										B-4 (壊口~壊外)			
Ⅲ-2(108)		1	26-12 30-108	31B	大形無茎鎌(S-1、配石中)、 指状撽器(S-2、配石中)	2		37-23 24	38				第42号石組と一部重な り、第28号石組が近く にある
I-1(109)、Ⅲ-2(110)、 Ⅲ-14(26-12)、Ⅲ		10	30-109 ~112	31B									
I-1(113)、Ⅲ		9	30-113 ~116	31B									
I-1(117~119)、Ⅲ		7	31-117 ~120	31B									
Ⅲ		2	31- 121、122	32A	断面三角形の擦石(S-1、 配石)	1		40-71	40A	B-14 (壊口~壊外)			第49号(新)ピットと 切合い関係
					断面三角形の擦石(S-1、 石組)	1		40-74	40A				
Ⅱ		1	31-123	32A	削器(S-1、配石中)、削器? 石皿(S-2、配石)、台石(S- 3、配石)	4		37- 25、26 41- 80、84	38 41-2 43-3				

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長 軸 方 向	ビットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ビット群
			規 模 口 深さ	口 深さ							
41	XV-H-14	円 形	94×90	22	城外3個(内, 焼石1個)			A I L	8, 46		Z
42	XV-I-13	石 組	113×70		14個(内, 焼石10個)			S	19, 47		Y
43	XV-I-13	石 組	102×65		16個(内, 焼石7個)			S	24, 47	29B	Y
44	XIV-H-15	不整円形	79×61	14	城内壁2個	城内SP-1	NE -SW	A III ²	14, 46		X
45	XIV-H-15	楕円形	60×35	16	城内1個(焼石)		NE -SW	A III ¹ S	14, 46		X
46	XIV-I-3, 4	楕円形	84×62	21		壁に接してSP-1	NNE -SSW	A I M	5, 46	6A	X
47	XV-H-12, 13	楕円形	87×58	16	城内1個 城外北東側2個(内, 焼石1個)		NE -SW	D	21, 46		X
48	XIV-H-25	不整楕円形	71×55	12	城口壁1個		NE -SW	A I M	6, 46		X
49	XV-I-12, 13 17, 18	円 形	105×104	19.5	城外東側1個			A I L L	17, 47		Y
50	XV-I-14, 15	不整円形	70×64	15	城内11個(内, 焼石3個)	城外SP-1		A IV ^c	19, 47	22A	Y
51	XIV-I-17	不整楕円形	90×63	26			NW -SE	D	22		Y"
52	XIV-I-18	楕円形	111×85	44			NW -SE	A I L	7	8B	Y"
53	XIV-H-14	楕円形	72×58	19		城外SP-1	ENE -WSW	A I M	6		Y"
54	XVI-H-11	石 組	51×49		16個(内, 焼石6個)			S	16		Z
55	XV-J-12	石 組	31×29		4個			S	5		S5
56	XV-I-11	円 形	93×85	25	城内1個			A III ¹ L	12	11B	Y
57	XV-H-18	石 組	57×44		14個(内, 焼石3個)			S	24, 46	29A	X
58	XV-I-8, 9	不整楕円形	128×99	37	城内1個		NNE -SSW	D	23, 47	25B	Y
59	XVI-I-6	不整円形	71×64	23			NE -SW	A I M	7, 47		Y
60	XVI-I-11	不整円形	64×51	12	城内1個		NNW -SSW	A III ¹ S	11, 47		Y

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
Ⅲ-10(124)、Ⅲ		8	31-124 ~126	32A	円形撻器	1		37-27	38	R-2 (壕外)			
					石皿(S-1、配石)								第33号ピットと一 部重なる
Ⅲ		3	31- 127、128	32A						B-16 (壕口)			
Ⅱ-4(129)、Ⅲ		4	31- 129、130	32A	大形有茎鎌(S-1、 底部)	1		38-28	38		+		第45号ピットと接して いるが新旧関係不明
Ⅲ		5	31-131 ~134	32A							+		第44号ピットと接す る
I-1(135)、Ⅲ-14(27- 13、P-1+2)	1 (壕底部)	1	27-13 31-135	32A			1						
													第10号ピットと接し ている
I-1(136)、I-2(137 ~139)、Ⅱ		5	31-136 ~140	32A									
		8											第38号(旧)ピットと 切合い関係
Ⅲ-2(141)、Ⅲ-10(142)、 Ⅲ		15	31-141 ~145	32A	ナイフ状石器(S-1、配石中)、 石皿破片(S-2、配石)	1		38-29 41-79	38 42-1				S-2は第21号(S- 3)と接合
I-1(146)、Ⅱ		2	31- 146、147	32A									風倒木痕で、北側が切ら れており、壕底部明確で ない
I-1(148)、Ⅱ、Ⅲ-5(150)、 Ⅲ-10(151)、Ⅲ		20	31-148 ~156	32A	有茎鎌(S-1、底部)	1	2	38-31	38				
Ⅲ		3	32- 157、158	32B			5				+	(3層、多量)	3層中には、多量の木 炭以外に、黒曜石の削 片も多く含んでいる
					無茎鎌(S-32、配石中)、 削器(S-1、2、配石中)	3		37-1、 3、4	38				第1号ピットの南側 に接してある
													第67号ピットの北北西
I-2(160)、Ⅲ-11(162)、 Ⅲ-12(164)、Ⅲ		19	32-159 ~164	32B							+		
I-1(165、166)、 I-2(167)		3	32-165 ~167	32B	石錘(S-1、壕口部)	1		38-30	38				北東部一部攪乱
I-2(168) ?、Ⅲ		18	32-168 ~173	32B	石錘(S-2、底面)、縦形 撻器(S-1、底面)	2	5	38- 32、33	38		+		

ピット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ピット	長 軸 方 向	ピットの タイプ	挿 番 号	図 番 号	版 号	ピット群
			竪 口	深 さ								
61	XIV-H-23	石 組	72×38		11個			S	5, 46	7A		X
62	XIV-H-16	石 組	83×47		12個			S	10, 46	29C		X
63	XV-H-8	石 組	46×19		6個			S	46			Z
64	XV-H-9, 10	石 組	49×18		3個			S	46	22A		Z
65	XV-J-13, 18	円 形	57×57	17	城内2個			AⅢ ²	14	14B		S5
66	XV-J-11	円 形	67×63	24				AⅠM	6			S5
67	XV-J-17	円 形	64×58	34	城外北東側1個			AⅠM	5			S5
68	XV-I-11	不整楕円形	96×62	26			NW -SE	AⅠL	7			S5
69	XV-I-11	円 形	52×45	12		城外SP-1		D	12, 47			Y
70	XV-J-20	不整楕円形	77×63	16	城内15個(内, 焼石3個) 城外北側1個		NE -SW	AⅣc	20	23B		S5
71	XV-J-25	楕 円 形	60×46	16	城内1個		E-W	AⅢ: S	11			S5
72	XV-J-23	石 組	56×28					AⅠM	5			S5
73	XV-J-22, 23	不 整 円 形	68×64	42	城口壁2個 城央部3個			AⅢ ³	14	14C		S5
74	XV-J-21	円 形	64×61	19				AⅠM	6			S5
75	欠 番											
76	XV-J-9, 14	楕 円 形	139×106	30	城口部2個		E-W	D	23	25C		(S5)
77	XVI-I-12	不整楕円形	104×80	27			NE -SW	AⅠL	7			Y'
78	XVI-I-18, 19	不 整 円 形	99×89	13	城内21個	城内SP-1	N-S	AⅣc	20	23A		S6
79	XVI-I-13	不 整 円 形	67×64	22				AⅠM	6	6C		Y'
80	XVI-I-13	不 整 円 形	41(55)×45	6	城外北西壁に接して1個		ENE -WSW	D	6	6C		Y'

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
													第18号ピットの南東にある
													第14号と第15号ピットとの間にある
										B-1			
													第7号ピットの南東にある
Ⅲ-10(174)、Ⅲ		2	32-174, 175	32B	削器(S-3、底部)	1		38-36	38				
Ⅲ-10(176、178)		4	32-176, 177	32B									
Ⅲ-10(179)、Ⅲ-11(178)、Ⅲ-12(182)、Ⅲ		16	32-178, 182	32B	円形播器(焼けている)	1		38-34	38				北北西に第55号石組がある
I-1(183)		2	32-183	32B			1						
I-1(184、185)		10	32-184, 188	32B									
I-1(189)、Ⅱ-2(191)		16	32-189, 191	32B	削器	1	1	38-39	39				
Ⅲ-10(192)、Ⅲ		7	32-192~195	32B						B-19 (壊1-壊外)			
Ⅲ		4	32-196, 197	32B									
I-1(198~200)、I-1(27-14、P-1+3)、Ⅲ	1	5	32-198~202	32B									
					柳葉形鎌(S-2、ほぼ底部)、削器(S-1)	2		38-37, 38	39	B-28 (壊央)			壊内中央部に大きな攪乱
Ⅲ		3	32-203, 204	32B									第80号(新)ピットと切合い関係
													第79号(旧)ピットと切合い関係

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長 軸 方 向	ビットの タイプ	挿 図 番 号	図 番 号	版 号	ビット群
			横 口	深 さ								
81	XVI-I-14	円 形	93×86	48	壕口部1個(焼石) 壕底部14個(内,焼石8個)	壕外SP-1		AVc	20	24A		S6
82	XVI-I-15	円 形	67×62	24				AIM	6	7B		S6
83	XVI-I-9	不整形	50(67)×62	12	壕内3個	壕内SP-1~2 壕外SP-3		C	21			Y'
84	XVI-I-9	楕円形	80(95)×72	11	壕内1個		NE -SW	C	21			Y'
85	XVI-I-4	円 形	48×44	28				AIS	8			Y'
86	XVI-I-4	円 形	92×88	30				AIL	8			Y'
87	XVI-H-24	不整形	49×41	11				D	23			Y'
88	XVI-H-22	円 形	41×39	17	壕内1個			D	23			Y'
89	XVI-H- ^{16, 17} 21, 22	楕円形	70×51	22				AIM	7			Y'
90	XVI-I-1	不整形	98×95	39	壕内壁1個			AIII L	12	12B		Y'
91	XVI-H-12	不整形	62×48	21			NW -SE	AIS	5			Z
92	XVI-H-11	石 組	33×29		3個(内,焼石2個)			S	16			Z
93	XVI-H-12, 13	隅丸形	57×54	12	壕内2個(内,焼石1個) 壕外南側2個			B	21	27A		Z
94	欠 番											
95	XVI-H-23 XVI-I-23	円 形	100×100	43	壕内12個(内,焼石4個)			AVb	17	17C		Y'
96	欠 番											
97	欠 番											
98	XVI-H-14, 15	楕円形	99×85	44	壕内11個(内,焼石4個)		NE -SW	AVb	17	19A		Z
99	XVI-H-13	不整形	78×60	19			NE -SW	AIM	6			Z
100	XVI-H-15	不整形	55×52	12				B	21	27A		Z

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
Ⅲ-5(205)、Ⅲ-10(206)、 Ⅲ-12(207)、Ⅲ-14(211)		26	33-205 ~211	33A	敲石(S-1、配石)		1						
Ⅲ-14		3	33-212	33A						B-20 (壕口)			
													第84号(旧)ピットと 切合い関係
Ⅲ-5(213)		2	33-213	33A									第83号(新)ピットと 切合い関係
Ⅲ-5(214)、Ⅲ		5	33- 214、215	33A			1						第86号ピットと接して いるが新旧関係は不明
Ⅲ		2	33-216	33A									第85号ピットと接す る
Ⅲ-14(27-16)、Ⅲ		13	27-16 33- 218、219	36-6 33A	削器	1	1	38-35	38				
Ⅲ-10(220)、Ⅲ		14	33-220 ~223	33A	両面体石器(S-1、壕 央部)	1		38-40	39				
					縦形搔器	1		37-2	38				
Ⅲ		2	33- 224、225	33A						B-30 (壕口)			
Ⅲ-5(228、231)、Ⅲ-10 (226、227、229、230)、 Ⅲ-14(232)、Ⅲ		49	33-226 ~233	33A	大形無茎鎌(S-1)、削器 (S-14、ほか2点)、扁平石 核(S-15、ほか2点)	7	4	38-41 ~47	39	B-21 (壕央)	+		S-1、14、15は壕底部出土、焼土 中よりクワミシ片検出、壕底部の3" 層中からは、多量の木炭と黒曜石 削片、磁器が出土
Ⅲ-1(240)、Ⅲ-5(234、235)、 Ⅲ-10(238、239)、Ⅲ-14(27- 17、P-1)、Ⅲ	1 (配石中)	66	34-234 ~251	37-4 33B	削器(2点)、 石皿(破片)(S-1、配石)	2	10	38- 48、49	39				
		1					1						
Ⅲ-14(27-19、P-1)	1 (壕底部)		27-19 34-251	36-7 33B									

ピット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ピット	長 軸 方 向	ピットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ピット群
			横 口	深 さ							
101	XVI-H-13	円 形	51×48	22				AIS	5	6B	
102	XVI-G-22 XVI-H-2	円 形	81×75	28	城内1個			AIII ₁ M	11	11A	S1
103	XVI-H-16	不整楕円形	80×73	10	城内10個(内、焼石2個)	城内SP-1 壁に接してSP-2		AI _V a	15	15C	Z
104	XVI-H-7	不整円形	84×74	18	城内5個		NW -SE	AI _V a	15		Z
105	XVI-G-14, 15	楕 円 形	86×71	26	城内4個(内、焼石1個)		ENE -WSW	AI _V a	16	17A	S1
106	XVI-H-6	不整円形	54×50(54)	27		城外、ピットに接して SP-1		AIS	21		Z
107	XVI-H-7	楕 円 形	48×37	23	城口部上1個		E-W	AIS	21		Z
108	XV-H-5, 10 XVI-H-1, 6	円 形	70×65	38	城内11個(内、焼石5個) 城外北西側1個(焼石)			AIVC	21		Z
109	欠 番										
110	XVI-G-16	円 形	104×95	35	城内1個			AIII ₁ M	12	12C	S1
111	XVI-G-11	円 形	104×95	35	城内1個			AIII ₁ LL	13	13A	S1
112	XVI-G-8, 9	不整円形	87×80	39	城内底面1個			AIII ₁ L	12	12A	S1
113	XVI-G-7, 8	楕 円 形	133×111	59	城口部1個 城内、城底部2個		WNW -ESE	AIII ₂ LL	14		S1
114	XVI-G-18	楕 円 形	92×86	34	城内8個(内、焼石3個)			AI _V a	18		S1
115	欠 番										
116	X-G-16	不整楕円形	103×82	30	城外1個	城内壁に接して SP-1	E-W	D	23	28A	(S1)
117	XVI-H-2	石 組	55×23		4個(内、焼石1個)			S	24		Z
118	XVI-G-8, 13	円 形	82×73	51				AIL	9		S1
119	XVI-F-24	不整円形	73×62	34			NNE -SSW	AIM	7	7C	S1
120	XVI-G-5	楕 円 形	108×94	38	城内壁1個		NNW -SSE	AIII ₁ LL	13	13B	S1

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
		2											粘土塊底部にある
		1											
Ⅲ-1 (252)、Ⅲ		15	34- 252, 253	33B	削器、石皿破片 (S-9、 配石)	2		38-50 39 41-81 41-3					第122号(旧)ピットと 切合い関係
Ⅲ		18	38-254 ~260	33B	無茎鎌(S-2、底部)、 石錐(S-1、底部)	2	3	39- 51, 52	39	R-3 (横穴西) B-22 (横穴)	+	(5'層)	C ¹⁴ : 4,800±160Y.B.P. (Gak-6,043)
Ⅲ		2	34-261	33B									
Ⅲ		3	34-262	33B									第107号(旧)ピットと 切合い関係
Ⅲ		5	34-263	33B	無茎鎌(S-1、底部)	1		39-53	39	B-23 B-23' (横口~横穴)			第106号(新)ピットと 切合い関係
Ⅲ		4	34-264 ~266	33B			1						
		3			削器	1	2	39-54	39				
Ⅱ-2 (267, 269)、Ⅲ		29	34-267 ~269	33B									壕内中央部より南側 一部攪乱
Ⅱ-2 (270~272)、Ⅲ-12 (273)、Ⅲ-1 (27-15、 P-2~4)、Ⅲ	1	14	27-15 34-270 ~274	36-1 33B	削器(2点、横口部)	2		39- 55, 56	39				
Ⅲ-12(275)		7	34-275	33B			1						
Ⅱ-4 (27-18, P-1)	1	1	27-18	35-5									風倒木との切合いの 可能性もある
Ⅱ-2 (276)		1	34-276	33B									
Ⅲ		10	34- 277, 278	33B						B-24 (横口)			

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長 軸 方 向	ビットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ビット群
			廣 口	深 さ							
121	XⅤ-G-1	楕円形	96×86	26	壙内1個			AⅢ+L	12		S1
122	XⅤ-H-11	楕円形	56×40(46)	29			NNE -SSW	AIS	15	15C	Z
123	XⅤ-G-6	円形	94×90	53				AIL	8	8D	S1
124	XⅤ-G-6,10	円形	96×93	40	壙内壁1個			AⅢ+L	12	1D	S1
125	欠番										
126	欠番										
127	欠番										
128	欠番										
129	XⅤ-I-16	円形	56×56	25				D	12		S6
130	XⅤ-I-20	不整円形	66×58	14				D	22		S6
131	XⅤ-I-10 XⅤ-I-6	円形	73×68	11		壙内SP-1		D	20		S6
132	欠番										
133	XⅤ-I-3	楕円形	108×86	54	壙内17個(内、焼石5個)		E-W	AⅣc	20	24B	S7
134	XⅤ-H-13, 14	円形	78×71	18	壙内1個	壙内SP-1~3		C	21		S7
135	XⅤ-H-17	不整円形	54×49	28				D	22		S7
136	XⅤ-H-1, 2	円形	74×65	32				AIM	7		S7
137	XⅤ-H-7	円形	65×64	21	壙内4個			AⅣa	18	19B	S7
138	XⅤ-H-7	円形	64×57	13				AIM	6		S7
139	XⅤ-H-2	円形	46×46	26				D	12		S7
140	XⅤ-G-22	楕円形	58×47	13			NW -SE	D	22		S7

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
													第103号(新)ピットと 切合い関係
		1											
Ⅲ		1	35-27	34A									
Ⅲ		2	35-28	34A	砥石	1		40-70	40B				
Ⅲ-6(282)、Ⅲ-10(283)、 Ⅲ-10(27-20)、Ⅲ	1	58	27-20 35-20 ~20	36-5 34A	円形礮器、削器、扁平石核 (3点)黒曜石棒状原石 (S-1、赤色土付着)	6	25	39-57 ~62	39		+		S-1は配石中出土 C ¹⁴ :2,520±130Y.B.P. (Gak-6,041)
I-1(291)		1	35-29	34A									
		1					1						
		3			削器	1	1	39-64	39				
		4			両刃石斧刃部破片(S- 1、底部)	1		39-63	39				
Ⅲ-14		1	35-29	34A									
I-1(293)、I-2(294 295)、Ⅲ-14(296)		4	35-29 ~296	34A	断面三角形の擦石 (配石?)	1		40-72	40A				

ピット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ピット	長 軸 方 向	ピットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ピット群
			横 口	深 さ							
141	XVI-G-23	長楕円形	152×47	110			N-S	T	25		(S7)
142	XVI-G-15, 20	円 形	74×66	22	境内壁1個(焼石)			AIII ₁ M	11	11C	S1
143	XVI-G-15	円 形	90×89	28				A I L	8	8A	S1
144	XVI-G-6	不整楕円形	111×96	28	境内4個(内、焼石1個)		WNW -ESE	AN _a	16	17D	S1
145	XVI-G-10	円 形	105×102	36	境内1個(焼石)			AIII ₁ LL	13	13D	S1
146	XVI-G-12, 17	不整円形	117×106	44				A I L L	9	9D	S1
147	XVI-G-7	不整円形	95×95	70				A I L	9		S1
148	欠 番										
149	XVI-H-6	不整楕円形	90×73	22	境内7個(内、焼石3個)		E-W	AN _a	18	21B	S7
150	XVI-H-6	円 形	48×43	19				D	12		S7
151	XVI-G-6	不整円形	71(120)×100	53	境内1個		NE -SW	AIII ₁ L	9		S1
152	欠 番										
153	欠 番										
154	XIV-I-1	円 形	69×65	40				D	22		X'
155	XIII-I-5	楕 円 形	55×45	22			NW -SE	A I S	5		S3
156	XIV-H-7	円 形	76×69	31	境内2個(内、焼石1個)			AIII ₂	14		S2
157	XIV-H-8, 9	不整楕円形	108×82	35			WNW -ESE	A I L	8		S2
158	XIV-H-9	不整円形	101×89	22	境内2個(内、焼石1個)			AIII ₂	14	14A	S2
159	XIV-H-5	楕 円 形	70(74)×49(53)	30	境内2個(焼石)		NW -SE	AIII ₂	14		S2
160	XIV-H-1	円 形	108×104	48	境内3個(内、焼石2個)			AIII ₃ LL	15	15B	S2

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
		2											
I-1 (297)		3	35-297	34A									
III-5 (298)		4	35-298	34A									東側風倒木により攪乱
													第151号ピットと切合関係にあるが新旧は不明
III-2 (300)、III		2	35-300、301	34A						B-25 (壙央)			B-25中には、赤色土を若干含む
II、III		4	35-302 ~304	34A									第147号ピットと切合関係にあるが、新旧は不明
II-3 (306)、III-10 (305)、III-12 (310)、 III-15 (307)、III	2	10	35-305 ~311	34A									
					断面三角形の擦石 (S-1、配石)	1		40-75	40A				
I-2 (312, 313)、II-4 (317)、III-2 (316)、III-10 (315)、III-12 (318)、III		9	35-312 ~318	34A									
III		1	35-319	34A									
III-5 (320, 321)、III		9	36-320 ~322	34B									壁面半分攪乱のため明確でない
II-4 (323, 324)、III		7	36-323 ~325	34B	削器 (S-1、底部)	1		39-65	39	B-26(壙口) B-27(壙央)	+		(6'層)

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長 軸 方 向	ビットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ビット群
			横 口	深 さ							
161	欠 番										
162	XIV-H-1	円 形	90×90	29	境内3個(内, 焼石2個)			AⅢ ₃ L	15	15A	S2
163	XⅢ-H-4, 5	楕 円 形	(77)×67	27				AⅠM	6		S2
164	欠 番										
165	欠 番										
166	欠 番										
167	XV-G-3	長楕円形	166×57	109	境内1個		N-S	T	25	30A	
168	XIV-G-10	円 形	60×55	14				D	22		
169	欠 番										
170	XIV-H-7, 12	不整四角形	51×47	40	境内1個			B	3, 21	26A, B	S2
171	XV-F-21	長楕円形	178×74	109				T	25	30B	
172	XV-G-22	石 組	178×74		9個			S	21		S2
173	欠 番										
174	欠 番										
175	欠 番										
176	欠 番										
177	XVI-H-2, 7	円 形	45×41	18				D	23		Z
178	XVI-H-8	円 形	64×63	13	境内壁2個(内, 焼石1個)			AⅢ ₂	14	14D	Z
179	XVI-H-8, 13	楕 円 形	63×45	15				D	22		Z
180	XVI-H-9	不整円形	71×56	11	境内15個(内, 焼石6個)		ENE -WSW	AⅣc	19	25A	Z

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
Ⅲ-14		34	36-326 ~329	34B									
													南側半分攪乱
					石皿(配石)	1		42-86	42-3				
Ⅲ-13(330)、Ⅲ-14 (331)、Ⅲ		8	36-330 ~333	34B									
Ⅲ		8	36-334	34B							+	(5'層)	
		16											北西部一部攪乱
Ⅲ-14(27-21、P-1)、 Ⅲ	1 (配石上)	18	27-21 36- 336、337	37-2 34B									南西部攪乱

ビット 番号	区 名	平面形	規 模		配 石	小ビット	長 軸 方 向	ビットの タイプ	挿 図 番 号	図 版 番 号	ビット群
			横 口	深 さ							
181	XⅣ-H-21	楕円形	87×65	18			NE -SW	A1M	6		X'
182	XⅢ-H-6	不整形円形	90×76	41	壕口部1個			A1L	9	9B	S2
183	欠 番										
184	XⅢ-H-24	円 形	87×84	27				A1L	8	8C	S3
185	XⅢ-I-4	円 形	91×89	22	壕外北東側1個			A1L	10		S3
186	XⅢ-I-8, 9	円 形	126×124	60	壕内24個(内, 焼石4個)			ANc	20		S3
187	XⅢ-I-9	円 形	59×56	15	壕内5個(内, 焼石1個)			ANa	18	19C	S3
188	XⅢ-I-10	不整形円形	70×51	53			NW -SE	AII	11	10C	(S3)
189	XⅢ-I-14	円 形	72×67	38	壕内3個(内, 焼石1個)			AIIIaM	15	15D	S3
190	XⅢ-I-18, 19	楕円形	145×101	58	壕内5個		E-W	ANa	16	17B	S3
191	XⅢ-J-4	円 形	84×75	20				A1L	10		S4
192	XⅢ-J-4	不整形円形	79×64	20			WNW -ESE	A1M	7		S4
193	XⅢ-J-5	円 形	95×86	29				A1L	10		S4
194	XⅢ-J-10	円 形	101×99	27	壕内1個			AIII,LL	13		S4
195	XⅢ-J-15	円 形	79×75	23				A1L	9		S4
196	XⅣ-J-1	楕円形	114×100	30				A1LL	10	9A	S4
197	XⅣ-J-6	円 形	63×60	17	壕内11個(内, 焼石4個)			ANc	19	21C	S4
198	XⅣ-J-7	円 形	49×47	11				D	22		S4
199	XⅣ-J-8	円 形	53×52	16				A1S	5		S4

土器型式	土器		挿図 番号	図版 番号	石器器種	石器		挿図 番号	図版 番号	焼土 赤色土	炭化物	骨片	備考
	完形 半完形	破片 総数				石器	石片						
Ⅲ		1	36-33	34B		1							
Ⅱ、Ⅲ-10(340)、Ⅲ		3	36-33 ~34	34B	円形槌器、削器	2		39- 66,67	39				
Ⅲ-6(342)		8	36-34	34B									
					石皿破片(S-1、配石)	1		41-85	40A				
Ⅲ-10(343~345)、Ⅲ		22	36-34 ~348	34B	砥石(S-1、底部)	1		40-73	40B				
		2											南側壁にそって攪乱
Ⅲ-7(349)、Ⅲ		8	36-349 ~352	34B	削器(2点)			39- 68,69	39				
Ⅲ		10	36-353 ~357	34B		1							

第3表 T210遺跡焼土・赤色土一覧表（B番号：焼土，R番号：赤色土）

番号	ピット番号、区	範囲	厚さ	層準およびレベル（標高）		内 容 物					備 考	
						色 調	性 状	炭 化 物	細 礫	黒耀石削片		土 器 片
B-1	第63号石組	55×37cm	7.6cm	石組中	136.419~136.343m	茶 褐 色	土壌分多い	△	×	×	△	Z配石群中
B-2	XV-H-17	37×31	7.0		136.265~136.195	暗 褐 色	やや粘性あるが、きめは粗い	△	×	×	×	X配石群中
B-3	XV-H-16、17	40×31	4.2		136.176~136.134	褐 色	粘性あり、きめは細い	△	×	×	×	〃
B-4	第31号ピット	34×24	3.4	壇口~壇外	136.384~136.350	暗 灰 褐 色	〃, 〃	×	×	×	×	〃
B-5	XV-H-16	47×40	4.3		136.182~136.140	灰 褐 色	やや粘性ある	×	×	×	×	〃
B-6	XV-H-22	37×36	7.7		135.964~135.887	茶 褐 色	土壌分がやや多く、粘性ある	×	×	×	×	〃
B-7	第9号ピット	36×27	8.6	壇口~壇外	136.043~135.957	〃	やや土壌分多い、やや粘性ある	×	×	×	×	〃
B-8	XV-H-11	40×25	6.8		136.366~136.298	(暗)茶褐色	〃, 〃	△	△	×	×	〃
B-9	第15号ピット	39×34	5.0	壇口の上	136.309~136.259	暗 灰 褐 色	やや粘性ある	△	×	×	△	〃
B-10	〃	44×19	3.5	〃	136.408~136.373	〃	〃	×	×	×	×	〃
B-11	XIV-H-24	35×29	5.6		136.598~136.542	〃	〃	△	△	×	×	〃
B-12	第30号ピット	46×46	9.0	壇口~壇外（14層）		灰 褐 色	粘性ある	△	×	×	×	〃
B-13	XV-G-25	45×29	5.2		136.581~136.529	暗 茶 褐 色	土壌分多く、やや粘性ある	△	×	×	×	〃
B-14	第38号ピット	75×34	7.0	壇口~壇外（14層）		不 明						Y配石群中
B-15	XV-I-18	60×9	9.7		135.199~135.102	褐 色	非常にきめ細い	△	×	×	×	〃
B-16	第43号石組	32×29	11.2	石組のそば	135.366~135.254	灰 褐 色	〃	△	×	×	×	〃
B-17	第28号石組	30×27	13.4	石組の外	135.525~135.391	暗 褐 色	粘性あり、非常にきめ細い	△	×	×	×	〃
B-18	XV-I-22	61×55	8.7		135.187~135.100	暗 灰 褐 色	やや粘性ある	△	×	×	×	
B-19	第73号ピット	61×37	10.0	壇口~壇外（14層）		褐 色	〃	△	△	△	△	
B-20	第82号ピット	10×8	4.0	壇口部（7層）		茶 褐 色	土壌分多い	△	△	×	×	
B-21	第95号ピット	64×31	5.0	壇中央部壇内（14層）		暗 褐 色	土壌分多く、粘性ある	○	○	△	△	クルミ殻片出土
B-22	第104号ピット	56×54	10.0	〃（5層）		明 褐 色	バサバサしてきめ細い	△	◎	×	×	
B-23	第107号ピット	不明	6.0	壇口部壇内（7層）		不 明						
B-23'	〃	34×21	4.5	壇中央部壇内（9層）		暗 灰 褐 色	土壌分多く、粘性ある	○	○	×	○	
B-24	第120号ピット	42×34	8.0	壇口部壇内（14層）		灰 褐 色	きめ細い	△	○	×	×	
B-25	第149号ピット	65×30	7.0	壇中央部壇内（14層）		〃	〃	◎	△	△	△	赤色土を若干含んでいる
B-26	第160号ピット	47×45	7.0	壇口部壇内（14層）		暗 灰 褐 色	やや粘性ある	○	○	×	×	
B-27	〃	50×35	10.0	壇中央部壇内（6層）		不 明						
B-28	第77号ピット	不明	6.0	〃（14層）		不 明						
B-29	第20号ピット	不明	3.0	〃（6層）		不 明						
B-30	第93号ピット	不明	5.0	壇口部壇内（6層）		不 明						
R-1	第24号ピット	26×26	2.0	壇口~壇外								X配石群中
R-2	第41号ピット	13×15	1.0	壇外	136.214							Z配石群中
R-3	第104号ピット	2×2	0.5	壇底（西側）								〃
R-4	第10号ピット	12×15	1.0	〃（東側）配石直下								X配石群中

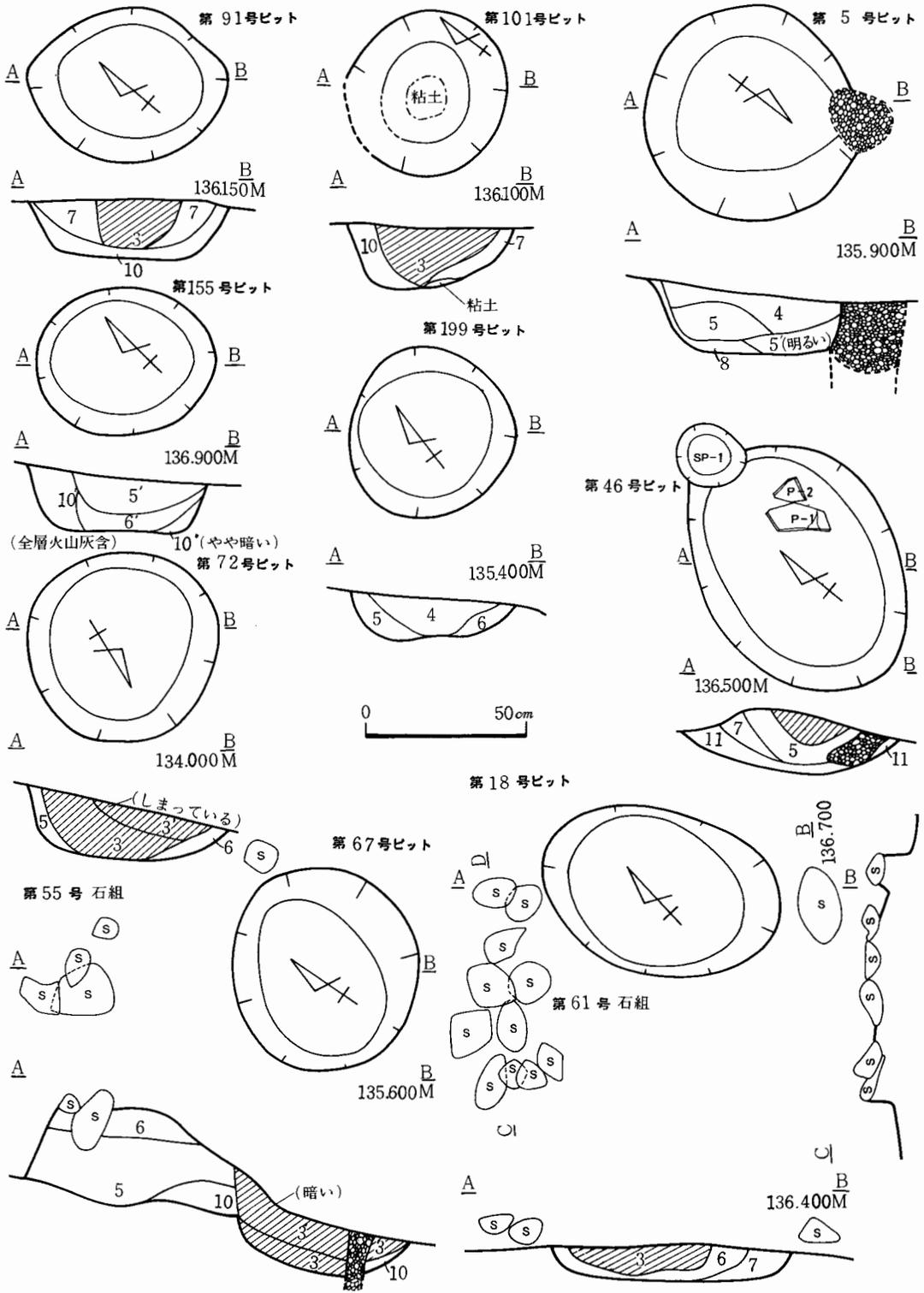
（内容物：◎非常に多い、○多い、△少ない、×なし）

第4表 T210遺跡小ピット一覧表

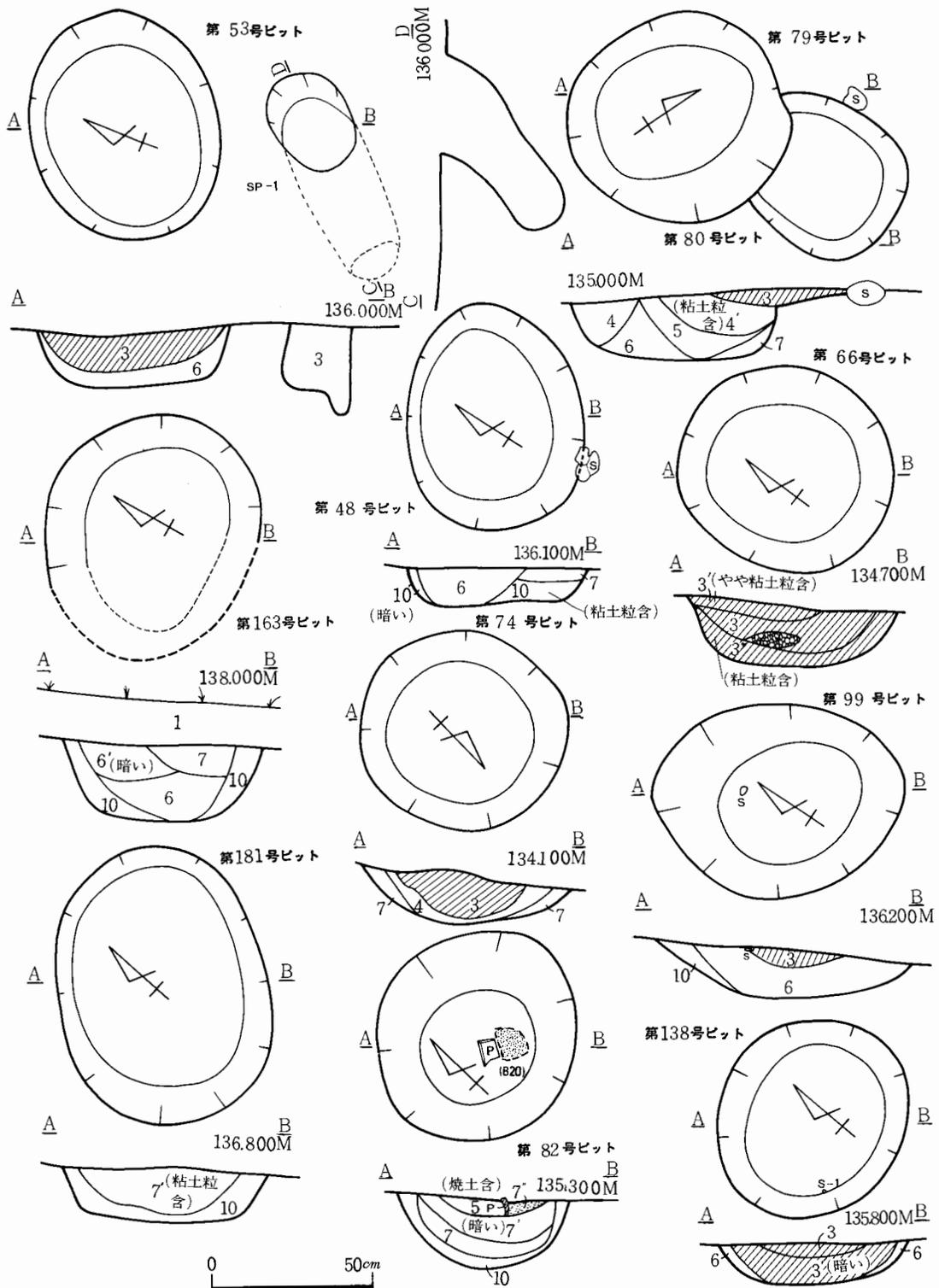
ピット番号	小ピット番号	部 位	長径×短径	深 さ	備 考
第1号ピット	1 ^(sp)	塙 底, 東	7×6 ^(cm)	13.9 ^(cm)	
"	2	" , "	7×4	6.9	
"	3	北 東 壁	9×7	8.2	
"	4	塙 外, 北	52×17	21.0	上部に土器片(P-2, 底部位)
"	5	" , 西	12×12	21.0	
"	6	" , 南南東	30×26	16.2	
"	7	" , 南 東	20×14	12.1	
"	8	" , 東	14×9	13.4	
第4号ピット	1	" , 南 西	18×15	12.2	黒褐色土層(やや明るい)
"	2	" , 東	34×19	6.9	黒褐色土層(少量粘土細粒含)
"	3	" , "	16×15	18.4	暗黒褐色土層(少量粘土細粒含)
"	4	" , 北 東	15×11	33.3	茶褐色土層(現代の所産の可能性あり)
第12号ピット	1	" , 北	36×27	5.0	暗茶褐色土層, 削器(1), 土器片(5), 礫(2)
第14号ピット	1	塙 底, 東	12×11	5.0	黄褐色土層
第21号ピット	1	底面~南東壁	31×26	13.0	暗茶褐色土層(粘土粒混入)
"	2	北 東 壁	25(37)×30	12.0	
第24号ピット	1	塙 外, 南 西	29×18	10.0	黒褐色土層, 炭化物若干含む
第30号ピット	1	南 東 壁	23×23	19.0	茶褐色土層
第33号ピット	1	塙 外, 東	21×20	20.0	
第34号 石 組	1		19×13	21.9	小ピット内の石は塙口の上である
第38号ピット	1	西 側 壁	82×48	22.0	第38号ピットより古い, 上に焼土(B-14)
第44号ピット	1	塙 底, 南 東	6×4	?	浅い, 小ピットかどうか疑問
第46号ピット	1	北 壁	21×20	?	暗茶褐色土層
第50号ピット	1	塙 外, 北	67×40	16.0	暗黒褐色土, 黒色土, 暗黄褐色土層
第53号ピット	1	" , 南南東	32×24	30.0	黒色土, 斜めに掘込んでいる, 攪乱?
第69号ピット	1	" , 南 東	11×9	?	
第78号ピット	1	南 西 壁	14×12	?	
第81号ピット	1	西 壁~塙 外	50×45(50)	5.0	茶褐色土層
第83号ピット	1	南 東 壁	27×18	?	
"	2	南 壁	18×12	?	
"	3	塙 外, 南	16×13	?	
第103号ピット	1	塙 底, 北	13×13	?	

炭化物を含む
いずれも若干の

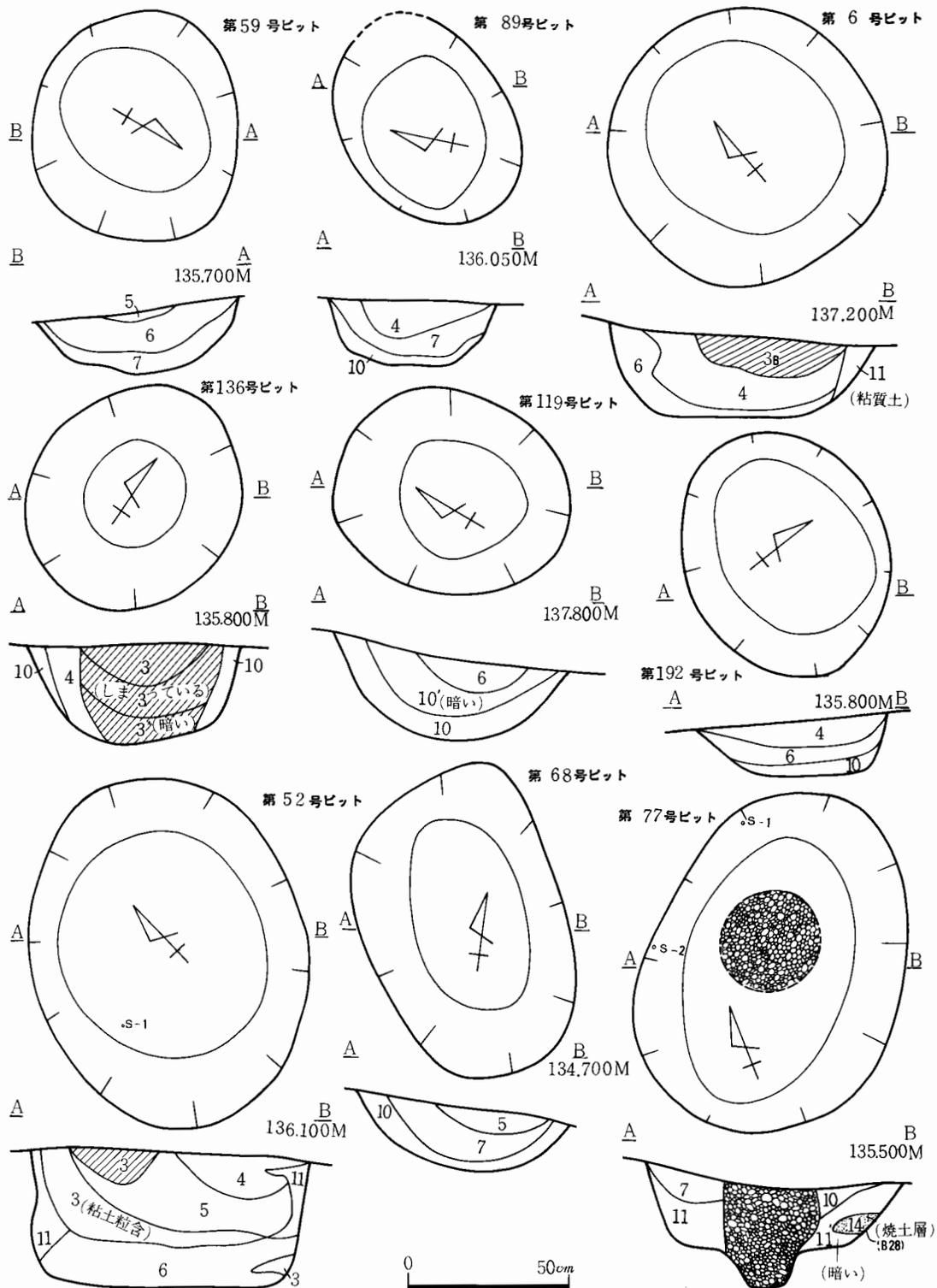
ピット番号	小ピット番号	部 位	長径×短径	深 さ	備 考
第103号ピット	^(SP) 2	西 壁	44×30 ^(cm)	^(cm) ?	
第106号ピット	1	北 壁, 壙 外	45×22	6.0	暗茶褐色土, ピットの一部分
第131号ピット	1	北 壁	18×17	?	攪乱?
第134号ピット	1	壙 底, 北 西	16×13	?	
"	2	" , 南 西	16×12	?	
"	3	南 東 壁	11(13)×10	?	



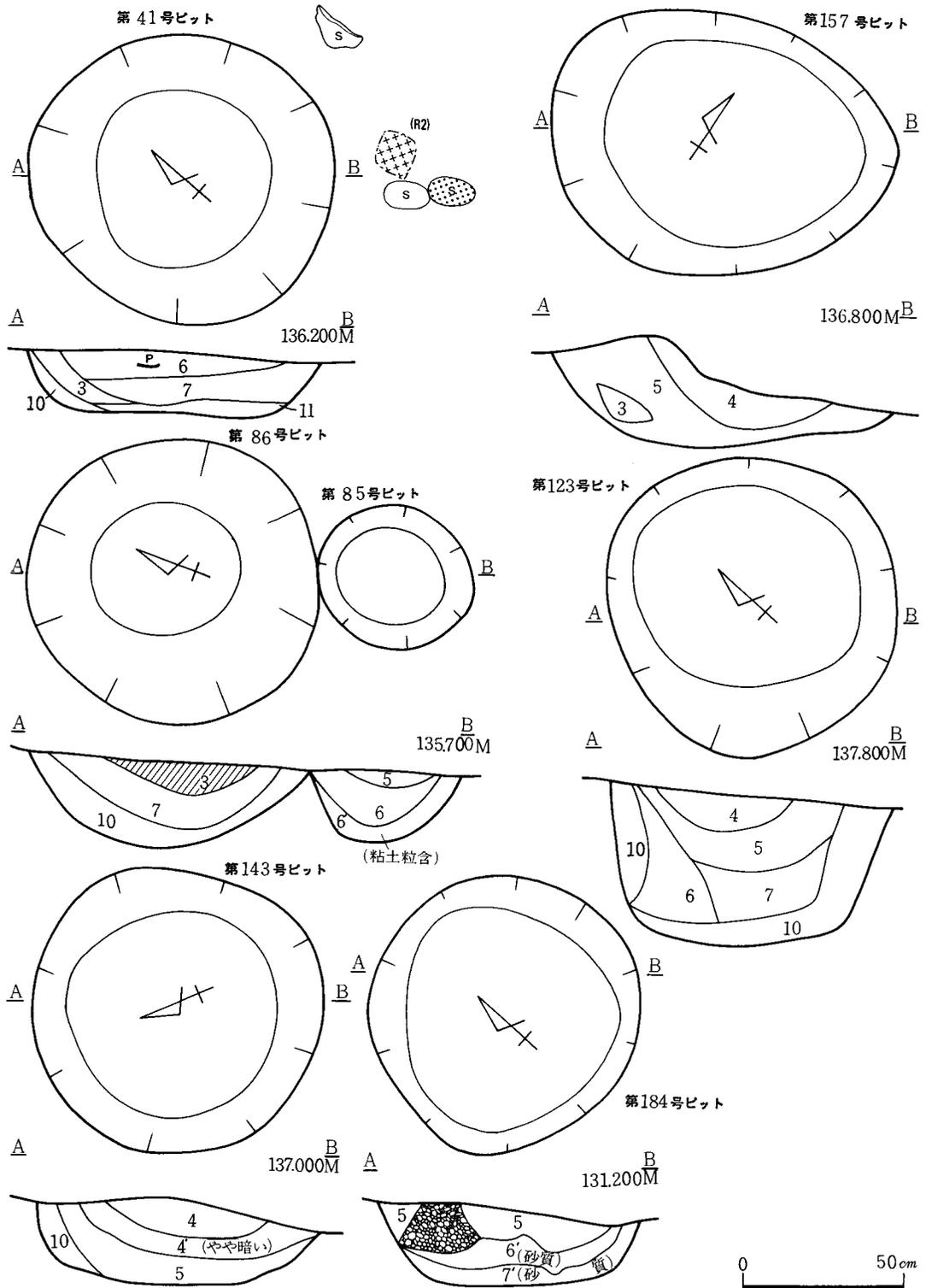
第 5 図 第 5, 18, 46, 67, 72, 91, 101, 155, 199号(A I型)ピット, 第 55, 61号石組実測図



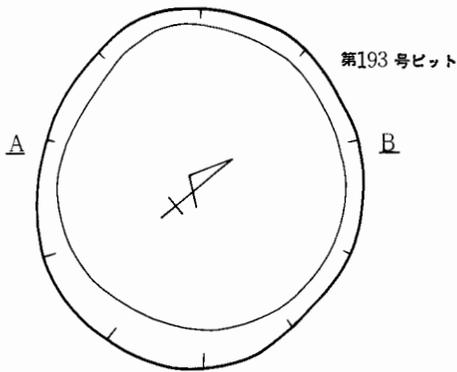
第6図 第48, 53, 66, 74, 79, 82, 99, 138, 163, 181号(AI型), 第80号(D型)ピット実測図



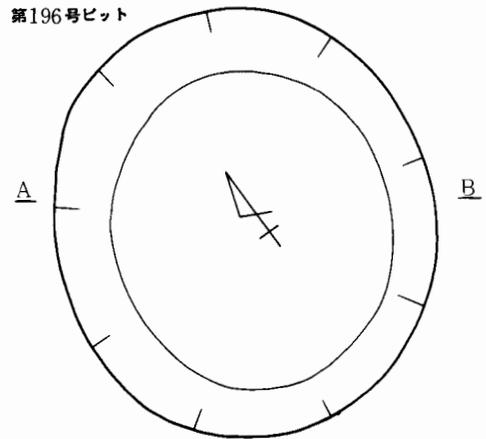
第7図 第6, 52, 59, 68, 77, 89, 119, 136, 192号(AI型)ピット実測図



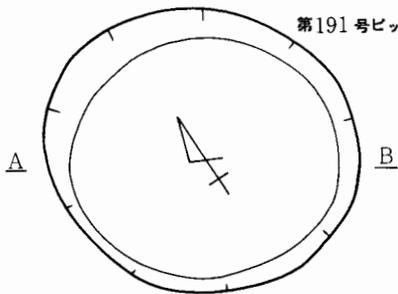
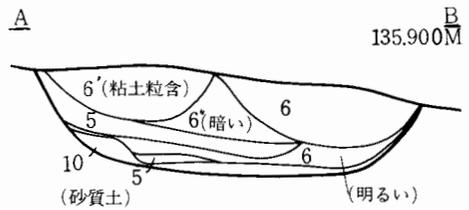
第 8 図 第 41, 85, 86, 123, 143, 157, 184 号 (A I 型) ピット実測図



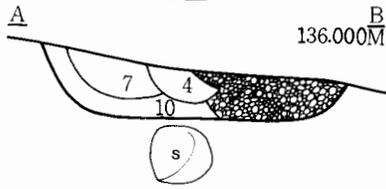
第193号ピット



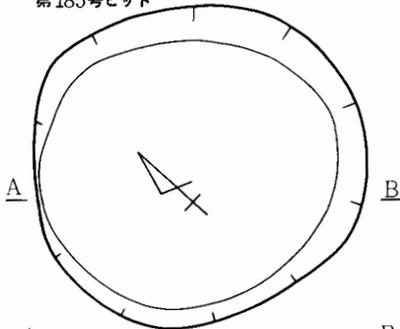
第196号ピット



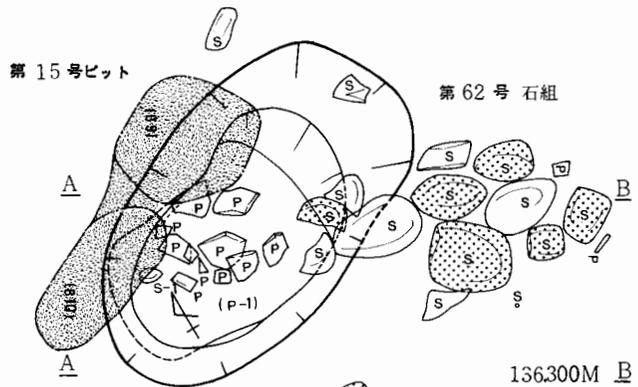
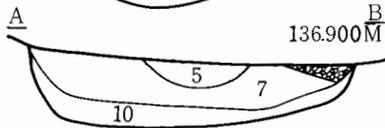
第191号ピット



第185号ピット

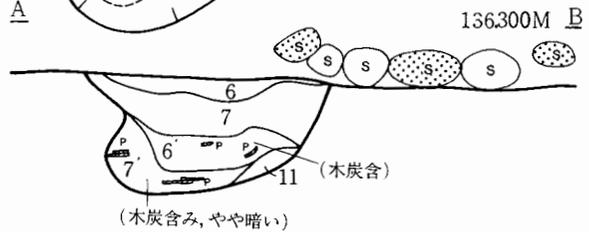


136.900M



第15号ピット

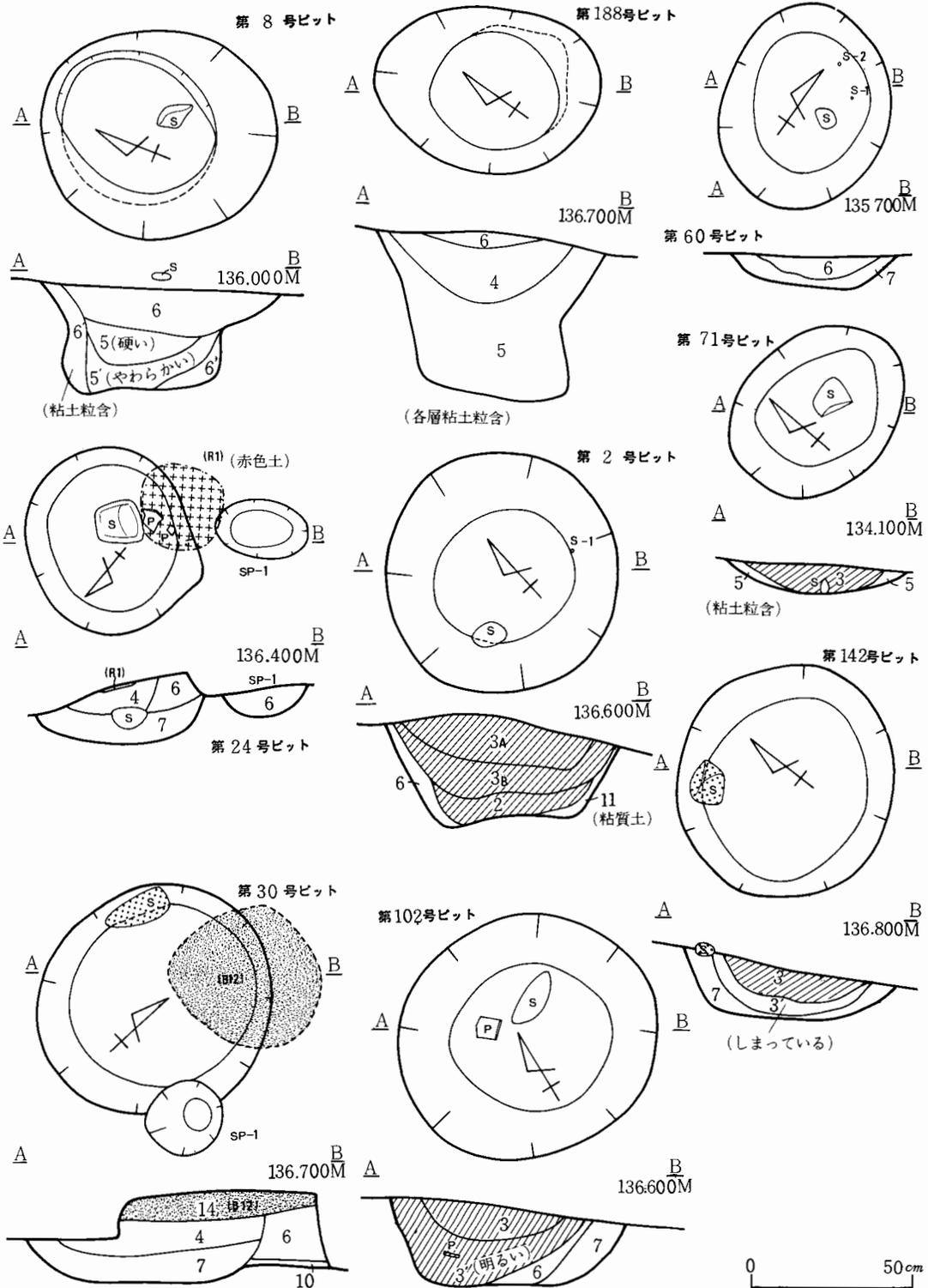
第62号石組



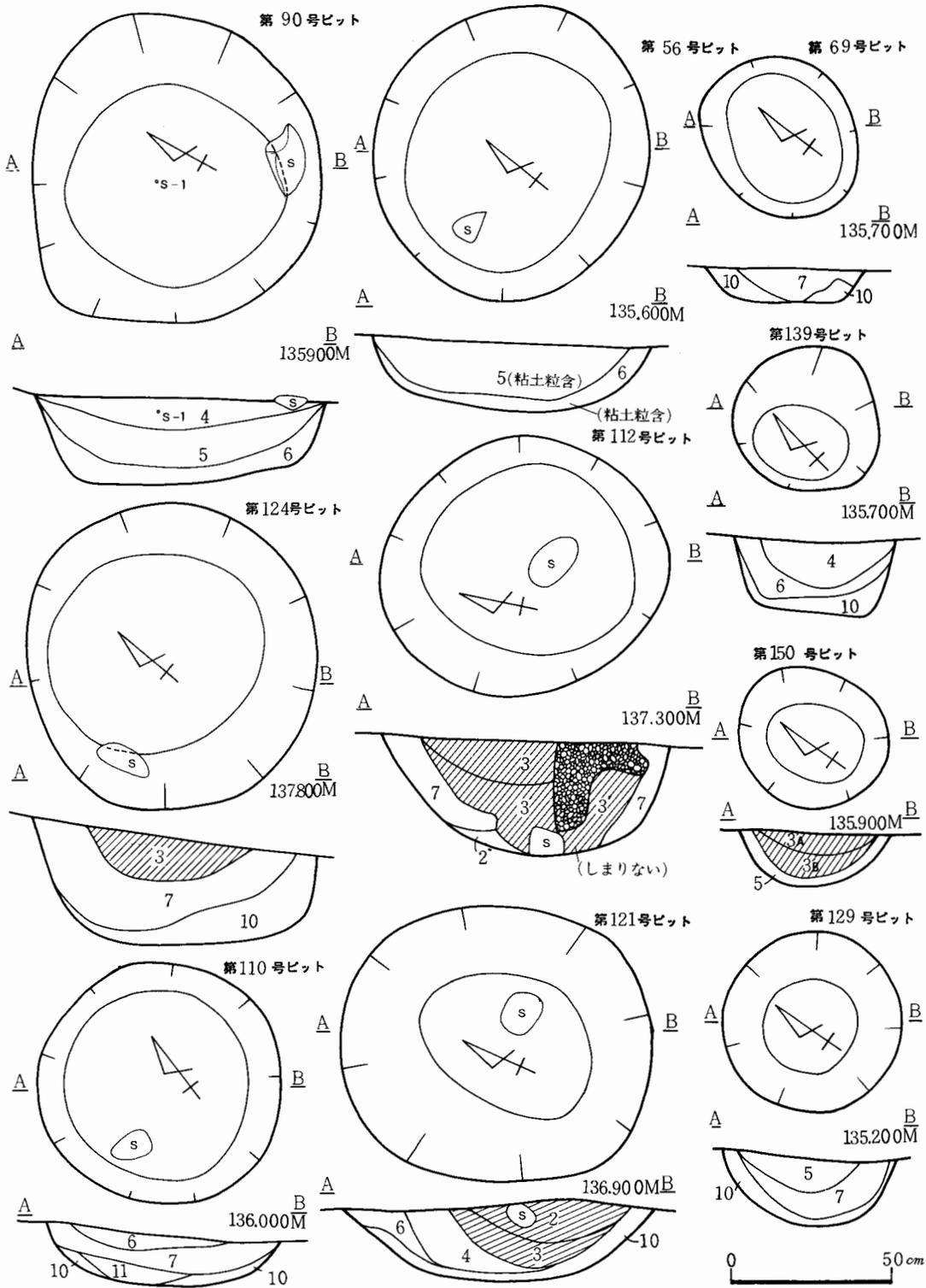
136.300M



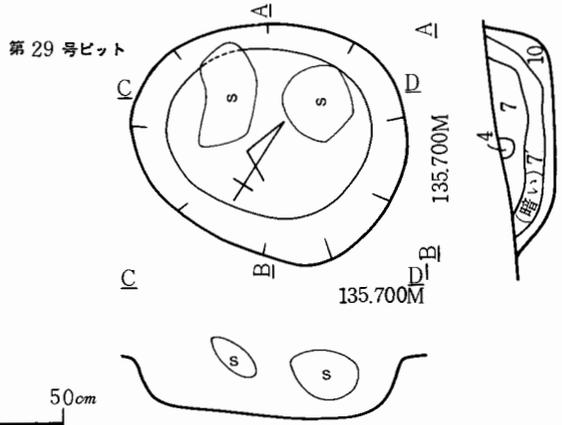
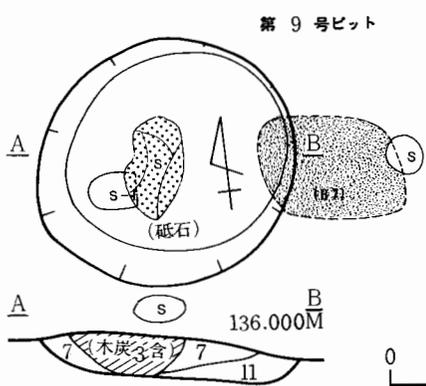
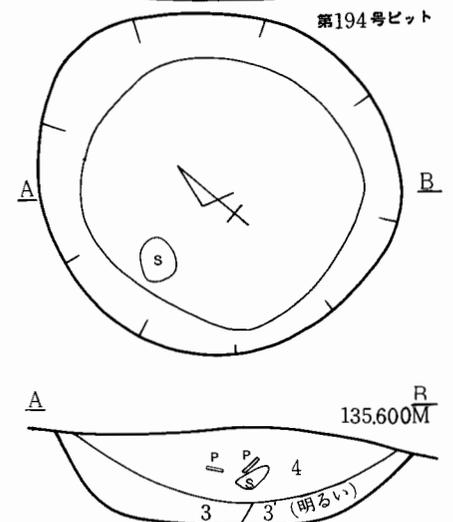
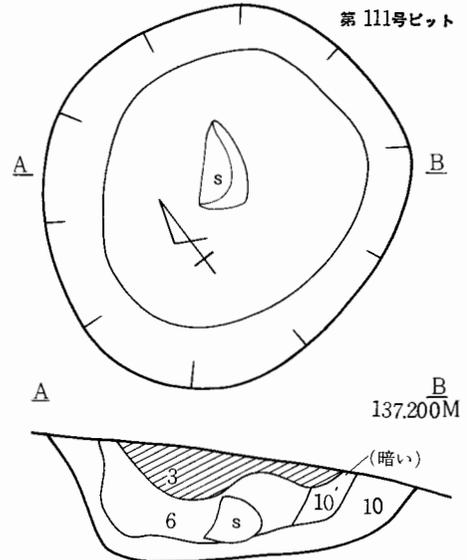
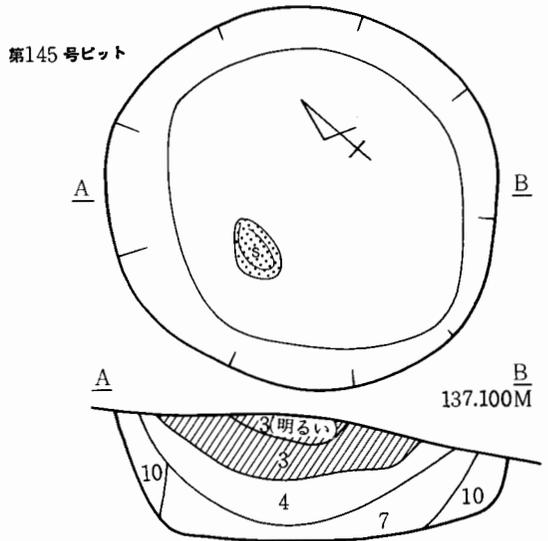
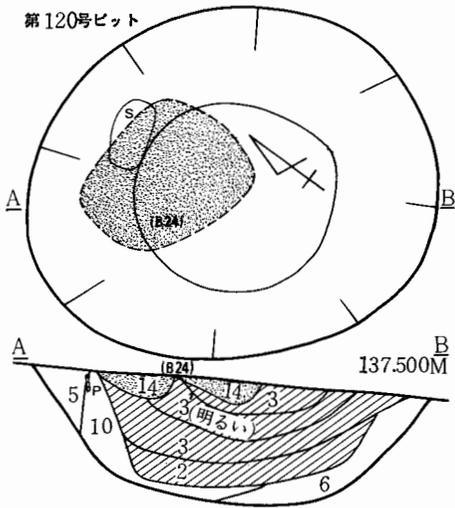
第10図 第185, 191, 193, 196号(A I型), 第15号(A II型)ピット, 第62号石組実測図



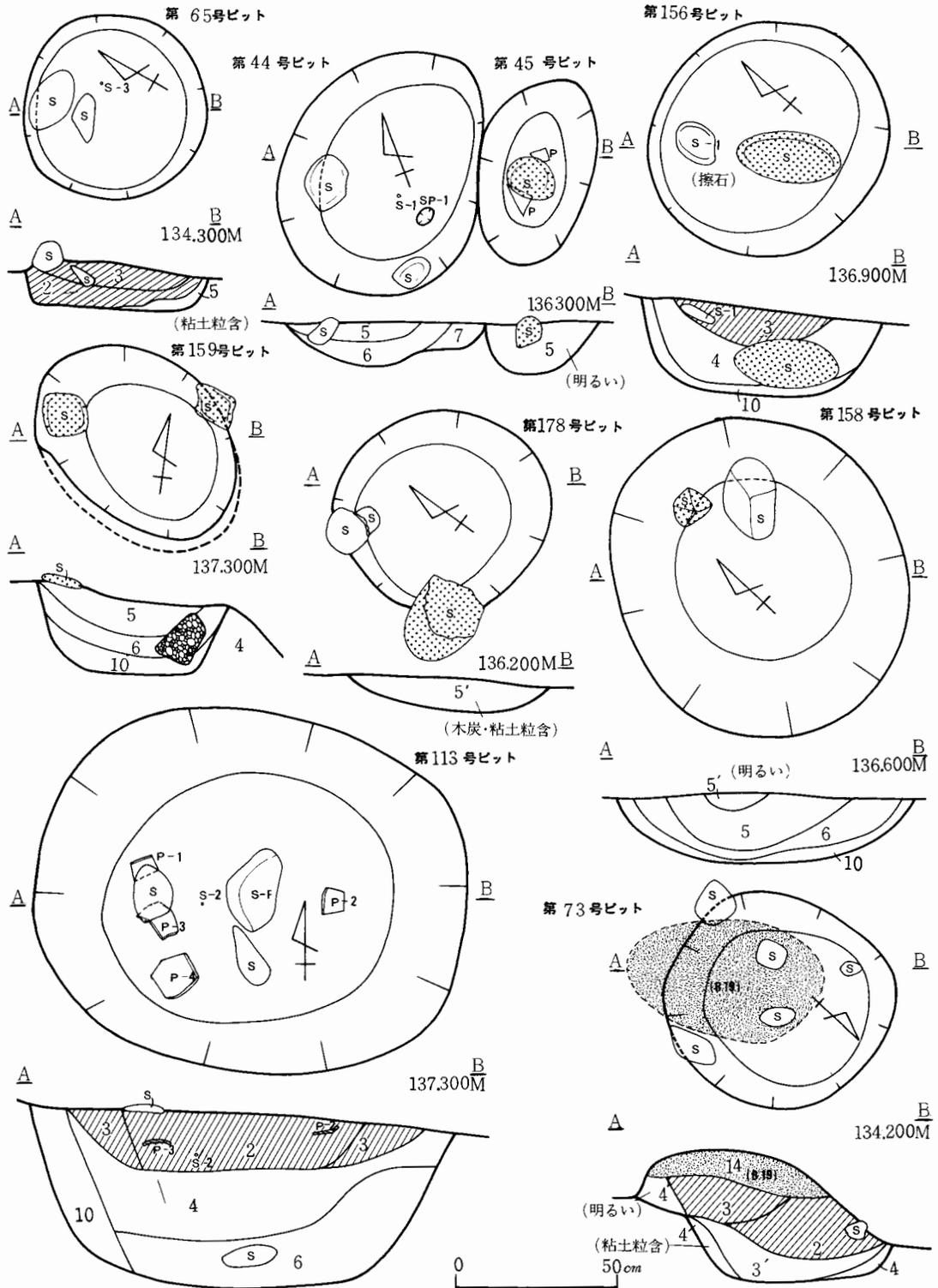
第11図 第8, 188号 (A II型), 第2, 24, 30, 60, 71, 102, 142号 (A III型) ピット実測図



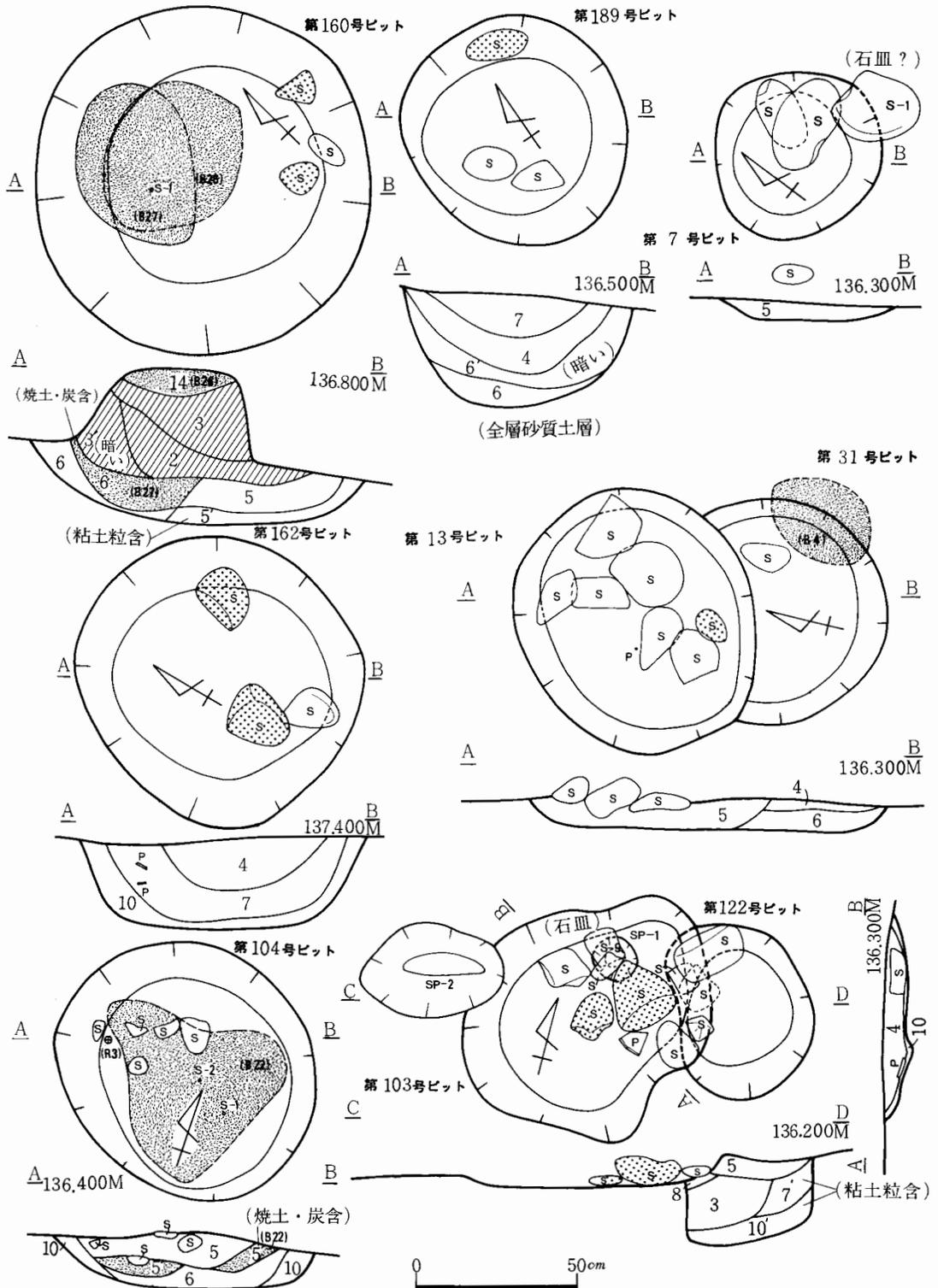
第 12 図 第 56, 90, 110, 112, 121, 124号 (A III型), 第 69, 129, 139, 150号 (D型) ピット実測図



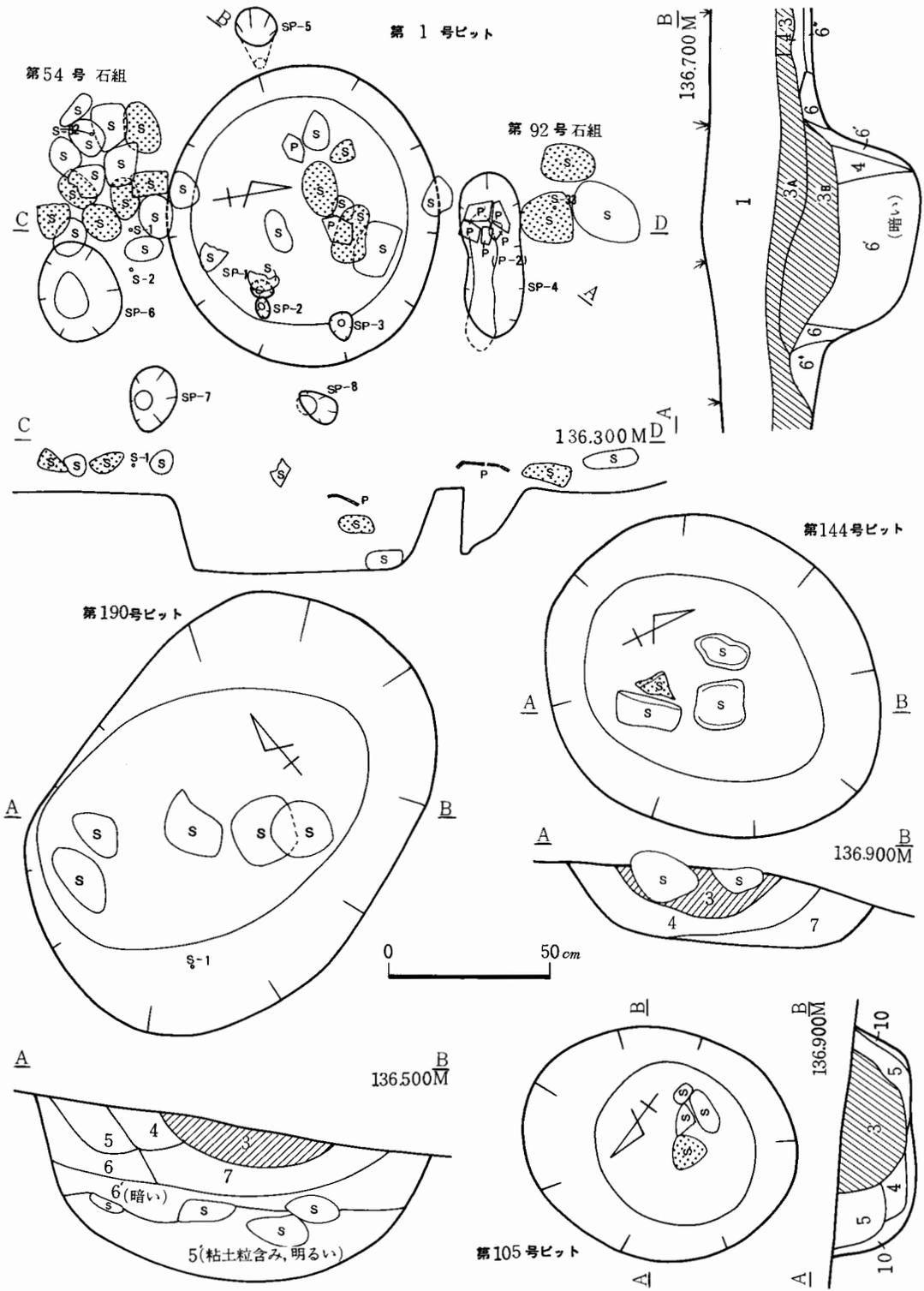
第13図 第9, 29, 111, 120, 145, 194号(AⅢ型)ピット実測図



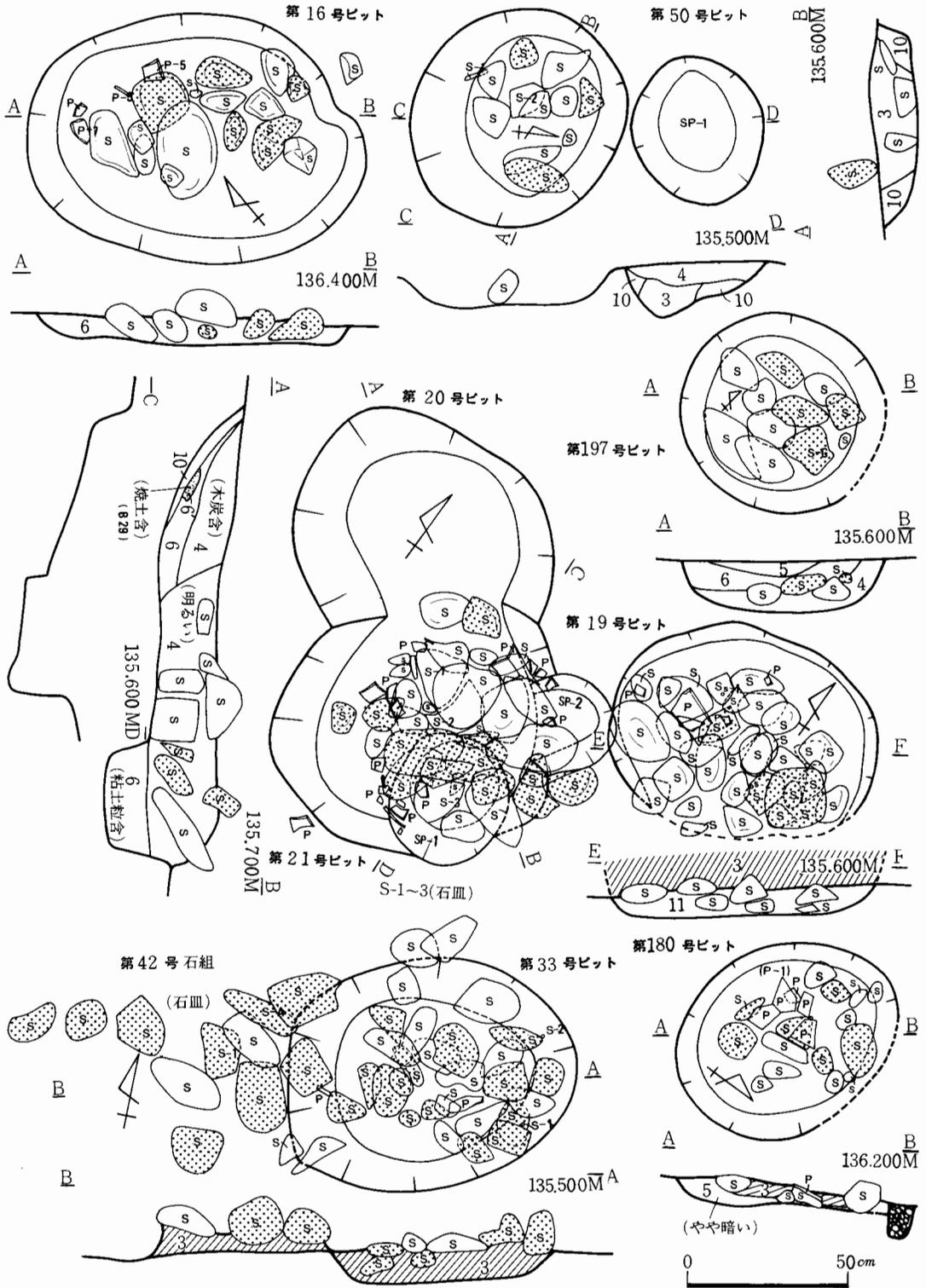
第 14 図 第 44, 45, 65, 73, 113, 156, 158, 159, 178 号 (AⅢ型) ピット実測図



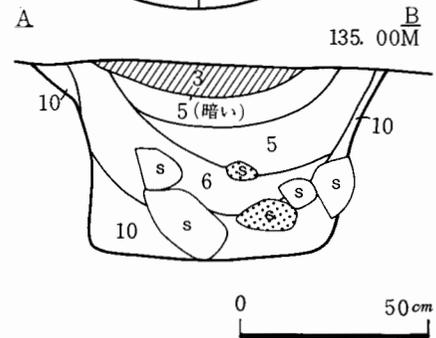
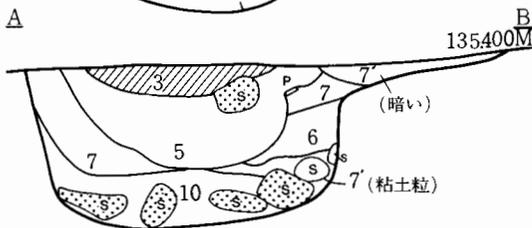
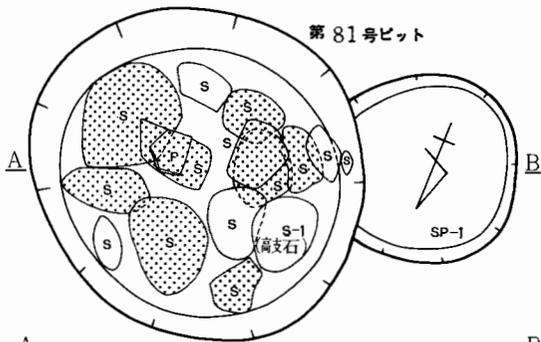
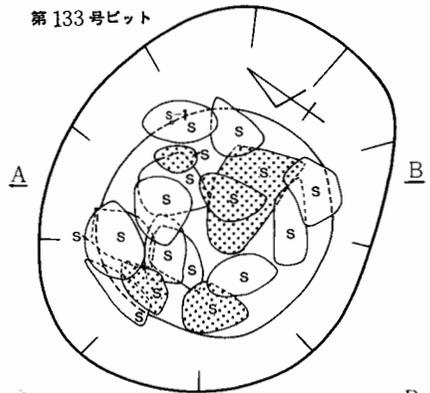
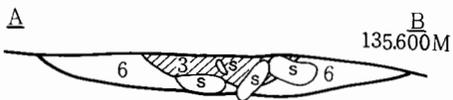
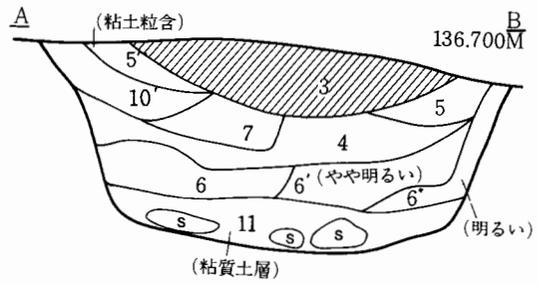
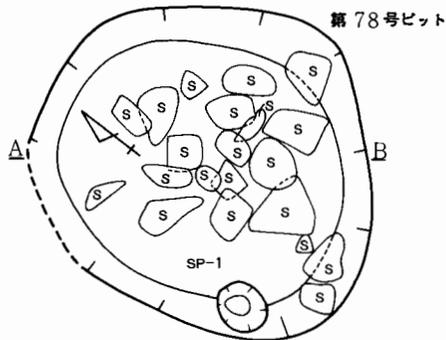
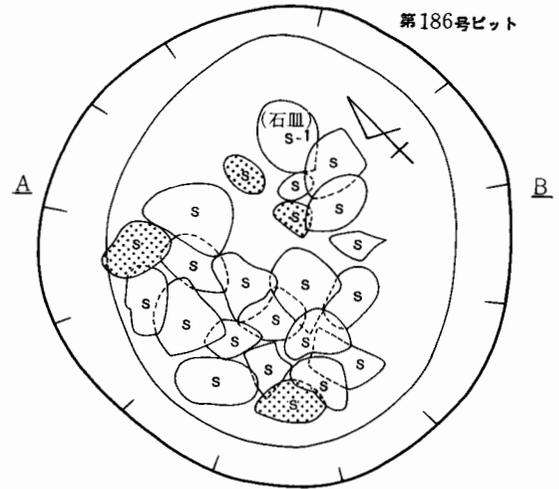
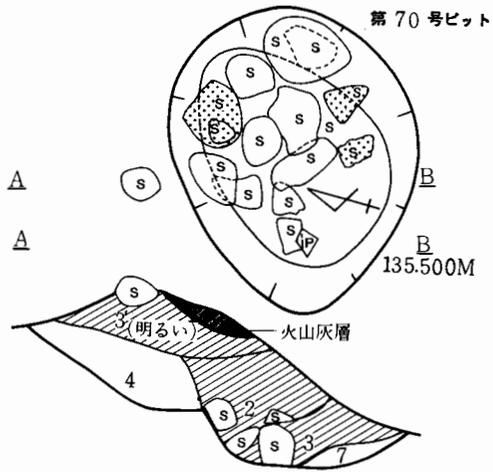
第15図 第122号(A I型), 第7, 31, 160, 162, 189号(A III型), 第13, 103, 104号(A IV型)ピット実測図



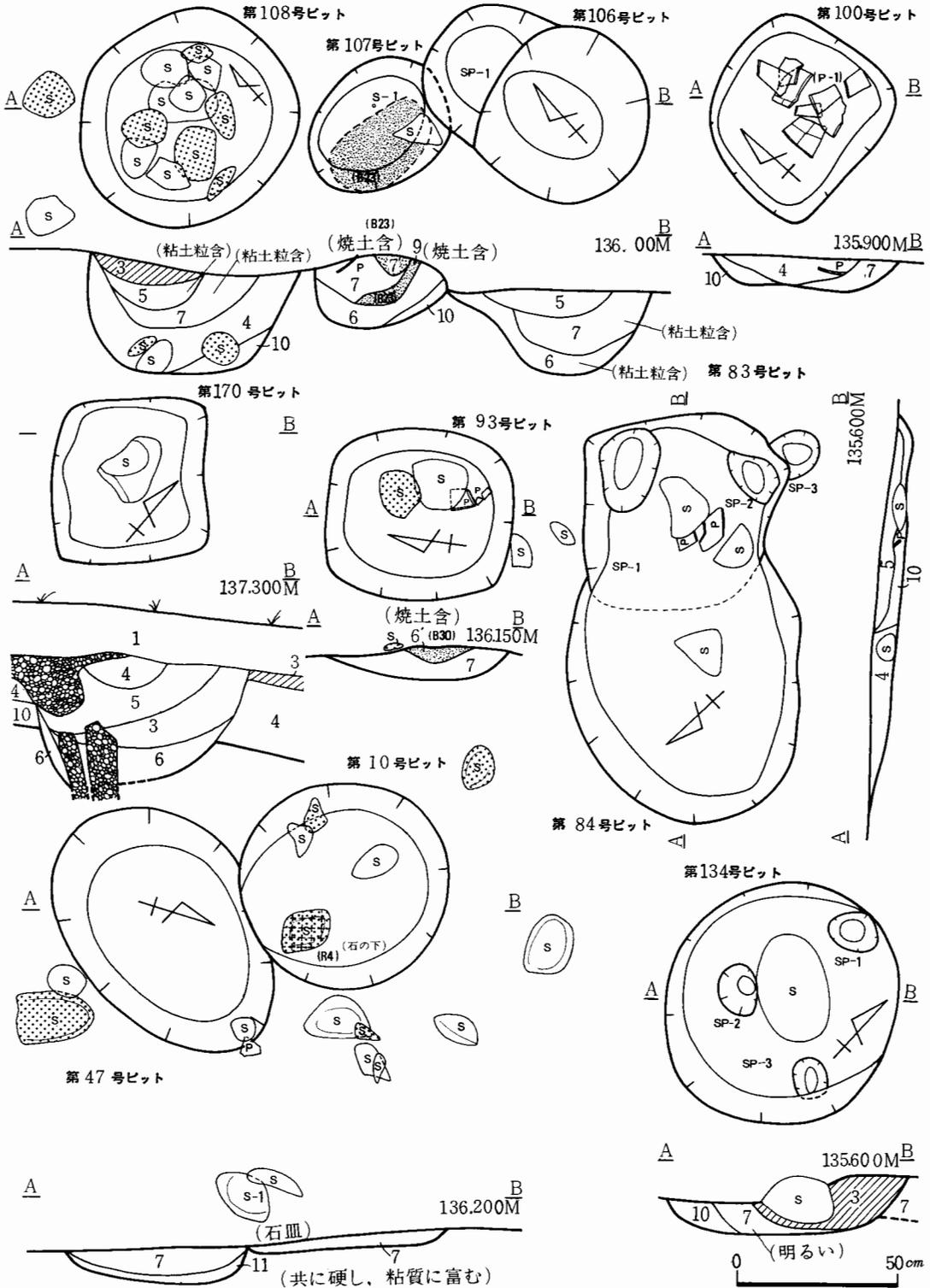
第 16 図 第 1, 105, 144, 190 号 (AIV 型) ピット, 第 54, 92 号石組実測図



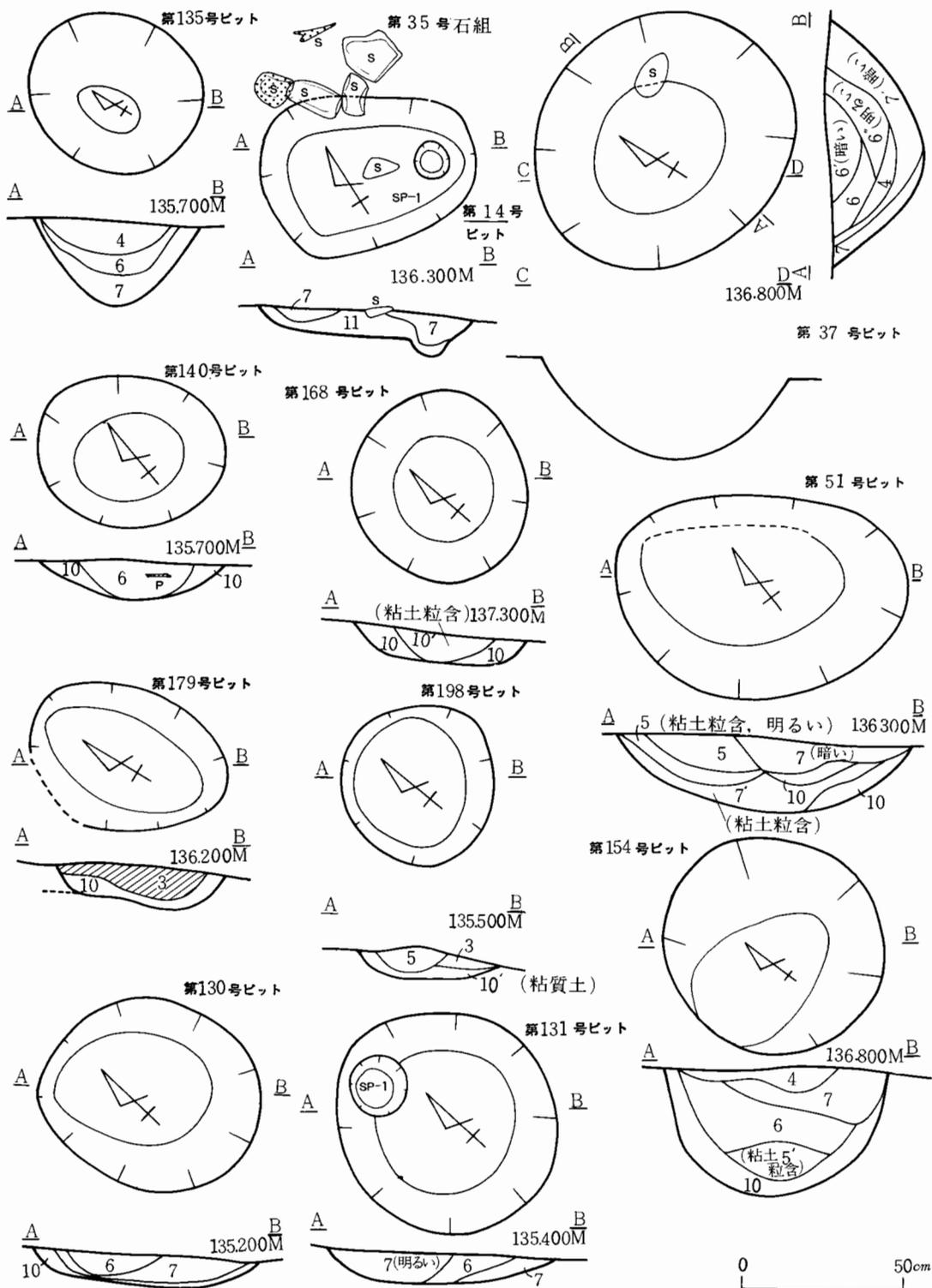
第19図 第20号(A I型), 第16, 19, 21, 33, 50, 180, 197号(A IV型)ビット, 第42号石組実測図



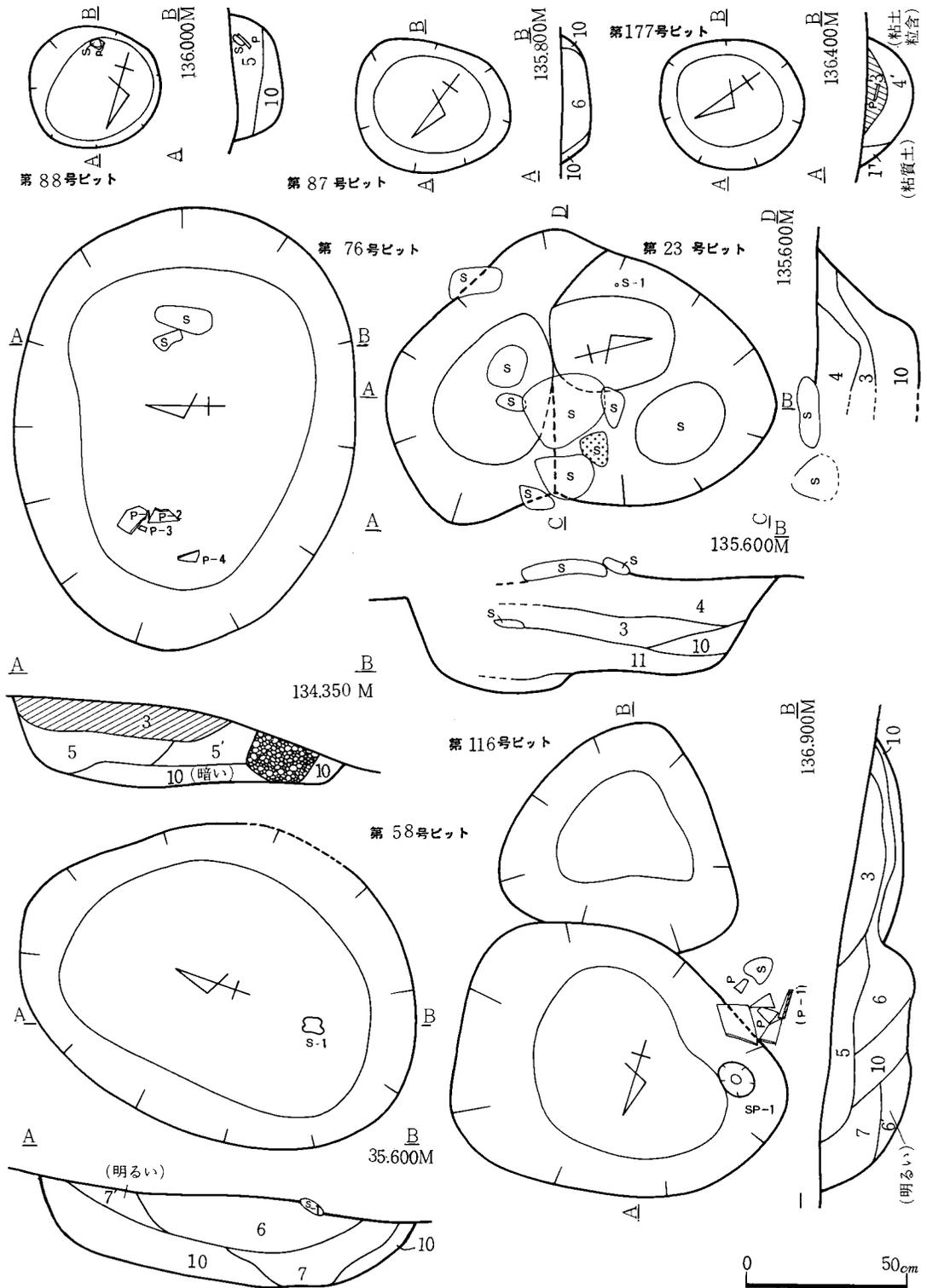
第20図 第70, 78, 81, 133, 186号(AIV型)ピット実測図



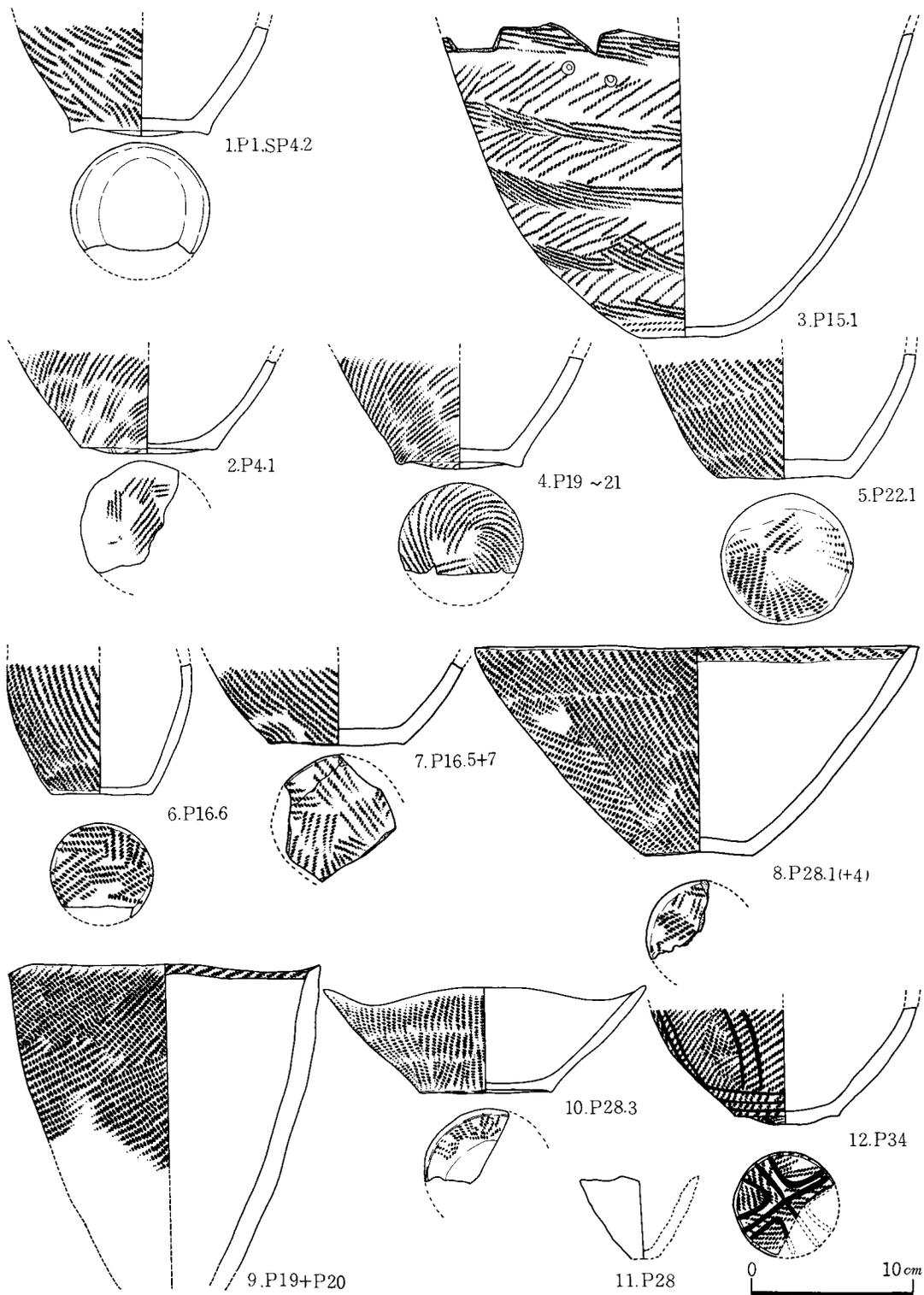
第21図 第106, 107号 (A I型), 第108号 (A V型), 第93, 100, 170号 (B型), 第10, 83, 84, 134号 (C型), 第47号 (D型) ピット実測図



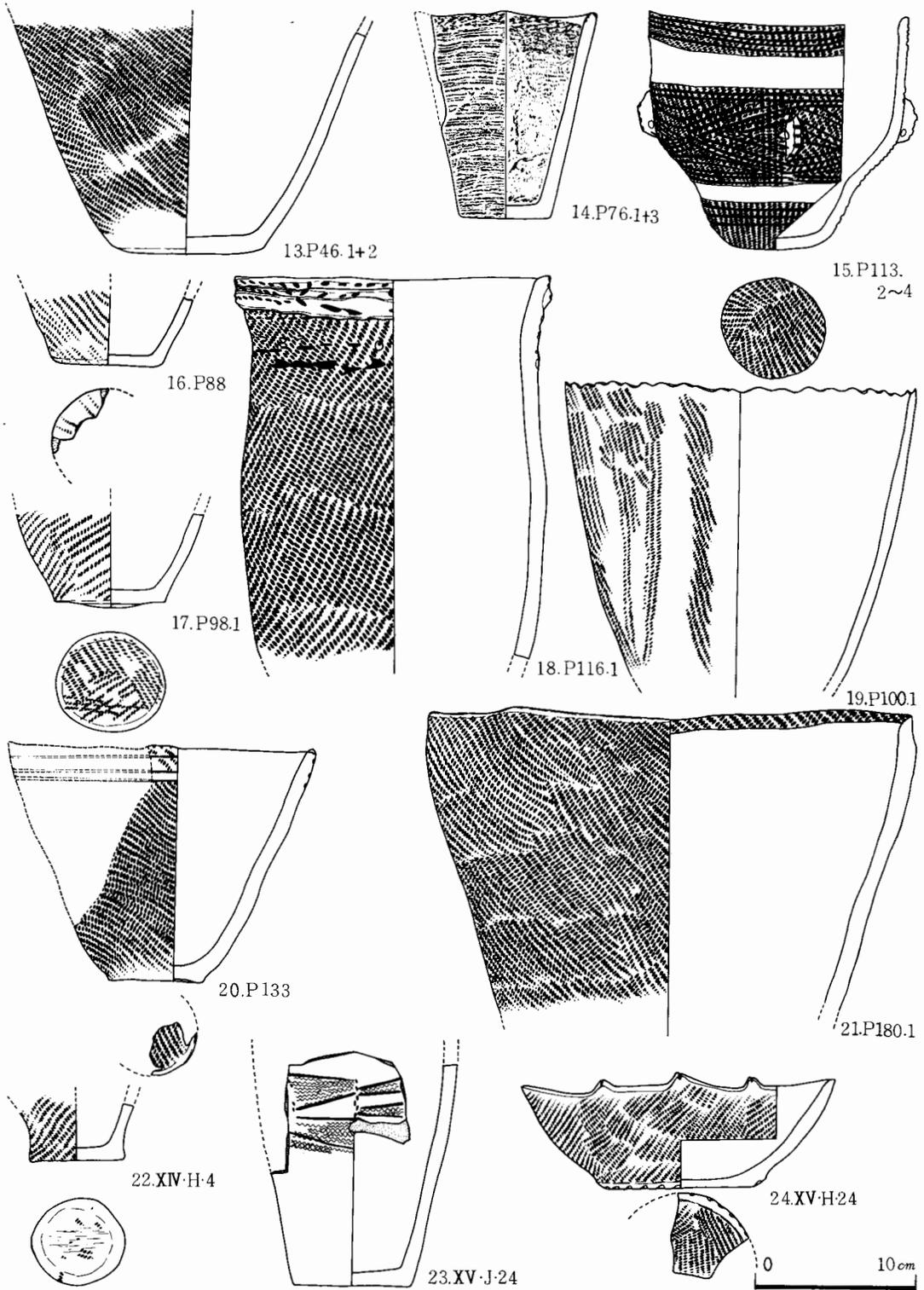
第22図 第14, 37, 51, 130, 131, 135, 140, 154, 168, 179, 198号(D型)ピット, 第35号石組実測図



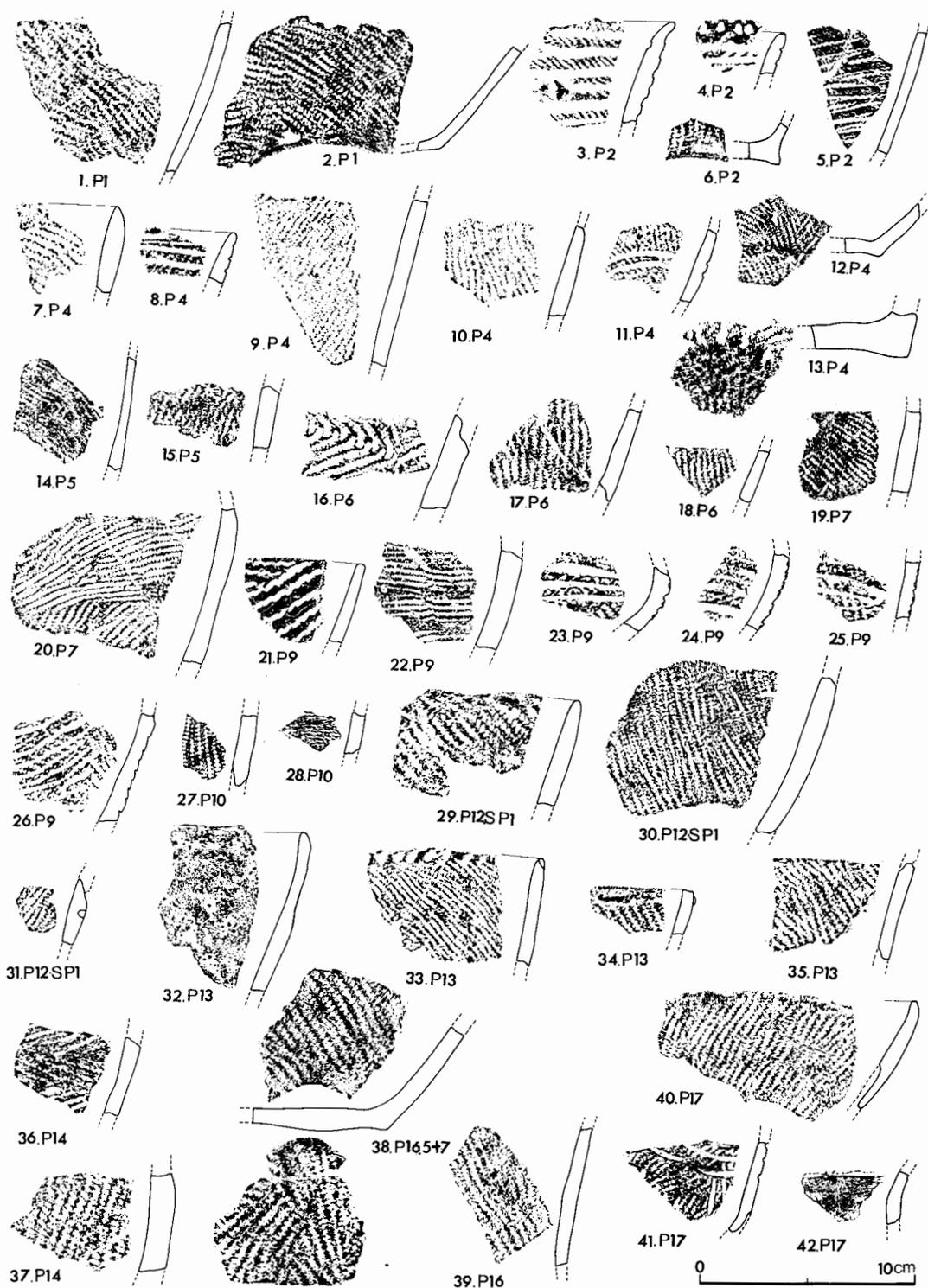
第23図 第87, 88, 177号 (D型), 第23, 58, 76, 116号 (D型) ビット実測図



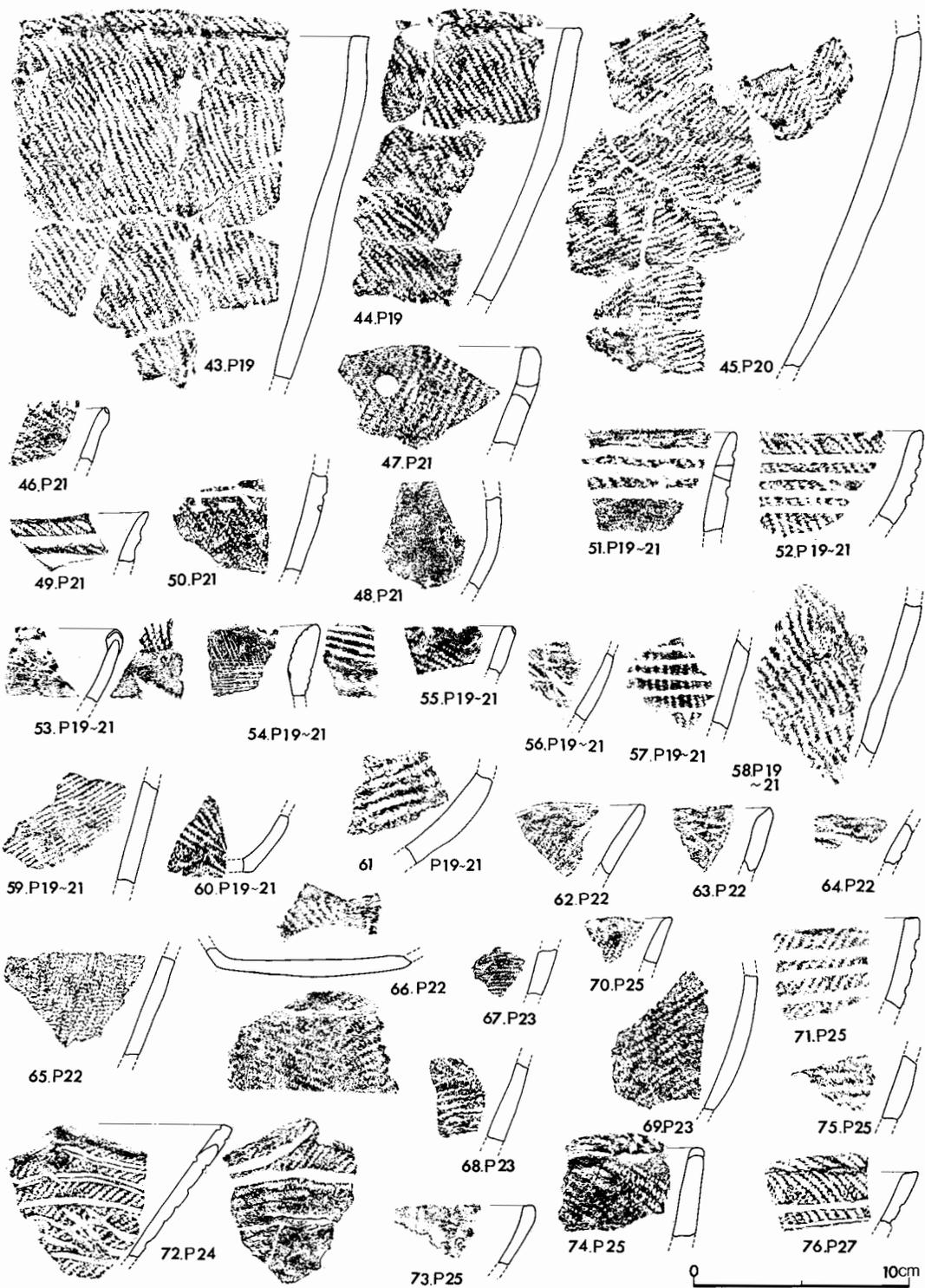
第 26 图 遺構出土土器実測図 (1)



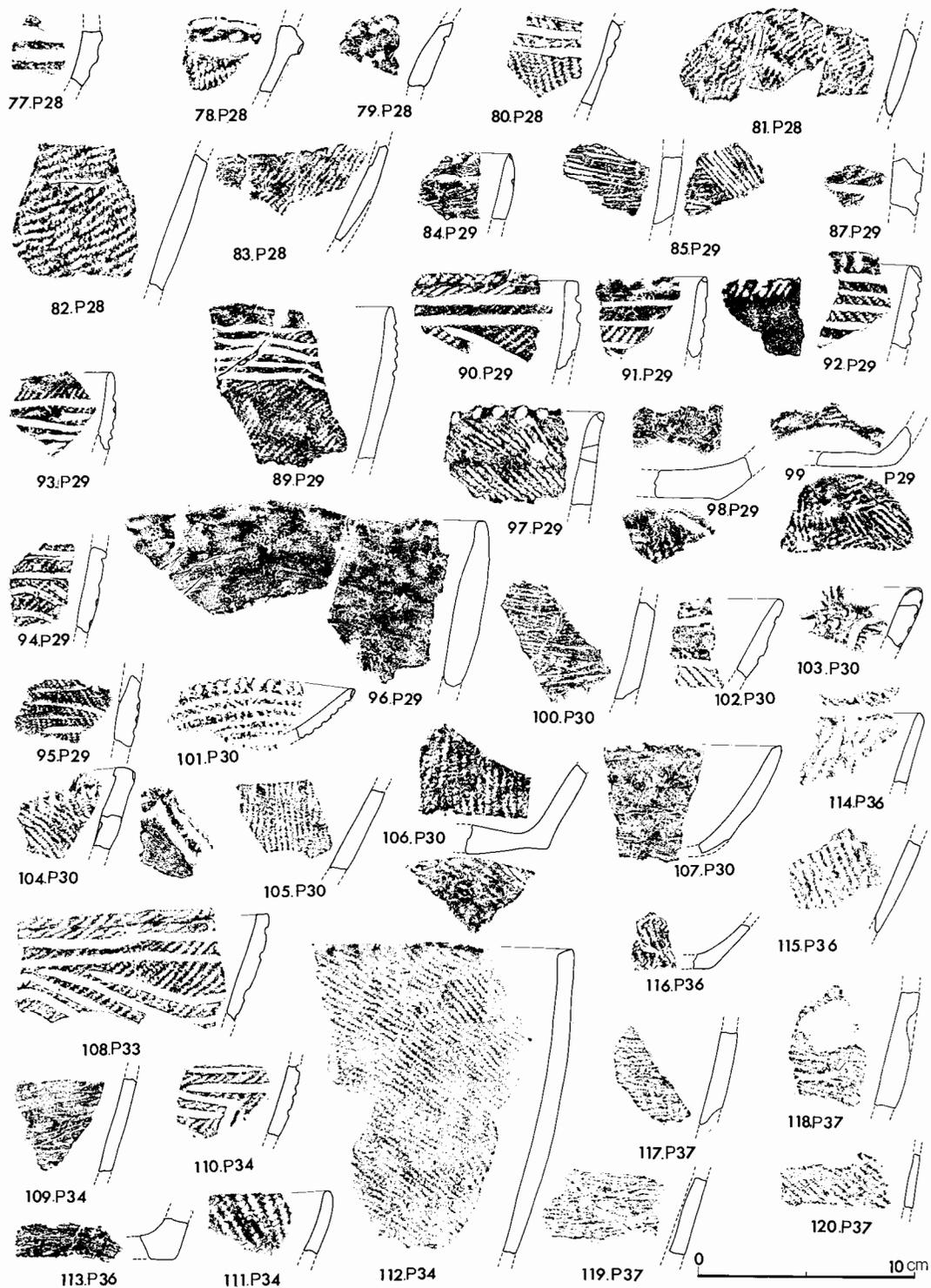
第 27 図 遺構および発掘区出土土器実測図 (2)



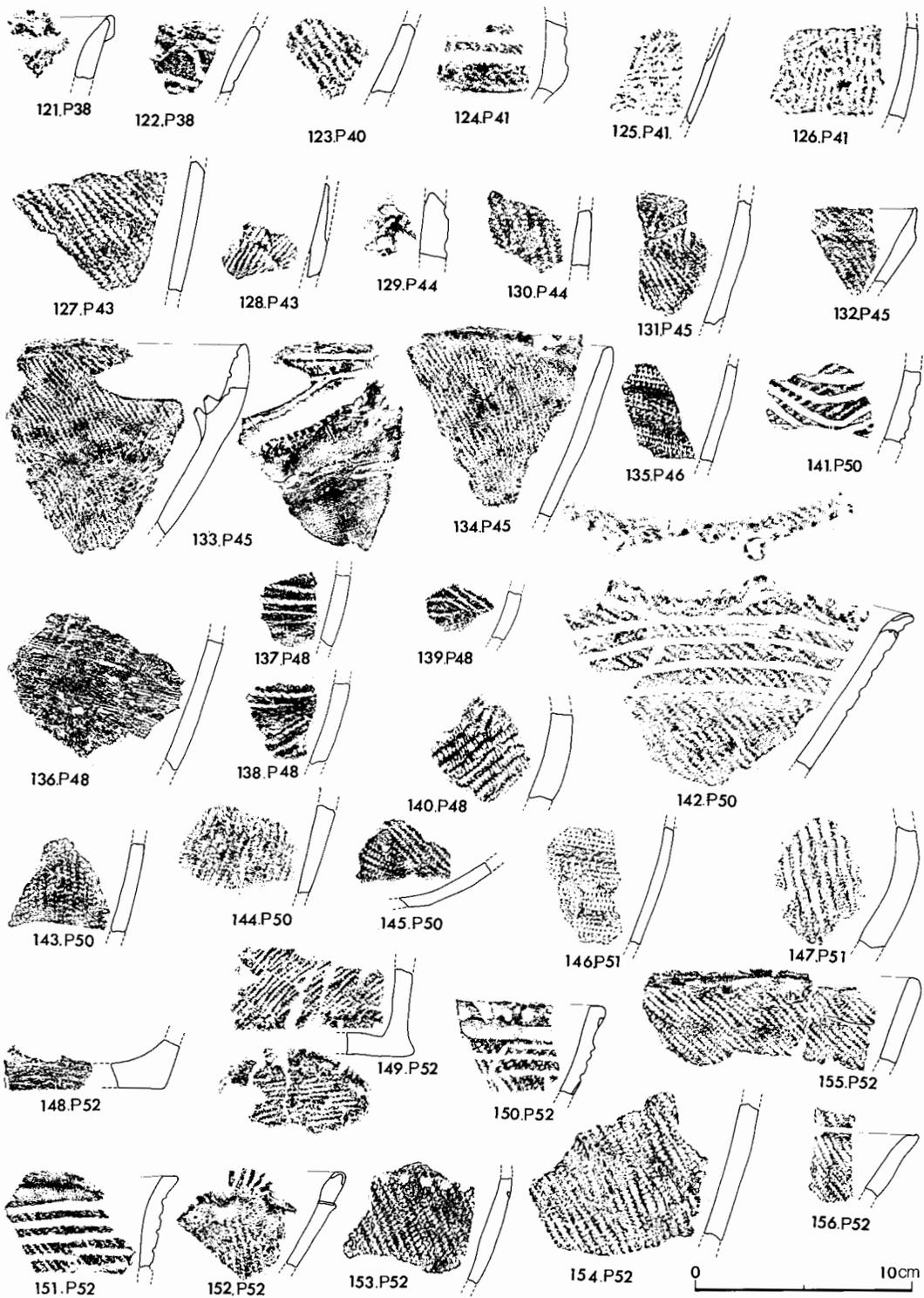
第 28 图 遺構出土土器拓影图 (1)



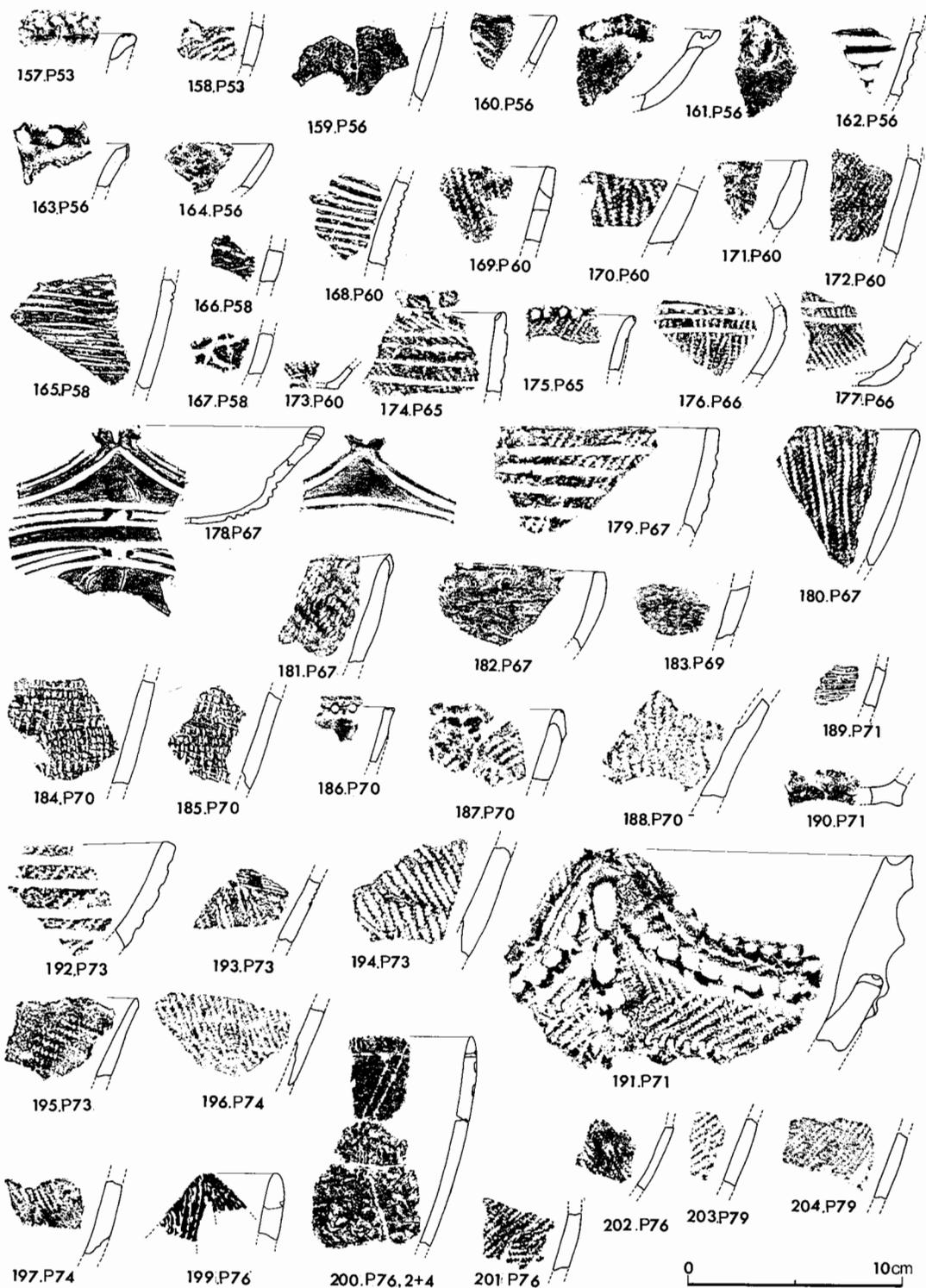
第 29 图 遺構出土土器拓影图 (2)



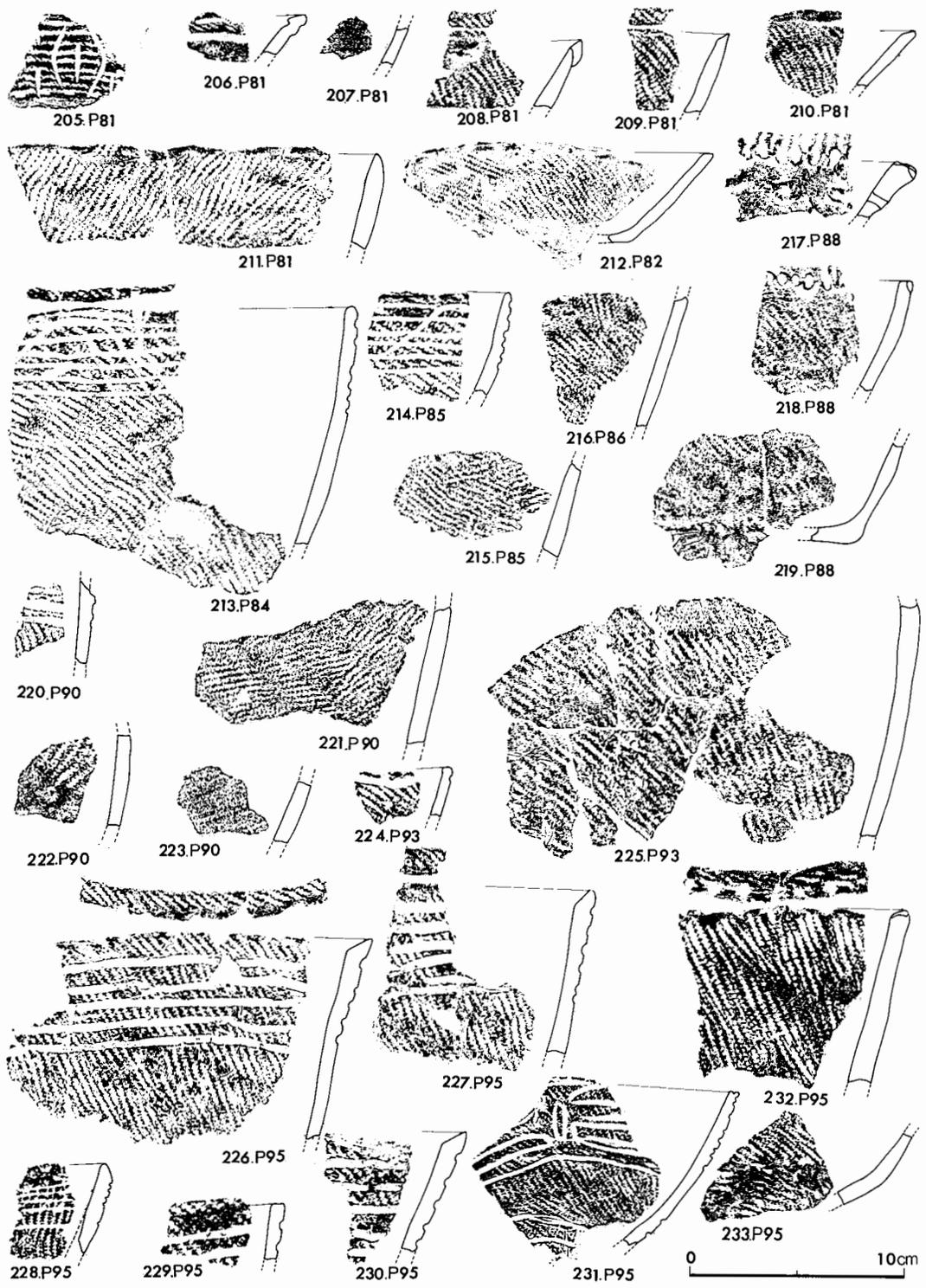
第30図 遺構出土土器拓影図(3) (註: 84~99の第29号ピット出土の資料中には、第32号ピット出土のものが含まれている)



第 31 图 遺構出土土器拓影圖 (4)



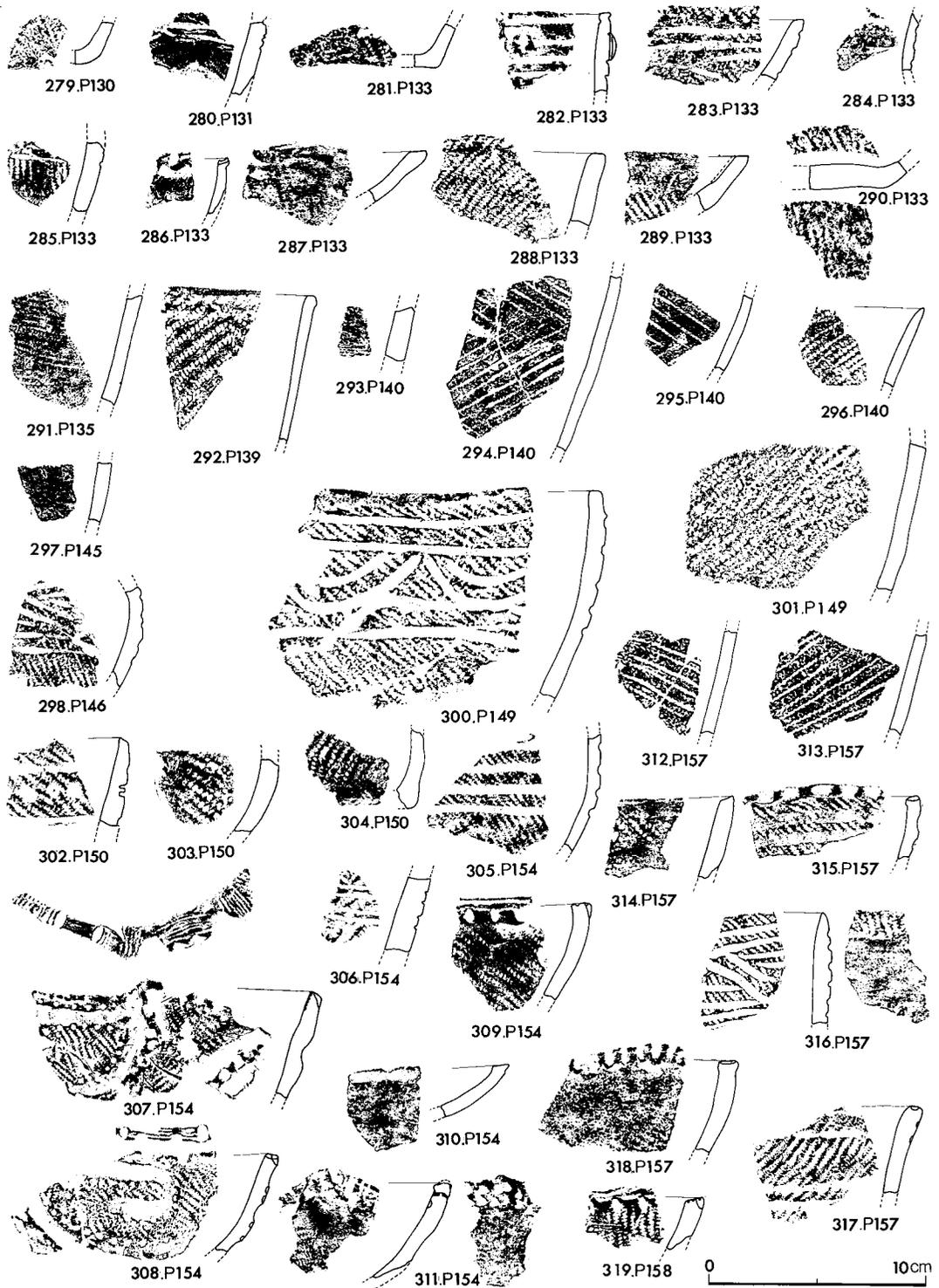
第 32 図 遺構出土土器拓影图 (5) (198は欠番)



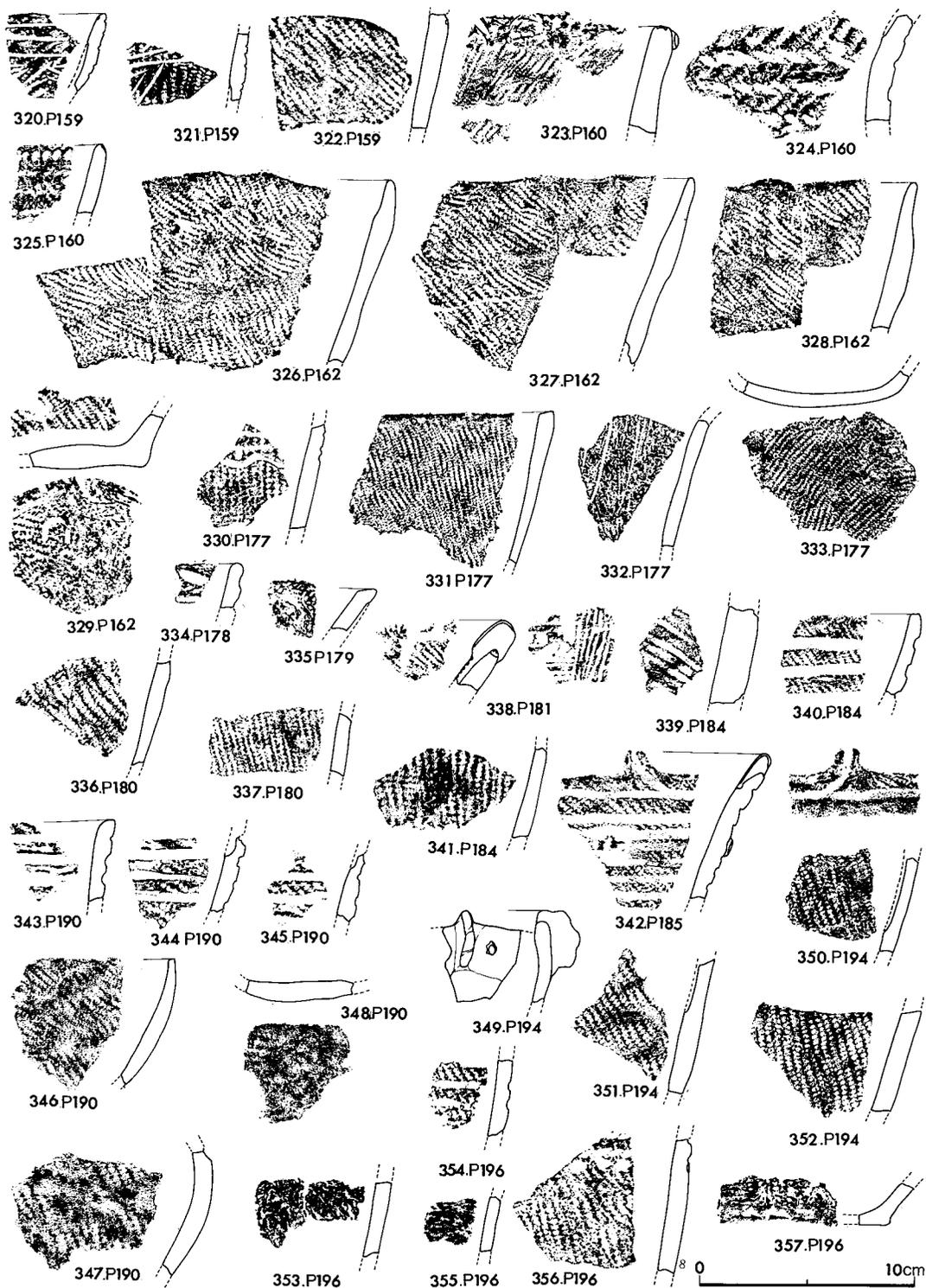
第 33 图 遺構出土土器拓影图 (6)



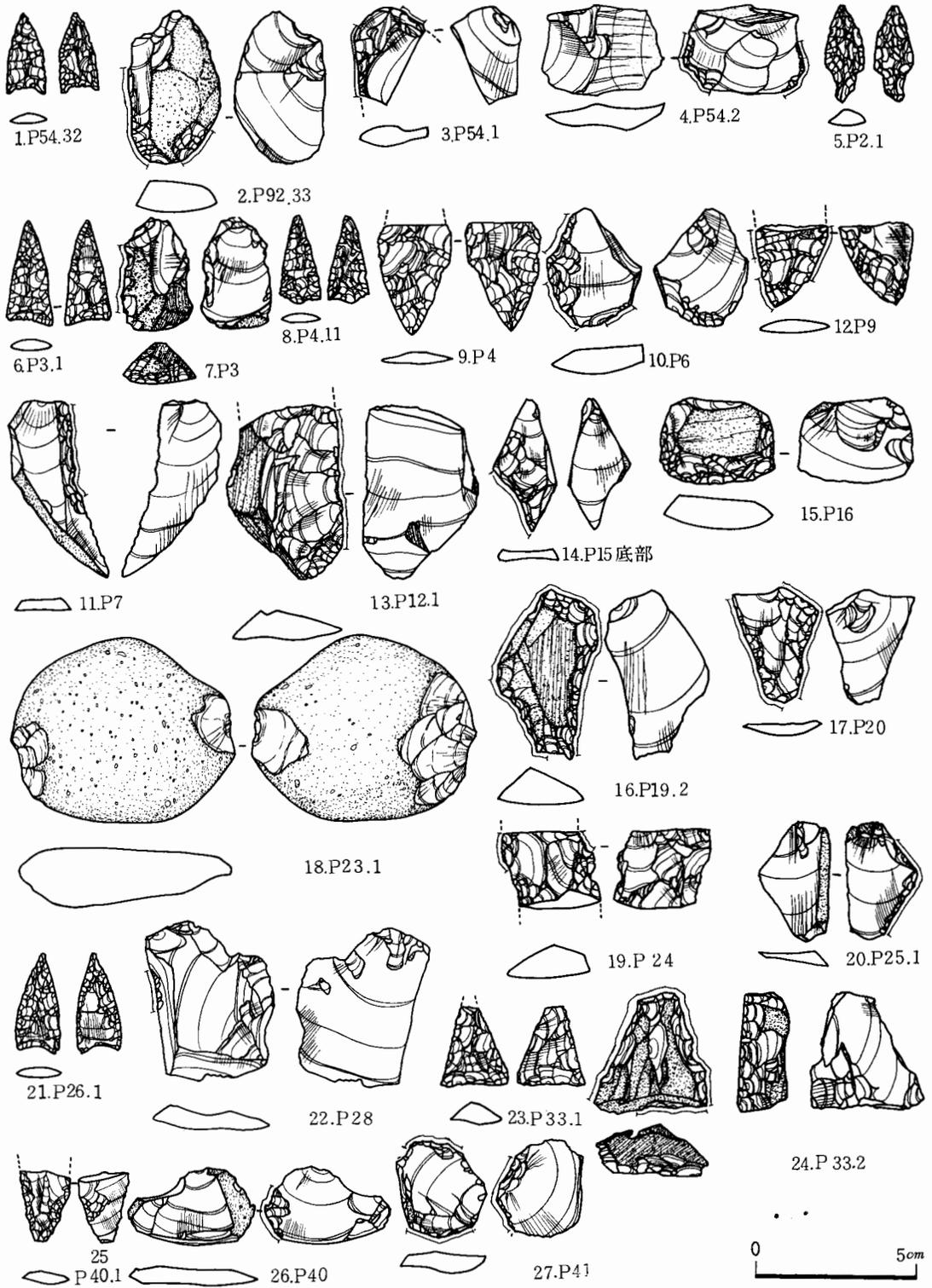
第 34 图 遺構出土土器拓影图 (7)



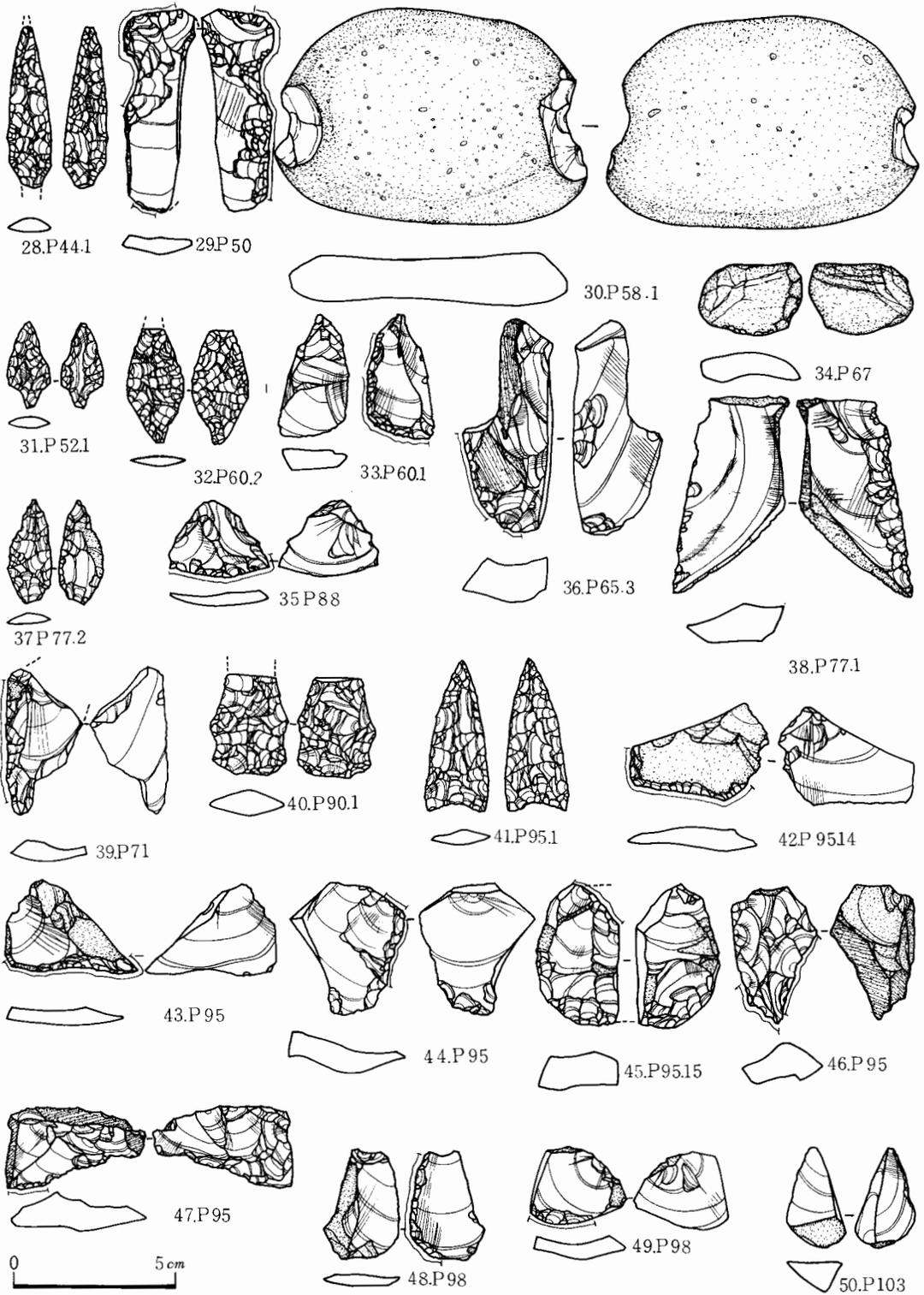
第 35 图 遺構出土土器拓影图 (8)



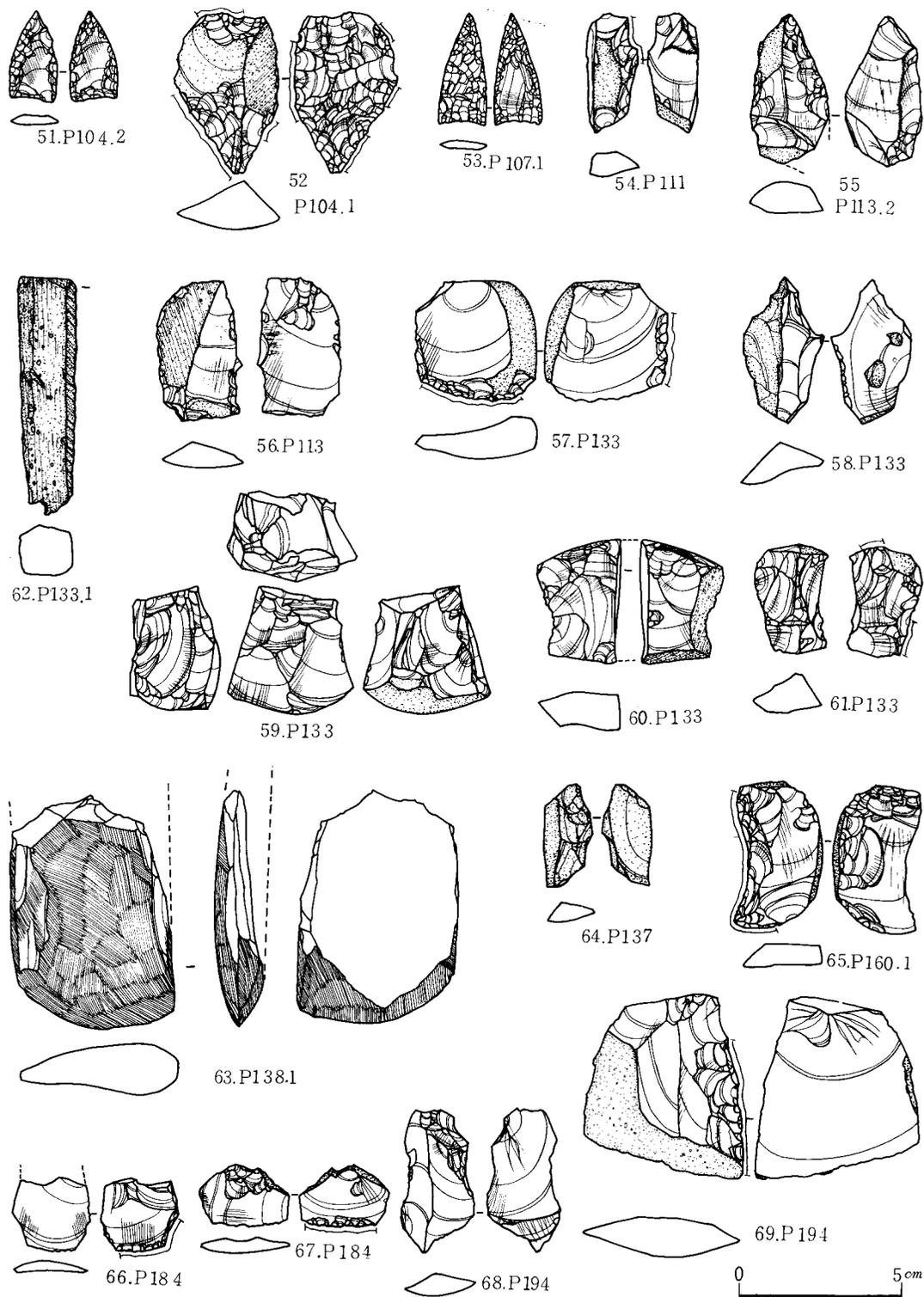
第 36 图 遺構出土土器拓影图 (9)



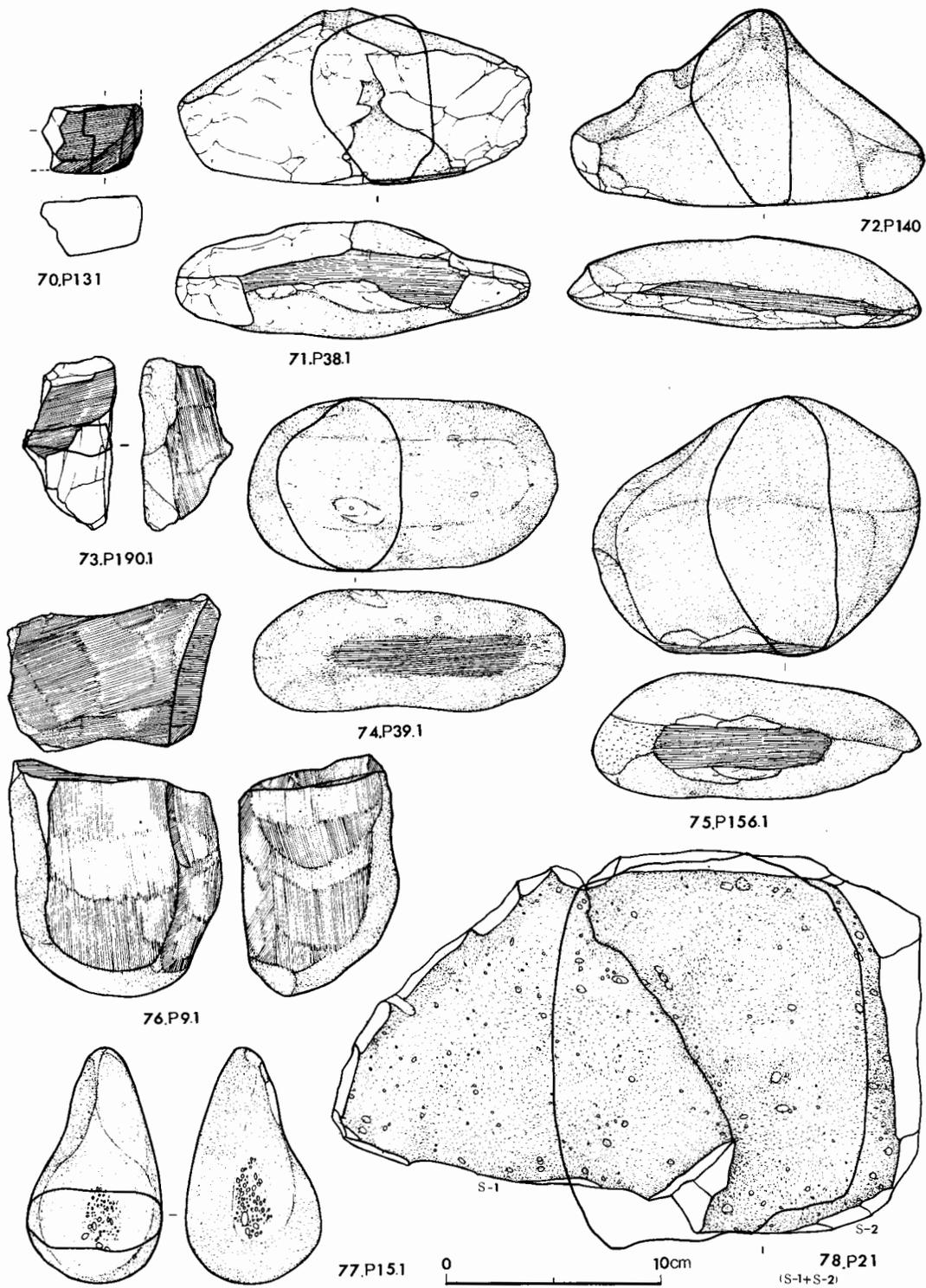
第 37 图 遺構出土石器実測図 (1)



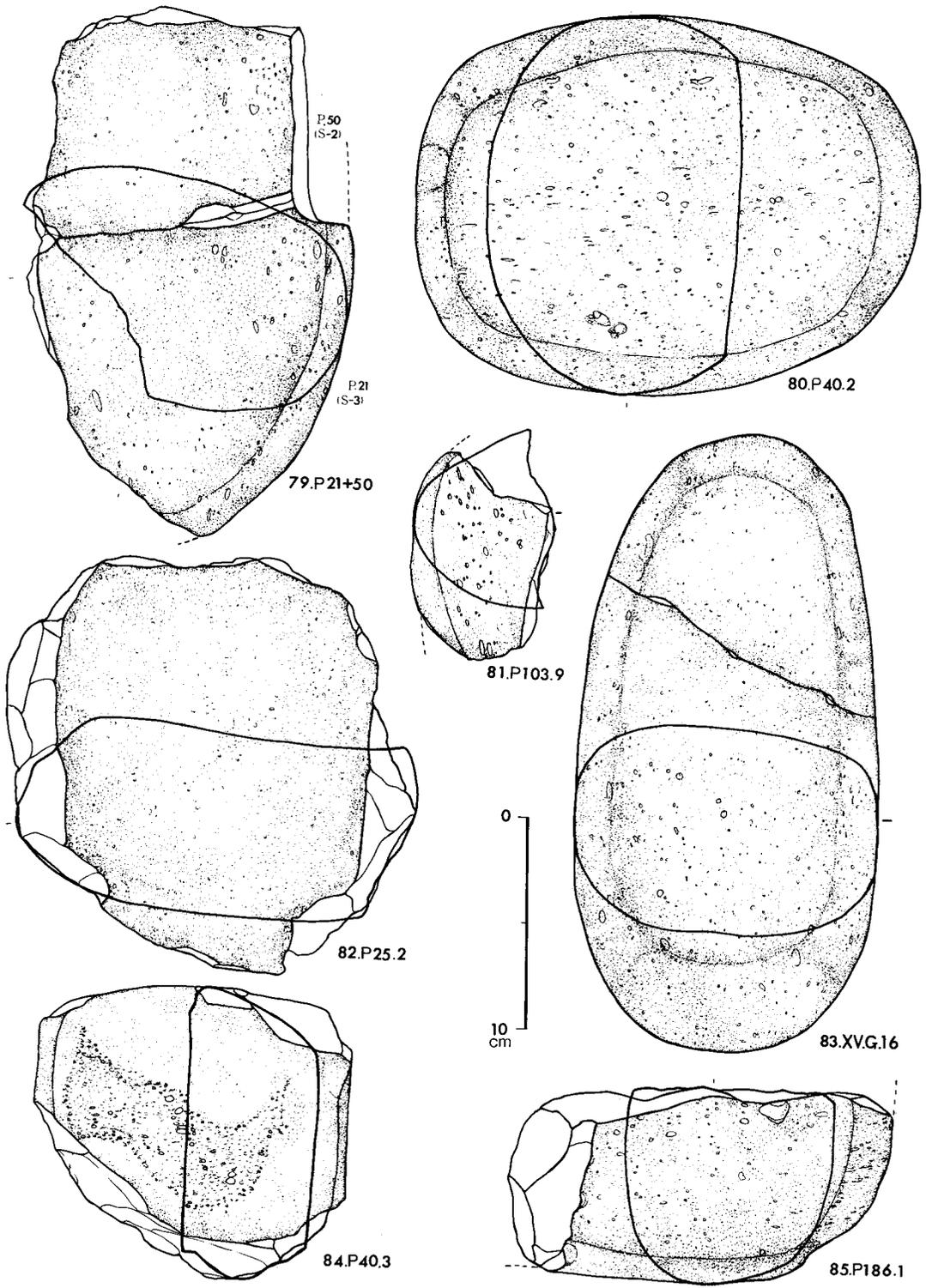
第 38 图 遺構出土石器実測図 (2)



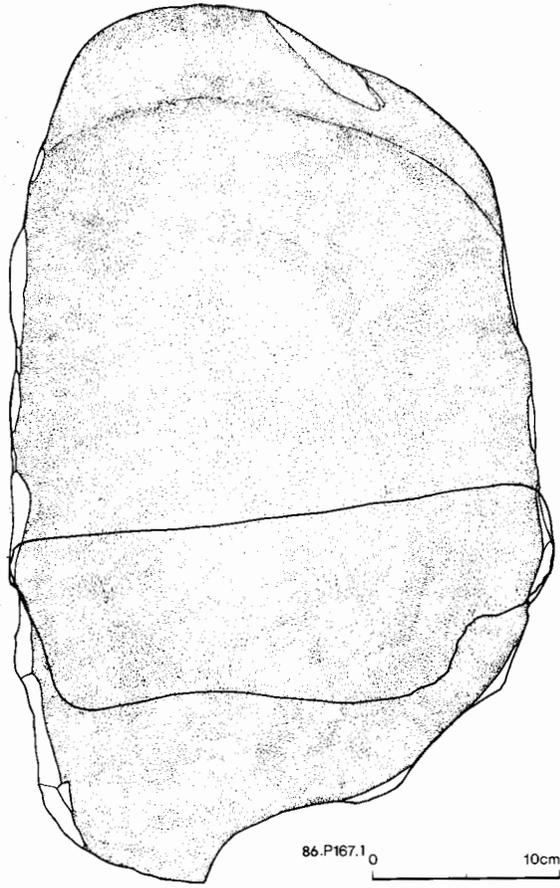
第 39 图 遺構出土石器実測図 (3)



第 40 图 遺構出土石器実測図 (4)



第 41 図 遺構出土石器実測図 (5)



第 42 図 遺構出土石器実測図 (6)

第2節 遺構の分類

175基みつかった土壌(墓)および石組、溝状遺構について、表で説明できなかった事実を中心にまとめてみたいと思う。

第1項 土 壌 (墓)

土壌は、全部で151基みついている。この内、127基に関しては、構造・層堆積・遺物の出土状態などから土壌墓である可能性が高いが、残りの24基に関しては、墓であるかどうかの確証はない。

また、土壌墓と思われる127基の内、5基は切合い関係にあるとか、墳底面しか確認されていないなどの理由で、その特徴を明らかにできなかった。従ってこの5基を除いた122基について、平面形・断面形・配石の有無と数量などを基に、分類を試みたいと思う。なお、特徴を明らかにできない土壌墓と構築意図不明ないしは人為的な所産かどうか疑問のある土壌番号は、以下のものである。

〔特徴不明の土壌墓：C型〕第3, 10, 83, 84, 134号の5基のピット

〔疑問のある土壌：D型〕第14, 23, 37, 47, 51, 58, 69, 76, 80, 87, 88, 116, 129, 130, 131, 135, 139, 140, 150, 154, 168, 177, 179, 198号の24基のピット

さて、119基の土壌墓は、以下のように分類できる。まず、大きく平面形から、

A型：円形から不整円形、ないしは楕円形から不整楕円形

B型：隅丸方形

の2つに分けられる。なお、A型の中に楕円形のものも含めたのには異論があるかもしれないが、本遺跡では、長径と短径が極端に違うものは少なく10~20cm内外のため、円形のものと同然と区別することは難しく、ここでは一括して取り扱っている(第5表)。さらに、表中の円形と楕円形の区別の基準は、長径と短径の差が10cm以上のものを楕円形としているが、明確なものではなく、多分に視覚的な判断によっている。この内、A型はさらに配石の有無・数量と断面形から、

AⅠ型：配石を伴わないもの

AⅡ型：配石を伴わず、断面形がフラスコ状になるもの

AⅢ型：1~3個の配石を伴うもの

AⅣ型：4個以上の配石を伴うもの

に細分される。なお、AⅠ、AⅢ、AⅣ型の断面形は後述する(a)、(b)タイプである。

また、AⅠ~AⅣ型各々で、特に墳口部の大きさには均一性はないが、便宜的に次の4つのサイズに分けて説明する。

(S) 墳口部の大きさが48×44~62×48cmで、長径の平均値が50cm程になるもの

(M) 墳口部60×59~87×65cmで、長径の平均値が70cm程になるもの

(L) 墳口部84×84~111×85で、長径の平均値が90cm程のもの

(LL) 墳口部105×104~117×106で、長径の平均値が110cm程で、長径および短径共に1mを

超えるもの

また、断面形・層堆積・土壌の深さ・遺構内出土遺物の分類基準を示すと以下の如くである。まず、断面形は、

- (a) 壙底面が平らで、底面と壁の境がやや明瞭なもの
- (b) 壙底面が丸味を帯び、底面と壁の境が不明瞭なもの
- (c) 壙底面が平らで、底面と壁の境が明瞭な点は(a)と同様であるが、壙中央付近から壙口部が大きく開き、全体にフラスコ状になるもの

の3種類に分けている。

層堆積は、次の5種類に分けている。

- (a) 壙口部最上層に(II)層の黒色土ないし真黒色土の堆積はなく、第1表で示した、(III)第4、5層(暗黒褐色～黒褐色土)、(IV)第6～9層(暗茶褐色～茶褐色および暗褐色～褐色土)、(V)第10、11層(暗黄褐色～黄褐色土)の内2～3種類の土層で充填されているもの
- (b) 壙口部最上層に(II)第2、3A・B層(真黒色土～黒色土)が薄く堆積したもので、その下は(a)と同様である
- (c) 壙口部から壙底部近くまで、(II)第2、3A・B層が、深く堆積し、壙底面から壁に沿ってのみ、(III)～(V)の土層が薄く堆積しているもの
- (d) 壙口部から壙底面まで、全面(II)第2、3A・B層の黒色土系統の土層で充填されているもの
- (e) 全体の層堆積としては、前述の(a)ないし(b)と同様であるが、(II)層が間層として、あるいは壙底面について堆積したもの
- (f) その他

なお、これらの土層の堆積状態については、後項で改めて述べたいと思う。

土壌の深さについては、あくまでも説明の便宜上、(a)19cm以下、(b)20～29cm、(c)30～39cm、(d)40cm以上の4つに分けている。しかし、前述した土層堆積分類の中で、少なくとも(a)の例と、(b)例の内、壙口部最上部に(II)層の堆積のないものに関しては、遺構掘込み面は、おそらくさらに上であったと考えられ、本来の土壌の深さを示してはいない。

遺構内出土の遺物は、大ざっぱに、

- (a) 完形ないし半完形土器(および石器ないし剥片)を伴う例
- (b) 石器と土器片を伴う例
- (c) 土器片と剥片を伴う例
- (d) 土器片のみの例
- (e) 剥片のみの例
- (f) 全く遺物の出土しない例

に分けて説明している。この中で、完形ないし半完形土器と石器については、出土地点と層準を、

表および図面中に明示してある。

また、土壌から出土した土器の型式については、第5章第1節の土器の説明に合わせて、

I期：縄文早期～前期初頭（第I群土器）

II期：縄文中期（第II群土器）

III期：縄文晩期末～続縄文期（第III、IV群土器）

の3期に大別して説明している。なお、III期に関しては、おおむね縄文晩期末ないし続縄文期初頭に位置する第III群土器をさして使っている。

なお、土壌内外にある小ピットに関しては、第4表に一覧表にして示したが、今回の調査では、その新旧関係とかその遺構に伴うかなどの検証は、そのほとんどの例において、明確にはできなかった。従って、遺構内外に小ピットがあること自身大きな問題を内包していると思われるが、本報告において、この問題に関しては、詳しくは触れていないことを御容赦願いたい。

(1) A型

A型に属する（不整）円形から（不整）楕円形の土壌墓は、119基（97%）を占め、ほとんどこのタイプに属する。

AI型

配石を伴わず、断面形が釜を縦にたち切ったような形ないしは立上りのきつい皿状を呈した例である。50例を数え、全体の40%になる。数が多いので、説明の都合上壙口部の大きさ毎にまとめてみる。

Sサイズ（A I S型）

第85、91、101、106、107、122、155、199号の8基のピット。

このサイズの平面形は、第91、107、122、155号の4つのピットが楕円形ないし不整楕円形を呈する以外は、円ないし不整円形である。

断面形は、すべて壙底面の平らな(a)のタイプのものである。

層堆積は、(a)のもの5例（第85、106、107、155、199号）、(c)のもの2例（第91、101号）、(d)のもの1例（第122号）の内訳になる。

土壌の深さは、すべて21～29cmのもので(b)のタイプに属し、全体に浅いものが多いが、壙口部の長径と深さの指数をとると0.45になり、M、L、LLサイズの土壌と比べると規模の割りに深いものである。なお、このサイズでは掘り込み面からの土壌の深さが判るものは1つもない。

焼土は、第107号で壙口と壙中央部の7層の茶褐色土層中に焼土を含んでいる（B-23、23'）。なお、本ピットの上にある河原石は壙口部のかなり上にあり、本ピットに伴うものではないものと思われる。小ピットのある例はない。切合いのあるのは、85↔86、106↔107、122↔103の3つで、この内セクションの切合い関係から、新旧関係が判るのは第122号と第103号の例で、第122号の方が古い所産である。前2者は遺構確認面のレベルでは単に接するだけで、新旧関係は不明である。なお、第106号ピットには、北側に幅広い浅いピット様のものがあるが、これは本ピットと切合う関

係ではなく、付属するものであるが、性格は明らかではない。

また、第101号ピットにおいては、底面について中央部に13×13cmの範囲で、厚さ2cmの白色の粘土が敷かれていた。

遺物は、完形土器が出土したピットはないが、第107号ピットから無茎鉢（底面）と土器片が出土している(b)。また、第85、106号ピットで土器片と剥片(c)、第101号ピットでは土器片のみ(d)が出土している。他の4例からは全く遺物が出土しなかった(f)。

土器片の時期が判るのは、前記の4基であるが、いずれも縄文晩期末～続縄文期初頭のⅢ期の第Ⅲ群土器の時代である。

Mサイズ (A I M型)

第5、59、66、67、72、74、79、82、119、136、138、163号の12基のピットと第18、46、48、53、89、99、181、192号の8基の都合20基のピットが属し、A I型の中では一番多い。

平面形は、前者の12基が円形から不整形円形、後者の8基が楕円形から不整形楕円形を呈している。

断面形は、平らな(a)タイプ14基、(b)タイプ6基（第46、59、74、82、99、119号）である。

層堆積は、(a)タイプ10例、(b)タイプ2例（第46、99号）、(c)タイプ7例（第18、53、67、72、74、136、138号）、(d)タイプ1例（第66号）の比率である。これらの内、(a)タイプの第48、82、119、163、181号の5基のピットは、(Ⅲ)層はなく、(Ⅳ)と(Ⅴ)層のみの例である。また、第154号では、黒褐色土が間層として下部にも入っている。全体に(c)、(d)タイプの黒色土系統の土層が幅広く堆積している例が多い。さらに第53号ピットの3層には、多量の木炭と黒曜石の削片が含まれていた。

土壌の深さは、19cm以下(a)のもの7例（第18、48、53、74、99、138、181号）、20～29cm(b)10例、30～39cm(c)3例（第67、119、136号）である。(b)の20cm台がやはり多いが、30cm以上の深いものが3例みられる。壙口部の長径と深さの指数は、0.34である。このサイズでも、掘り込み面からの深さの判る例は皆無である。

焼土が認められるのは、第82号ピットのみで、8×10cm、厚さ4cmのもので、壙口部にある(B-20)。小ピットは、第46号ピットの北側壁に1個ある。また、第53号ピット壙外の南南東に斜めに深く掘り込まれた小ピットがあり、黒色土で充填されている。いずれも新旧関係とか共伴関係は不明である。切合い関係にある例は、第79号と第80号との1例のみで、第79号の方が古く構築されている。

遺物は、第46号ピットの壙口部付近から、Ⅲ期の底部位土器が出土した(a)以外は、すべて破片のみである。(b)の例2基（第67、138号）、(c)の例6基（第53、74、79、99、136、181号）、(d)の例5基（第5、18、48、66、82号）で、遺物が全く出土しなかった(f)の例は6基（第59、72、89、119、163、192号）であった。石器の器種は、第67号が搔器、第138号が石斧の破片である。

土器片の時代は、Ⅲ期のみ出土した例が10基（第15、18、66、67、74、79、82、99、138、181号）、Ⅰ期とⅢ期の例1基（第46号）、Ⅱ期とⅢ期の例1基（第53号）、Ⅰ期のみの例1基（第136号）、Ⅰ、Ⅱ期の例1基（第48号）である。しかし、第46、53、136号のいずれの例も、ⅠないしⅡ期の

土器片は1片のみで、これらは第48号ピットを除いてはそのほとんどがⅢ期に属する可能性が高い。

Lサイズ (AIL型)

第6, 20, 41, 86, 118, 123, 143, 147, 184, 185, 191, 193, 195号の13基と第26, 52, 68, 77, 157, 182号の6基の都合19基がこのタイプに入る。A I型の中では、A I M型とならんで多い方である。

平面形は、前者の13基が、円形から不整形円形、後者は楕円形から不整形楕円形である。前者の中でも、第20, 118, 123, 143, 184, 185, 195号の7基は、不整形円形で全体に丸味に乏しいが、あとの4基は円形である。

断面形は、平らな(a)タイプ14例、(b)タイプ4例(第68, 86, 157, 182号)、不明1例(第20号)である。

層堆積は、(a)タイプ13例、(b)タイプ3例、(第6, 52, 86号)、(e)タイプ5例(第41, 52, 157, 182, 193号)である。(a)タイプの第77号ピットは、(Ⅳ)・(Ⅴ)層と焼土が間層として入っているのみの例であり、(e)タイプの第41, 157, 182号ピットは間層として(Ⅱ)層が入っており、第51号ピットは、(Ⅱ)層が壙口部および間層として幅広く入った例である。また、第193号ピットは底面について(Ⅱ)層がある。なお、第191号ピットの南東部は壁に沿って攪乱が入っていて、この部分の層堆積は不明である。

土壙の深さは、19 cm 以下(a)2例(第26, 195号)、20~29 cm (b)9例、30~39 cm (c)3例(第6, 86, 157号)、40 cm 以上(d)5例(第52, 118, 123, 147, 182号)で、(b)サイズのものが多いが、30~40 cm 以上という深い例も次いで多い。この内、一番深いのは第147号の70 cm である。平均値は31 cm 程である。この内、掘り込み面からの深さがほぼ判るものは、(b)タイプの層堆積をしている第6, 86号の2基で、共に30 cm の深さをはかる。平均値と非常に近い値である。すなわち、このサイズでは、深さ30 cm 土のものと、40 cm 以上の極端に深い例が多いことが特徴であろう。土壙の長径と深さの比の平均値は0.29 である。

焼土は、第20号と第77号ピットに認められるが、いずれも壙中央にある。第20号ピットは6'層中に焼土が含まれているもの(B-29)で、第77号は第11'層に間層として入っているもの(B-28)であるが、いずれもその範囲は確認していない。また、第41号ピットの壙外南東部15 cm 程離れた所に10×10 cm の範囲で、赤色土(R-2)の散布が認められている。なお、この赤色土に接して2個の礫があるが、この内1個は焼けている。またその北東部にある礫は、断面三角形の擦石であるが、本ピットに伴うものではないと思われる。同様に第182号ピットの第4層上部にある礫も本来このピットに伴うものではない。切合い関係は、20 ↔ 21, 26 ↔ 25, 86 ↔ 85, 147 ↔ 151の4例であるが、この内、前2者は各々第20号、第26号ピットの方が古い。第86号と第85号は、遺構確認面のレベルでは単に接する状態で新旧関係は不明である。また、第147号と第151号の新旧関係はセクションラインの設定のミスで明らかではない。

遺物は、第20号ピットから半完形土器の一部と底部位土器、石器が出土している(a)。また石器と

土器片を出土した(b)例は6基(第6, 26, 41, 52, 77, 184号), (c)例は1基(第191号), (d)例は5基(第86, 118, 143, 157, 185号)で, 全く遺物のない(f)例は6基(第68, 123, 147, 182, 193, 195号)であった。

石器の器種は, 第6号, 第20号, 第184号が削器, 第26号が無茎鎌と削器?, 第41号は円形搔器, 第52号は有茎鎌, 第77号は有茎鎌と削器である。

土器の時代は, III期のみの例5基(第41, 86, 184, 185, 191号), I期若干とIII期の例3基(第20, 52, 157号), II期若干とIII期の例1基(第6号), II期のみのもの1基(第118号)である。従って, 第118号ピットを除いては, その多くはIII期の所産が多いことになる。第118号ピット出土の縄文中期の胴部片はかなり大きい破片で, 2つに割れて壙中央部から出土しているが, これとて覆土内であり, 縄文中期とする根拠にはならない。なお, この点に関しては, 第5章第1節の(2)で詳述する。

LLサイズ (A I L L型)

第49, 146, 196号の3基のピットが入る。

平面形は, 第49号が円形で, ほかの2者はやや楕円形に近い。

断面形は, 第146, 196号ピットが(a)タイプ, 第49号が(b)のタイプである。

層堆積は, いずれも(a)のタイプであるが, 第146号ピットの東側は, 土壙構築後いわゆる「風倒木痕」で切られており, 平面プラン・層堆積の状態はこの部分は不明である。セクション図中の5', 10, 11層は風倒木痕にともなう層である。

土壙の深さは, 各々19.5, 44, 30 cm である。壙口部の長径と深さの比は, 0.25でA I L型の数値に近い。

焼土, 小ピットのある例はない。

遺物は, 第196号から土器片と剥片(c), 第46, 49号から土器片のみ(d)が出土している。

土器の時期は, 第49, 146号はIII期のみ, 第196号はI期とIII期である。この3基も, おおむねIII期の所産とみなしうるであろう。

A II型

このタイプは, A I型と同様に配石を伴わず壙底面は平らで, 底面と壁の境は明瞭であるが, 壙中央部付近から壙口部が大きく開き, 全体にフラスコ状に近い断面形を呈する例である。

第8, 15, 118号の3基(全体の2.5%)がこの仲間である。

平面形は, いずれも楕円形であるが, 特に第15号は壙口部の大きさが101×59 cm で, 長径が長いものである。

断面形は, いずれも壙中央部より下は袋状にやや広がり, またその上も大きく開く特異な形態をしている(c)。

層堆積は, すべて(a)タイプで, (III)と(V)層ないしは(IV)と(V)層で充填されている。特に第15号は, 壙底部の一部に11層が認められるのみで, その上は暗茶褐色～茶褐色のほぼ同じような土層のみである。同様に, 第188号も壙口部最上部に暗茶褐色土層がある以外は, すべて暗黒

褐色～黒褐色系統の単一の層である。第8号においても基本的に暗茶褐色と黒褐色の2層からなっている。この様相は、前述のAⅠ型とは少し趣を異にしている。

土壌の深さは、各々36, 31.5, 53 cmと深い。なお、この3つの土壌は、ローム面でコンタ 136 m前後のライン上に分布し、この内第8号と第15号は後述するX配石群の中にある。

焼土は、第15号ピットの北西側に壙口部から壙外にかけて2つの焼土層が分布している(B-9, 10)。しかし、本ピットに伴うものかどうかは配石の問題とも関連して明確ではない。配石は、平面図をみると第8号と第15号に1個ずつあるようであるが、これはすべて遺構確認面より上に分布しているものであって、これらのピットに伴うものではない。おそらく、両ピットが埋め戻された後に、両ピットと脈絡なしにおかれたものと思われる。なお、第62号石組が、第15号ピットの南東部の壙口部の上から第14号ピットにかけて分布している。この石組と第15号ピットは、後述する通りおそらく時代を明らかに異にしているものと思われる。

遺物は、第8号と第188号の両ピットでは、全く何も出土していない。第15号ピットからは、壙底部に一面敷きつめられたように第26図の3の半完形土器が出土した。これは縄文早期末～前期初頭に位される「東釧路Ⅳ式」土器である。口縁部は、欠損するが、あとはほぼ完全に近い。さらに、この土器の北西部壙底面から第40図77のひょうたん形をした河原石を素材にした敲石が1点出土している。これ以外には出土地点は明らかではないが、黒曜石の削器が1点、やはり壙底部から出土している。すなわち、第15号ピットは、今迄述べてきたAⅠ型がそのほとんどがⅢ期に構築されたピットであったのに対して、Ⅰ期の土壌墓である。

可能性として、第8号と第188号もⅠ期の所産であることが考えられるかもしれない。

AⅢ型

このタイプは、1～3個の配石がある例である。1個だけのもの(AⅢ₁型)は20基、2個のもの(AⅢ₂型)9基、3個のもの(AⅢ₃型)は5基で、都合34基で、土壌墓全体の約29%を占めている。

配石の個数毎にまとめてみると以下の如くである。

(a) AⅢ₁型

配石1個だけの土壌(墓)20基をさらに、壙口部の大きさに分けると、

Sサイズ……第24, 45, 60, 71号の4基

Mサイズ……第2, 30, 31, 102, 110, 142号の6基

Lサイズ……第56, 90, 112, 121, 124号の5基

LLサイズ…第111, 120, 145, 151, 194号の5基

Sサイズ(AⅢ₁S型)

4基の平面プランは、すべて楕円形であるが、第24号ピットは壙口部の南西部にはコーナーがあり、全体に隅丸方形に近い形態で、後述するB型に近い。

断面形は、全体に壙底面がやや丸味を帯びる例が多いようである。

層堆積は、第24, 45, 60号の3基は(a)のタイプで、第71号は(c)のタイプである。なお、第45号

と第60号は、各々黒褐色土、暗茶褐色～茶褐色土層からなる単一の層である。

土壌の深さは、各々22、16、12、10 cmで、A I S型に比べて浅いものが多いようである。

配石は、壙内中央に壙底面～壙中央にかけてのレベルにある。石の大きさは、小1例、中3例である。なお、第45号の石は焼けていた。

赤色土が、第24号ピットの南西部に壙口から壙外にかけて分布する(R-2)。また、小ピットが、やはり南西側壙外に1個あり、その内容物は暗茶褐色土である。

遺物は、第24、60、71号の3基からは、石器と土器片(b)、第45号から土器片(d)が出土している。石器の器種は、第24号と第71号が削器、第60号は搔器と有茎鏃で、この2点は底面から出土している。

土器の時期は、第24、45号はⅢ期のみ、第60号はⅠ期とⅢ期、第71号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ期の土器が出土している。いずれもⅢ期の所産かと思われる。

Mサイズ(AⅢ₁M型)

このサイズの6基のピットは、いずれも円形ないし不整円形のプランを呈している。

断面形は、第110号の壙底面がやや丸味がある以外は、すべて(a)のタイプである。

層堆積は、(a)タイプのもの3例(第30、31、110号)、(c)タイプのもの3例(第2、102、142号)である。

土壌の深さは、第2号と第110号が35 cmで深い以外は、20～29 cm(b)の例である。掘り込み面の判る第30号ピットは20 cmの深さである。

配石は、AⅢ₁S型と違いすべて、いずれかの壁に寄って存在する。レベルは、いずれも壙底面から10～15 cmまでの範囲の壁ないし壙底面に接してある。

焼土は、第30号(B-12)と第31号(B-4)の2基で認められ、いずれも北東部と東部に壙口部から壙外にかけて分布する。第30号の例は、セクション図にその一部が示されているように、厚さ9 cmに及ぶ焼土層が、掘り込み面の上ののっている。また、石が焼けていた例は、第30号と第142号である。

遺物は、第2号ピットでは第3 A層から有茎鏃、覆土中から土器片(b)が、第30号では土器片と剥片(c)が、第102号では土器片(d)が出土している。第31、110、142号の3基からは何も出土していない(f)。

土器の時期は、第2号がⅠ、Ⅲ期、第30号がⅢ期であった。

Lサイズ(AⅢ₁L型)

5基のこのサイズのピットは、いずれも不整の円形を呈したものである。

断面形は、第90、124号が壙底面が平らで底面と壁の境は明瞭であるが、第56、112、121号の3基は、底面がやや丸味を帯び壁との境も漸移的である。

土層堆積状態は、第56、90号が(a)のタイプ、第124号が(b)タイプ、第112、121号は(c)のタイプである。とりわけ、(c)タイプの第112号は、(Ⅱ)層が壙底面まで達している。また、(a)タイプはいずれも、(Ⅲ)、(Ⅳ)層からなっている。第121号では、底面から壁に沿って暗黄褐色土が堆積して

いるが、これは、単に地山の壁ないし底面が埋土によって汚染された層であるかもしれない。

土壌の深さは、25～26 cm(b) 2 基 (第 56, 121 号), 39～40 cm ((c)～(d)) 3 基 (第 90, 112, 124 号) で、全体に深い傾向にある。第 124 号は、ほぼ掘込み面に近い深さを示しているかと思われるが、これは 40 cm である。

配石は、壁によってあるもの 3 例 (第 56, 90, 124 号), 中央部にあるもの 2 例 (第 112, 121 号) である。この内、第 112 号ピットの例は壙底面、第 124 号は底面に近い壁について石が出土しているが、あとはいずれも壙底面からかなり上にある。特に、第 121 号は、(II) 層上部にあって、この遺構にともなうものでないかもしれない。

焼土、小ピット、焼けた石のある例はない。

遺物は、第 90 号より抉ぐりのある両面加工のナイフ? と土器片(b), 第 112 号より土器片と剥片(c), 第 56 号より土器片(d)がいずれも覆土中より出土している。なお、第 121, 124 号の 2 基は何の遺物も出土しなかった(f)。

土器の時期は、第 90 号がⅢ期、第 56 号と第 112 号は、各々 I, Ⅲ期と II, Ⅲ期である。この内、第 56 号ピット出土の大洞 A' 式～二枚橋式頃の精製土器 (第 32 図 178) には漆丹が塗られていた。なお、第 112 号ピットからは、Ⅱ期の土器片が数多くみつまっているが、これと同一の個体と思われるものは、近くの第 113 号、第 118 号、XVI - G - 12 区でも出土しており、また全体の傾向としても、この地区の 137 m コンタライン付近にⅡ期の土器片の出土が顕著である。従って、第 112 号ピットではⅢ期の土器片も同時に出土した事実と相まって、Ⅱ期の土器が多く出土した第 112, 113, 118 号いずれもがⅡ期の所産というよりは、Ⅲ期に構築されたものと考えた方が妥当かと思われる。

LL サイズ (AⅢ, LL 型)

第 111, 120 号の平面プランは、やや楕円形に近く、第 145, 194 号は全体に丸味に乏しく不整の円形を呈している。第 151 号は、第 147 号でその半分程が切られており、全体形は何もない。

断面形は、第 120 号の底面がやや丸味を帯び、壁との境が不明瞭な以外は、あとは(a)のタイプである。

土層堆積は、第 111, 145 号が(b)の例、第 120 号が(c)の例、第 194 号は(d)の例で壙底面から壁に沿って (II) 層が堆積している。第 151 号はセクションライン設定のミスで不明である。

土壌の深さは、第 194 号が 27 cm でやや浅いが、第 151 号は 53 cm、あとは 35～38 cm の深い例である。この内、第 111, 145 号は、掘り込み面からのだいたいの深さを示しているかと思われる。

配石は、第 111, 145, 194 号は壙内中層の中央部に、第 120, 151 号は壁よりにある。

焼土は、第 120 号において壙口部の北よりに分布している (B-24)。また、第 145 号の石は焼けていた。

遺物は、第 111 号と第 194 号から削器と土器片(b), 第 120 号から土器片と剥片(c), 第 145 号から土器片(d)が出土している。第 151 号は、無遺物であった(f)。

土器の時期は、第 120, 194 号がⅢ期のみ、第 111 号は II, Ⅲ期、第 145 号が I, Ⅲ期で、いずれもⅢ期の所産かと思われる。

(b) AⅢ₂型

配石2個の土壙墓9基を、壙口部の大きさで分けると、

Sサイズ……第65号の1基

Mサイズ……第9, 29, 44, 156, 159, 178号の6基

Lサイズ……第158号の1基

LLサイズ…第113号の1基

である。数が少ないのでまとめて述べる。

平面形は、第113号が楕円形、第29, 44, 158, 159号ピットがやや楕円形に近い以外はほぼ円形の形態を呈している。

断面形は、第44, 158, 178号の3基が、やや壙底面が丸味を帯びる(b)が、あとは(a)タイプである。なお、第44号ピットは、南東側の底面はやや高くなっている。

層堆積は、第113, 150号例が(b)タイプ、第9, 65号が(c)タイプである以外は、みな(a)タイプの堆積である。なお、(a)タイプの第178号は、壙底部しか確認されておらず、黒褐色土層の1層のみである。また、(c)タイプの第9号は、全面(Ⅱ)層で充填されているのではなく、中央部のみに(Ⅱ)層があり、その一部が壙底面に達している例である。

土壙の深さは、19cm以下(a)5例、20~29cm(b)1例(第158号)、30~39cm(c)2例(第156, 159号)、40cm以上(d)1例(第113号)である。黒色土が壙口部最上面にある第113, 156号ピットの深さは各々59cm, 31cmで、だいたいの掘込み面からの深さを示しているものと思われる。配石のあり方としては、2個接して中央部にある例(第9, 29, 113, 156号)と壁よりにある例(第65, 158号)と離れて壁よりにある例(第44, 159, 178号)とがある。いずれも、壙底面から5~10cm程ういた所ないしは壁の近くに存在する。なお、第9, 156, 158, 178号では配石の内1個が焼けており、また、第159号では2個とも焼けていた。なお、第113号ピット上部にある石は、掘込み面上で本ピットに伴うものではないと思われる。

焼土は、第9号ピットの東側の壙口部~壙外にかけてある(B-7)。小ピットは、第44号の底面に4×6cmで浅いものがあるが、攪乱の可能性もある。切合いは、第44号と第45号の1例のみで、両者は、遺構確認面では、接するのみで新旧関係は不明である。

遺物は、第113号ピットの壙口部のⅡ層から続縄文期初頭の完形土器1個体と削器1点が出土(a)している。ほかに出土レベル不明であるが削器が1点出土している。また、第9, 44, 65号から石器と土器片が出土(b)しているが、各々器種は、ナイフ、有茎鏃、削器?である。第178号は、土器片と剥片(c)、第159号は土器片のみ(d)、第158号は剥片のみ(e)が出土している。なお、第156号ピットの配石の内1個(S-1)は、断面三角形の擦石(縄文早期)である。

土器の時期は、Ⅲ期のみのももの4例(第65, 158, 159, 178号)、Ⅰ, Ⅲ期のももの1例(第9号)、Ⅱ, Ⅲ期1例(第44号)、Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ期1例(第29号)であった。この内、第29号ピットの土器片は、註記の段階で、第32号ピットのそれと混じってしまい、一部は第32号出土の資料もあるかもしれない。おおむね、このタイプの土壙墓はⅢ期の所産と考えてよからう。

(c) AⅢ₃型

配石が3個ある土壙墓は5基である。

Sサイズ……第7号の1基

Mサイズ……第73, 189号の2基

Lサイズ……第162号の1基

LLサイズ……第160号の1基

ただし、Sサイズとした第7号は壙底面しか確認されておらず、正確な規模は明らかではない。

平面形は、円形～不整形円形ものばかりである。

断面形は、第160, 189号の壙底面がやや丸味がある以外は、(a)のタイプに属する。

層堆積は、(a)タイプ3例(第7, 162, 189号)、(b)タイプ1例(第160号)、(c)タイプ1例(第73号)である。なお、第160号ピットでは、最上層に焼土層がのっけていて、その下壙中央部まで(Ⅱ)層が堆積している。第73号も最上層に焼土があつて、あとは壁よりに暗黒褐色土層が若干あるのみで、ほとんど(Ⅱ)層で充填されている。土壙の深さは、第162号が29cm、第189号が38cm、第73, 160号は各々48cmで、第7号の不明な例を除くとすべて29cm以上で深いものが多い。第73, 160号は、掘り込み面からの深さを示している。

配石は、3個かたまってあるもの2例(第7, 160号)、2個接してあつて1個は離れているもの2例、ばらばらにあるもの1例(第73号)である。かたまってある例は、いずれも壙底面ないし壁に接してあり、2個と1個の例は、2個が壁よりの壙底部、1個は壁に接してある。焼けた石は、第162, 189号で1個、第160号で2個認められた。なお、第73号では、南東壁壙口部付近に2個石がある。

焼土が、第73, 160号ピットで認められた。第160号のは2つのレベルであり、1つは、壙口部最上層にあるもので、範囲45×47cm、厚さ7cm(B-26)、もう1つは壙底部近くの暗茶褐色土層中に焼土と炭が入っていたもので、50×35cm、厚さ10cmを計る(B-27)。第73号のは、壙口～壙外にかけてあり、厚さ11cmである(B-19)。

遺物は、第7, 160号から石器(各々削器、ナイフ)と土器(b)、第73, 162号は土器片(d)、第189号は何の出土もなかった(f)。なお、第7号ピットでは、石皿?(S-1)が配石に転用されている。

土器の時代は、Ⅲ期3例(第7, 73, 162号)、Ⅱ, Ⅲ期1例(第160号)で、おおむねⅢ期の所産と思われる。

AⅣ型

このタイプは、4個以上の配石がある例である。総数32基を数える。配石はすべて、壙底部から壙中央部にある。なお、浅いものに関しては壙底部より5～10cm程上にあつても、壙口部にあるとみることのできるが、ここでは壙底部にあるとして扱う。これらは、配石のあり方から、次の3種類に分けられる。

AⅣ a型：4～10個程の石が、壙底部の一部にまとまりをもって配されているもの

AⅣ b型：10～18個程の石が、壙内壙底部付近にまとまりをもって配されているもの

A IV c 型：11～31 個程の石が、壙内壙底部一面に配されているもの

なお、この種類別けは、あくまで視覚的なものであって、従って各種類毎で配石の数に幅があるのは、土壌の大きさとか、石の大小によって、壙内で配石が占める割合が異なっているためである。

(a)A IV a 型

第 1, 13, 22, 40, 103, 104, 105, 114, 137, 144, 149, 187, 190 号の 13 基が、このタイプに属する。

平面プランは、第 1, 40, 137, 187 号の 4 基が円形から不整円形、第 149 号が楕円形を呈しているが、他はやや楕円形に近い円形である。なお、第 103 号のプランは明確ではない。

規模は、

S サイズ……第 187 号の 1 基

M サイズ……第 22, 103, 137 号の 3 基

L サイズ……第 1, 13, 40, 104, 105, 114, 149 号の 7 基

LL サイズ…第 144, 190 号の 2 基で全体に大きいものが多い。

断面形は、第 40, 103, 190 号がやや底面が丸味を帯びる以外は、(a)タイプである。

層堆積は、(a)タイプ 7 例 (第 13, 22, 40, 103, 104, 149, 187 号)、(b)タイプ 2 例 (第 1, 190 号)、(c)タイプ 3 例 (第 105, 114, 144 号)、(d)タイプ 1 例 (第 137 号) である。この内、(c)タイプはいずれも、今まで述べてきた例に比べて (II) 層の堆積は深くまでは達していない。

土壌の深さは、19 cm 以下(a)は 6 例、20～29 cm(b)が 4 例 (第 105, 137, 144, 149 号)、30～39 cm (c)が 2 例 (第 1, 114 号)、40 cm 以上(d)が 1 例である。この内、掘り込み面が確認されているのは、第 1 号ピットで、30 cm を数える。

壙底部にある配石は、4 個のもの 3 例 (第 105, 137, 144 号)、5 個のもの 4 例 (第 22, 40, 104, 187, 190 号)、6 個のもの 2 例 (第 1, 40 号)、7 個のもの 2 例 (第 13 例, 149 号)、8 個のもの 1 例 (第 114 号)、10 個のもの 1 例 (第 103 号) である。第 1 号ピットでは、壙口部に 5 個の石があるが、壙底部のそれとは性格を異にしているものと思われる。

配石の拡がりは、縦に長く、壙内中央部かどちらかの壁によって分布している。壁よりにある例は、いずれも壙中央より北北西ないし、南～西南西～南西～南南西の方向で、長径の軸は、北北西～南南東～北西～南東～東北東～西南西の範囲に入る。

配石のレベルは、壙底面から壙底部にあるのが、第 1, 13, 40, 103, 114, 137, 187, 190 号の 8 例で、第 22, 104, 144, 149 号の 4 例は、壙底面からやや浮いた位置にある。

なお、第 1 号ピットでは、掘り込み面のレベルにおいて、南側に第 54 号石組 (石 16 個)、北側に SP-4 をはさんで、第 92 号石組 (石 3 個)、壙内壙口部付近の南東部に 3 個の石が分布している。また、SP-4 の上部に P-2 の底部位土器 (第 26 図 1) があった。しかも、第 54 号石組の一部は、第 1 号ピットの壙内に一部かかっている。

配石の中で、焼けた石は、第 1 号では壙内壙底部において 3 個、第 54 号石組において 6 個、南側壙外例において 2 個認められた。これ以外に、第 13, 22, 105, 144, 187 号で 1 個、第 103 号で 2

個、第40、114、149号で3個認められている。また、このタイプの配石の大きさは、長径20cm前後の大きな例は第114号の1点のみで、あとは15cm前後の中形と、10cm±の小形のものばかりである。

焼土は、第104、149号の2基で認められたが、いずれも(Ⅲ)層と(Ⅳ)層との間に間層としてある。ただ、第104号例は、焼土のみの層ではなく、黒褐色土の中に焼土と炭が含んでいたものである。また、第104号ピットの壙底部の西側壁よりから、2×2cmの狭い範囲で、赤色土(R-3)が検出されている。

なお、第1号ピットでは、土壌内外から小ピットがみつまっている。壙内のは、3本で各々7×6cm、-13.9cm(SP-1)、7×4cm、-6.9cm(SP-2)、9×7cm、-8.2cm(SP-3)で、比較的径が小さく、やや浅いものが多い。壙外には、土壌をとり囲む様に5本ある。いずれも壙内のに比べ、径が大きく深い。なお、SP-4の上部からは、P-5の底部位の土器が出土したことは前述した。

遺物は、第1号と第22号から、続縄文期初頭の底部位土器が配石中から出土している(a)(石器は共になし)以外は、土器の破片と石器・剥片のみである。石器と土器片が出土(b)したのは、第40号(削器、石皿、台石)、第103号(削器、石皿)、第104号(無茎鏃、鏃?)、第137号(削器)、第190号(砥石)の諸ピットである。この内、第40号の石皿(S-2)、台石(S-3)、第103号の石皿(S-9)は、いずれも配石として転用されたもので副葬品ではないと思われる。出土レベルは、第40号のS-1の削器は配石中、第104号のS-2の石鏃と第190号の砥石は、壙底面である。あと、土器片と剥片が出土した(c)のは第114、149号、土器片のみ(d)が第13、105号の2例である。第144、187号は無遺物(f)であった。

土器の時期は、Ⅲ期のみなもの10例(第1、13、22、103、104、105、114、137、149、190号)、Ⅱ期のは第40号の1例である。この第40号は、縄文中期の胴部細片が1個出土したのみで、これをもって縄文中期の所産とすることはできない。おおむね、Ⅲ期に構築されたと考えてよいと思う。

(b) AⅣb型

第4、12、25、38、95、98号の6基が入る。

平面形は、第12、25、98号がやや楕円形、あとは円形から不整円形を呈する。規模は、Mサイズ第4、12号、Lサイズ第38、98号、LLサイズ第25号、95号でやはり大きい例が多い。

断面形は、第4、98号の壙底面はやや丸味を帯びるが、あとは(a)タイプである。

層堆積は、第12、38号が(a)タイプ、第4号が(b)タイプで、あとの3例は(c)タイプである。この(c)タイプの内、第95号はほとんど全面(Ⅱ)層で充填され、上部にのみ(Ⅲ)、(Ⅳ)層と焼土層が薄く堆積しているだけである。また、第98号も(Ⅱ)層はあまり深くまでは堆積していない。(a)タイプの第12号は、暗茶褐色土層一層しか確認されていない。なお、第95号ピットの3層(壙底部)中には、多量の黒曜石削片と木炭が含まれていた。同様な例は、AⅠM型の第53号ピットでも認められており、興味ある事例かと思われる。

土壌の深さは、19 cm 以下(a)1 例(第 12 号)、20 cm 台(b)2 例(第 25, 38 号)、30 cm 台(c)1 例(第 4 号)、40 cm 台(d)2 例(第 95, 98 号)で、全般に深い例が多いが、いずれも掘り込み面を確認している例はない。

配石は、第 4, 25, 38 号が各々10, 18, 18 個で壙底部にあり、第 95, 98 号では各々11, 10 個の石が壙底部から壙口部にかけての各レベルにわたって配されている。石の分布は、特にまとまりなく、壙内全面であるが、同一レベルで全面を覆う感じではない。なお、第 12 号は上述のものとは趣を異にし、3 個と 1 個が壁に沿って存在し、前述の AⅢ₃型に似たあり方をしている。

配石の内焼けていた例は、第 12 号 2 個、第 4, 25, 98 号は 3 個、第 38, 95 号は 4 個である。また、石器を配石に転用した例は、第 25, 38, 98 号で認められた(各々 S-2, S-1, S-1)。

焼土は、第 38 号、第 95 号で検出されている。第 38 号は、西側の壙口部から壙外にかけて厚さ 7.5 cm の焼土が分布している(B-14)。第 95 号は、壙中央部に間層として入っているもので、厚さ 6 cm を算る(B-21)。

遺物は、第 98 号から、P-1 の底部位土器(第 27 図 17)と削器 2 点、石皿?(配石)が覆土から出土しており(a)、また、ほかのほとんどのピットからも石器(b)が出土している。第 4 号では、有茎鏃と石銛が出土しているが、この内石鏃は配石中出土である。第 12 号は、壁から削器(S-1)が、第 25 号では、削器と石皿が出土しており、削器は配石下、石皿は配石として利用されたものである。第 95 号では、無茎鏃 1、削器 3、フレーク・コア 3 点が出土している。この内、S-14 の削器と S-15 のフレーク・コアは底面から、あとは覆土である。なお、第 38 号は配石として石器(断面三角形の擦石)が利用されただけの例で、あとは土器片若干しか出土していない(d)。

土器の時代は、土器の出土をみなかった第 12 号ピット以外はすべてⅢ期である。

(c) AⅣc 型

第 16, 19, 21, 33, 50, 70, 78, 81, 108, 133, 180, 186, 197 号の 13 基のピットがこのタイプである。

第 21, 50, 81, 108, 186, 197 号の 6 基が円形から不整形円形であるが、他の 7 基は楕円形から不整形の楕円形である。規模は、Mサイズ 5 例(第 50, 70, 108, 180, 197 号)、Lサイズ 5 例(第 19, 21, 33, 78, 81 号)、LLサイズ 3 例(第 16, 133, 186 号)で、やはり大きいサイズが多い。

断面形は、第 70, 78 号の底面がやや丸味を帯びているが、あとは(a)タイプである。

層堆積は、(a)タイプ 3 例(第 16, 21, 197 号)、(b)タイプ 3 例(第 81, 108, 133 号)、(c)タイプ 5 例(第 50, 70, 78, 180, 186 号)、(d)タイプ 1 例(第 33 号)の比率で(c)タイプが多い。第 19 号は、壙底面しか確認されておらず不明である。なお、(c)タイプの第 78 号は、(Ⅱ)層は中央部のみである。

土壌の深さは、19 cm 以下(a)7 例、20 cm 台(b)1 例(第 21 号)、30 cm 台(c)2 例(第 70, 108 号)、40 cm 以上(d)は 3 例(第 81, 133, 186 号)で、一番深いのは第 186 号で 60 cm を数える。この内、19 cm 以下の 7 例は、いずれも壙底面しか確認されていない例であり、掘り込み面が判るのは第 70 号で、深さは 31.5 cm である。従って、一般に深い例が多いようである。

配石は、第 81 号の 1 点の石を除いては、すべて壙底部に壙内全面を覆うように配されている。第 50, 108, 197 号は 11 個の配石がある。石の大きさは、第 50 号は小形の石が多く、第 108, 197 号は中形のが多い。第 16, 70, 81 号は 14 個あるが、第 16, 81 号は大～中形の石が多く、第 70 号は小形の石が多い。第 78, 133, 180 号は、各々 21, 17, 15 個で、第 133 号は大、中形の石が多いが、第 78, 180 号は小形の石が多い。第 19, 21, 33 号は、各々 30, 31, 27 個で、第 19 号と第 21 号は隣合せのピットであるが、前者は小形例が 28 個で多く、後者は大～中形が主体を占め、両者には明瞭な差がある。第 33 号は、小形の石が多い。

焼けた石は、第 19, 50, 70 号が 3 個、第 186, 197 号は 4 個、第 16, 81, 108, 133 号が 5 個で、第 21 号、第 33 号、第 78 号は各々 14, 9 個で、配石のそのほとんどが焼けている。また、石器を配石に転用している例は、第 21 号は石皿 3 個（破片）（S-1～3）、第 50 号は石皿（S-1）、第 81 号は敲石（S-1）、第 186 号では石皿（S-1）を利用している。この内、第 21 号の S-3 と第 50 号の S-1 の石皿破片は接合した。

焼土が認められた例はない。小ピットは、第 21 号の東側壁に径 30 cm 程で、深さ 12～13 cm の小ピットがある。この内 S P-1 は、層の切合いから判断すると、この土壌が埋め戻される以前に穿たれたものである。しかしどのような目的で掘られたものかは明らかではない。

遺物は、第 19・20, 133, 180 号ピットから半完形土器が、第 16 号からは底部位土器が出土している(a)。第 133 号の例は出土層位は不明であるが、いずれも壙底部の配石中から出土している。石器は、第 16 号（搔器）、第 19 号（削器）、第 21 号（石皿 3）、第 33 号（無茎鏃、搔器）、第 50 号（削器、石皿破片）、第 81 号（敲石）、第 133 号（円形搔器、削器、フレーク・コア）、第 186 号（石皿）が出土している。この内、第 21, 50, 81, 186 号は、配石として利用されていることは前述した。第 70, 108 号では、土器片と剥片が出土しており(c)、第 108 号では、土製品？（第 61 図 2）が出土している。

土器の時代は、第 78 号は不明、第 70 号からは I と III 期の資料が出土しているが、あとはすべて III 期で、おおむね III 期の所産と思われる。

(2) B 型

隅丸方形を呈した土壌は、第 93, 100, 170 号の 3 基のみである。形態の特異性をもって、特に A 型と別けたが、ここで述べる通り、構造とか時代などは、A II 型を除いた A 型と何ら変る所はない。

平面プランは、第 93, 170 号はやや一辺が長い方形、第 100 号は、不整の方形である。規模は、三者共 51×47～57×54 cm で、ほぼ同じ大きさであり、すべて S サイズに入る。

断面形は、第 100 号は(a)タイプであるが、他の 2 例は、壙底がやや丸味を帯びている。

層堆積は、第 93, 100 号が(a)タイプ、第 170 号が(d)タイプで、間層として (II) 層が入っている。

土壌の深さは、第 93, 100 号が 12 cm、第 170 号が 40 cm である。第 170 号は、第 II 層中に掘り込み面がある。

配石は、第 93 号で 2 個、第 170 号で 1 個で、いずれも壙底部の中央部付近にある。なお、第 93

号の1個は焼けていた。第100号は、石は配されていないが、壙底部に1個体の半完形土器が毀されて、敷きつめられたような状態で出土している。

焼土とか、小ピットのある例はないが、第170号には、攪乱が一面に入っている。

遺物は、前述の通り、第100号ピットから縄文晩期終末から続縄文期最初頭の粗製深鉢形土器が出土している。第17号は無遺物であった。

土器の出土した、第93、100号はいずれも、その時期はⅢ期である。

(3) 特徴不明の土壙 (C型)

5基あるが、個々に述べたいと思う。

第3号ピットは、Point E-Hのラインの縦断セクションにおいて、その断面形が確認されたものであるが、遺憾ながら平面形は明確にすることができなかつた。断面形で判断する限り、壙口51cm、深さ19cmである。無茎鏃と搔器が出土している。

第83、84号は、二連ピットであるが、いずれも壙底面しか確認されておらず、平面プランも不定形である。第83号は、全体の傾向としては、不整形を呈し、B型のタイプに属する可能性もある。しかし、規模はMサイズで大きい。また、壙内壁コーナー部分に2本と壙外に1本の小ピットと壙内中央部に3個の配石がある。第84号は不整形で、壙中央に1個石がある。なお、第84号では、Ⅲ期の土器片が出土している。

第134号ピットは、平面プランがほぼ円形を呈するMサイズの土壙で、壙内中央に大形の石が1個ある。また、壙内に3本小ピットがあり、深さは不明であるが、長径は10~16cmで大きいものである。この小ピットを除くと、タイプとしてはAⅢ₁型に属する。土器はⅠ期の土器片が1片出土している。

第10号ピットは、壙底面部分しか確認されていないもので、平面プランに不安がある。なお、土壙内に4個の配石(内2個焼けている)があり、また周囲にも石が散乱している。この内東側の焼石の下の壙底面からは、赤色土(R-4)が出土している。土器はⅢ期の資料である。

(4) 疑問のある土壙 (D型)

ここで述べる22基のピットは、平面形・断面形・層堆積・土壙の深さからいって、幾つか問題がある例である。

この中には、配石のないSサイズの土壙が12例、配石がないか1個の配石のあるMサイズの土壙6例、規模が大きく、平面形および断面形が明確でないものが4例ある。

配石のないSサイズのものは、第69, 87, 88, 129, 135, 139, 140, 150, 168, 177, 179, 198号の12基のピットである。この内、第139号は断面形が西にきつく、東にゆるい立上りをみせ、全体として平面形も不整形である。第129, 135号も、断面形は摺鉢形を呈している。第179号は、底面に凹凸があり、北西部分は攪乱によって切られている。この4例に関しては、人為的な古い時代の土壙でない可能性がある。他例は、大きくは前述のAⅠS型に入るものであるが、いずれも浅く、特に

第 88, 150 号ピットは規模が非常に小さいもので、土壌墓として十分な用途を果しえたかどうかは問題は残る。ただし、墳底面部分しか確認されていないために浅いということも考えられるが、それを証明する証拠、ないしは墓であるとする積極的な根拠に欠ける。

土器の時代は、Ⅲ期が第 69, 135 号, Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ期が第 140 号であった。また石器が、第 88 号(削器)、第 140 号(擦石)で出土している。

第 14, 37, 51, 130, 131, 154 号の 6 個のピットは、配石 1 個、ないしは全くない M サイズの例である。第 14 号は、平面形が特異な形態を呈し、また土層堆積も不自然である。第 37 号は、断面形が摺鉢形で、層が同系統の層が幾層にも重なって堆積している。第 51 号も同様で、層堆積が不自然であるが、これは、北東部分が、いわゆる「風倒木痕」で切られているためかもしれない。第 130, 131 号は、層が(Ⅳ)、(Ⅴ)層のみで、しかも堆積のあり方は不規則である。第 154 号は、平面プランがいびつであると同時に黒褐色土層が間層として入り、また暗黄褐色土層が底面から壁に沿って堆積しており、全体に汚染された地山を掘り過ぎた可能性もある。それにしても、断面形は摺鉢状である。

土器の時代は、第 130, 131, 154 号がⅢ期、第 14, 37, 51 号は各々Ⅰ, Ⅱ期、Ⅰ, Ⅲ期、Ⅰ, Ⅱ期である。石器は、第 131 号から砥石が出土している。なお、第 154 号ピットの土器片は出土は多く、2 個の大形破片を含め 12 片の土器片(Ⅲ期)が出土している。

第 23, 58, 76, 116 号の 4 基については、個々に説明しよう。

第 23 号は、平面プラン・断面形・層堆積などを明確につかむことはできなかった例である。墳口部の平面形は、不整楕円形が 2 つ切合ったような形態を呈しており、断面形は、A-B セクションにみられるとおり、北側と南側とでは墳底面の高さが違う。しかし、この A-B セクションを観察した限りでは、切合い関係は明確にはできなかった。東側の墳口部付近には、7 個の配石がある。このように、墳口部に多数の石を配する例は、本遺跡ではこれ以外にはない。ただし、この配石と下の土壌が無関係であると考えられるなら、後述する石組として捉えうるもので、従って土壌の年代は、この石組(ほとんどⅢ期と思われる)よりは古い所産になろう。層堆積も、(Ⅲ)層と(Ⅴ)層との間に(Ⅱ)層が間層として入っている特異なものである。

遺物は、西側壁より縄文早期の石錘、覆土中より縄文早期の土器片 2 点(撚糸圧痕文と貝殻条痕文)、縄文晩期の土器片 1 点が出土している。しかし、いずれも出土層準は確認していない

第 58 号ピットは、層は(Ⅳ)、(Ⅴ)のみで充填されて、非常にかたくしまっへており、東側壁の一部には攪乱が入ったため、平面形・断面形は、必ずしも明確とはいえない。規模は、128×99 cm を測り、大形である。長軸方向は南-北である。墳口部付近から、石錘が 1 点、縄文早期の土器片が 2 点(貝殻条痕文と撚糸圧痕文)覆土から出土している。

第 76 号も、第 58 号と類似の平面プランと規模を有しているが、土層は、(Ⅱ)、(Ⅲ)、(Ⅴ)の 3 つの層で充填されている。これも、墳底面・壁は必ずしも明確ではなく、東側には攪乱が所々入っている。長軸方向はほぼ東-西である。

このピットからは、3 個体の貝殻条痕文の縄文早期の土器(P-1~P-4)と出土状態は不明

であるがⅢ期の土器片が2点出土している。この早期の資料の内2個体は、器形を伺うに足る資料で、いずれも壙底部の西側からまとまって出土している。なお、東側の壙口部付近から2個の石がみつまっている。

以上の第23, 58, 76号の3つの土壙は、コンタ135.5~134.5mの所にあつて、いずれも不整楕円形に近い平面プランを有し、規模の大きいものである。しかも、縄文早期の土器片ないし半完形土器、石錘などが出土している。Ⅲ期の土器片も若干つつ出土はしているが、各所に攪乱が入っており、混入した可能性を考慮すると、前述したAⅡ型の土壙と同様に、Ⅰ期の所産になる土壙の可能性もあろう。

さて、第116号ピットは、コンタ136.800m程の所にあるもので、平面プランは明確にはつかむことができず、結果的には不整三角形が2つ切合ったような形態になった。共に壙底面は平坦ではなく、凹凸で傾きをもっており、しかも層堆積からみると両者は切合う関係ではない。さらに、北側の第7, 6'層と第6, 10層とは不整合に交わっている。この種の堆積は、いわゆる「風倒木痕」（高橋1975）のそれと非常に近いものである。なお、西側の上部からは、第27図18の縄文中期の半完形土器が出土している。なお、この地区は、本遺跡の中では、発掘区から比較的縄文中期の土器を多く出土しており、近くのⅢ期の土壙墓の覆土からも中期の土器片を多く検出している。

第2項 石組

石組は、都合21基確認されている。これら21基の石組は、標高135.900~136.500mの間にある後述するX配石群とその延長部分（Z配石群）および135.600~135.00mの間にあるY配石群中に集中している。この内、石が6個以上で、あるまとまりをもってあるのは11例だけである。あとの10例は、バラバラな第39, 63号の2基を除いては、みな3~5個の石しかなく、果して石組といえるかどうか判然としない。しかし、ここでは説明都合上両者とも石組とし、前者をA型、後者をB型と仮称しておく。

(1) A型

第11, 42, 54, 61, 62号の5基と第17, 27, 28, 43, 57, 172号の6基の都合11基が入る。

この内、前者は土壙の壙口部のレベルにおいて、土壙と重なってないしは接して存在するもので、後者は土壙と無関係に石組のみ存在する例である。

前者は、11~29個の石からなり、その分布範囲は、113×70（第42号）~72×38（第61号）の範囲で、第54号がやや円形であるのに対してほかはすべて楕円形である。

土壙との重なりは、第11号が第12号ピット（AⅣb型）と第42号が第33号ピット（AⅣc型）と、第54号が第1号ピット（AⅣa型）と、第62号が第14, 15号（第15号はAⅡ型、第14号は不明）と土壙の掘込み面のレベルで重なっている。また第61号と第18号ピット（AⅠM型）とは近接した位置にある。

これらの石組の石の内、焼けていたのは第11号が5（/29）個、第42号が10（/14）個、第54号

が6 (/16) 個、第62号が6 (/12) 個である。

なお、第33号ピットは、南東グループ(11)と北西グループ(3)の2つに分けることも可能である。

また、AⅣ型の土壌と重なっている第11、42号では、土壌内の石とは、明瞭に大きさが違う。すなわち、第11号石組は小形の石が主体であるのに対して、第12号は中形の石であり、第42号石組は中形の石が主体であるのに対して、第33号ピットのは小形の石が多いといった違いがある。

なお、第62号石組内からは、土器片と剥片が、第54号石組では、無茎鏃と削器2点が出土している。

土壌とは無関係に存在する後者の6例は、6～16個の石からなり、その分布範囲は56×28cm(第172号)～102×65cm(第43号)の大きさである。第17号がやや四角形の範囲で分布するが、ほかはすべて楕円形である。ただし第17、27、43号の3例は、各々5個と10個、3個と7個、3個と13個というように2つのグループに細分できる。なお、第43号例は、両グループは離れているのではなく、前者は大形の石、後者は小～中形の石からなっているものである。

これらの石の内、焼けていたのは、第17号が6 (/15) 個、第27号が4 (/10) 個、第28号が1 (/6) 個、第43号が7 (/16) 個、第57号が3 (/14) 個であった。また、第43号石組の西側には焼土がある(B-16)。

なお、第28、42号石組の各々S-1は、砥石?と石皿を石組として再利用したもので、また第172号からは、縄文中期の土器片が2点出土している。

なお、後者の例の内、第57、172号を除いては、石組の下部に浅い掘り込み様のものを認めたが、いずれも平面形は不整形で、底面はフラットではなかった。石組の下部ないし近くに土壌があるかないかは、大きな問題であるが、本遺跡の場合、少なくともⅢ期の構築になる土壌は、たとえそれが墳底面しか確認されていなくとも、ほぼ平坦であり、壁も明瞭に捉えることができるので、一応ここでは、後者の例は、本来的に土壌と無関係に造られたものと考えたい。

(2) B型

第35、55、64、92号の4基と第32、34、36、39、63、117号の6基の都合10基が入る。

この内、前者はA型と同様に、土壌の墳口部のレベルにおいて土壌と重なっているか、近接した位置にある例であり、後者は単独で存在するものである。

前者は、3、4個の石からなり、その範囲は31×29cm(第55号)～49×18cm(第64号)までの拡がりがあり、第55号と第92号がほぼ円形、他は楕円形を呈している。

土壌との関係は、第35号石組が第14号ピット(タイプ不明)と墳口部のレベルで一部で重なっており、第55号は第67号ピット(AⅠM型)と、第64号は第7号ピット(AⅢ₃S型)と、第92号は第1号ピット(AⅣa型)と接した位置に存在する。

これらの石組の内、焼けていたのは、第35、64号で1 (/4) 個、第55号で2 (/3) 個であった。

なお、第92号石組内からは、縦形搔器(S-33)が1点出土している。

後者の6例は、4~6個の石からなり、その分布は41×33 cm（第32号）~92×43 cm（第39号）の範囲に、すべて楕円形に拡がっている。ただし、前述した通り第39号と第63号は、石の分布にまとまりはなくばらばらで、果して石組といえるかどうかは定かではない。なお、第36号では4個と2個の2つつグループに細分も可能である。

焼けた石は、第34、39、117号で1個、第32、63号で2個、第36号で4個認められた。

なお、第63号では北側に焼土（B-1）が分布している。また、第39号のS-1は断面三角形の擦石である。

第3項 溝状遺構

本遺跡から、溝状遺構は第141、167、171号の3基がみつがっているが、すべて遺跡の北西側にあって、第171、167号は、標高137.500 m前後、第141号は135.800 m程の所に存在する。

この3基は、等高線と無関係に一直線上に並んでおり、その長軸方向も3例とも、ほぼ南-北方向を向いている。

遺構の規模は、長軸178~152 cm、短軸47~74 cmで、深さは109~110 cmである。

いずれも、壙口部付近は（II）、（III）層などが摺鉢状に堆積し、その下部は（IV）層が若干と地山が二次堆積したものと考えられる（V）層が深く堆積している。この（V）層中には、第141、167号では、中央部と壙底直上に2~5 cm程の厚さで、有機物質を多く含む黒褐色土層ないし黒灰色土層が入っている。

なお、第167号ピットの壙口部から壙外にかけて、肩にかぶさるように、非常に大形の石皿（S-1）が出土している。

この3基の溝状遺構は、後述する通り、明らかに前述してきた土壙（墓）と石組とは性格を異にするものである。

（上野 秀一）

第3節 総括と問題点

第1項 総括

今まで、122基の土壌墓について、平面形・配石の有無と数・規模をもとに細かく分けて述べてきたが、A型としたものは、AⅡ型の3例を除いて、配石の有無を別にすれば、平面形・断面形・層堆積・土壌の深さ・焼土のあり方・土壌内出土の遺物・構築時期などの点においては、全く差異を見出すことはできず、また規模においても、AⅠ、AⅢ、AⅣ型各々における大きさのばらつきも、各型同様の傾向を示している。すなわち、この3つのタイプの土壌とB型の3基の都合119基の土壌（墓）の構築年代に関しては、各型毎に詳述してきた如くすべてⅢ期の第Ⅲ群土器の時期に属すると思われるものである。Ⅲ期の第Ⅲ群土器は具体的にいえば、第5章第1節(3)で詳述している如く「西岡式」と仮称される縄文晩期終末から統縄文期最初頭の単一の時期である。

AⅡ型は、Ⅰ期の所産と思われるが、第15号ピットを除いては、遺物の出土はなく必ずしも明確ではない。また、D型とした第58号、第23号、第76号ピットの3基でも、Ⅰ期の半完形土器・破片、そして石器（石錘）などが出土しており、Ⅰ期の所産の可能性もある。

さて、以下において、Ⅲ期の所産のA型の土壌（墓）116基（AⅡ型を除く）を中心に、各項目別に全体的な特徴をまとめてみたいと思う。

平面形

まず、平面形に関しては、円形（a）と楕円形（b）の数比は、69：45で、やや円形ないし不整円形の例が多いが、楕円形ないし不整楕円形としたものも、長径と短径の差は10～20cm内外であり大きな差はなく、最大で第113号ピット（AⅢ₂型）の22cm（133×111cm）である。従って、構築時の意識において、本遺跡で円形としたものと、楕円形としたものとは、有意な差を認めることはできないと思われる。第5表は、A型とB型のすべての土壌（墓）と3基の溝状遺構の壙口部の長径と短径をグラフにしたものである。溝状遺構（□印）は、長径が極端に長い為、図の上部にくるが、土壌（墓）は、中軸線から15°の範囲にすべてが収まっている。なお、円形としたものは、同様に6～7°程の所に集中している。

規模

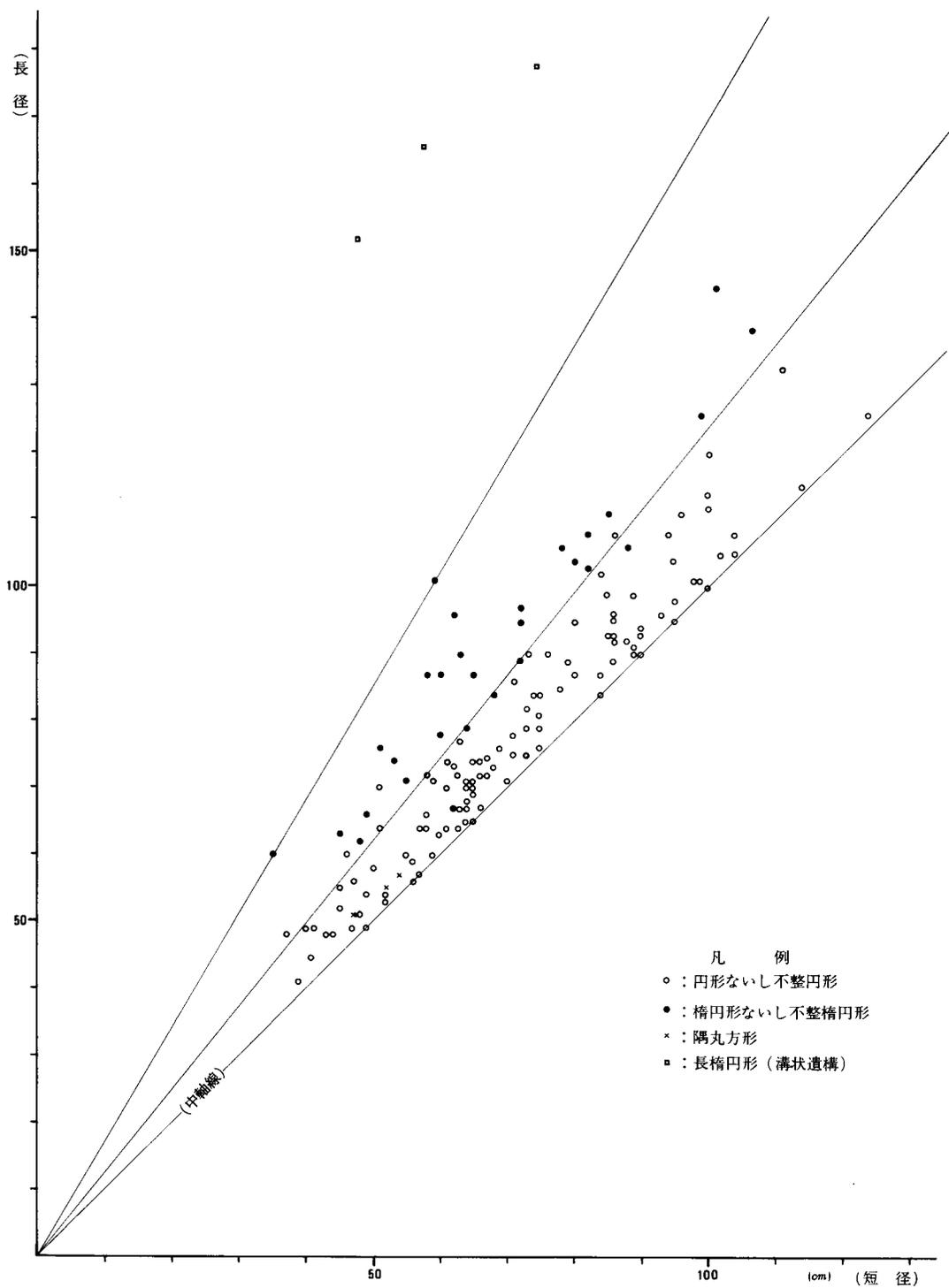
規模は、長径の平均値が50cm程になるSサイズは15例、平均値70cm程のMサイズは44例、平均値90cm程になるLサイズは40例、平均値110cm程になるLLサイズは17例であった。すなわち、SとLLサイズは少なく、MとLサイズの70～90cm程になる例が多いことが判る（第43図）。

断面形

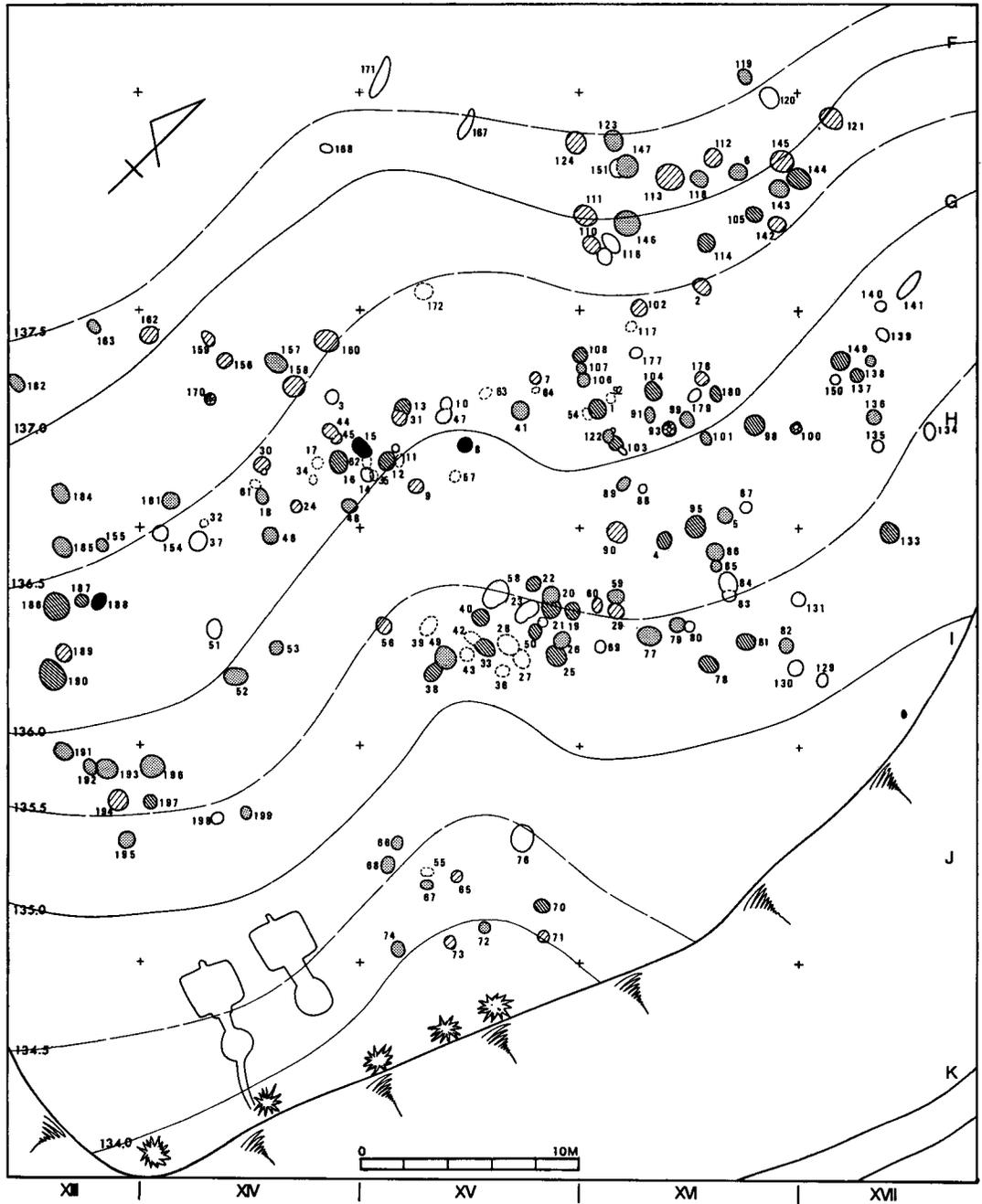
断面形は、(a)が69例、(b)が45例で、壙底面が平らで、底面と壁の境が明瞭な(a)タイプが多いが、前述したように、この区分は、本遺跡では大きな意味はもたない。

土壌の深さ

土壌の深さは、19cm以下(a)33例、20cm台(b)44例、30cm台(c)21例、40cm以上(d)17例で、



第5表 T210遺跡のピットの形態と規模の分布図



凡 例

- | | | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
|  A I 型 |  A IV 型 | ○は石組 |
|  A II 型 |  B 型 (第141, 167, 171号は溝状遺構である) | |
|  A III 型 |  不明 | |

第43図 T210遺跡土墳(墓)タイプ別分布図

19 cm 以下と 20 cm 台の例が比較的多いようである。しかしこの結果は、ほとんどの例が遺構確認面からの深さであり、掘り込み面からの深さを示すものではないため、これだけでは実際の傾向を示してはいない。

掘り込み面が確認されているのは、5 例である。AⅣ型の第 1 号、第 70 号は、各々 30、31.5 cm、B 型は第 170 号で 40 cm、C 型の特徴不明の第 3 号、第 10 号は、各々 29 と 18 cm である。掘り込み面は、第 170 号は縦断セクションの第Ⅱ層（黒色土層）中であるが、あとは第Ⅲ層（暗黒褐色土層）の上面である。

また、壙口部から壙外にまたがって焼土ないし赤色土が分布している例は、6 例あり、AⅢ₁型では、第 24、30、31 号で、各々 22、19、27 cm、AⅢ₂型では第 9 号で 16 cm、AⅢ₃型は第 73 号で 42 cm、AⅣ型では、第 38 号の 21 cm の深さである。すなわち、AⅡ型を除く A 型と B 型の土壌の深さは、20 cm 前後のものが第 3 号ピットを含めて 6 例、30 cm 前後のものは、第 10 号ピットを含めて 3 例、40 cm 台のものは 2 例である。浅いのは第 9 号の 16 cm で、一番深いのは第 67 号の 48 cm である。なお、掘り込み面は確認されていないが、50 cm 以上の深さがある土壌は 9 例であって、その内 AⅠ型が 3 例（第 118、123、147 号）、AⅢ型が 2 例（第 151、113 号）、AⅣ型は 3 例（第 190、133、186 号）であるが、すべてサイズは L ないし LL 型で大きいものである。一番深いのは第 147 号の 70 cm である。また、AⅡ型の M サイズの第 188 号ピットも深さは 53 cm をはかる。従って、全体的にみると 20 cm 前後のものが多かったようであるが、しかし 10 cm 台から 70 cm まで特にまとまる傾向は認められない。

層堆積

層堆積についてみると、(a)タイプとしたのは 59 例、(b)タイプは 17 例、(c)タイプは 30 例、(d)、(e)タイプ各 5 例、(f)タイプ 2 例（不明）の比率である。(a)タイプは一番多いが、この仲間の多くは、本来は自然堆積の黒色土が陥んでいる(b)タイプと同じものと思われるが、遺構を確認する際この層を削平してしまった結果と思われる。(e)タイプも、間層ないし底面について黒色土が堆積するものであるが、間層としてあるものに関しては、基本的に(b)タイプの標準的な土層堆積と大きな差はないものと思われる。ただ、底面についてあるものに関しては、底面に有機物を意図的に散布ないしは敷いていた可能性もある。札幌市白石神社遺跡（加藤・上野・羽賀 1973）の第 2 号ピットは、後北 C₂ 式期の土壌墓であるが、ここの底面には薄いアンペラ状を呈する炭化物層が存在していた。

問題は、(c)、(d)タイプである。(c)タイプは数の上でも比較的多い。この仲間は、単に土壌（墓）を埋め戻す際に黒色土系統（Ⅱ層）の土のみで充填させた結果とも考えられるが、ほとんどの例において土壌の少なくとも壙底部は、地山の月寒火山灰層〔TK〕を掘り込んでおり、当然掘った土壌を埋めるためには、上土の黒色土層のみだけでは、たとえ死体の分の容量は少なくなったとしても、土壌を完全に埋め尽すことは難しかったのではないかと思われる。かなり意識的に黒色土のみを入れたものと考えたいが、その理由は明らかにはできない。

なお、第 53 号ピットの 3 層と第 95 号ピットの 3 層には、多量の黒曜石の削片と木炭が含まれていた。

焼土

焼土は、A II型(第15号)の2例と土壌と切合う関係にないものを含めると31例認められる(B-1~B-30)(第3表, 第45図)。この内、土壌と関連してみつかったのは15土壌17例(第9, 20, 30, 31, 38, 73, 77, 82, 93, 95, 104, 107, 120, 149, 160号)である。なお、第15号ピット(A II型)の例は、縄文早期の土壌であるが、ここでみつかった焼土(B-9, 10)は、遺構確認面(本号の場合は、掘り込み面に相当していると思われる)のかなり上で、第62号石組などと共に本来、本ピットに伴うものではないと思われる。

さて、これら遺構と関連してみつかった焼土の内壙中央部にある例は7例(第20, 77, 95, 104, 107, 149, 160号)、壙口部から壙外にかけて分布するものは5例(第9, 30, 31, 38, 73号)、壙口部の壙内に分布しているもの5例(第82, 93, 107, 120, 160号)である。ただし、最後の例の幾つかは、遺構確認の際掘り込み面を削平しているために、本来壙中央部にあった可能性を考慮すべき例があったかもしれない。特にB型の第93号(B-30)は、その可能性がある。

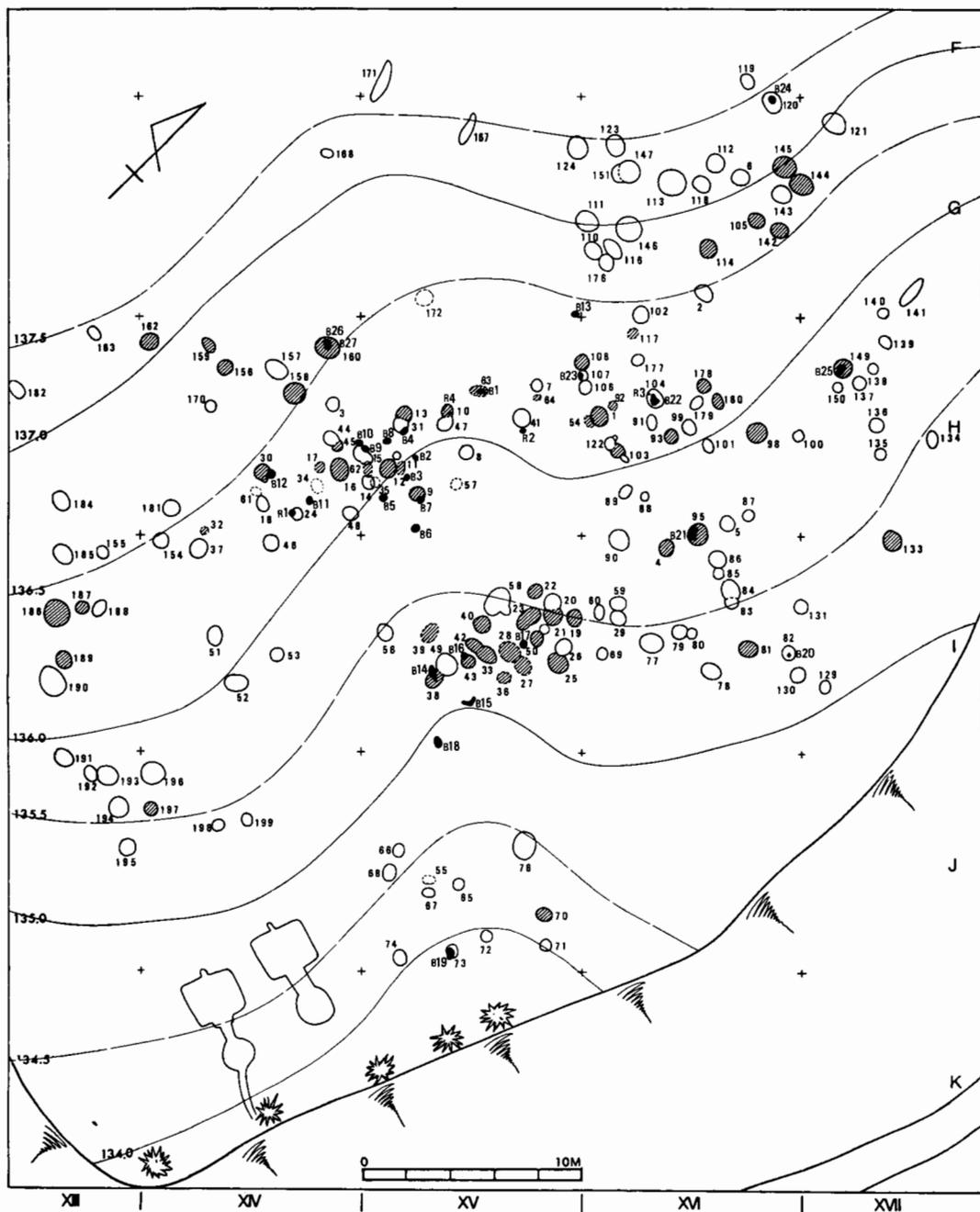
また、第107号と第160号においては、壙口部と壙中央部の2つの層準に焼土が認められている。すなわち、焼土の散布は、土壌を埋め戻す途中に、壙中央部に入れる場合と、埋め戻した後、壙中央部に散布するという2つの例、ないしは両者を行う例があったことになる。

なお、タイプ別にみるとA I型は4例、A III型6例、A IV型4例、B型1例で、前述した如く、A II型には、本遺跡の資料では検出できなかった。また、14層の焼土のみのものは8例、他の土層に焼土が混じっているものが7例であるが、一般に壙口~壙外にかけてある例は焼土層(14層)のみで、壙内壙口部ないしは壙内壙中央部にある例は、焼土層のみの例とともに他の土層中に焼土が混じった例が幾つかみられるようである。

また、石組と関連してあるのは3例(第63, 43, 28号)で、焼土と石組はほぼ同一レベルの縦断セクション(第3図)の第III層上面か、第II層中にならっている。

焼土の内容物に関しては、水洗選別した結果を第3表に示した。土壌サンプルを採取した25例の内、20例で炭化物を検出することができたが、B-25(第149号ピット例)を除いては、非常に少量である。また、B-19, B-21, B-25の3例からは、黒耀石の小削片が若干みついている。土器片を含んでいた例も幾つかあるが、すべてIII期の資料である。なお、明確ではないが、色調で褐色としたものは、ほとんど焼土のみであるが、灰褐色とか暗灰褐色としたもののいくつかには、灰を含んでいる可能性もある。茶褐色~暗茶褐色としたものは、サンプリングの失敗もあるが、純粹な焼土以外に、他の土壌をも含んでいるものである。以上の結果は、予想外に木炭の検出量が少ないということと、灰(?)を含み非常にきめの細かい例が幾つかあることである。

焼土層の厚さは、最高がB-17(第28号石組)の13.4cmで、平均値は6.7cm程である。また範囲も、B-18(XV-I-22区)の61×55cmを最大とし40cm余の径で散布されている例が多い。すなわち、この焼土は、かなりの量であると判断していいかと思う。この量は、葬送儀礼に伴って土壌(墓)の近くで、単に火を焚いたということだけでは解決されない多さである。おそらく壙中央部に散布している事実も考慮すると、意図的に焼土を集め搬出し、散布したものと考えられる。こ



- 凡例
- 焼土 (B番号)
 - ないしは
 - 赤色土 (R番号)
 - 焼石 (土壌内および石組内で焼けた石が入っているもの)

第44図 T210遺跡焼土・焼石の分布図

のような傾向は、本遺跡の配石に異常に焼けた石が多いという点とも関連して、興味ある問題を提供しよう。

赤色土

赤色土——いわゆる「ベニガラ」と思われるものの散布は、本遺跡では、わずか5例で全体の4%程である。内2例(R-1, R-2)は土壙の壙口部から壙外と壙外にあるもので、他の2例(R-3, R-4)は、壙底部にあるものである。前者は、第24号、第41号ピットの例で、範囲は各々26×26と13×15cmである。後者は、第104号、第10号ピットの例で、第104号は壙底面西側壁より、第10号は壙底面東側の焼けた配石の下から検出されている。また、第149号ピットの壙中央部からみつかった焼土中からも、少量赤色土が検出されている。全体に赤色土の検出数は少ないが、ただ、土壙内外から出土した縄文晩期末から続縄文期初頭の大洞A'式ないしは二枚橋式系統の土器にはほとんど漆丹が塗られており、また第133号ピットから出土した棒状の黒耀石原石、そして第28号ピット出土の縦長剥片にも赤色土が塗られていた事実は、本遺跡では散布例は少なかったが、赤色土は何らかの形で利用されていたものと思われる。ただ後述する通り、札幌市域の遺跡においては、土壙墓内に赤色土を散布する例は、非常に少なく、かわりに焼土の散布が多いという事実は注意する必要がある。

小ピット

小ピットは、21基の土壙(墓)と1基の石組の壙内外において38本認められた。この小ピットには、大きさから2つの傾向がある。1つは、径が30cm前後以上の大きいものと、もう1つは径が20cm前後以下の小さいものである。

大きい例のうち、壙外にあるのは、第1号ピットのSP-4とSP-6、第12号、第24号、第50号ピットの各々SP-1の諸例である。部位は、北側にあるものは第1号のSP-4、第12号、第50号の各々SP-1、南ないし南西側にあるのは、第1号のSP-6と第24号SP-1である。また、第1号ピットのSP-4では、小ピットの壙口上から1個体の底部位土器、第12号ピットの小ピット内からは、削器1点、土器片5点、小円礫2点が出土している。これらの事実は、後述する通り、その方向が南ないし北であることと共に葬送儀礼に関係した小ピットである可能性を示唆するものかもしれない。いずれも、AⅢとAⅣ型のピットである。

壁にある例は、第21号ピットのSP-1, 2、第103号のSP-2などにある。この内、第21号のSP-2(南南東)、第103号SP-2(東)のは、壁を切り込んだものであるが、第21号のSP-1(東北東)は、層堆積から見ても、埋め戻す以前に壙底面から掘り込まれたものである。

第81号のSP-1、第79号と第80号は、各号ピットと切合う関係にあるが、いずれも小ピット、第80号ピットの方が新しく、深さも各々5, 6(+ α)cm程で浅く、これらも土壙墓に関連した小ピットである可能性がある。なお、第106号ピットにおいても、類似した浅い小ピット様のものが付属しているが、層堆積の観察からは、切合う関係にはない。また、MないしLサイズの土壙とSサイズの土壙が接する関係にある第44号と第86号ピット例も、各々第45号、第85号ピットは、墓ではなく、それらに関連した小ピットである可能性もあるかもしれない。

第53号ピットの壙外南々東には32×24cmの黒色土で充填された小ピットがあるが、南西側に斜めに掘り込まれたもので、土層も非常にしまりのない状態であった。木の根の攪乱の可能性もあろう。なお、第38号ピットの西側にあるSP-1は、層堆積の観察では、本号が掘り込まれる以前に掘られたもので、本ピットとは直接関係のないものかと思われる。

小形の小ピットで、壙内にあるのは11例(第1号SP-1~3, 第14, 44号のSP-1, 第83号SP-1, 2, 第103号SP-1, 第134号SP-1~3)である。いずれも、径が小さいか浅いものであり、本来的にそれらのピットに伴うものかどうかの確証はない。

壁にあるものは4例(第30, 46, 131号のSP-1, 第83号SP-3), 壙外にあるものは9例(第1号SP-5, 7, 8, 第4号SP-1~4, 第3, 69号のSP-1)ある。この内、第4, 33, 69号の例は図示していないが、第4表に示した通り、いずれも壙内にあるものに比べてやや大きく、深いものが多いようである。第4号ピットの例に関しては、SP-1~3は、黒褐色~暗黒褐色系統の土層で充填されており、土壙とはほぼ同時代の所産かと思われるが、SP-4は、さくさくした茶褐色土層で、新しい時代のものかと思われる。他例のものも、茶褐色の明るい色調を呈するものの幾つかは、木の根などの攪乱である例もあるかもしれない。

切合い関係

本遺跡の土壙で切合い、ないしは接する関係にあるものは12例ある。この数字は、122基の土壙の約19.6%に相当するが、全体の傾向としては単独ピットが本遺跡では多い。この内、遺構確認面における関係で、接するだけのものは4例(10↔47, 44↔45, 85↔86, 106↔107)ある。完全に切合っているものの内第147号と第151号は、セクションライン設定のミスで新旧関係は不明であるが、あとの7例に関しては、13←31, 21←20, 25←26, 49←38, 79←80, 83←84, 103←122(新←旧)という関係である。しかし、いずれもⅢ期の所産で、大きな時代差はないと思われる。なお、前述した通り、第80号ピットは、第79号ピットに伴う小ピットの可能性もある。

また、配石と重なる関係にあるのは5例で、図式で示すと、1→54, 12→11, 14→35, 15→62, 33→42(ピット→石組)になる。重ならないが、近い位置関係であるものは、同様に1→92, 7→64, 18→61, 33→28, 67→55の5例であった。

配石および石組

さて本遺跡では、配石とか石組の形で、石が745個みつまっている。その内、X, Y配石群とした所には各々192, 227個あって、各々全体の25.6, 29.9%を占めており、この地帯に配石が特に多いことが判る。配石は、そのほとんどが壙底部に限られている。ただ、若干例壙口部にある例もあるが、これは石組と同様は性格をもつものと思われ、土壙と石組が重なる、ないしは接する関係にあることを考慮すると、本遺跡における配石のあり方は、壙内壙底部と壙口~壙外にかけての2ヶ所ないし、いずれかに配石があると考えてよいかと思われる。ただし、A型の土壙の分類はあくまでも、壙底部の配石のあり方を基準に行った。

壙底部に配石のあるA型の例は66基、B型は2基で、都合68基である。上部にある例は14基(第1, 8, 14, 15, 23, 58, 73, 81, 95, 98, 107, 113, 159, 182号)あるが、第23, 95号ピットを

除いては、多くて3～4個、多くは1、2個で、果して意識的に配されたものかどうかは明確ではない。第98号ピットは、7個上部にあるが、壙口部ではなく壙中部から壙口部にかけてで、下の4個と共にすべて下部に配石したものとして考えていいかもしれない。第23号ピットは、ピットの性格は明らなではなく、ここでは取扱いを保留しておく。従って石組としてあるもの以外は、一応、壙口部の配石は明確ではないといえよう。

壙底部における配石の数は、A型では、1個が20例、2個が9例、3個が5例で、1～3個の例は都合34例、4個以上は32例である。4個以上は最高は31個（第21号ピット）である。なお、配石1、2個および3個の例（AⅢ型）は、死体上に覆いかぶせた配石というよりも、いわゆる「枕石」とか「耳石」といわれるものに相当する例もあるかと思われ、AⅣ型とは、その配石の性格が異なっていた可能性もある。

本遺跡の配石および石組に興味ある点は、焼けた石が非常に多い点である。図中にスクリーンをかけて示した例は、半分ないし部分的に黒くすすけているようなかなり明瞭なものだけで、判断の難しい例を加えとかなりの数になると思われる。焼けた石の総数は200個（以上）にのぼり、745個中の26.8%で約1/3に当る。この内、焼けた石が多いピットは、第21号（12/31）、第33号（14/27）、第81号（9/15）、第108号（5/11）、第133号（5/17）、第180号（6/15）（焼石/総数）などであり、石組では、第17号（6/15）、第36号（4/7）、第42号（10/14）、第43号（7/16）、第62号（6/12）などである。

これらの焼石は、壙内にあるものは、焼石の分布と周囲の土層から判断して、配された後に焼けたものではなく、明らかに、別の所で焼いたものを持ち込んだものである。しかも、図版44 Aに示したような半分だけ黒く焼けた例も多くある。これは、炉址とか「ミルクイー・ストーン」として居住区域で利用したものを持ち込んだとも解釈できるが、しかしあまりに焼けた石は多く、理解に苦しむ所もある。これは、かなり多量の焼土を散布したことも関連して、何らかの葬送儀礼の1つとして石を焼くような過程があり、その際できる焼石と焼土を土壙墓に入れ、散布したとも考えられよう。なお、明確には断定できないが、石組は21基の内19基において焼石を認めることができ、しかも前述した通り、19基の内6基は、40%～70%の石が焼けている。この事実は、石組としたものが、焼石を生産するその過程の1つであった可能性もあるが、その割りには、石組中に炭は認められず、しかも下部の土層が焼けていた例はなく、明確ではない。

さて、前項で個々に述べてきた如く、配石ないし石組に、石器を転用している例が16遺構18例認められる。この内、土壙のAⅢ型3例（第7、9、156号）、AⅣ型11例（第21、25、38、40、50、81、98、103、186号）、D型1例（第140号）、石組では3例（第28、39、42号）の比率である。器種は、縄文早期～前期初頭の土器（Ⅰ期）に伴う断面三角形の擦石は3例、石皿は11例、台石・敲石・砥石が各1例であった。

壙内出土遺物

さて、土壙内出土の遺物に関しては、完形ないし半完形土器（底部位土器も含めて）が出土した例(a)は全体で11例、石器と土器片が出土した例(b)は31例、土器片と剥片が出土した例(c)は20例、

土器片のみのもの(d) 23例、剥片のみのもの(e) 3例、無遺物のもの(f) 29例の比率であった。

(a)のもので、完形に近い土器を出土した土壌は、第113号ピット(第27図15)である。出土レベルは、墳口部の黒色土層中でバラバラになって出土している。底部位片ないしはかなり大きい破片が墳内から出土したのは、11基の土壌で認められる。これらは、墳底部ないしは、配石中とかその直上から破片がまとまりをもって出土しており、半完形ないしは底部位の破片ではあるが、意識的に土器片を散布し、副葬品として供えたものと考えられる。この内、配石のない例では第100号で、墳底部に墳内ほぼ一面にしきつめられたような状態で、粗製深鉢形の半完形土器が毀された状態で出土しており、また配石のある例では、第4号、第180号の2例が配石の直上から、また第16号(2個体)、第19号ないし第21号(2個体)、第28号、第98号の4例は配石ないし石組中から、第22号は配石下から、復元できる土器片が出土している。なお、大きく接合した土器片は出ていないが、第95号の配石直上に多数の土器片が散布されていた。また、第46号は配石はないが、墳底部からかなり大きい底部位土器が出土しており、さらに第1号ピットのSP-4の上から底部位片が出土したことは前述した。

石器は、40個の土壌(墓)と2個の石組、そして1個の小ピット内から出土している。器種でみると石鏃9、大形石鏃3、石銛2、石錐1、削器24、搔器10、ナイフ状石器2、両面体石器1、砥石3、フレーク・コア2、石斧(破片)1の比率である。

出土レベルは、出土層位の不明のものもあるが、第113号と石錘を出土した第23、58号ピット例を除いては、ほとんど底面から10cm以内の墳底部ないしは配石中から出土している。特に石鏃は、出土レベルがすべて判明していて墳底部である。第113号ピットの削器は、墳口部であるが、このピットでは、この層準に完形土器が出土していて、墳口部に副葬品をおいた例であろう。第23号と第58号は、いずれもD型で、不完形のプランを呈するものであるが、縄文早期の土器片と共に壁ないし墳口部付近から石錘が出土している。

以上でみると、I期の第15号ピットを除くと、A・B型のIII期の土壌(墓)は、厚葬という傾向はないが、119基の内56基において、土器ないし石器の副葬品が認められたことになり、そのパーセンテージは47%で、約半数を数える。この事実、この時期の副葬品のあり方を知る上で重要であろう。

第2項 分布とグルーピング

前項までに175基の土壌(墓)、石組、溝状遺構について述べてきたが、本遺跡の今次発掘地点は、住居址はなく、3基の溝状遺構を除いては、すべて土壌(墓)とその関連施設で、この約1,700m²に及ぶ舌状台地部分は、明らかに墓域と思われるものである。さて、これらの数多くの土壌(墓)はどのような分布のあり方をしているのであろうか(第43~47図、図版3~5)。

I期と思われるAII型の土壌は、標高136m前後のラインにのって、遺跡地の南西端~中央部にかけて分布している。

III期の119基の土壌(墓)の分布は、第45図に示した通りである。第1項で詳述した如く、これ

らの分布のあり方で、一番特徴的なことは、遺跡の中央部に2ヶ所、X、Y配石群と仮称した配石および石組が異常に多いグループがあることである。各々の配石数は、168個(全体の22.6%)、223個(同29.9%)を数え、両者で本遺跡出土の配石の半数以上を占めている。また、X配石群の北東側にも、これよりまともにはないが、配石数122個(全体の16.4%)を数え、比較的多いグループがある。これをZ配石群とすると、X、Y、Z配石群の3者をあわせて配石は513個で(内焼石137個)で、全配石数の68.9%を占め、ほとんどの配石がこの地帯に集中していることになる。

X、Z配石群(第2、46図)は、等高線の136.5~135.7mの範囲、136m前後のライン付近に南西から北東にかけて分布するもので、X配石群は、土壇(墓)15基、石組7基、Z配石群は土壇(墓)18基、石組5基からなっている。その内、AⅣ型が各々3、6基、AⅢ型は6、2基、AⅠ型は3、5基、B型は0、2基、CないしD型は各々3基である。

X配石群は、さらに細かくみるとAⅣ型の第13、12、62号ピットは、配石群のほぼ中央に存在し、また同様にZ配石群では、第108、1、103号と第104、180、98号ピットのAⅣ型の3基づつが一線で2m程の間隔で並んでいる。なお、X配石群の南西側に3基の土壇と1基の石組があるが、これを説明の都合上X'(配石)群としておく。配石総数5個で、内焼石は1個である。

Y配石群は、標高135.1~135.7mの範囲にX、Z配石群と同様に南西から北東にかけ分布しており、土壇(墓)16基、石組6基からなる。タイプは、AⅣ型が8基、AⅢ型が3基、AⅠ型4基、D型1基の比率である。

この群も、AⅣ型の第40、33、38号と第22、21、19号、第50、25号の各々が小グループをつくって所在する。なお、第19、21号の配石数は各々30、31個、第50、25号は各々11、18個で、両グループは共に接しているが、配石数において異なっている。

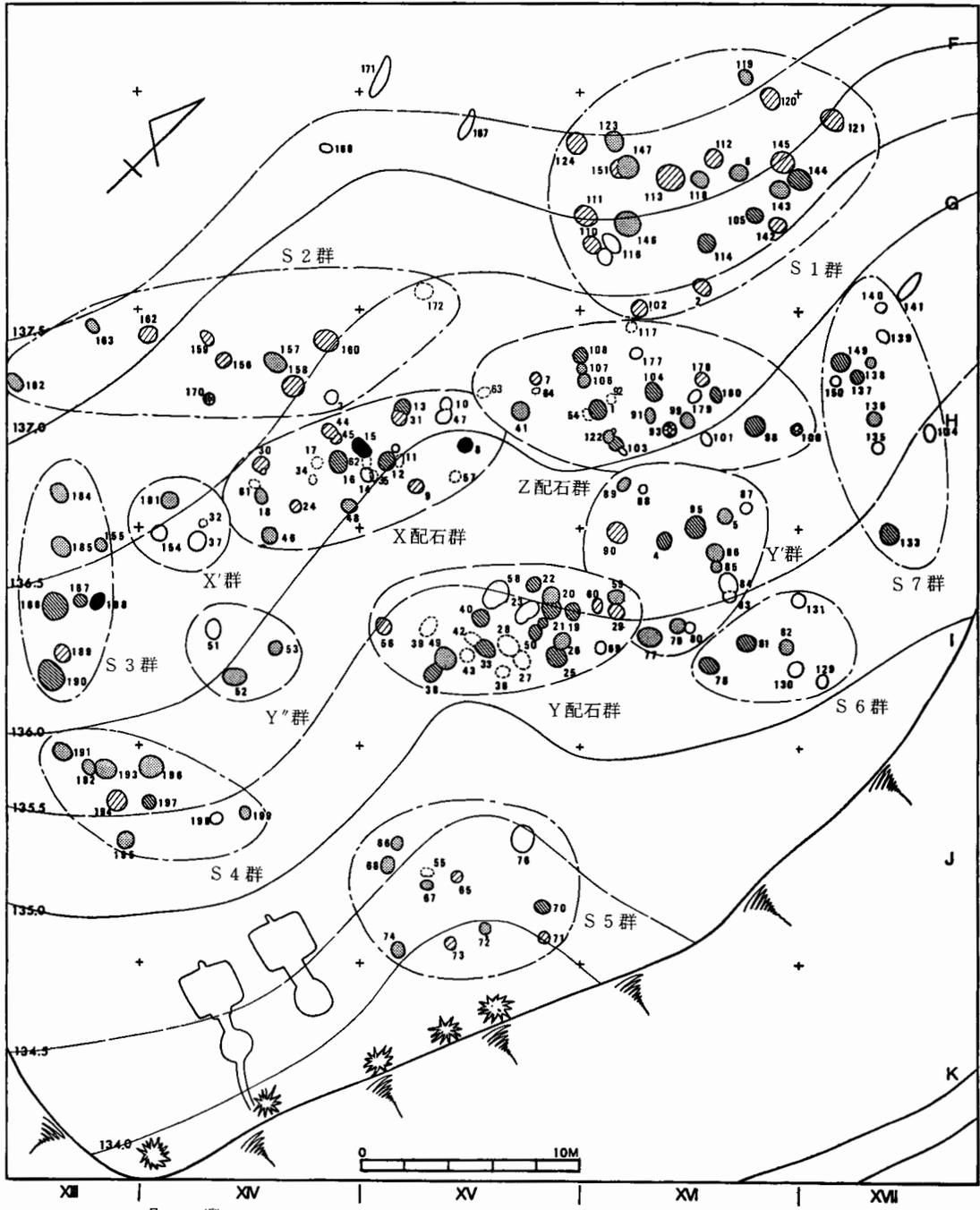
なお、Y配石群の北東に、土壇(墓)14基からなる1つのグループと南西に、3基の土壇(墓)からなるグループがある。これを説明の都合上各々Y'、Y''群とすると、Y'群は、AⅣ型2基、AⅢ型1基、AⅠ型6基、CないしD型5基からなり、総配石数29個(内焼石7個)である。Y''群は、AⅠ型2基とD型1基である。

一方、この配石群以外の土壇(墓)と石組は、これらの配石群を取り囲むように7つのグループ(S1~S7群)を作って存在する。総数で、土壇(墓)68基と石組2基である。この内、AⅣ型の土壇は13基、AⅢ型22基、AⅠ型27基、B型1基、C型(不明)5基の比率になる。

S1群は、最も大きい広がりをもつもので、配石群の北西——山側にあつて、22基の土壇(墓)からなっているが、タイプはAⅣ型3基、AⅢ型12基(内11基はAⅢ₁型で、配石1個の例)、AⅠ型7基で、圧倒的にAⅢ₁型が多い。なお、AⅣ型の3基は、南——北方向に2m程の間隔をおいて一線に並んでいる。

S2群は、配石群の西側に横に長く分布し、10基の土壇(墓)と1基の石組からなる。タイプは、AⅢ型5基、AⅠ型3基、B型1基、C型1基の比率で、S1群と似てAⅢ型が多いが、いずれも配石2、3個(AⅢ₂、AⅢ₃型)の例である。AⅣ型のものはない。

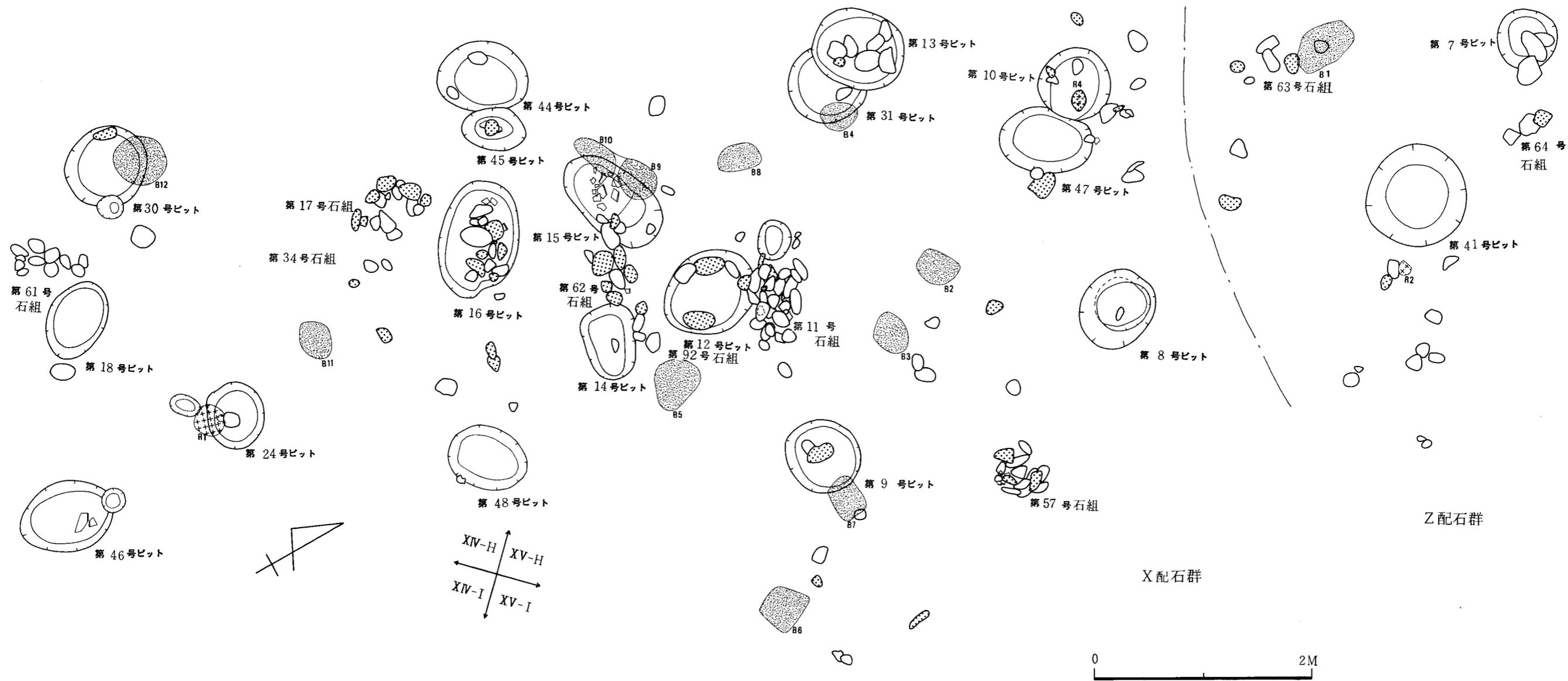
S3群は、配石群の南西端にあり、土壇(墓)7基からなる。AⅣ型3基、AⅢ型1基、AⅠ型



凡例

	A I 型		A IV 型		は石組
	A II 型		B 型		
	A III 型		不明(C,D 型)		

第 45 図 T 210 遺跡土壌（墓）の分布とグルーピング

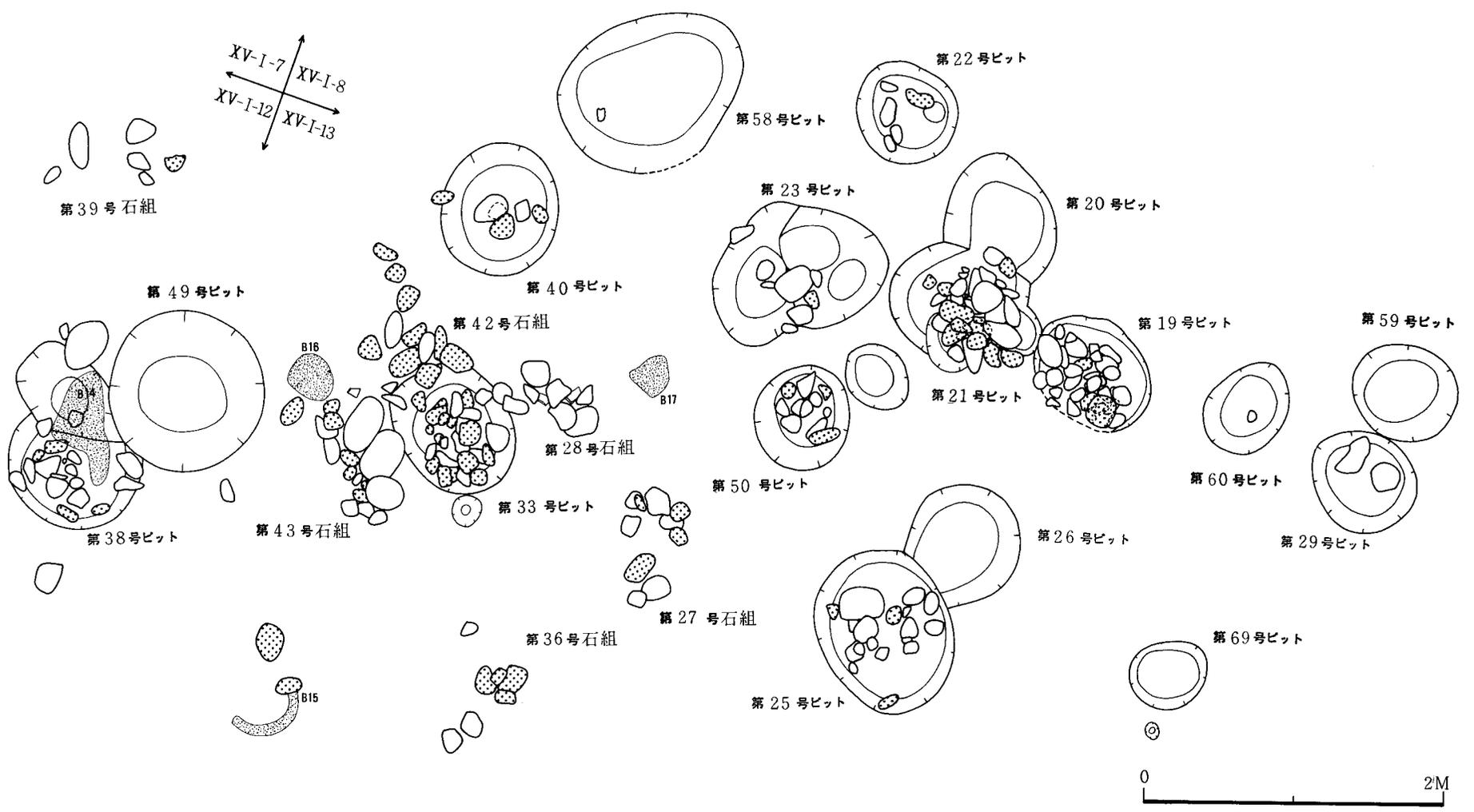


第 46 図 X 配石群遺構関連図 (1 : 40) (B : 焼土, R : 赤色土, 右側は Z 配石群の一部である)

D
O



XV-I-7 XV-I-8
XV-I-12 XV-I-13



第47図 Y配石群遺構関連図(1:40)

3基である。なお、配石のないA I型は北西側、配石のあるA IV、A III型は、南東側に片寄っている。

S 4群は、9基の土壙（墓）からなり、配石群の南側に分布している。タイプは、A IV、A III型各々1基、A I型6基、D型1基の比率で、圧倒的に配石のないA I型が多い。

S 5群は、配石群の南東端——谷側にあり、9基の土壙（墓）と1基の石組からなる。タイプは、A IV型1基、A III型3基、A I型5基である。なお、第66号と第68号（A I型）、第65号（A III型）と第67号（A I型）、第70号（A IV型）と第71号（A III型）の2基ずつは、各々他から離れて小グループを作っているようにもみられる。

S 6群は、Y'群にかなり接しており、また土壙の組み合わせも似ているので、1つのグループとしてY'群と切離して考えるかどうかの確証はない。6基の土壙からなるが、内A IV型2基、A I型1基、CないしD型3基である。

S 7群は、配石群の北東側にあり、土壙（墓）10基からなる。タイプは、A IV型3基、A I型2基で、あとはC、D型である。ただし、C型の第134号ピットは、A III型としてもいいかもしれない。

S 1～S 7群、各々の配石数は、31、25、37、12、28、36、29個で、総数198個で、全体の26.6%にしかすぎず、焼石も45個である。

配石群とそれをとりに囲む土壙（墓）群の違いを整理すると、土壙（墓）数は、前者が69基、後者は73基で、後者の方が若干多いが、分布の密度からみると、前者の方が狭い範囲に密集している。石組は、各々19基と2基で、圧倒的に中央のX、Y、Zなどの配石群の方が多い。

土壙（墓）のタイプでみると、A IV型は、各々19、13基、A III型12、24基、A I型21、25基、B型2、1基、CないしD型15、10基の比率であり、配石群ではA IV型が多く、一方外の土壙群はA III型が多い。このことは、配石数において、前者547個（内焼石146個）、後者198個（内焼石45個）という数比からも伺える。すなわち、S 1～S 7群は、A IV型の土壙（墓）は、各群1～3基で、半数以上は、A III型とA I型の配石の少ない、ないしは伴わない土壙からなっていることが判る。

こうしてみると、この約1,700㎡に及ぶ舌状台地上には、台地中央部にX、Y、Z配石群とX'、Y'、Y''群が、中央にやや土壙のない地帯を挟んで、ほぼ楕円形に分布（内環）し、それをとりに囲むようにS 1からS 7群までの7つの土壙（墓）群が、ほぼ円形に分布（外環）していることになる。換言すれば、配石が多く、密集して分布する土壙（墓）群と、配石が全体に少なく、ややまばらな分布をみせる土壙（墓）群とが、内環と外環に分かれて分布していると解してよいかと思われる。

なお、焼土の分布も、第44図に示した通り、28例の内22例は内環の土壙（墓）に認められる。X配石群10例、Z配石群4例、Y配石群6例、Y'群2例である。外環の6例は、S 1群2例、あとはS 2、S 5、S 6、S 7群各1例である。また、赤色土があるのはX、Z配石群だけに認められ、各2例であった。

配石の中で、焼けた石の入った土壌（墓）は43基、石組は16基であるが、内環では土壌25基、外環では18基、石組はすべて内環で偏在性があるが、特にY配石群に多い。

遺物は、18個体の完形・半完形土器および底部片は、X配石群3例、Z配石群4例、Y配石群8例4土壌（墓）、X'群、Y'群で各1例出土しており、内環では17例13土壌で認められる。外環では2例（S1、S7群各1例）だけである。

石器は46基で認められたが、内X配石群2基（大形石鏃、ナイフ状石器各1）、Z配石群7基10個（石鏃2、石錐1、搔器2、削器5）、Y配石群9基13個（石鏃、大形石鏃、石銛、ナイフ各1、搔器2、削器6、赤色土付着剥片1）、Y'群は5例8個（石鏃2、大形石鏃、両面体石器、扁平石核各1、削器3）、Y''群1例（石鏃）の比率で、都合24土壌で33個である。

一方、S1～S7群では、S1群3基4個（石鏃1、削器3）、S2群2基3個（石鏃、搔器、削器各1）、S3群2基3個（搔器、削器、砥石）、S4群1基1個（削器）、S5群3基3個（搔器1、削器2）、S6群1基1個（砥石）、S7群3基5個（搔器1、削器2、黒耀石棒状原石、石斧各1）で、都合15土壌20個である。

全体の傾向として、内環の方が遺物の副葬がある例が多いようで、石器に関していえば、内環の方が石鏃6、大形石鏃3、石銛1で投擲体が多く、またナイフ状石器、両面体石器、扁平石核などは外環の土壌からはみつかっていない。一方、外環では、砥石、石斧片などがあるが、内環にはない。削器は、両者とも一番多く各々14、10個を数える。

なお、各群をさらに細かく見ると、幾つか同型ないしは異型毎、2～3個1つの小グループを作っているようにも見る事ができる例があるが、今回の資料をもってしては、その関係は明確にはできないので特に触れない。

第3項 比較考察

本遺跡からは、I期（縄文早～前期初頭）とIII期（縄文晩期末～続縄文期初頭）の土壌墓がみつまっているが、I期のものに関しては、確実な例は第15号ピット1例のみである。ここからは、壙底部より、ほぼ1個体の土器が押しつぶされたような状態で出土し、その近くから敲石、削器が各1点出土している。土器は「東釧路IV式」である所から縄文前期初頭位の時期に位されようか。また、土壌として幾つか問題を残すが、第76号ピットからも、土壌内西側の底面から、やや浮いた状態で2個体の縄文早期（第I群第1類）の半完形土器が出土している。

縄文早期の墓は、重松（1972）によると釧路市東釧路貝塚で29例、同遺跡第II地点で1例、浦河郡浦幌町新吉野台遺跡で2例みつまっている。全体の傾向として、平面体は楕円形のものが多く、壙口部の大きさは230×220～50×48cmの範囲で、平均値は100×85cmである。深さは78～20cm（平均値44cm）程である。ベニガラは、東釧路遺跡例は、第II地点のを含めて全例から検出されている。なお、東釧路S46、2・4・6・8号では壙底に袋状ピットがあり、ここに頭部がおかれていた。本遺跡のAII型の1つの特徴である壙底がやや広がっているものもこのような例であろうか。伴出土器は、完形ないし復元完形になるような例はなく、すべて破片である。従って、本遺跡

第15号ピットの如く、(復元)半完形土器が副葬されていた例は、重松の集成の段階では、認められていない。石器・石片では、玉随質フレーク(東釧路S 35, 1号)、石鏃(同S 45, 8号, S 46, 1・2・9号)、剥片石器(同S 45, 9号)、小形砥石(同S 46・5号)、剥片(同S 46, 8号)などが出土しており、東釧路第II地点S 42, (C)では石刃鏃、石刃、石鋸と壙底に30cm²ほどの小マウンドがあって、ここより貝・魚骨片が出土している。

III期のものに関しては、縄文晩期末のタンネトウL式期のものを含めるとかなりの資料がある。すなわち、恵庭市柏木川遺跡(高橋編1971)、釧路市幣舞遺跡、同縁ヶ岡遺跡(沢1969, 1974)、雨竜郡妹背牛町メム川遺跡(高橋・野村1972)、夕張郡栗山町鳩山第3地点(野村1964, 1965)、上川郡東川町幌倉沼遺跡(佐藤1966)、同郡同町西6号北10番地1(松野・佐藤・兼重1971)、千歳市ママチ遺跡(石川・佐藤・金山1971)、札幌市S 153遺跡(加藤編1976)、新冠郡新冠町大狩部遺跡(藤本1960, 1961 a, b)、同郡同町氷川遺跡(愛下・橋本ほか1975)、富良野市無頭川遺跡(高橋1971)、芦別市野花南丸谷遺跡(野村1974)、浦河郡浦河町白泉遺跡(黒崎・宮夫1962, 橋本1969 b)の14遺跡を挙げるであろう。やや長くなるが、それらを個々に紹介してみたい。

柏木川遺跡では、A・B両地区あわせて137基のピットと1基の積石(PIT 136)がみつまっているが、遺憾ながら報告されているのはごくわずかである。確実に墓として報告されているのは、PIT 30, 45, 77の3基で、副葬品とかベニガラが見出されている。残りの134基の内3基(PIT 81, 133, 134)は、副葬品はないが、規模が適切で、ベニガラとか枕石のあるものであり、また7基(PIT 21, 41, 50, 52, 53, 70, 80)は、1m以内の規模で、高さ30cm程の立石があるものであるが、あとは何ら特徴的なものは見出されていないという。

墓とされた3基の内、PIT 30, 45はタンネトウL式の完形土器が出土した縄文晩期末のものである。大きさは、各々壙口部140×110, 110×90cmで隅丸長方形、楕円形を呈している。深さは、共に1m前後である。PIT 30では、60×35cmの板状石1個と礫3個が、壙口部付近に落ちこんだような状態にあり、この配石下、壙底面より10cm上のベニガラ面(2個体)と東壁より、破片の状態に3個体の完形土器およびスクレイパー(1)と大形フレーク(2)が出土している。なお、本ピットの板状石および土器片の一部は焼けていて、炭化物もみつまっているという。PIT 45では、配石は15個以上あり、この配石下から6個体分の土器が、破片で出土している。また、PIT 50(56×54cm, -23cm)では、6個の配石と土器片、PIT 134(152×88, -32cm)では、配石1と土器片、PIT 81(126×127, -44cm)、117(74×67, -26cm)、113(144×78, -32cm)の各ピットでは、配石はないが、土器片と削器(PIT 113)が出土している。これらのピットから出土した土器もタンネトウL式である。

釧路市域では、大洞C₂~A式ないしはタンネトウL式併行と思われるヌサマイ式期の土壌墓が幾つかみつまっている。幣舞遺跡では、径1.2mの円形プランの土壌墓から頭位南東の座位屈葬人骨がみつまっている。壙内からは、バケツ2杯分のベニガラと共に、大量の黒耀石の大形剥片、石鏃(7)、矢柄研磨器(有溝砥石2)、扁平に磨かれた大形の凝灰石(3)、磨製石斧(4)、小形の舟形土器などが出土している。また縁ヶ岡遺跡では、500基以上の縄文晩期の墓が存在したらしいが、

調査されたのは 60 基程で、その主体はヌサマイ式のものであった。この内 9 例には、ホタテ、ウバガイ、サラガイ、エゾシカ、イノシシ、イルカ、サメ、トドなどの動物遺骸の一部が副葬され、また 8 体合葬例もあり、頭部から「うるし塗りの櫛」がみつまっている。副葬品は、貝製の小玉が何千という数で発見される例がある反面、ほとんど何も出土しないものもあるという。さらに、石斧、石鏃、敲石、コハク玉のように、墓壙によって副葬品の量・種類に差があるといわれる。なお、両遺跡とも正式報告は出されておらず、土壙の細かな構造とか規模、その分布のあり方などは不明である。

メム川遺跡では、2 基のピットが報告されている。ピット I は、径 160 cm の円形のもので、深さは 1 m 程である。勾玉と彫刻のある石製品が出土している。ピット II は、半掘のもので深さ 51 cm である。内部より、黒耀石の棒状原石が出土している。時代は、伴出土器からいわゆるタンネトウ L 式に相当するが、これよりやや新しい時代の所産かと思われる。

鳩山第 3 地点では、1 基の土壙墓が報告されている。壙口部には土器片多数と軽石製の有溝砥石、底面には石鏃（40 本程）、石斧、スクレイパー、砂岩製の板状砥石、黒耀石板状原石、舟形土器、木炭、多量の動物骨片と人骨小片があり、うすくベニガラが敷かれていた。底面ないしは壙底部から出土した土器・石器の幾つかは火熱を受けており、また底面も焼き固められていたという。1 個だけであるが興味ある資料である。伴出土器の型式はいわゆるタンネトウ L 式に相当するが、正確な所属時期は不明である。

幌倉沼では、45 基の土壙墓が報告されているが、この内 SE 9、SW 2、SW 7 号は各々 2 基の土壙墓が重なったもの、SW 8、SW 14 号は 3 基の土壙が切合ったものと解せられるので、都合 50 基みつまっていることになる。

平面形は、不整形のものが多く、土壙の肩崩れとか地山の汚染などに起因するもので、本来は円ないし楕円形のプランを呈していたものと思われる。不整形円形～円形 21 基、不整形楕円形～楕円形 21 基、長楕円形 3 基で、プランの確認することができなかったものは 5 基である。

規模は、長径が 110 cm 前後から、それ以上になるものは 22 基、90 cm 程のもの 6 基、70～80 cm 程のもの 9 基、50～60 cm 程のもの 7 基、不明 1 基で、全体に大形のものが多いようである。しかし、この数値も、全体に不整形の例が多いことから、若干差引いて考えねばならないかもしれない。深さは、30 cm 台 1 例（SE 11 号）、20 cm 台 9 例、10 cm 台 29 例、10 cm 以下 5 例で、全体に 10 cm 台の浅い例が多い。

ベニガラが認められたのは SE 2 号の 1 例のみで、長軸の一端（東側）の配石上に散布されている。また、焼土が覆土中に含まれ、配石も焼けている疑いがあると報告されている。

配石は、4 個以上のものが 36 例、1～3 個のもの 7 例、配石のないもの 4 例、不明 3 例である。

遺物は、全く出土しなかったのは 5 基（SE 7、17、12、13、16 号）、復元によって完形～半完形になる土器を出土したもの 12 基（NE 1、SE 1、9、NW 3、5、6、9、SW 7、9、14、16、21 号）であり、石器は 20 基で出土していて、器種では石鏃 16、石槍 1、削器 32、搔器 1、石斧 12、フレーク・コアー 2、軽石と磨石 4 点という内訳である。出土レベルは、SW 3 の石斧の内 1 点が

墳口上、SW 20の石斧は配石上で出土しているが、あとは墳底部である。土器片が、敷かれたような状態で出土しているのは、SE 2, NW 1, 15, NW 6, SW 5, 7, 9号の7基で、特にNW 15号は、配石はなく、かわりに一面土器片が敷かれていた。なお、ほかに25基で、配石中とその前後から比較的多くの土器片が出土している。また、SW 2号で水晶体、SW 11号で木炭、NW 6号でパンケーキ形の粘土軟塊が出土している。

袋状ピットが、SW 8と10号であり、またSW 9号墳外に焼土が3ヶ所認められている。

時期は、いわゆる「タンネトウL式」期であるが、これよりやや新しく、縄文晩期末から続縄文最初頭頃の時代に比定されようか。

東川町西6号北10番地1の遺跡からは、12基の土壌がみつまっている。内、第2, 7, 8, 11号の4基のピットは、墳口部は47×36~58×40cmで小形のもので、配石はなく、遺物も第2号でフレーク・コアーが1点出土したのみである。第3, 12号は、各々228×145, 140×104cmで大きいもので、第3号からは拇指状搔器2点、第12号ではベニガラと木炭が出土し、底面より石鏃12, 剥片27, 埋土中より削器1と土器片4点が出土している。第1, 9号は、2個の配石があるが、各々の大きさは60×60, 50×42cmで、やはり小形のものである。共に土器片と剥片(第1号のみ)が出土している。第4, 5, 6, 10号の4基は、4~6個の配石をとまなうものである。大きさは52×40~62×51cmで、やはり小さい。遺物は、第5号で土器片2点が出土したのみでほとんどない。時期は、土器からみると幌倉沼遺跡とほぼ併行するものかと思われる。

ママチ遺跡では、101基のピットがみつまっている。報告書の遺構一覧表にある68基を基に集計しなおすと、配石のあったピットは8基で、全体の11.8%(8/69)、石器が出土したものは31基で45.6%(31/69)、半~完形ないしは底部位土器が出土したものは7基で、10.3%であり、結局墳底部から石器ないし半完形および底部位土器が出土したピットは43基で、全体の63.2%のものに副葬品と思われるものが出土しているようである。石器の器種は、石鏃(46)、石槍(3)、石錐(1)、スクレイパー(39)、剥片石器(179)、石斧(5)、砥石(2)、敲石(2)などで、総数は277点を数える。なお、10基のピットから動物骨片が出土している(14.7%)。

個々にみていくと、Pit 13(第1号墓穴)では、墳中央より大洞A式(報告者はC₂式とあるが)併行の半完形土器(1)と破片(4)が散乱状態で、また剥片石器、スクレイパー、礫各1が、Pit 15(第2号墓穴)では、円形の半完形土器と動物骨片(2)と木炭片が、Pit 21(第3号墓穴)は、不整形であるが、完形土器(2)、石鏃(無茎)、剥片石器、スクレイパー(各2)が出土しており、この内土器は墳中央~下部にかけてまとまって出土している。東壁に径15cm程の小ピットが2本ある。Pit 67(第4号墓穴)では、墳口部より土器片が、Pit 24(第5号墓穴)では、底部位土器が伏せた状態で出土している。Pit 71(第6号墓穴)では、壁に小ピットがあり、墳底部より深鉢形土器の大きな破片とスクレイパー(2)などが、Pit 29(第7号墓穴)とPit 59(第8号墓穴)は半掘であるが、土器片少量と石斧(Pit 59)が、Pit 82(第9号墓穴)では、墳口部に粘土塊があり、周囲から無茎石鏃100余点などがみつまっている。また、墳内からも剥片石器、石槍、黒曜石棒状原石、石鏃などが出土している。石鏃は、特に方行性はない。Pit 83(第10号墓穴)では、壁に小ピットと2ヶ

所に張り出しがあり、壙口部より黒曜石棒状原石(12)、有溝砥石(1)、剥片石器(2)がみつまっている。

なお、この遺跡では、D-23区で石鏃の集積、D-22区で石斧の集積、B-17区で剥片の集積が認められている。石鏃と石斧の集積中からは他の石器もみつまっているが、特に石鏃中では黒曜石棒状原石、石斧中ではベニガラ付着の黒曜石剥片などみつまっているのが興味ある事例である。また、石斧の集積の付近で焼土がみつまっている。

札幌市S 153遺跡では、769に及ぶ土壌が密集してみつまっている。しかし、この遺跡では、縄文早期～擦文文化期までの幅広い時期の資料が錦々とみつかっており、またその土壌の時代を決定しうるような半～完形土器ないしは時代の判る特徴的な器種型式の石器が出土した例はごくわずかで、土器でみると多くみても32例で、わずか4%である。特に、完形土器を副葬する例がないか、少ない時代の土壌の抽出は、ほとんど不可能に近いといえる。ここで取り扱おうとする、縄文晩期末～続縄文期初頭の時期も薄葬の傾向があり、配石を有する土壌であっても、それがこの時期か、後北C₂-D～北大式の時期なのか俊別できない。

また、報告では資料が膨大なため個々に細かい検討はなく、さらに第1表における、特に土壌の時代判定の基準には若干疑問があり、これをそのまま利用することも難しい。従って、土壌数とその資料の多さにもかかわらず、その取り扱い是非常に難しいといわざるをえない。

明らかに、縄文晩期末の所産と思われるのは、第97号、第101号、第716号の3基と、後北D式の破片が出土していて若干問題になるが、この時期の完形と半完形土器各1個体を出土した第158号ピットの都合4基である。あと、根拠が薄弱であるが、覆土内出土土器の中で一番新しい資料が晩期末であるものは、第3、5、7、11、12、16、18、28、33、37、39、42、44、50、52、60、70、74、76、81、83、86、87、88、89、98、99、110A、113、114、116、126、132、133、134、136、147、152、168、170、171、174、190、199、206、223、238、247、250、292、410、427、430、473、618、621、626、645、650、654、669、702、723、778号の64基のピットである。これに、縄文晩期末の資料以外に「続縄文」が出土したと註記された、第302、369、378、412、429、498、503、511、559、576、580、611、612、614、615、622、642、663、697、713、732、733、741、791号の24基を加えると全部で88基になる。

やや確実な4基と不確実な88基をあわせて92基を対象にまとめてみると、平面形には、第33、60、199号は報告では円形とあるが楕円形とみることもできるので円形79基、楕円形10基、不明3基の比率で、圧倒的に円形プランの例が多い。大きさは、50～60cmの例8基、70～80cmの例33基、90～100cmの例13基、110cm以上の例22基で、全体に70～80cmの例と110cm以上の大きい例が多いようである。範囲は136×121cm(第60号)～47×47cm(第70号)である。配石のあるものは37基で、内1～3個のもの23基、4個以上もの14基である。なお、初年度の調査例に関しては、配石が焼けているかどうか調べられているが、この結果は第6、12、52、87号の5基で焼石が認められている。切合関係にあるのは24基で、92基中の26%である。焼土は、第702号で壙央に、第199号で壙口に認められた。また、第171号からは貝殻が出土している。

遺物は、前述した第97、101、158、716号の4基でかなりの量の縄文晩期の土器片が出土してい

るが、内第158号の墳中央から出土した資料は2個体に復元できた。石器は、第7号(削器1)、第12号(砥石2)、第28号(石斧片1)、第37号(大形有茎石鏃1)、第88号(砥石片1)、第114号(搔器1)、第138号(削器1)、第171号(石鏃1)、第412号(削器1)、第580号(ナイフ1)、第650号(石篋?1)、第702号(ナイフ1)、第741号(削器1)の13基で認められ、全体の14%に当る。これに、石器は出土していないが、土器片の多かった4基を加えた17基は、少ないながら意識的に遺物を入れたものとみていいかと思う。全体の18.5%に当る数である。

大狩部第1地点では、2回にわたる調査で、15基の土墳がみつまっている。

大きさは、80×80～160×125 cm程で、1 m以下80～90 cm程と1 m以上130×150 cmの2種類の大きさがあるようである。平面プランは、円形と楕円形が相半ばしているが、特に第11号は、130×65 cmで長楕円形を呈している。なお、5号と5'号、9号と11号は切合っている。深さは、20～110 cmまでであるが、50～70 cm程の例が多いようである。ベニガラは、3号、5号、6号、7号、14号の5基で認められている。この内、3号と6号は、墳底部にあると報告されている。あとの例もすべて墳内であるが、正確な検出レベルは不明である。

副葬品は、6号ピットで、墳口と墳底の2つのレベルで出土している。墳口面からは、伏せて2個の完形土器と軽石器、石鏃(2)、搔器(3)が、墳底部からは、琥珀平玉(約400)、石斧(1)、黒曜石の剥片(1)と8個の土器片が出土している。

他のピットでは、1号では木炭、2号では墳口面に直立位で完形土器、3号では土器片47個、5、5'、7号では軽石器が各々1～2個出土している。なお、7号のものは2個の内1個は焼けた部分があったという。9号は墳底の中央に琥珀平玉57個、10号では墳底部から石斧2点、14号から土器底部と墳口面のレベルの墳外に取囲むように、6個石が配されている。ほかの例は、遺物は出土していない。

なお、C、Dトレンチから、各々3個と1個「焼灰跡」がみつまっている。この内2例に、1個と6個の配石が伴っている。配石のないものは、楕円形に分布し、60×40 cm程で小さいが、配石があるものに関しては、120×70 cm以上の広がりをもっている。これらの土墳墓と焼灰跡の時期は、伴出土器から、続縄文期初頭のいわゆる「大狩部式」の時代である。

水川遺跡では、15基の土墳墓がみつまっているが、(不整)円形と楕円形のものがあるが、やや楕円形のものが多いようである。大きさは、80～90 cm台のものが3例あるが、あとは112～176 cmの大形のものである。深さは、49～83 cmまでであるが、60～70 cm台のものが多い。なお、第4、5号は、第3号と切合い関係にある。ベニガラは、11基という高い比率で認められる。ない、ないしは不明のものは、第4、5、11号の3基である。

副葬品と思われる遺物は、墳底部のみと墳口部と墳底部の両者にある例とがある。両者にある例は、第6、12号の2基で、第6号では、墳口部から軽石、小形壺形土器、石匙(ナイフ状石器)が、墳底部から深鉢形土器(2)、石鏃(2)、剥片石器(4)、大形剥片石器(1)、軽石(2)が出土しており、第12号では、墳口部から4個体の土器、底部から石斧(1)、黒曜石円礫原石(1)、礫(2)が出土している。なお、両ピット共に墳内から小ピットが1個づつみつまっている。なお、

第1号では、壙口部に多くの礫が不規則にあり、壙底部から琥珀玉原石、石鈴(?)、石斧、剥片石器、剥片が出土している。また、小ピットが1個ある。

壙底部に遺物があったものは、6基ある。第2号では石匙(ナイフ状石器)、第7号では壺形土器、石鏃(5)、石斧(1)、軽石(2)、礫(1)が、第13号では石鏃、剥片石器、軽石、剥片と共に大形円礫1点がある。また、壙中央付近に中形円礫が3個出土している。小ピットは壁よりにある。第14号では、石槍、石鏃(8)、琥珀玉(6)と小ピットが1個みつまっている。なお、第10号では壙底部から円礫1個と壁よりから小ピットが1個みつまっている。さらに、第3号の覆土から若干の土器片が出土したという。時期は、続縄文期初頭の時期で、二枚橋式にやや近い位置にあり、本遺跡の第Ⅲ群土器(仮称西岡式)よりはやや新しい時期である。

無頭川遺跡では、細かな伴出土器型式は明らかではないが、石器で判断する限り続縄文期初頭の土壌が2基みつまっている。ピット1は、120×180 cm、深さ30 cmの規模で、壙中央より倒立した状態の壺形土器が、また破損した深鉢形土器も出土しているらしい。ピット2は半掘で詳細は不明である。

野花南丸谷遺跡では、D、G、I区から5基の土壌がみつまっているが、この内I区から検出された3、4、5号の3基は、続縄文期初頭と思われるものである。3号は100×80 cmの大きさで、長方形のプランを呈する。壙底面は段を有しており、中から炭化物が出土している。ピットの近くには、26個からなる石積(石組)がある。小ピットが2つ壙外に穿たれている。5号は、70×50 cmの楕円形のプランを呈するもので、深さは20 cmである。片岩製の玉と続縄文期初頭の土器片が出土している。少し離れた所に、20個からなる石積がある。4号は、径30 cm程の小ピットで、深さ20 cmのものである。性格は、明らかにされていない。

白泉遺跡では、各トレンチから13基の土壌がみつまっている。大きさは、220×150～60×50 cmまでであるが、1 m以上の大きい例が9例あり多い。深さは115～35 cmの範囲であるが、特にまとまる傾向はない。ベニガラは、5号と10号からみつまっている。前者は、壙口部、後者は壙底部である。小ピットが、2号ピット内に1個、3号の壙外に10個の小ピット、6号ピット底部に深さ50 cm程の大きいピットが穿たれているが、報告では詳細は不明である。配石は、6号で25個、9号では、壙口部に8個みとめられるほか、7号で、壙口に厚さ15 cm程の小砂利が1 m²にわたって円形状に分布し、この面に焼土混りの層が分布していた。また、10号でも壙口部に小砂利層が認められる。なお、4号と5号の間と6号の壙底部から焼土(100×100 cm、厚さ10 cm)がみつまっている。

遺物は、1号で土器片と石鏃(6)、剥片、3号では土器片、石鏃、スクレイパーと壙口～壙中央30 cm程の所にかけて炭化木片が少量みつまっている。4号では、土器片多数と石鏃(2)、石錐(1)、スクレイパー(1)、石斧(1)、剥片それに獣骨片と木炭片が検出されている。5号は、土器片多数と剥片が覆土より出土しているほか、壙口部から石鏃(1)、スクレイパー(1)、軽石(8)が出土している。なお、この上にベニガラを散布している。6号では、配石中に土器片と石鏃、ナイフ、石槍が、また焼土上面から黒曜石の剥片が敷きつめられたような状態で、また焼土中から獣骨

と木炭片が出土している。7号では、焼土混りの層中から、少数の土器と石器片が出土している。9号からも、土・石器片が、10号では底部からペニガラと共に完形土器(2)、小刀(1)、石鏃(3)が出土している。12号は、土器片、石鏃(1)、ナイフ(1)と底部近くに獣骨片が見出されている。遺物がなかったのは、半掘の11号を除くと2号、8号、13号の3基である。

以上の縄文晩期末から続縄文期初頭の土壙墓を、各事項別にまとめながら、本遺跡例と比較すると以下の如くなる。

平面形に関しては、幌倉沼、大狩部などでは、(不整)円形と(不整)楕円形のもの相半ばしているが、東川町西6号北10番地1、氷川、白泉などでは、円形と楕円形の比率は1:3で、楕円形のものが多いようである。一方、本遺跡(T210遺跡)では、(不整)円形69基、(不整)楕円形45基で、その比率は3:2で、円形のものが多い。やや不確実であるが、同市S153遺跡でも、円形のもの89%を占め多いという傾向を指摘できる。結局、遺跡により差異があるが、全体の傾向としては、両者相半ばして存在するといえる。

規模は、本遺跡の分類(第4章第2節第1項参照)に従えば、幌倉沼、大狩部、氷川、白泉などでは、LLサイズの110cm以上の例が50~75%を占めており、S153遺跡を除くと、全体でLLサイズは54%、S、M、Lサイズは、各々11~18%で、1m以上の大きいものが多いようである。本遺跡では、LLサイズは17基(14%)で、一方MサイズとLサイズが各々44基(37%)、40基(34%)で、70~90cm台のものが多いようである。S153遺跡でも、Mサイズが43%を占め一番多く、LLサイズが29%でこれにつづいている。

土壙の深さについては、掘り込み面が確認されていない例がほとんどであるが、参考までに触れると、幌倉沼などでは10cm台のものが29例、10cm以下のものが5例で、全体に浅いものが多いようであるが、ほかの遺跡では20~30cm台が一番多く、それに40~80cm台のものにつづいているようである。90~100cm以上のものは、全体の8%で、あまり数は多くはない。本遺跡でも、10cm台30%(35基)、20~30cm台55%(65基)、40~70cm台15%(18基)で20~30cm台が一番多く、上述の結果とはほぼ同傾向を示している。

配石に関しては、幌倉沼遺跡で数多く認められた。1~3個の配石のあるもの7基、4個以上のもの36基で、内SE1、2、8、11、NW2、SW14(内1基)、20号の7基では、16~67個の配石が、壙内一面にあるものである。配石のないものは、わずか4基であった。そのレベルは、すべて壙底部から壙口部にかけてであるが、土壙が浅いので壙底部にあるとみていいかと思う。

東川町西6号北10番地1では、1、9号で2個、4、5号で4個、6、10号で各々5、6個礫が出土している。レベルは、1号は底部に接して、5号は浅いもので壙底部から壙口まで及んで認められる。あとは、内部であるが詳細は不明である。

柏木川遺跡では、報告された限りでは、PIT30、45、50、134などで、配石が認められている。PIT30では、壙底部に大きな板状石、壙中央部に3個の円礫がある。45では、15個以上の礫が壙中央にある。50は、浅いもので壙底部から壙口部にかけて6個の大小の配石がある。134は、壙底部にやや大きい円礫が1個(報告者は枕石といっている)ある。

白泉遺跡では、6号と9号の壙口～壙外にかけて各々25、8個の石がある。本遺跡で認められた石組と同様の性格をもったものかもしれない。また、7号と10号の壙口部にも、セクションで見るとやや盛り上がったような状態で、小砂利層が認められている。この7号の小砂利層と同じレベルには焼土混りの層がつづいていた。同様な小砂利層は、大洞C₂式期の上磯郡木古内町札苅遺跡（野村・森田ほか1976）で、60基の内30基で上部構造として砂利ブロックが認められている。

氷川遺跡では、7、10、12号の3基で、1～2個の礫が出土しているが、12号の2個は底部である。13号では、底面に大形礫1個、壙中部に中形礫が3個ある。また、1号で壙口部から不規則に多くの礫が出土している。

ママチ遺跡でも、付表で見ると8基において、1～2個の石が出土しているようであるが詳細は明らかではない。

なお、S 153遺跡では、1～3個の配石があるもの23基(25%)、4個以上あるものは14基(15%)である。また、鳩山第3地点でも、拳大の石数個が不規則に出土している。

本遺跡においては、壙底部に1～3個の石があるもの36基、4個以上あるもの32基で、119基中57%に石があることになる。ただ、1～3個のものに関しては、混入ないしは、高橋（高橋編1971）のいう如く「枕石」的な性格をもっている可能性もあり、4個以上のものとは別な取扱いをせねばならないが、それにしてもかなりのパーセンテージで石が認められることになる。この傾向は、幌倉沼遺跡のそれと類似している。また、本遺跡では、「石組」と称した石の集積が、壙口～壙外、壙外あるいは単独で21基認められた。これと同様なもので、明確なものは少ないが、白泉、大狩部、丸谷遺跡などでやや似たあり方をするものがある。大狩部のもので、遺構と関係なくある例には、焼土を伴っている。なお、石組と同様な性格をもったものは、大洞C₂～A式期の虻田郡虻田町高砂遺跡（峰山1966, 1967）、磯谷郡蘭越郡蘭越町港大照寺遺跡（竹田1970）、勇払郡鶴川町花岡遺跡（大場・扇谷1964）、余市郡余市町大川遺跡（名取・峰山1961）、沙流郡門別町トニカ遺跡（扇谷1961, 1963, 1965）で比較的多く認められる。また、柏木川PIT 30で出土した大きな板状石も、上記の遺跡の内て幾つかあり、縄文後期に特徴的に認められた配石遺構とのつながりを強く感じされる。重松（1972）が述べている如く、縄文晩期末から統縄文期初頭の時期は、配石は全体に少ない傾向にあるが、幌倉沼遺跡とか本遺跡の如く、根強く残り、また配石のあり方が変わってきていることには注意せねばならない。

なお、後述する通り壙内における配石のレベルに、土器片が多数散布される例が、本遺跡とか幌倉沼遺跡で認められる。

また、本遺跡では、配石が焼けた例が多く認められたが、同様な例はS 153遺跡でもあり、さらに柏木川PIT 30では壙内にある石とか土器片が、鳩山第3地点では土・石器片とか壙底部が焼けていたといわれる。また、本遺跡も含めて、焼けた黒曜石製の石器とか剥片が壙内から出土した例は他にも数多くあり、焼石とか多量の焼土、木炭の出土とも関連して、葬送儀礼において火に対する意識がかなり強くあったことは察知できるかもしれない。

大形の河原石から作られた石器を配石に転用した例は、S 153遺跡でも明らかに数多く認められ

るが、他の遺跡に関しては、報告書を読む限りでは明確なものはない。

さて、本遺跡では焼土が30例認められた。この内、土壌に関連してあったのは、17基19例、石組と関連してあったのは3基3例で、あとは単独にみつかったものであるが、いずれもX、Y配石群の中にある。土壌例の、そのレベルは、壙口～壙外ないしは壙口部にあるものが10例、壙内壙央部にあるものは7例である。

ほかの遺跡では、幌倉沼SW9号の壙外に3カ所、SE2号の覆土中、ママチ遺跡B-17区の剥片の集積付近に1カ所、大狩部で4カ所（内2個配石あり）、白泉6号、7号（混土層）とBトレンチ4、5号ピットの間にある。また、S153遺跡では、第199号（壙口）と第702号（壙央）などにあり、あと時代は不明であるが土壌内外からかなりの焼土がみつまっている。

なお、この焼土は、本遺跡例では前述した通り焼土のみの場合と土壌中に若干混じっているものがあるが、いずれも木炭などはないか、あっても少量しか含まれていない。

木炭は報告の限りでは、鳩山第3地点（底部）、東川町西6号北10番地1、12号（ベニガラと共に）、大狩部1号、白泉3号（壙口～壙央にかけて）、同4号、6号（獣骨と共に焼土中）、ママチPit15、丸谷3号などにある。

本遺跡でも、第4、20、25、26、44、45、53、56、60、95、104、133、160、178号などで検出されているが、第53号の3層と第95号の壙底部の3"層からは、多量の炭と共に黒耀石の小チップ（削片）が多量に出土した。

ベニガラは、柏木川PIT30（壙底面のやや上）、鳩山第3地点（底部）、幌倉沼SE2号（配石直上、壙口部）、東川西6号北10番地1の12号（木炭と共に）、大狩部3、5、6、7、14号（3、6号は底部）、氷川遺跡で11例、白泉5号（壙口）、同10号（壙底）、そして幣舞遺跡などでもみつまっている。幌倉沼では、その出現率は2%（ $\frac{1}{50}$ 基）、大狩部では36%（ $\frac{9}{25}$ 基）、氷川では73%（ $\frac{8}{11}$ 基）、白泉15%（ $\frac{3}{20}$ 基）で、氷川遺跡を除いては、あまり高い比率では検出されていない。本遺跡では、「赤色土」という言葉で述べたものが、いわゆる「ベニガラ」に相当すると思われるが、5基の土壌（第10、24、41、104、149号）でみつまっているが、この内第149号は壙央部にある焼土（B-25）中から少量検出されただけのものである。レベルは、壙口～壙外および壙外2例（第24、41号）、壙底部2例（第10、104号）であった。土壌全体での比率は、4%（ $\frac{2}{50}$ 基、C型も含めて）で低いものである。また、土器に漆丹が塗られた例とか黒耀石の棒状原石とか剥片に赤色土が付着したものが幾つか検出されていることは前述した通りである。S153遺跡では、469基みつかった土壌中から、1例も赤色土が検出されていないが、朱塗の土器片は、第76号ピットなどで出土している。さらに、ママチ遺跡でもD-22区の石斧の集積中出土の剥片の中にベニガラが付着しているものがあつた。

小ピットに関しては、不明確なものが多いが、ママチ遺跡では、報告された限りPit21（2本）、71（1本）、83（1本）が壁に各々あり、Pit83では底部に張り出しが2カ所あるようであるが、報告では明確ではない。氷川遺跡では、14号の壙内に1本（SW側）、1号（NW）、9号（N）、10号（NE）、12号（NW）では壁よりに各々1本、6、15号では、壁に1本、13号では壁（E）と壁より（NW）に各1本ある。方向としては、北西（NW）にあるものが一番多く、あとは北東（N

E), 東 (E), 北 (N) などである。白泉遺跡では, 2号で壙内北側に1本, 3号壙外に取り囲むように10本, 6号でも不明確ながら底部に大きいピットが穿たれている。さらに, 丸谷遺跡3号の北北西壙外に2本長径50cm程のやや大きいピットがある。なお, 同遺跡4号は, 5号の南南西に1m余離れて存在するが, それ自身墓でなく, 土壙墓に関係した小ピットかもしれない。

これらの小ピットは, 丸谷遺跡のやや大きい例を除いては, すべて10~20cm程の径の小さいもので, その時代性とか共伴関係は不明であるが, その部位は南にあるものではなく, 北西~北東で, 北側の壁際ないし壁に集中している。

本遺跡では, 21基の土壙と1基の石組で38本穿れている。詳細は, 本節第1項に詳述した通りであるが, 本遺跡の小ピットには, 径30cm以上の大きい例と径20cm以下の小さなものがある。丸谷遺跡の例は, その方向と大きさからこの内, 大形の例と同性格の可能性もある。また, その時期は明確ではないが, 新冠郡新冠町緑丘遺跡(藤本・愛下1963)で, 大きさ150×130cmの1号ピットとその南側に接して径30cm程の4号ピットがみつかり, 4号ピットに関しては, 報告者は「その直径から考えて墓壙ではない」と述べている。この4号ピットは壙内より炭化したクルミが数個発見されている点からも, 1号ピットに付属する小ピットの可能性が高く, しかもそれがいわゆる供献用のものであることも考えられよう。この種のやや大きい付属ピットに関しては, その方向が北ないし南である点も含めて, 今後注意する必要がある。

径の小さなものに関しては, 今回の調査では, 切合いとか土壙内容物の検討を通じての土壙との同時性の追求が明確でなかったため, 本遺跡では前に列挙した遺跡のように, その部位とか方向には特にまとまる傾向は認められない。

なお, 今まで述べてきた遺跡では認められなかったが, 大洞C₂~A式期頃の遺跡では, 壙底部に溝がある例が幾つかある。すなわち, 花岡遺跡5, 6号(大場・扇谷1964), 札苺遺跡45, 65号土壙墓(野村・森田ほか1976)などで, 長さ39~90cm, 幅10~20cm, 深さ10~30cmの溝が, 壙底面のどちらかの壁にそって, 暖やかな傾斜で掘られている。札苺遺跡の報告者は, この溝に対して, 「有機質の副葬品(衣類・食糧など)が入れられたものかも知れない」と述べているが, 根拠は明確にされていない。

この問題に関連して, 土壙内から貝殻とか獣骨片が見つかる例がまま認められる。これは, 供献用の食糧であったのかもしれない。貝殻が出土したのは, 釧路市緑ヶ丘遺跡, S153遺跡第171号ピット, 獣骨は緑ヶ丘遺跡, ママチ遺跡(Pit15ほか10基), 白泉4号, 6号(焼土中), 12号(底部), 鳩山第3地点(底部)などである。

なお, この小ピットとか, 貝殻・獣骨の問題に関しては, 重松(1972)が各時代にわたって詳述しているので, それを参照して頂ければと思う。

次に, 遺物の問題に移るが, 土壙内から, 完形ないし半完形土器(底部位片も含む)あるいは多くの土器片が敷きつめられたような状態で出土したものには, 柏木川PIT30(30個体), 45(6個体), 幣舞(舟形土器), 鳩山第3地点(壙口:土器片多数, 底:舟形土器), 幌倉沼12基(内, 敷いたような状態にあったものは, SE2, NW1, 6, 15, SW5, 7, 9号で, ほかに25基で土

器片が比較的多く出土している)、ママチ7基(Pit 13, 15, 21, 83ほか)、S 153第97, 101, 716号(多くの破片)、第158号(2個体に復元)、大狩部6号(壙口:伏せて2個体)、3号(土器片47)、14号(底部位片)、氷川6号(壙口:小形壺形土器、壙底:深鉢形土器2個体)、12号(壙口:4個体)、7号(壺形土器)、無頭川1号(壙中央:倒立位の壺形土器を破損した深鉢形土器)などがある。そのあり方としては、壙口部と壙底部のどちらかか、両者あるいは配石中から出土しているが、いずれも結果的に復元できた如何にかかわらず、すべて破片で、散布されたような状態で出土している。完形に復元されたものに関しては、意識的に毀され副葬されたものであろう。しかし、このように数多くの土器片が出土したピットの出現率は、幌倉沼では24%(12/50基)、ママチで10%(7/68基)、大狩部29%(4/14基)、氷川で20%(3/15基)で、10~30%で極めて少ないものである。

本遺跡でも、壙口部から1例(第113号)、壙底部ないしは配石中とかその直上から11例、多くの土器片の出土をみている。全体の10%(12/119基)に当る。

石器は、幌倉沼では40%(20/50基)、東川町西6号北10番地1では25%(3/12基)、ママチでは46%(31/68基)、大狩部では36%(5/14基)、氷川では60%(9/15基)の比率でみつかり、氷川遺跡例を除いては、25~46%で約1/3の土壌では石器が出土していることになる。その内まとまって数多くの石器を出土したのは、鳩山第3地点、東川町西6号北10番地1の12号、ママチPit 82, 83、大狩部6号、9号などである。あとは、非常に器種に乏しく、また量も少ない。器種には、石鏃、石槍、石錐、搔器、削器・剥片石器・スクレイパー、フレイク・コア、石斧、砥石類(含軽石石器、有溝砥石)、敲石、琥珀玉、勾玉、貝製小玉と剥片・削片などである。この内、玉類を除くとスクレイパーとか削器、剥片石器といわれるものが一番多く、次に石鏃がくる。あと比較的多いものは石斧、軽石石器とか砥石類である。

本遺跡においても、同様の傾向を示していて、全体の比率は、34%(40/119基)である。

なお、本遺跡では、数多くの土器片とか石器など副葬品と思われる遺物が出土したのは、合せて56基で、全体の47%(56/119基)で半数近くには、少ないながら副葬品があるようであるが、他の遺跡でも、幌倉沼で48%(24/50基)、ママチでは63%(43/68基)、大狩部では50%(7/14基)、氷川では60%(9/15基)で、ほぼ50~60%のものに副葬品があるようである。ただ、その副葬品の内容とか量的なものは、遺跡毎、土壌毎で大きな差があるが、全体に薄葬であるという傾向は指摘できよう。この副葬品のあり方は、本項で扱った時代の次にくる恵山式期(高橋・内山・土田ほか1976)~後北B式の厚葬の傾向に比べてきわだった違いであろう。

なお、本項で扱った時代も、縄文後期から続縄文期全般の土壌の変遷史の流れの一部をなすもので、本来これらの幅広い時期を通観し、その中で縄文晩期末から続縄文期初頭の問題を位置づけるべきであったが、力量不足と時間の関係で、全く果せず中途半端で未整理のまま終らねばならない。実際、多くの紙面を使いながら、考えていたことの何10分の1も果せなかったことに対して、深く御詫びすると同時に、本報告書で一端を学んだことを出発点にして、今後も学習していきたいと思っている。

(上野 秀一)

第4節 炭焼窯址

本遺跡の営まれた台地の南端部、すなわちXIV-K~J区には、炭焼窯址が2基、隣接してのこされていた。南側のものを第1号炭焼窯址、北側のそれを第2号炭焼窯址と呼称し（第2図）、以下にそれぞれの概略を説明することにした。

第1号炭焼窯址（第48図、図版62、63）

第1号炭焼窯址は、窯そのものと、前庭部に掘り込まれたいくつかの付属施設とから構成されている。

窯は、ほぼ2.5×2.1mの方形に掘り込まれた炭化室を中心に、北西部に突出した幅35cm、奥ゆき30cm程の煙道と、相対する南東部につくられた幅80cm弱の窯口とから成っている。

炭化室の壁の掘り込みは、ほぼ垂直で、底はほぼ水平な平坦面につくられている。壁、床ともに堅くしっかりしており、焼けて赤化した部分が多い。方形を呈する底面の四隅には、それぞれ浅く窪んだ四角な柱址がのこされ、窯口の両脇にも、ほぼ丸い柱址が浅くのこされている。煙道と窯口とを結ぶ底面の中心線上には、幅20~30cm、深さ10数cmの排水溝が掘られている。この排水溝は、窯口を出て前庭部の付属施設に連結し、さらに台地の末端へと伸びている。これとは別に、煙道の突出する北西壁沿いの底面には、ちょうど北隅の四角な柱址と西隅のそれとを結ぶように、やや浅めの溝が掘られている。これは、中心線上の排水溝に連絡する支流とでも称すべきものであろうか。

図版63A、Bにみられるように、排煙口から煙道へと続く煙出しの施設も、極めて良好に遺存していた。排煙口は、排水溝の両側にそれぞれ立てられた高さ14cm、奥ゆき20cm、厚さ4cm弱の荒割りされた板（断面図に縦線をひいて示したものがその一部である）に、同様の板を天板としてのせ、簡単に釘付けした“冂”形のものである。板は、いずれも乾溜されてかなり炭化しており、さらに一面にタールに浸潤されていた。天板の上には、30×15×20cm程の石（札幌市内石山からきりだされた熔結凝灰岩）がのせられ、煙道と炭化室とを仕切る窯壁の下部をなしている。排煙口の内外や窯壁下部、煙道の内面には、一面にタールが厚く付着していた（平面図では黒く塗りつぶしてタールの付着を示し、断面図では、斜線をひいて煙道に付着したタールを示した）。

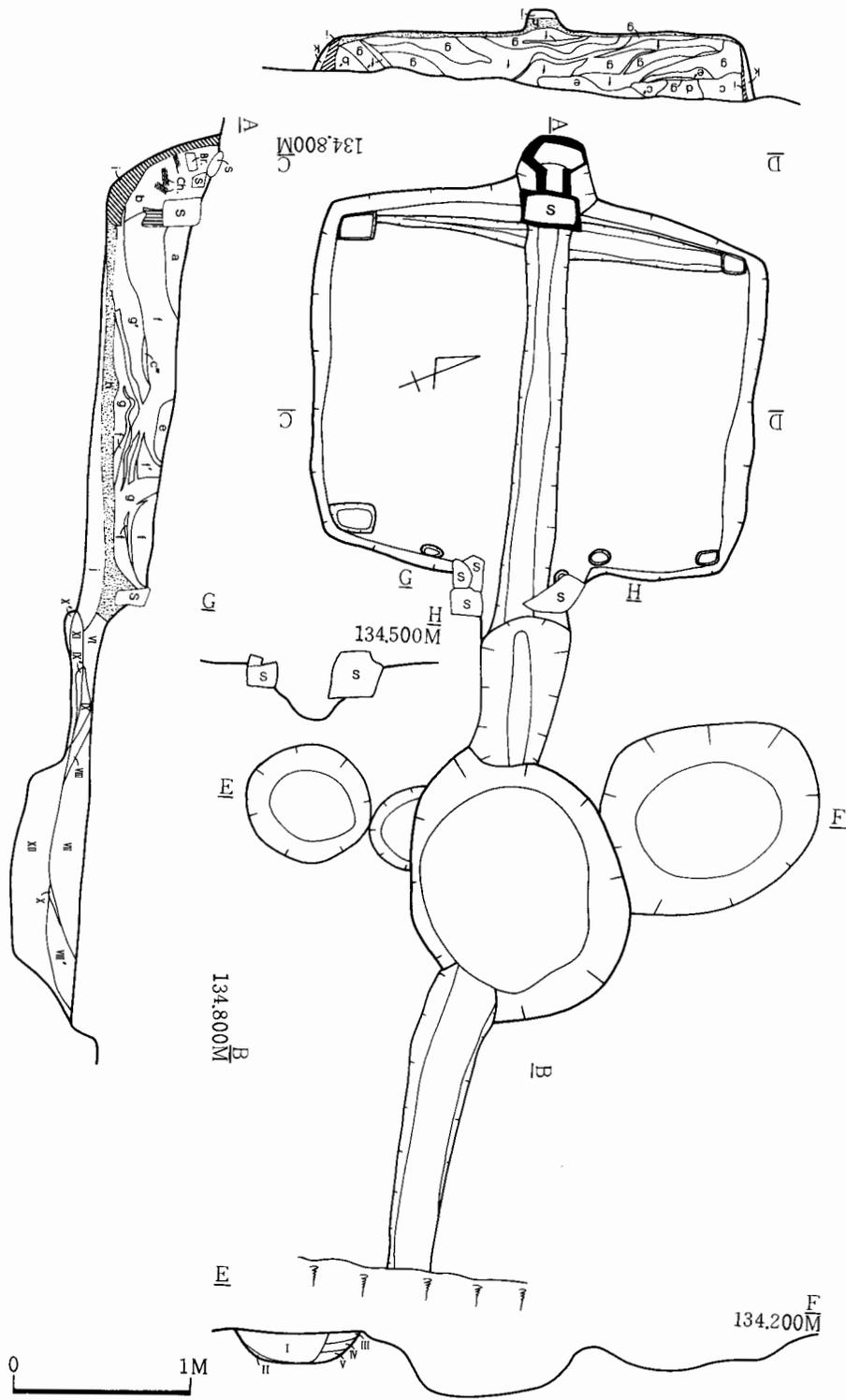
窯口は、平面図やG-H断面図に示す如く、幅80cm弱に炭化室の底面とほぼ同じ深さの突出部をつくり、その両側に石を配したものである。石は、やはり石山からきりだされた熔結凝灰岩で、加熱されて脆くなり、ひび割れたりしていた。

ところで、以上に説明した窯の本体部分は、以下の各層に覆われていた。

a層：暗茶褐色土層。炭粒を若干含む。

b層：茶褐色土層。煙道に充填されていたやわらかな土で、多量の炭粒が含まれているほか、礫（S）やレンガ（Br.）、乾溜され炭化し、さらにタールに浸潤された板切れ（ch.）などを点在させていた。

b'層：炭と焼土とを若干含む灰茶色土層。やわらかく、しまりが無い。



第 48 图 第 1 号炭烧窯址実測图

c層：ブロック状にかたまった黒色の土層。

c'層：C層と同様だが、焼土の点在がみられる。

d層：焼土や粘土粒を含む灰茶褐色土層。

e層：白灰褐色粘土層。一部には、焼土が点在。

e'層：灰褐色粘土層。

f層：灰褐色粘土を主体とする層であるが、e, e'層よりも一層火熱の影響を受けたと思われるもので、塊状にかたまる傾向がみられる。炭粒や焼土などの混入物や色調などの差によって、さらにいくつかに分層することも可能である。

f'層：火熱を受けつつも、炭や焼土を混入しない白灰褐色の粘土層。

g層：赤褐色を呈する焼土層。これも、混入物や色調などの差によって、いくつかに分層することも可能である。

g'層：g層とはほぼ同様だが、かなり灰褐色がちな焼土層。

g・g'層は、窯の天井をつくっていた土であったろうと思われる。

h層：木炭の微粉を主体とする炭層。底面に直接にのる層で、いわば炭焼きの残滓である。

i層：厚く付着したタール。

j層：排水溝を埋めていた黒褐色土層で、炭が含まれている。

k層：周壁が焼けて暗赤灰褐色を呈する部分である。

さて、前庭部に掘り込まれた付属施設については、必ずしもその構築意図は明らかではないが、いずれも炭焼きと直接に関連するものであったことは、間違いなからう。

E-Fセクションラインの南端部に位置する70×65 cm程の丸い掘り込みは、木炭の細粒がぎっしりと詰まった特色あるもので、壁や床は焼けて赤変し、かたくしっかりしている。これは、窯から外へ出されたばかりの木炭が何らかの処理を受ける場所であったのかも知れない。この掘り込みに充填されていた層は、以下の通りである。

I層：木炭の細粒がぎっしり詰まった炭層。若干の黒褐色土が入り込んでいる。

II層：若干の黒褐色土と木炭粒とを含む暗灰色の灰層。I, II層は、次のIII～V層より新しい堆積と考えられる。

III層：暗黒褐色土層。木炭と焼土とが混在している。

IV層：明黄赤褐色灰層。

V層：暗灰色を呈する灰層で、II層よりも木炭の含有が多い。

窯口に続く80×40 cm程の掘り込みは、あるいは製炭の初期に仮設されるという点火室であったかも知れない。この部分に、通風のための特別な設備があったか否かは判らなかつた。これと次に続く160×120 cm程の楕円形の掘り込みとは、排水溝の一部をなしている。排水溝それ自体は、煙道から水を注いで炭焼きの際の火力調整を図るものであろうとする意見が筆者のまわりでは強いが、確実ではない。両者の掘り込みを埋めていた層は、以下の通りである。

VI層：炭と灰を含む茶褐色土層。

Ⅶ層：比較的多くの炭を含む暗茶褐色土層。

Ⅷ層：炭含みの暗茶褐色土層。

Ⅷ'層：Ⅷ層とほぼ同様だが、色調がやや明るい。

Ⅸ層：暗黄褐色粘土層。

Ⅸ'層：炭を含む暗黄褐色粘土層。

X層：木炭の微粉を主体とする炭層。

X'層：X層とほぼ同一の炭層。

XI層：白黄色粘土層。これは、意図的に貼ったものかも知れない。

XII層：白黄色の粘土粒を点在させた茶褐色土層で、若干の炭を含む。

このほかの2個の掘り込みについては、その構築意図は全く不明である。これらには、主に焼土のブロックを点在させた、炭を含む暗茶褐色土層が詰まっていた。

第2号炭焼窯址（第49図、図版61A、B、63C）

第1号炭焼窯址の北側に隣接して見出された第2号炭焼窯址は、やはり前庭部に付属施設をもつもので、窯の形態や構造も、第1号と殆んど変るところがない。

窯は、やはりほぼ2.5×2.1mの方形の炭化室を中心に、北東壁に突出する幅20数cm、奥ゆき30cm程の煙道と、南西部に相対してつくられた窯口とから成っている。

ほぼ垂直に掘り込まれた側壁や、ほぼ水平な平坦面をなす炭化室の底は、堅くしっかりしており、焼けて赤化した所が多い。底面の三隅には、浅く窪んだ柱址がのこされているが、柱址のみられない北隅にも、恐らくは柱が立てられていたと思われる。煙道と窯口とを結ぶ中心線上には、やはり幅20～30cm、深さ10数cmの排水溝が掘られており、窯の外へと続いている。

断面図に縦線をひいて示した炭化室と煙道とを仕切る窯壁は、粘土によってつくられていた。この部分の粘土は、ちょうど第1号の排煙口をかたちづくっていた木材と同様に、すっかりタールに浸潤されていた。

窯口は、やはり幅80cm強の大きさにつくられており、G-H断面図に示す如く、その両側には、石を抜きとった跡が歴然とみられる。

窯の本体を埋めていたのは、以下の各層である。

a層：焼土や炭の細粒を点在させた暗茶褐色土層。

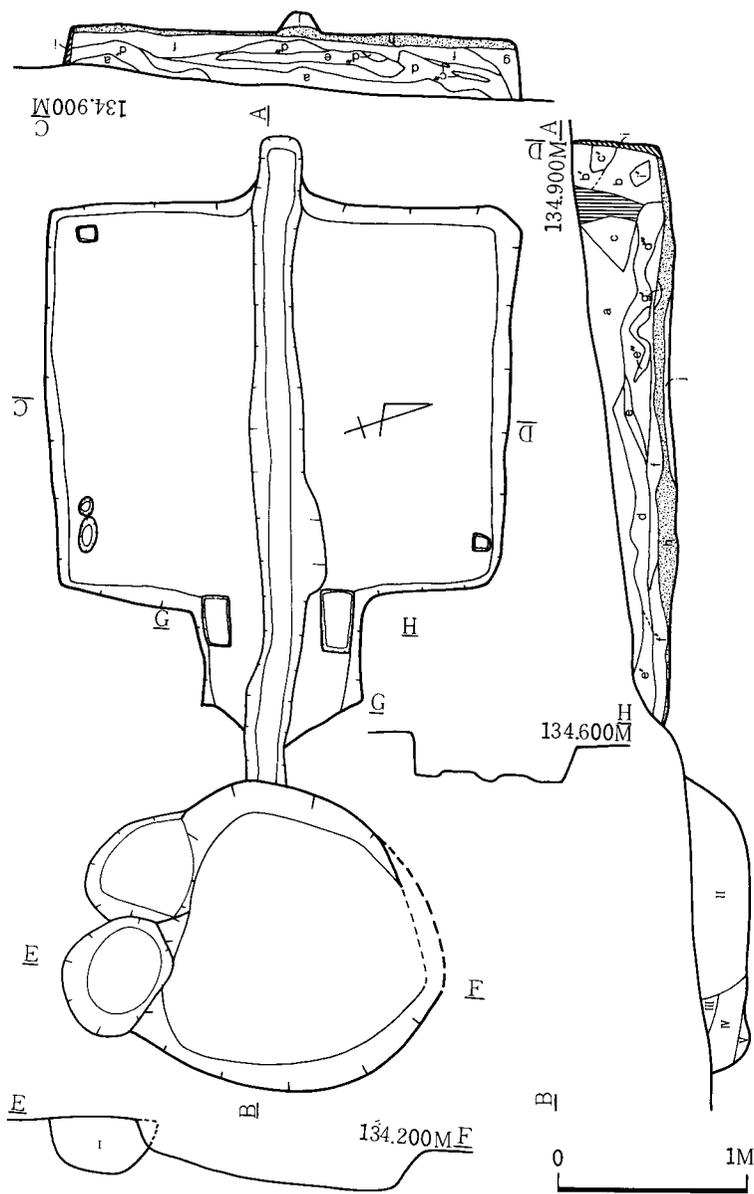
b・b'層：煙道を埋めていた明茶褐色の土でボソボソとやわらかい。上の方は草の根が多く入り込んだ土で（b）、下は火山灰の含有多い明茶褐色土で、色調がやや白っぽい（b'）。

c層：すっかりタールに浸潤された粘土が崩落したもので、真黒なかない塊。

c'層：タールに浸潤された粘土の小塊と、明茶褐色土とが混合したもの。

c''層：タールに浸潤された粘土の小塊と、焼土とが混合したもので、黒味がちな暗赤褐色を呈する。

d・d'・d''層：焼けて赤化した粘土で、小塊状をなしている。これは、窯の天井が崩落したものかと思われる。いずれも、やや薄汚れた明赤褐色を呈するが、dからd''層の順に色調が暗く



第 49 图 第 2 号炭烧窠址实测图

なる。

e・e'・e"層：焼けて赤化した粘土と、暗茶褐色土とが混合したもので、灰と若干の炭粒が含まれている。e層は他よりも灰の含有が多く、小塊状をなし、e'層は暗茶褐色土の含有が他よりやや少なく赤味がちの色調を呈する。e"層は、焼けて赤化した粘土と、暗茶褐色土とが半々くらいの割合で混合したものである。

f層：暗灰色の灰と炭の微粉とが混合したもの。

f'層：f層とはほぼ同様だが、やや赤褐色味つよく、暗灰赤褐色を呈する。

g層：白灰褐色の灰層。

g'層：多量の灰が混入した赤灰褐色の焼土。

h層：微細な炭粒がぎっしり詰まった炭層。やはり底面に直接のるもので、炭焼きの残滓である。

i層：周壁に厚く付着したタールや、それが崩れ落ちたタールの塊。

j層：排水溝を埋めていた焼けて赤化した粘土層で、最下部には炭層が薄くつづいている。

さて、前庭部に掘り込まれた付属施設の用途については、やはり不明の点が多い。E-Fセクションラインの南端部に位置する65×55cm程の丸い掘り込みには、ぎっしりと木炭の細粒が詰まっていた。すなわち、I層は、所々に少量の焼土ブロックを点在させた炭層で、若干の黒褐色土の混入がみられるものである。これは、第1号炭焼窯址に付属していたのと同様の掘り込みほどには、壁や床がかたく焼けかたまつたものではないが、やはり壁の一部には、熱による赤化が認められる。

この掘り込みの西に隣接する、ほぼ同規模の掘り込みは、焼土のブロックを点在させた、炭を含む暗茶褐色土に充填されていたが、その構築意図は不明のままである。

排水溝によって窯口と連結する径1.6m程の丸い掘り込みには、以下の各層が残されていた。

II層：木炭の細粒や若干の灰を含む、やや白っぽい色調の暗茶褐色土層。

III層：少量の木炭を含む、微細な暗黄褐色の粘質土層。

IV層：II層と同様だが、II層よりもさらに多くの灰を含有し、白味がちな茶褐色土層。

V層：III層と同様だが、殆ど木炭を含有しない、明るい黄褐色の微細な粘質土層。

筆者は、S 253遺跡においても炭焼窯址を1基調査したが、その際は炭焼窯であることになかなか気付かず、不用意に調査をすすめたこともあって、炭焼窯の構造を十分明らかにすることができなかった(高橋 1975)。幸い、今回は遺存状態の極めて良好な2基の炭焼窯址が見出され、前年度の欠陥をある程度補うことが可能となった。

S 253遺跡に見出されたものも、本遺跡の2基も、形態的にはともに角窯と呼ばれるものに属すると思われる。ただ、S 253遺跡のそれは、煙道が3つも付属した非常に規模の大きな変則的な窯であったが、本遺跡の2基は、恐らくは規模の上でも、構造的にも、角窯と呼ばれるものの典型とみなしうるものではなかろうか。

本遺跡の第1・2号炭焼窯址は、ともに台地の末端部分の緩斜面を利用して構築されており、斜

面の高い方には煙道を設け、窯口は、低い方につくられている。これは、排水のためでもあり、煙道と窯口とを結ぶ中心軸の方位と風向きとの関係も、十分考慮された結果と思われる。

考古学的な発掘調査によって知られる窯の構造や、前庭部の付属施設については、既に説明したが、遺憾ながら今回も、徹底的な聞き込み調査や関係文献の渉獵に充てる時間に乏しく、窯の上屋構造や排水溝の役割、さらには窯口や前庭部においてなされたであろう作業の実態について、明解な説明を下すことができない。これらの諸点については、今後も機会あるごとに炭焼窯について調べ、明らかにしてゆきたい。

最後に、本遺跡の2基の炭焼窯の構築年代について触れておきたい。開拓3代目にあたる現在40才代の地元の人の話では、父親の代（開拓2代目）に炭焼きが行なわれた記憶はないという。先の報告書に引用したように、北海道において角窯の使用が一般的であったのは、そう新しいことではない。発掘調査によって知られた事実のうち、年代の解明に有効な資料は、石山からきりだされた熔結凝灰岩の存在である。この石材が、公官庁の建築だけでなく、広く一般に普及した年代の把握こそ、この2基の炭焼窯の営まれた時代を知る近道ではあるまいか。また、第1号炭焼窯址と第2号炭焼窯址との新旧関係を敢えて論ずるならば、第2号の窯口の石を再利用して第1号の窯口に据えたと推測し、第1号を若干新しく考えることも不可能ではないかも知れない。

（高橋 和樹）

第5章 遺物

本遺跡からは、縄文早～前期初頭、中期および縄文晩期終末から続縄文期最初頭の土器、石器、土製品などの遺物が、遺構内外から数多く出土している。発掘区における遺物の出土状態および分布に関しては、第3章第2節で詳述した通りであるが、この分布のあり方は、土壌の分布の密度と一致している。また、遺構内出土の遺物の出土レベルとか出土状態については、第4章第1節の表中、同章第2節で触れている。

なお、本章においては、図にして掲げた遺構内および発掘区出土の遺物のすべてについて、個々に詳述しているが、縄文晩期末から続縄文期（第Ⅲ、Ⅳ群）の土器片に関しては、資料数が膨大なため、その代表的なものの記載に留めている。また、土器群に関しては、時代毎に記載を進めたが、石器群に関しては、時代に関係なく器種毎に一括して取り扱っている。しかし、時代の判明する例に関しては、各項目（器種）毎に註記するように努めた。

第1節 土器群について

土器群は、以下に記す通り3期4群に分けられた。完形ないし半完形土器は、遺構内から13個体、発掘区出土の土器片は総数3,000余点を数える。しかし、縄文晩期末から続縄文期初頭の資料が、遺構数からみても判断されるように一番多い。

(1) 縄文早期～前期初頭（第Ⅰ群）

第Ⅰ群土器（第50～52図、図版44B、45A）

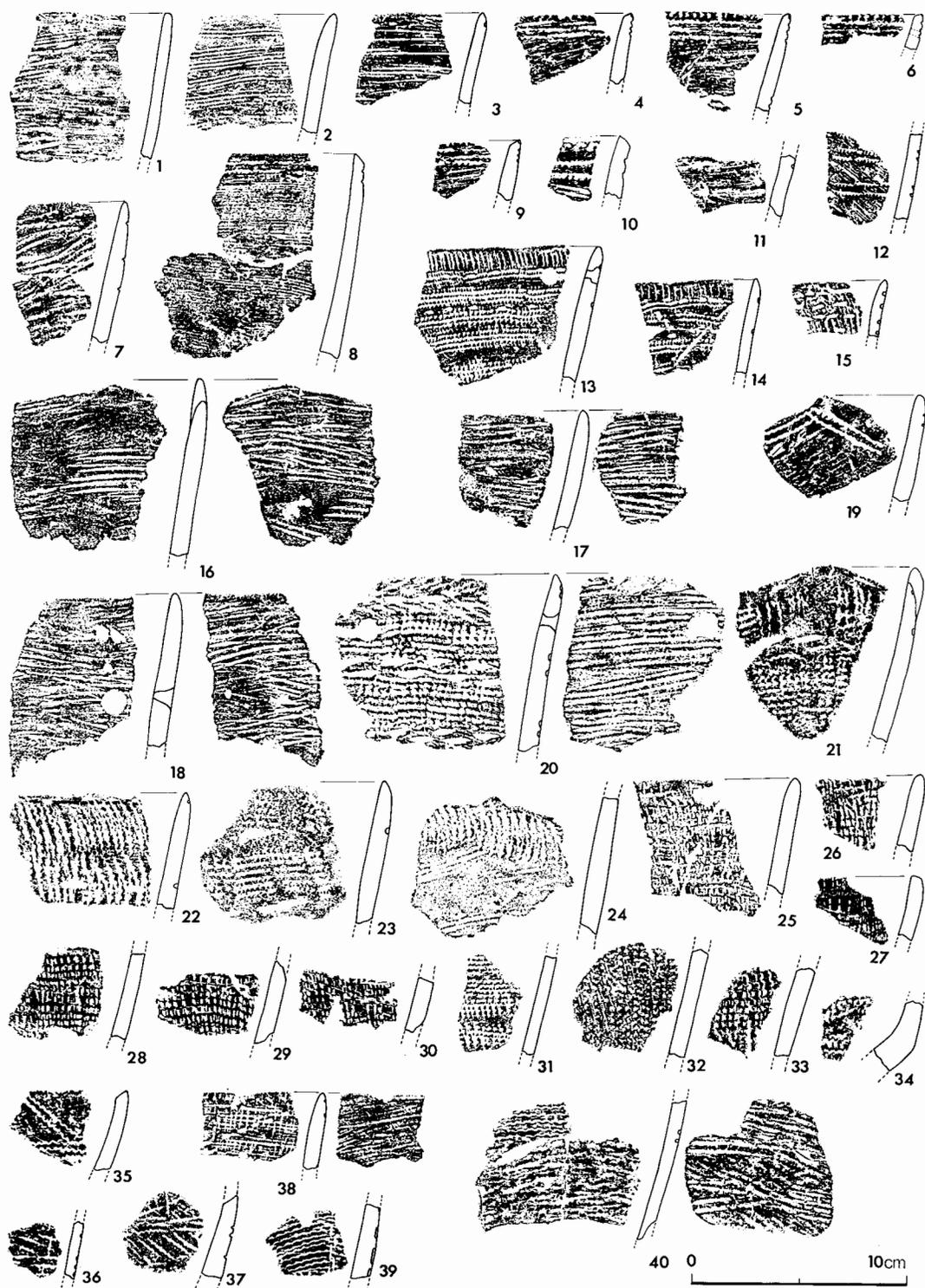
縄文早期～前期初頭に属する土器を第Ⅰ群とする。第Ⅰ群土器には、大別して、貝殻文に特徴づけられるグループと、いわゆる捺糸文土器のグループとの二者が認められる。

第Ⅰ類（第50・51図、図版44B）

第Ⅰ類は、いわゆる貝殻文土器のグループである。

色調は、暗黄褐色から暗赤褐色を呈するものが多く、焼成は良好で堅緻なものが多いが、いずれも吸湿性に富み、湿った状態では脆い。胎土には砂粒が含まれるが、肉眼観察の限りでは、繊維の含まれるものは見当らない。胎土に火山灰や軽石の細粒が少量含まれるものも存在し、これについては個々に触れるが、せいぜいがルーペによる観察のため、一部には見逃しや誤認があるかも知れない。

地文として、貝殻条痕文の施されたものが多いが、貝殻条痕文には、比較的細い条痕が整然と施されているものと、やや乱雑な印象を受けるための条痕との二種が認められる。前者は、殻頂近くの貝殻背面を器面にあてて施されたものであり、後者は、貝殻腹縁の縁辺部が利用されたものと思



第 50 图 发掘区出土土器拓影图 (1) (第 I 群第 1 类)

われる。

第1類は、それぞれの文様構成の差から、以下のa～mに細分して説明することにした。

a (第50図1, 2)

貝殻腹縁などによる条痕文のみが施された土器をaとする。

第50図1, 2は、ともに体側が単純に直伸する形態のもので、1の口唇部は丸味がちな平坦面に、2のそれは先細りにつくられている。やや薄手な1には、横走する浅い条痕がみられ、2には、数条が単位となった条痕文が横走している。色調は、ともに暗褐色から黒褐色を呈し、1の胎土には、少量の軽石が含まれている。

b (第50図3, 第27図14)

貝殻条痕文を地文とし、口縁部に刺突列の加えられた土器をbとする。

第50図3は、黒褐色を呈するもので、器形的には上述のaとほぼ同様であるが、口縁上部がやや内彎する傾向を有し、この部分に現存2個の刺突文が残されている。刺突文は、編棒のように先端がやや鋭い施文具の先を左に向け、押圧したものと思われる。

これとはやや趣を異にするが、第76号ピット出土の第27図14も一応この類に含めて説明しておきたい。これは、高さ12.8cm、推定口径11.5cm、底径5.8cm、器厚0.8cm程を測る小形の深鉢形土器である。現存する1/5周ほどの口縁の一部に高まりが認められることから、口縁形態は、全周で4～5ヶ所がやや高まる波状縁かと思われる。口唇部は平坦面につくられ、底は平底である。

器面には、幅約1.1cm程のやや不整な櫛歯状の工具による細く深い条痕文が、一面に横走し、裏面の一部にも貝殻条痕文であろうか、横走する浅い条痕が認められる。

口縁の内外には、波頂部を避けずに、長さ4～5mm、幅1～2mm刺突文がめぐっているが、摩耗や剥落のため判然としない部分も多い。この刺突文は、口唇上では左下りに、口縁外側では、やはり左下りのそれを口唇上の刺突列と交互に噛みあうような配置に施している。また、口縁内側では、ほぼ横位の刺突文を、上下に2～3段重ねている。なお、胎土には、少量の火山灰や軽石が含まれている。

c (第50図4～12, 第30図84)

横位に押捺された貝殻腹縁文に特徴づけられるものをcとする。

第50図4～6, 9は、いずれも内傾する平坦面に削られた口唇部を有する土器で、口縁外側には、貝殻腹縁を縦に押捺した短い刻みが並列し、口縁部には、一続きに施文された貝殻腹縁文が、口縁に平行に3列にめぐっている。5では、この文様帯の下2.5cm程の部位にも、同様の貝殻腹縁文が3列残されているが、上端に横位の貝殻腹縁文のみられる同図11も、この種の胴部片かと思われる。6の右端には、径3mm弱の貫通孔の左半分が残されているが、これは補修孔とは思われない。いずれも、器面には貝殻条痕文が、裏面には細く浅い整然たる調整痕が横走している。

同図8は、外傾する平坦面に削られた口唇部を有する土器で、一続きに施文された貝殻腹縁文が、口縁に平行に2列めぐっている。器面には貝殻条痕文が、裏面には浅い条痕が整然と横走している。内面および口唇部の調整は、かなり丁寧になされている。同図10も、外傾する口唇部を有する土器

で、口縁外側には、貝殻腹縁を横にひきずったものか、幅広の不整な浅い圧痕が残されている。その直下には、器面に垂直に押捺してから下方へとひきずって施した横位の貝殻腹縁文が2列みられる。器面には横走する貝殻条痕文が認められ、裏面は丁寧に調整されている。

同図7は、口唇部が丸く外傾して先細りを呈する土器で、口縁上部には、左下りぎみに押捺された貝殻腹縁文が、やや間隔をおいて並列している。その直下から、それぞれ単独に施された横位の貝殻腹縁文が、上下に間隔をおいて都合3段ほどみられる。器面には、貝殻条痕文がやや乱雑に斜走しており、裏面は比較的丁寧に調整されている。同図12は、貝殻腹縁文を横に連ねた文様のみられる胴部片である。貝殻腹縁文は、上下の2列ずつをひとつの単位として施している。器面には斜走する条痕文が認められ、裏面には横走する条痕文が部分的に残されている。

ところで、第29・32号ピット出土の第30図84は、やはり口唇部が丸く外傾して先細りを呈する土器で、口縁外側には、貝殻腹縁によるとと思われる左下りの幅広の圧痕が並列し、その直下には、ほぼ横走する条痕に重ねて、肋条の顕著ならざる小さな貝殻の腹縁を斜めにねかせて押捺したものであろうか、弧状の小さな圧痕が横に連なっている。やや異質な感もないわけではないが、これもこのうちに含めておきたい。

これらの土器にみられる横位の貝殻腹縁文には、名久井文明が青森県三戸町寺の沢遺跡出土の土器の横位の貝殻腹縁文に見出した、貝殻の縁辺の殻表面側を用い、必ず殻頂を下にして押圧するという規則性（名久井1974）が認められるようだ。

d（第50図13～15、第28図22、第35図29）

dは、口縁と平行にめぐる刺突列を、何段かにわたって施すものである。刺突文は、bのそれと同様に施文されたものである。

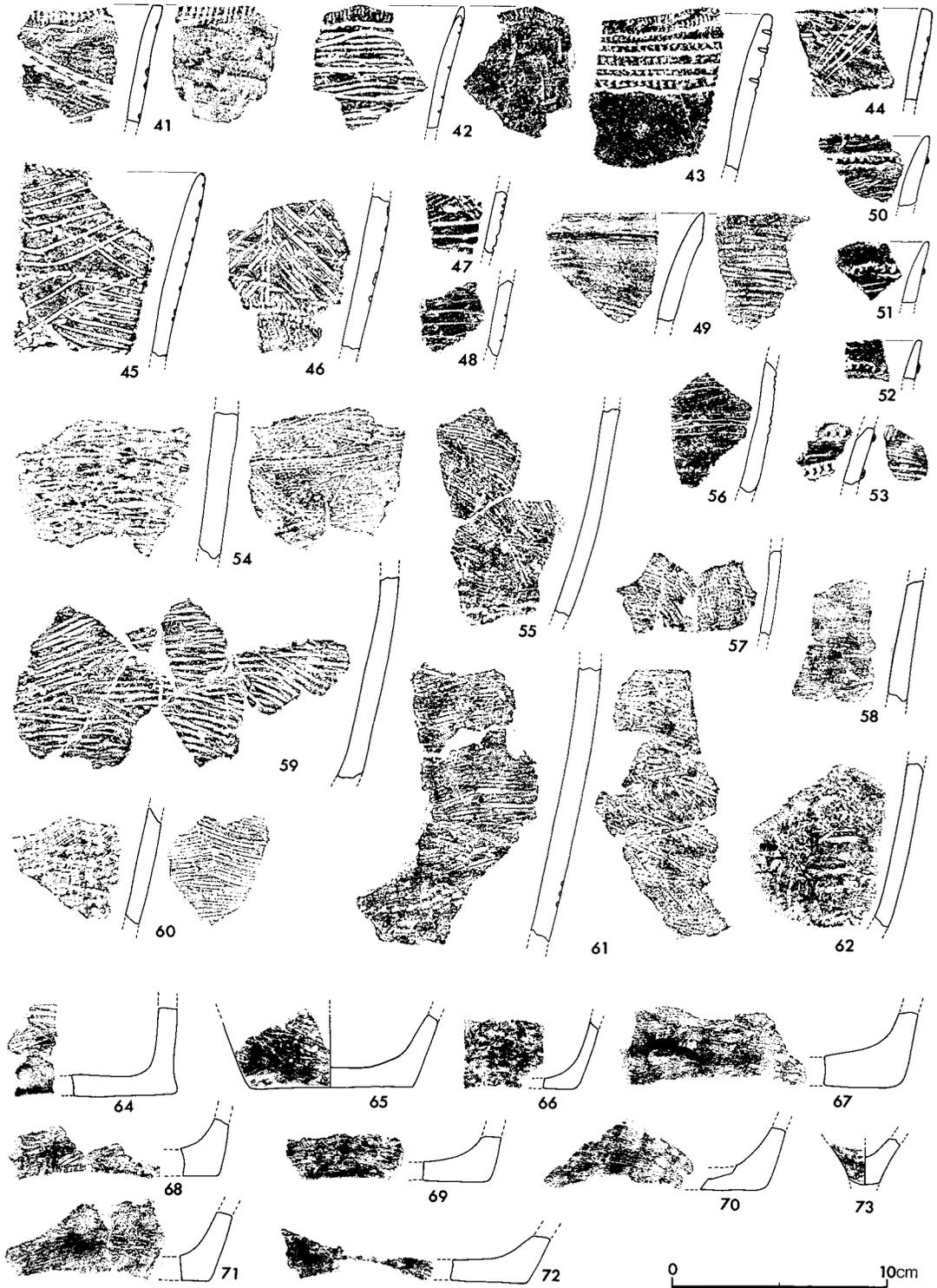
第50図13、14は、口唇部が丸く外傾して先細りを呈するもので、口縁外側には縦位の貝殻腹縁文が並列し、上下に1.5cm内外の間隔をおいて2段、刺突列が加えられている。地文は、貝殻をやや寝かせて連続的に押しながら引きずった、押し引き文（井上ほか1973）かと思われる。13に穿れている補修孔は、器壁の半ば過ぎほどのところで急激に径が縮小するもので、右側には、補修孔に連結する浅い横位の溝がつくりだされている。

同図15は、口縁上部がやや外彎ぎみを呈する土器で、口唇部は丸く先細りになっている。口縁外側には文様は刻まれず、現存部には刺突列が4段、ややぞんざいに配されている。地文は、縦位に施された貝殻腹縁文かと思われる。

以上の土器は、茶褐色から黒褐色を呈し、いずれも胎土には、軽石や火山灰が少量含まれている。

ところで、第135号ピット出土の第35図291は、第50図13、14と同様の地文に重ねて、現存1列の刺突列が横位に施されたものであるが、器面の摩耗がすすみ、その文様構成は必ずしも明瞭ではない。また、第9号ピット出土の第28図22も、押し引き文かと思われる地文の横走がみられる胴部片である。ともに胎土には、少量の軽石や火山灰が含まれている。これらも、一応dの類とみなしておきたい。

e（第50図16～18）



第 51 图 发掘区出土土器拓影图 (2) (第 I 群第 1 类)

表裏にやや幅広の貝殻条痕文が横走するものをeとする。aとは異なり、やや粗製、堅緻ならざる印象を受ける。

第50図16～18がそれで、16および18から判断する限り、口縁は、丸く山形に高まって波状をなすのが一般的らしい。口唇部は丸くつくられている。18には、外側から円錐状に穿れた補修孔がみられる。

f (第50図19)

第50図19は、器質においてeのそれを思わせる土器であるが、胎土に含まれる砂粒はごく少量で、表裏ともに貝殻条痕文はみられない。器面には、左下りに斜走する調整痕が認められ、口縁部には、2列が並行する貝殻腹縁文が、波状縁に沿って施されている。

g (第50図20～24)

bおよびdにみられる刺突文とは異なる、やや長大な刺突文が配されたものをgにまとめる。成形や文様構成など、全体に粗大な印象を受ける土器で、いずれも胎土には砂粒が多く含まれ、器面はややザラザラしている。また、胎土には、少量の火山灰や軽石も含まれている。

第50図20は、横位に連なる刺突文相互の間隔において、他のものとは大きな差が認められ、あるいはdのうちに含めた方が適当かも知れないが、今はgのうちに含めておく。口縁上部には、上の刺突列と下のそれとを交互に配して構成された文様が施され、その上方の口縁外側では左下りに、下方では右下りに加えられた貝殻腹縁文が並列している。この文様帯の下方には、それぞれ2.5cm強の間隔を上下に隔てて、同様の上下が交互に配された2列1組の刺突列が2段めぐっている。器面には、dのそれと同様に、押し引き文かと思われる地文が一面に施され、裏面には、貝殻条痕文の横走が明瞭に認められる。尚、補修孔の左側には、同図13にみられたと同様の、縛縄を納めるためかと思われる横位の溝が連結している。

同図21は、波状縁を呈する口縁部の破片で、口縁突起の下方一帯には、押し引き文かと思われる地文を重ねて、縦位の貝殻腹縁文が加えられ、さらにその下方には、横位の貝殻腹縁文が数段施されている。口縁突起の両麓の外傾する口縁外側には、それぞれ口縁に平行する刺突文が配されている。また、縦位の貝殻腹縁文の下端部には、横位に刻まれた刺突文が1個現存している。

同図22は、平縁の口縁片で、口唇部は外傾している。口縁上部には、やや離れて横位に連なる小さめの刺突文が施され、その下方4cm弱のところには、2.8cmほどの間隔をおいて横に連なる刺突文が加えられている。地文は、吹切沢式土器などで波状圧痕文(江坂1956)、あるいは連続移動波状文(井上ほか1973)と呼ばれているものと同様のものである。同図24も波状圧痕文のみられる胴部片で、下半部には、左下りぎみに横走する貝殻条痕文が残されている。

同図23も、平縁の、口唇部が外傾する口縁を有する土器で、押し引き文かと思われる地文のほか、横位に加えられた刺突文が1個現存している。

これらの土器にみられるやや長大な刺突文は、断面形が長楕円形を呈する平たい篋状工具の側縁先端部分を押捺したものかと思われる。

h (第50図25～34, 第31図135, 146, 第32図184, 185)

波状圧痕文あるいは押し引き文に類する文様のみがみられる、比較的薄手の堅緻な土器を h とする。

第 50 図 25～30 には、波状圧痕文の一種が一面に施されている。この施文は、縁辺に加工を加えて櫛歯状につくりだした貝殻腹縁によるものであろうか。25, 26 の口唇部は丸く、27 のそれはほぼ平坦につくられている。第 70 号ピット出土の第 32 図 184, 185 にも、同様の文様が施されている。

第 50 図 31～34 には、波状圧痕文と押し引き文との中間かと思われるような圧痕文が一面にみられる。31, 33, 34 の胎土には、軽石が含まれている。第 46 号ピット出土の第 31 図 135, 第 51 号ピット出土の第 31 図 146 にも、同様の文様が施されている。135, 146 の胎土にも、軽石や火山灰が含まれている。第 50 図 31, 32, 第 31 図 135, 146 の裏面は、黒褐色を呈し、やや光沢がある。第 50 図 32 の裏面には、横走する浅い貝殻条痕文が認められる。同図 34 は、底部近くの破片と思われるが、小片のため底部形態を明確に把握し難い。それにしても、少なくともこの下に続く底部として、底面の広い平底を想定することは困難と思われる。

i (第 50 図 35～37)

斜位に配された貝殻腹縁文のみられる土器を i とする。

第 50 図 35 は、その断面形が内彎ぎみにやや弧状を呈する口縁部の破片で、口唇部は内傾する平坦面に削られている。文様は、右下りに施された 2 列 1 組の貝殻腹縁文と、その直下に加えられた 3 列の貝殻腹縁文とから構成されている。暗茶褐色を呈する器面および淡褐色の裏面には、横走する条痕文がみられる。

同図 36, 37 はともに胴部の小片で、器面の摩耗がすすみ、それぞれの文様は必ずしも明瞭ではないが、斜位や横位、そして縦位に施された貝殻腹縁文が認められる。

j (第 50 図 38～40, 第 32 図 199, 200)

垂直に加えられた縦位の刺突列を中心に、貝殻腹縁文と刺突文とによって対称的な文様が構成されるものを j とする。

第 50 図 38 は、暗茶褐色を呈する口縁部の小片で、口唇部は先細りに丸くつくられている。表裏ともに貝殻条痕文の横走がみられ、表ではこれに加えて、h の波状圧痕文の一種を施文する際に用いられたと同様の貝殻腹縁によるものであろうか、縦位の圧痕が一面に並列されている。口縁外側には、刺突文を小さく横位にめぐらし、同様の横にめぐる刺突文は、現存部下端にも 2 個のこされている。この両者の刺突列の間には、左下りに連なる刺突文が配されている。なお、胎土には、少量の軽石が含まれている。

同図 39 は、互い違いに 2 列、縦位に細長く加えられた刺突文(刻文と呼ぶ方が適切かも知れない)を中心として、その左側ではやや左下りに、右ではやや右下りに、貝殻腹縁文を一面に並列させた文様のみられる胴部片である。

同図 40 も 39 と同様の文様構成がみられるもので、縦位の刺突文は 1 個、貝殻腹縁文帯の下端を縁どる横位の刺突文は 3 個、現存している。この灰黒褐色を呈する胴部片の表裏には、横走する貝

殻条痕文がのこされている。

これらの土器にみられる刺突文は、bやdなどに利用されたと同様の、編棒状の工具によるものであろう。

ところで、第76号ピット出土の第32図200は、全体に体側がゆるやかな弧状をなす小形の深鉢形土器の一部で、口縁は平縁、口唇部は丸く先細りにつくられている。底部形態は不明。器面の摩耗がすすみ、文様が部分的に不明瞭であるが、口縁外側および胴半部には、縦位の細い貝殻腹縁文が密に並列し、口縁外側の貝殻腹縁文の下端は、横位にめぐるやや浅めの刺突文に縁どられている。上下を貝殻腹縁文帯に挟まれた体上部には、2列1組の細長の刺突文が左下りに加えられている。口縁部に穿れた径3mm弱の貫通孔は、補修孔とは思われない。胎土には、軽石や火山灰が含まれている。

第32図199も第76号ピットより出土したもので、口縁の突起部分を主体とする破片である。この突起は、頂角75°を測るかなり急峻な山形を呈するもので、頂部の下には、外側から切り込まれた、縦長の透しの一部がのこされている。文様は、頂部から垂直に連なる2個の刺突文と、透し装飾の縁辺に平行に施された並列する貝殻腹縁文、そしてその間のところどころに配された刺突文とから構成されている。器質は堅緻で、暗茶褐色を呈し、胎土には少量の軽石や火山灰が含まれている。

k (第51図41~48, 第27図23, 第51図41~48, 第27図23, 第32図165)

沈線文を有する土器をkに一括する。

第51図41は、口縁上部がやや外反する土器で、口縁は波状縁をなすものと推測され、口唇部は平坦に調整されている。口縁外側および内側には、ともに縦位の貝殻腹縁文が並列しており、口縁外側の貝殻腹縁文の直下には、やや不整な小波状にめぐる沈線文がみられる。これと、現存部下端にはほぼ横位にめぐる沈線文との間には、右下りに並行する2本の沈線文が施され、それぞれの沈線上には刺突列が加えられている。地文の貝殻条痕文は、押し引き文的に施されたもので、右下りに斜走している。器表面は黒褐色を、裏面は淡褐色を呈している。

同図42は、山形に突出する波状縁のみられる薄手の土器で、口縁上部がやや外反し、口唇部は丸く先細りにつくられている。口縁外側および内側には、ともに縦位の貝殻腹縁文が並列しており、口縁外側の貝殻腹縁文の直下には、小さく波状にめぐる沈線文がみられる。この沈線文の下には、口縁と平行する山形に施された沈線文、次いでほぼ水平の沈線文、両側が次第にせりあがる沈線文、そして再びほぼ水平の沈線文と、沈線文が上下にそれぞれ間隔をおいて重ねられている。それぞれの沈線文の、ほぼ突起下の垂線上には、丸く小さな刺突文が加えられている。地文は横走する貝殻条痕文である。

同図43は、口縁に突起のみられる土器で、口唇部はほぼ平坦面につくられている。内側の口唇上には貝殻腹縁による刻み目が加えられ、口縁外側には貝殻腹縁文が並列し、その直下には、やや不整な小波状にめぐる沈線文がみられる。口縁部一帯には、恐らく波状圧痕文かと思われる地文が施され、この地文に重ねて、4本の平行沈線文と小波状にめぐる沈線文とが加えられている。これらの文様のほか、突起下の垂線上には、丸く小さな刺突文が3個配されている。

同図 47 は、薄手の胴部片で、胎土には火山灰が含まれている。器面の摩耗がすすみ、文様が明瞭に判別できない部分もあるが、左下りに並列する貝殻腹縁文と、右下りに 3 列が並行する刺突文、そして現存 3 本の平行沈線文が認められる。同図 48 には、浅い沈線様のものが横走している。これは、あるいは調整痕に過ぎないかも知れない。

第 27 図 23 は、推定底径 7.5 cm 弱の平底の底部から、急角度に体側が直伸する深鉢形土器で、口縁部は欠損している。現存部でみる限り、2 列がほぼ互い違いに配された縦位の刺突列と、同様の刺突列との間には、片側が次第に狭ばまってゆく沈線文に上下を縁どられた横位の貝殻腹縁文帯と、素文帯とが交互に配されている。胎土には、少量の軽石や火山灰が含まれている。

第 58 号ピット出土の第 32 図 165 は、地文のやや右下りに横走する貝殻条痕文と、同方向に 2 列 1 組をなす互い違いに配された刺突文とがみられる胴部片で、欠損部分には沈線文も施されていた可能性がある。

第 51 図 44 は、やや薄手の口縁部の破片で、口唇部はほぼ平坦面につくられている。口縁下 1 cm 程のところには、横位にめぐる刺突列がみられる。加えて、現存部の左下あたりを中心にして、口縁に至るまで右上へと放射状にのびる 4 本の沈線文と、右下へと同様に施された沈線文の一部がのこされている。器面には、右下りに斜走する調整痕が認められる。胎土には、少量の軽石や火山灰が含まれ、色調は灰黒褐色である。

同図 45 は、波状縁をなすと想定される口縁部を有するもので、口唇部は丸くつくられている。口唇上には、丸い刺突文が密に施され、現存器面には、右下りに並行する沈線文帯が左下りのそれに切られる形に交互に重ねられた特有の文様が、一面に展開されている。加えて、上からほぼ水平、右下り、水平、左下り、水平と繰返される刺突列が配され、さらに、突起下に垂直に施された刺突列の一部と思われる刺突文が 3 個、現存部の左下にのこされている。胎土には軽石が含まれている。

同図 46 は、沈線文と刺突列とがみられる胴部の破片である。縦位に施された 2 本の浅い沈線文を中心に、その右では右下りに、左では左下りに並行する沈線文がみられる。沈線文の施文具は、縁にささくれが生じた半截竹管様のものであろうか。刺突文は、縦位の沈線上に 2 個現存するほか、左下りおよび右下り、そしてやや右下りに配されたものがみられる。これらの文様下には、押し引き文風あるいは波状圧痕文風に施されたものかと思われる貝殻腹縁文がみられる。胎土には、軽石や火山灰が含まれている。

I (第 51 図 49)

第 51 図 49 は、口縁部に隆線文がめぐる例である。口縁は平縁で、口唇部は丸くつくられている。なだらかに高まる隆線文は、粘土紐の貼付によるものではない。表裏ともに、横走する貝殻条痕文がみられる。胎土には軽石が含まれている。

m (第 51 図 50～53)

幅 4 mm 内外の隆起線文が貼付された土器を m とする。隆起線文は、当初はその断面が三角形をなすものであったと思われるが、隆起線文上に密に刻み加えられた結果、扁平につぶれたり、不整に振れたりし、その断面は必ずしも三角形を呈しない。

第51図50～52は、いずれも口縁上部がやや外反ぎみを呈する口縁部の破片で、全体に、上方に向うにつれ先細りに薄くつくられている。口唇部は、やや内傾する平坦面をなしている。口縁下1～1.2cmほどのところには、刻みの加えられた隆起線文が横位に貼付されている。口縁外側には、不整円形の小さな刻みが密に施されるのを常とするらしいが、口唇部が摩耗したり、剥落したりで、不明瞭な部分が多い。器面には、ほぼ横走する調整痕が認められ、それは、時に細く浅い沈線文のようにもみえる。

同図53は、表裏に貝殻条痕文の横走する胴部片で、器面には、刻みの加えられた隆起線文が2本現存している。

胴部片（第51図54～62、第29図67、第30図85、100、109、117～119、第32図166、183、第35図293、297）

第51図54～62は、以上のa～mの胴部片と思われるものである。

54、55、57、59～61では、横走もしくは斜走、稀には縦走する貝殻条痕文がみられ、54、60、61では、裏面にも貝殻条痕文が明瞭にのこされている。61の下部には、横位の刺突列のようなものがみられるが、意図的な文様なのか否かは判断に苦しむ。57は、現存下端部の直径5cm強と推定される小形、薄手のものであり、59の現存下部の推定胴径は12cm強である。

56は、kあるいはmの胴部片と思われる。器面には、数本づつまとまってやや不整に横走する細く浅い沈線がみられるが、これは、あるいは単なる調整痕かも知れない。56の胎土には、少量の軽石や火山灰が含まれている。58は、恐らくはmの胴部片で、暗茶褐色を呈し、やや光沢がある。器面には、横走する調整痕に加えて、やや右下りの細く浅い沈線様のものも散見される。第34号ピット出土の第30図109、第145号ピットの第35図297も、ともにkあるいはmの胴部片と思われる薄手のもので、時に沈線文を思わせる細く浅い条痕がみられる。

第23号ピット出土の第29図67、第29号ピットの第30図85は、表裏に貝殻条痕文のみられるものである。第30号ピット出土の第30図100、第37号ピットの第30図117～119、第48号ピットの第31図136、第58号ピットの第32図166、第69号ピットの第32図183、第140号ピットの第35図293の器面には、ほぼ横走する貝殻条痕文がみられる。なお、第32図183の胎土には、火山灰の含有が認められる。ところで、第51図62は、現存部の下方がすばまる傾向が認められ、これに続く底部は尖底であったものと推定される。器面の一部には、右下りに斜走する調整痕がのこされており、胎土には少量の火山灰が含まれている。

底部片（第51図64～73、第30図113）

a～mの底部と考えられるものは、第51図64～72に示すように、平底のものが圧倒的に多い。

同じく平底とはいえ、66のように小形、薄手のものから、67のようにかなり厚手のものまで存在する。また、底面と体側とのなす角度については、64のようにほぼ直角なものから、65のようにほぼ110°に開くものまで、若干の幅が認められる。64、67、68では、底部近くまで貝殻条痕文が施されており、67、72では、底面の一部にも貝殻条痕文がのこされている。65は、底径7.5cm程と推定され、胎土には、少量の火山灰や軽石が含まれている。

第 36 号ピット出土の第 30 図 113 も、平底の底部片である。

さて、第 51 図 73 は、本遺跡より検出された唯一の乳頭状突起を有する尖底部の破片である。a～m の土器に、尖底のものがある程度存在することは、同図 62 の胴部片のように、その底部形態を尖底と推測しうる例が若干みられることから理解されるところである。73 の胎土には、火山灰や軽石が少量含まれている。

以上、a～m に細分して説明してきた第 1 類土器は、おおまかには、道東部における沼尻式土器（沢・西 1973）や大樹式土器（大場・棚瀬 1965）、道南部における住吉町下層式土器（大場ほか 1955）あるいは鳴川式土器（高橋 1967）、そして東北地方における寺の沢式土器（名久井 1974）や吹切沢式土器（江坂 1956、井上ほか 1973）などとの密接な関係が窺われるものであった。ただ、第 1 類として一括したものなかには、単純に同一視すべきではない資料も若干含まれている可能性がある。しかし、道央部における貝殻文土器の実態について不明な点の多い現時点では、それらを整然と分離することは困難であった。

また、第 27 図 14、第 32 図 199、200 の 3 点は、同じく第 76 号ピット中に見出されたものであるが、遺憾ながら、これらが共伴関係にあったか否かは不明である。

冗長たる事実報告に比して、考察が皆無に等しい点、自らの浅学非才を恥じるどころ大であるが、「早期の編年表をつくる最大のカギは、道南の尖底貝殻・沈線文土器群と道東の平底貝殻・沈線文土器群の関係をどのように理解するかにかかっている」（木村 1975）という現状にあっては、本遺跡の第 1 類土器をはじめ、道央部における貝殻文土器の形式分類やその編年的位置づけは、筆者の能力を超える難題であり、先学諸氏のお教えを待ちたい。

第 2 類（第 52 図、図版 45 A）

第 2 類は、いわゆる撚糸文土器のグループである。いずれも、暗赤褐色から暗茶褐色を呈するやや薄手の土器で、裏面には、一面に黒色炭化物の付着がみられるものが多い。器質はやや脆く、胎土には砂粒が含まれるが、肉眼観察の限りでは、繊維の含まれるものは見当らない。一部のものには、火山灰かと思われる白くやわらかな粒子の点在がみられるが、特別に注意を払う必要を感じさせるほどの量ではない。

第 2 類については、それぞれの撚糸文の回転方向や、利用される撚紐の単位を明示する必要上、n～q の 4 つに細分して、それぞれ説明する。なお、撚糸文に利用された撚紐の原体については、以下のように、数字におきかえて記述することにした。

$$\textcircled{1} L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right. \quad \textcircled{2} R \left\{ \begin{matrix} l \\ l \end{matrix} \right. \quad \textcircled{3} L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right. \quad \textcircled{4} R \left\{ \begin{matrix} l \\ l \end{matrix} \right. \quad \textcircled{5} L \left\{ \begin{matrix} R \left\{ \begin{matrix} l \\ l \end{matrix} \right. \\ R \left\{ \begin{matrix} l \\ l \end{matrix} \right. \end{matrix} \right. \quad \textcircled{6} R \left\{ \begin{matrix} L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right. \\ L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right. \end{matrix} \right.$$

n（第 52 図 74～85）

縦長の菱形状に配された撚糸文を有する土器を n とする。この縦長の菱形は、撚紐を軸に右巻きにした施文原体を縦位に回転押捺させることによって施される左下りの撚糸文と、軸に左巻きにし

たものを同様に回転押捺させた右下りの撚糸文とから構成されたものと判断される。

第52図74, 75は、口縁部の破片である。ともに口縁は平縁で、口唇部はほぼ丸くつくられている。74の文様は、①を軸に右巻きに巻いて縦位に回転押捺させた左下りの撚糸文と、①を左巻きにして同様に施した右下りの撚糸文とから構成されている。75の右側にみられ左下りの撚糸文は、⑥を軸に右巻きにして縦位に回転押捺させて施されたものと思われるが、左側のやや緩やかな右下りの撚糸文は、⑤を軸に右巻きにしたものを、左から右へと横位に回転押捺させて施されたものかと思われる。

同図76~85は、胴部の破片で、いずれも縦位に回転押捺の加えられた撚糸文がみられる。器面の摩耗がすすみ、撚糸文が不明瞭なものも少なくないが、一応、施文原体について触れておきたい。81は、⑤を軸に右巻きにしたものを、76の右側、78の左側、82の上方、83の下方、84の左側、85の右下りの撚糸文は、⑤を軸に左巻きにしたものを、76の左側、77の下方左寄り、78の右側、79の右側、80、82の下方、83の上方、84の右側、85の左下りの撚糸文は、⑥を軸に右巻きにしたものを、そして77の上方、77の下方左端、79の左側は、⑥を軸に左巻きにしたものを縦位に回転押捺して施されたかと思われる。

○ (第52図86~91, 第35図294, 295)

撚紐や組紐などを2本1単位として軸に巻きつけたものを、横位に回転押捺させて施した撚糸文のみられる土器を○とする。撚糸文は、菱形状に配されたものと思われる。

第52図86~88にみられる撚糸文は、組紐を用いたものである。86の左側、87, 88の左側にみられる撚糸文は、1本の組紐を二つ折りにした2本を1単位として軸に左巻きにしたものを、86および88の右側のそれは、同様の二つ折りにした組紐を1単位として軸に右巻きにしたものを、それぞれ横位に回転押捺させて施したものであろう。器面の摩耗などのため、組紐の原体の解明は困難であるが、0段の撚紐3本を平たく編んだものが利用されたらしい。

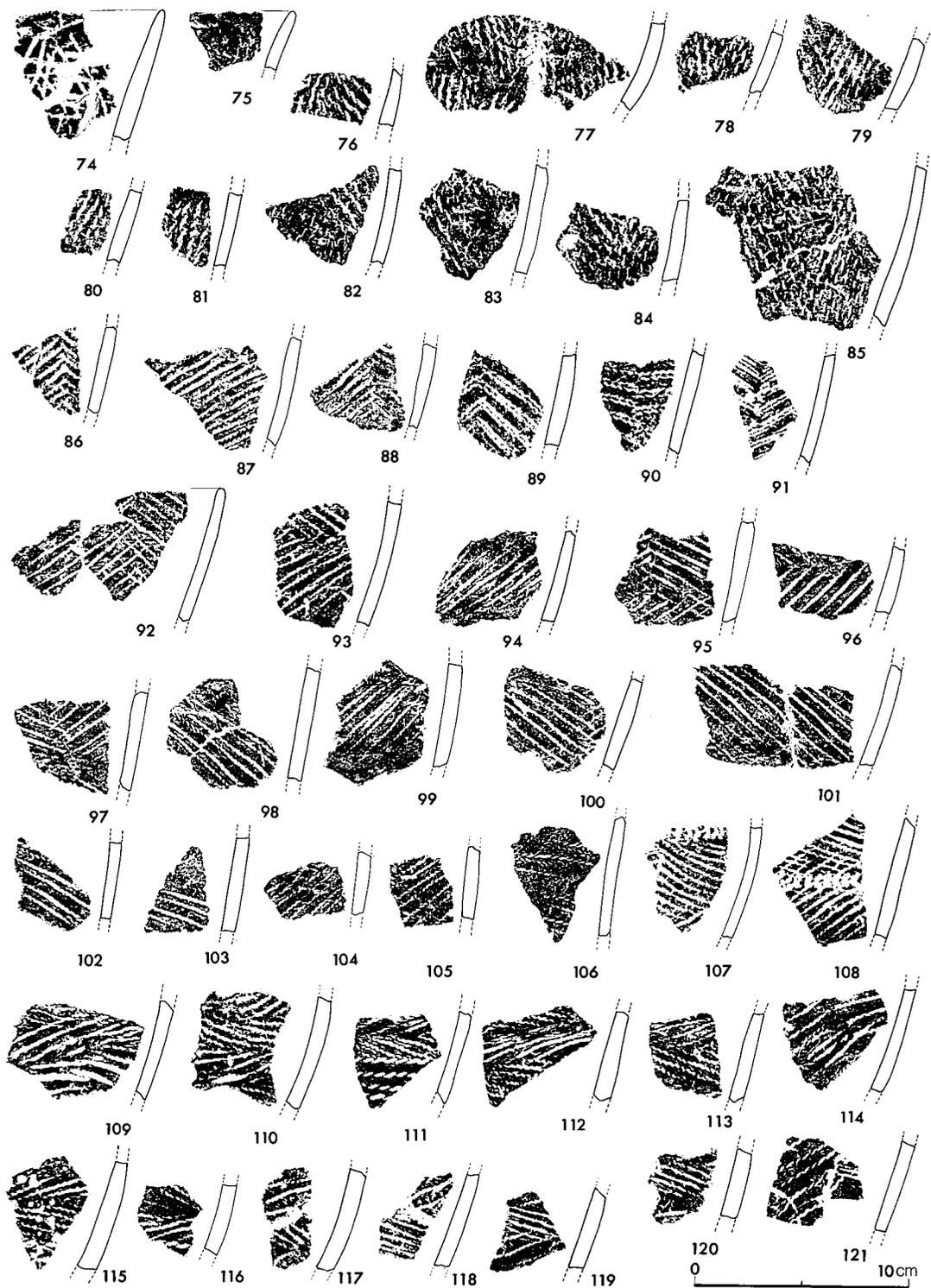
同図89, 90にみられる撚糸文は、①と②の2本の撚紐を1組として軸に巻いたものによって施されたものと思われる。89の左側および90の右側のそれは、軸に左巻きにしたものを、89の右側および90の左側のそれは、軸に右巻きにしたものを、それぞれ横位に回転押捺したものであろう。

第52図91の左側にみられる撚糸文は、②を二つ折りにしたものを軸に右巻きに、右側のそれは、①を同様に二つ折りにして軸に左巻きに巻き、それぞれ横位に回転押捺させて施したものであろう。

なお、第140号ピット出土の第35図294, 295にみられる撚糸文は、それぞれの条がほぼ等間隔に離れたもので、これは、後述するqに特有の撚糸文と同様のものと理解されるべきかも知れない。しかし、直感的には、294, 295の撚糸文は、1本の撚紐を二つ折りにするか、あるいは撚りの方向の同じ撚紐2本を離しながらも1組として軸に巻き、横位に回転押捺させたものではなからうかと思われた。この憶測の当否はともかくも、利用された撚紐は、④であったと思われる。

▷ (第52図92~108, 第32図168, 第35図312, 313)

第52図92~108にみられる撚糸文は、同図89, 90にみられたそれと、基本的には同一のものといえようが、撚りの方向の異なる2本の撚紐を1組としつつも、やや離して軸に巻きつけて施した



第 52 图 発掘区出土土器拓影图 (3) (第 I 群第 2 類)

この種の撚糸文を有する土器片は、比較的数が多いので、Pに一括して説明することにする。これもやはり、軸に右巻きに巻いて横位に回転押捺した右下りの撚糸文と、左巻きにしたものによる左下りのそれとが、菱形状に配されるものである。

口縁部の形態が知られるのは、92に示す1点のみで、口縁は平縁で、口唇部はほぼ丸くつくられている。

92～106にみられる撚糸文に利用された撚紐は、①と②とであったと思われる。ただ、96は、③と④とが使われた可能性が強いようだ。

107, 108は、以上の土器と同様、撚りの方向の異なる2本の撚紐を利用した撚糸文のみられるものだが、この撚糸文のほか、並列する縄文原体の圧痕が加えられている。107は、①と②を軸に右巻き、および左巻きにして撚糸文を菱形状に配した上に、それぞれ縦位に施した②の側面圧痕文を並列させたものである。108は、恐らく③と④とを右巻き、および左巻きにして施したと思われる撚糸文の境目に、やや太目の②の先端部を若干丸めて押捺した圧痕文が並列されたものである。

ところで、第60号ピット出土の第32図168および第157号ピット出土の第35図312, 313も、同様の撚りの異なる撚紐2本による撚糸文がみられるもので、前者は③と④とが、後者は①と②とが利用されたものと思われる。

q (第52図109～121, 第26図3, 第28図36, 第29図68, 第31図137～139, 第32図160, 167)

左下りと右下りの撚糸文が、一面に羽状に配された土器をqとする。左下りの撚糸文は、1本の撚紐を軸に左巻きに、右下りのそれは、右巻きにして、それぞれ横位に回転押捺し、施されたものと思われる。

109～121は、いずれも胴部の破片であるが、これらにみられる撚糸文に利用された撚紐については、おおよそ以下の通りであろう。110, 112, 113は①を、109は細目の①と太目の①とを、114, 117～120は①と②とを、111, 115, 116, 121は①と⑥とを利用したと思われる。

以上の胴部片は、いずれも小片のため器形を知るに足るものはないが、第15号ピット出土の第26図3は、口縁部を欠くものの、底部から体上部に至る部分が復元された唯一の例である。これは、小さな平底の底部から、体側が弧状に大きく開いてゆく器形のもので、現存器高19.5cm、現存最大径29cm程と、比較的大きな土器である。厚さは0.6cm程。底部は、そのごく一部分が現存するのみで、実測図に想定された底径は、必ずしも確実なものではない。撚糸文は、①を右巻きにしたものと、②を左巻きにしたものとを交互に、横位に回転押捺して施されたものと思われる。底部近くを横にめぐる2本の縄線文は、それぞれ⑥の側面圧痕文である。なお、補修孔は、図示した2個のほか、ほぼ反対の側にも、2個1対に穿れたものが現存している。

このほかにも、qに含めうる土器片が各ピットより若干見出されている。第56号ピット出土の第32図160は、ほぼ丸くつくられた口唇部を有する口縁部の破片で、①を軸に右巻きにして施した撚糸文がみられる。また、第14号ピット出土の第28図36, 第48号ピット出土の第31図137, 138は、①を利用した撚糸文が、第23号ピット出土の第29図68, 第48号ピット出土の第31図139は、①と②とを利用した撚糸文がみられる。第58号ピット出土の第32図167は、器面の摩耗がすすみ、

撚糸文は不明瞭であるが、利用された撚紐は、⑤と⑥の両者であろう。

以上n～qとした撚糸文を有する土器群は、東釧路第Ⅳ群土器（沢ほか1962）と呼ばれるグループに属するものといって大過あるまい。このグループの土器群が、ほぼ北海道の全域に分布することはよく知られているが、その実態は、必ずしも十分明らかにされてはいない。たとえば、文様については、本遺跡のqにみられる羽状に構成された撚糸文が、その典型的なものとみなされようが、これと、本遺跡のn～pにみられるような各種の撚糸文とが、それぞれ形式的に分離されるべきものなのか否か、明確にされてはいない。また、器形については、本遺跡の第15号ピット出土の第26図3のようなものがその典型といえようが、このような器形のほか、東釧路Ⅳ式には皿状の浅鉢が出現し、器形の分化がみられるといわれる（沢1974）。本遺跡の場合、第2類土器のものと思われる底部の検出に乏しく、不明の点が多いが、胴部の彎曲の度合いなどを考慮して、第26図3よりもさらに深鉢的なものが、全く存在しなかったとは断言できない状態にある。撚糸文を有する土器についても、今後その説明が待たれるところが少なくないと思われる。（高橋 和樹）

(2) 縄文中期（第Ⅱ群）

第Ⅱ群土器（第53図，図版45B）

縄文中期の土器片は、発掘区から約320片、土壌の覆土内より約30片の都合350片と、第116号ピットの壙口部に接して半完形土器が1個体出土している。

縄文中期の資料は、発掘区および土壌内覆土出土のものを含めて、ほぼ5類に分けられる。この内、第2，3，4類の仲間は比較的多いが、第1類，第5類は各々3片と1片のみであった。なお、後述する通り、これら各類の資料は各々まとまりをもって狭い拡がりの中から出土している。

第1類（第53図122～124）

発掘区から3片出土したのみである。いずれも剥脱部分が多く、型式的特徴は明確ではない。

122は、弁状の突起部分の破片で、突起の下には部厚い貼付文が縦に施されており、また口唇部直下にも低い貼付文が2条巡り肥厚帯を形造っている。これらの貼付文上には、0段の撚糸原体を単軸にまいた絡縄体圧痕文が深く押捺されている。縦の貼付文上には、観察される範囲では縦と横に、口唇部下の貼付帯には、これに直交して絡縄体圧痕文がある。ただし、口唇部下の2つの貼付文のうち上のは剥脱しており、押捺の状態は明確ではない。地文として、縄文が施されているらしいが、破片内ではどのようなものであるかは不明である。

123は、胴部片で、単節の羽状縄文地の上に横走する貼付帯とボタン状の貼付帯がある。横走する貼付帯には、122と同様の絡縄体圧痕文が中央部に平行して側縁にもこれに直交するように押捺されている。

124は、口唇部直下に低い貼付を行ない肥厚帯を作出し、この上に逆「く」の字と縦位方向に深い

0段の絡縄体圧痕文がある。地文は、第一種結節のある羽状縄文である。なお、破片内では、この肥厚帯下には、地文以外の文様は特に認められない。

器形は、122と124は、いずれも心持ち外彎する。いずれも、微量の繊維を含み、色調は黄土色で、器面の光沢はない。

第2類（第28図16、第32図191、第34図267、269～272、269、276、第53図125）

発掘区から1点出土したのみで、あとはすべて土壌の覆土内である。出土区は、第71号ピット出土例（第32図191）は、XV-J-25区であるが、あとは発掘区出土資料（XVI-G-12区）を含めて、すべてXVI-G-7～9、12～14区の6×4mの狭い範囲から出土している（第6、112、113、118号ピット）。これらは同一個体の可能性もあるが接合した例はない。

第6号ピット（第28図16）例は胴部片であるが、あとはすべて口縁部の破片である。内4片は、口唇部が残っている（第32図191、第34図267、276、第53図125）。あとの4片は、裏面が剥脱した資料である。

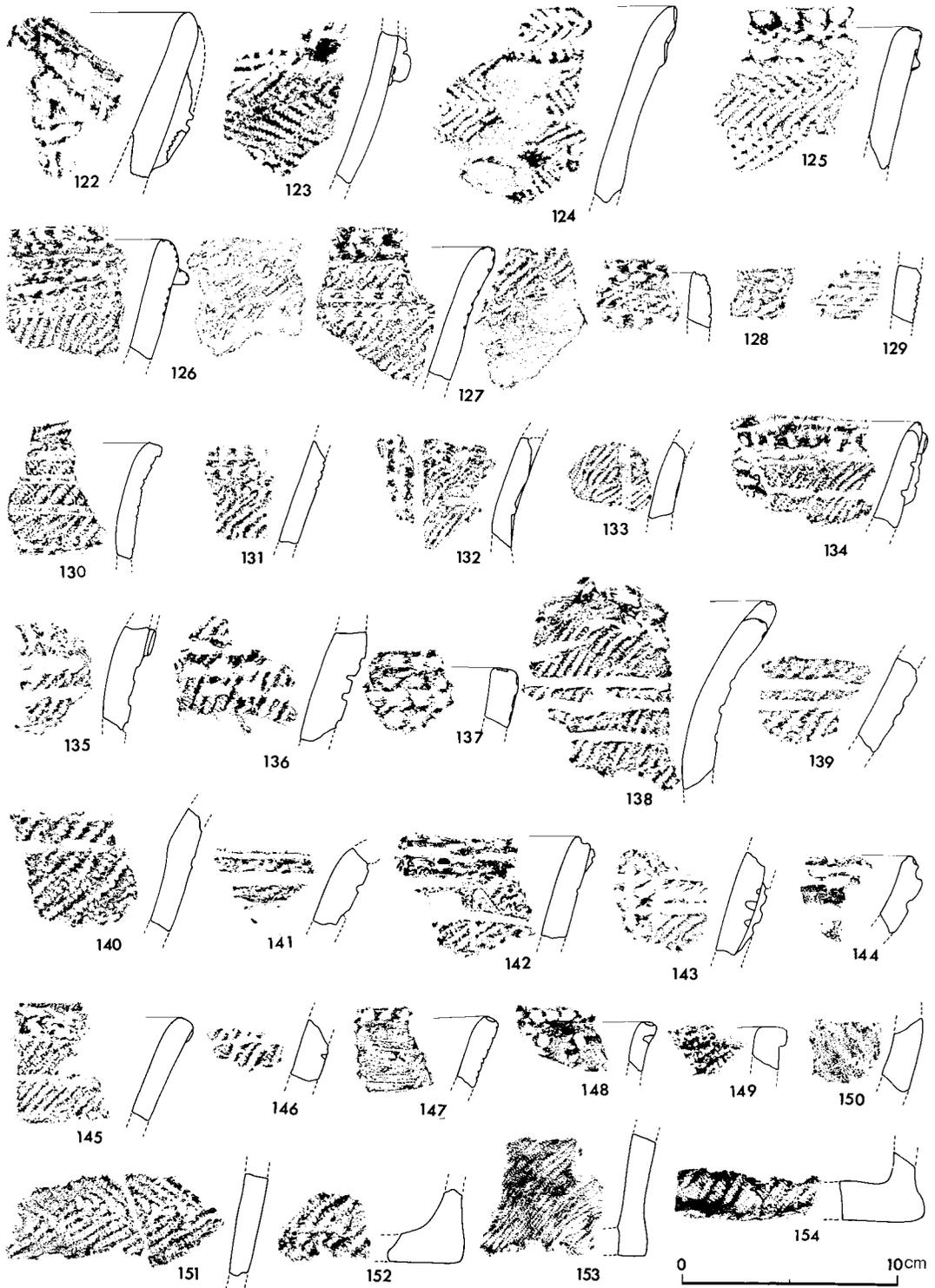
第71号（第32図191）と第118号（第34図276）の資料でみると、かなり大きい弁状突起を有し、この突起から垂下するように10cm程の長さのやや幅広い貼付文がある。また、突起部分を含めて口唇部直下に同様の貼付文帯を横環させ肥厚帯を作出している。この両者の貼付文上と口唇部には、2本の指でつまみ出した指頭と爪痕の押捺がある。多くの場合、下ないし左側の押捺は爪痕のみで、上ないし右側の押捺は指頭と爪痕の一部のみみられる。ただし、垂下する貼付文の上部2つの押捺は、つまみだしたものではなく大きな指1本で深く押圧しただけの文様である。突起の頭部分にも、この押圧がありへこんでいる。地文は、第一種結節のある羽状縄文で、口唇部下に横環する貼付文は、地文施文後に添加されたもので、一方垂下する貼付文は、地文施文以前につけられたものである。

器形は、非常に大形の深鉢形で、器厚は1cm程である。器内面は、少し光沢をもつ程度に磨き上げられており、焼成はかたい感じを受ける。色調は、白っぽい黄灰色を程し、繊維は微量しか含まない。

第3類（第53図126～133）

すべて発掘区から出土したもので、分布域は、XV-I-2区とXIV-G-3～XIV-H-3区などであるが、破片数が少なく明確ではない。

126～128の3片は、全くモチーフの同じもので、いずれも内面に縄文（縄文々々）を有し、口唇部とその直下および口縁部に半截竹管の内面側で、工具を器面から離すことなく連続刺突した文様を各々2条ずつ横環させた例である。口唇部直下の連続刺突文と口縁部のそれとの間には、かなり高い貼付文（帯）を横環させ、この上にも、同種の連続刺突文がある。この貼付帯は、地文を施文後添加されたもので、この後に半截竹管による連続刺突文が施されている。ただし、127、128の貼付帯は現在剥脱している。



第 53 图 发掘区出土土器拓影图 (4) (第 II 群)

130も、前述のものと同様のものであるが、縄文々々、貼付帯はない。口唇部の連続刺突文もなく、地文が施されている。半截竹管による連続刺突文は、口唇部直下から1～1.5 cm 間隔で、破片内で4条横環させている。地文は、節の狭長な斜縄文である。

131は、口唇部を欠損するが、2条の連続刺突文がある。工具は、かなり径の大きい竹管を截いたものと思われ、かなり平べったい感じを受ける。

132, 133は、胴部片であるが、縦位に先端がささくれたままの棒状工具による連続刺突文がある。132は、3条観察でき、上部にはドリルによって穿孔した修理孔がある。133は1条である。いずれも、地文は細かな斜縄文である。

129も胴部片で、半截竹管による横位の沈線文ないしは連続刺突文がある例である。

以上の資料は、いずれも胎土に若干の繊維を含み、赤褐色の色調を呈し、器内外表面は光沢をもっている。地文は、細かいあるいは節の狭長な斜縄文が多い。

第4類 (第27図18, 第31図129, 第35図317, 第36図323, 324, 第53図134～148)

この仲間は、縄文中期の資料の中では一番破片数が多い。分布範囲は、XV-I-2区を中心に、東はXV-I-13区、西はXIV-H-8区に及ぶ紡錘形の範囲と、XVI-G-16区からXV-F-21区を結ぶ一帯に広がっている。

この類は種々のものを含むが、全体的な特徴は、口唇部に貼付帯が1条横環する点と、口唇部上と口縁部に数条、棒状工具および半截竹管などの施文具で、やや間隔を開けて刺突文を巡らすという点である。工具は、圧倒的に棒状工具が多く、この工具を器面から離さずに連続的に刺突した例も幾つか認められ、一部沈線文のような感じを受ける所もある。また、刺突文のかわりに、1段の撚糸原体による絡縄体圧痕文が、口縁部と口唇部上に施されている例もある。個々に述べると以下の如くなる。

第27図18は、第116号ピットの壙口部に接して出土した半完形土器である。第4章第2節で述べた如く、本ピットは人為的な土壌であるという確証はなく、おそらく「風倒木痕」であろうと思われる。従って、遺構と関連して出土したものではない。

口径19.6 cm, 器厚1 cm 土, 現存高23.6 cmの深鉢形土器で、胴部はかなりふくらみ、口縁部はやや外彎する。口唇部直下には、幅1 cm程の貼付文(帯)が巡り、この貼付文上および口唇部上と口縁部には、半截竹管と先のやや丸い2 mm程の棒状工具の2種類の施文具による刺突文がある。口唇部上のは、ほとんど半截竹管であるが、実測図左側12 cm程は、丸棒状工具である。貼付帯上の刺突文も、口唇部には、貼付帯をはさんで、4～5条の刺突列が横環しているが、その工具は、口唇部とか貼付帯上と同様不規則である。図示した面では、貼付帯の上は丸棒状工具と半截竹管文、その下は丸棒状工具、半截竹管、丸棒状工具、半截竹管の順である。丸棒状工具による刺突は器面から工具を離さず施文している部分もあり、深い沈線文の如くなっている。器面から一回一回離れた場合でも、工具を器面に対してねかせて施文している。

図示していないが、そのさらに左側は、4段程半截竹管的な工具による刺突文列がある。

なお、この貼付帯は、地文と刺突文を施こした後に添付されたものであり、また全体に刺突文の形が不明瞭で、さらに文様構成、施文具なども統一性が認められない。なお、補修孔と思われるものが2個あるが貫通していない。

地文は、左下りの節間の狭長な単節斜行縄文で、胎土には、かなりの繊維を含み、色調は赤褐色である。口縁部には、一面炭化物が付着しており、器面調整は特でない。

134は、小突起を伴い、小突起下には垂下する貼付文、口唇部直下には横環する貼付文を地文施文後添加している。横環する貼付文下には、破片内の観察では3条の棒状工具（先端および断面は丸くない）による刺突文が施されている。この刺突文の間隔はかなり広いものである。貼付文上にも、同様の工具で、貼付文に直交して、3～5 mm程の間隔をおいて刻目が入っている。

135は、口唇部を欠損するが、134と同様な貼付文と刻目、そしてその下に刺突文が3条（以上）横環する。ただし、刻目および刺突文の工具は、134より大きくかつ深いものである。

136も、口唇部を欠損しており、破片内の観察では、4条、間隔の開いた、断面四角形？の棒状工具による刺突文が横環している。この破片は、かなり下の方から外彎の傾向を示し、かつ下半部に行くに従い器厚を増している。

137は、貼付文は認められないが、口唇部上とその下に3段（以上）の平らな篋による連続的な刺突文があるが、やはり間隔は広くまた深いものである。口唇部の断面形はコーナーが明瞭で、コの字形である。

第157号ピット（第35図317）の資料は、口唇部上に刺突文があり、その下4 cm程の所にも2条単位の深い刺突文が横環する。工具は、断面がやや丸味を帯びた棒状のものである。地文は、細かい単節の斜縄文である。

138は、かなり強く外彎する器形で、小突起を有し、この突起上と口唇部には中空の径3 mm程の丸棒状工具による刺突があり、口縁部には4段の、径5 mm程のやや幅広い丸棒状工具による、やや深い沈線文が横環するが、所々さらに深く刺突してあり、前述の刺突文に似た部分もある。工具の先端は少しササぐれている。地文は単節の斜縄文である。

139、140も、138と類似した資料で、やや幅広の作業面がやや丸味を帯びた平べったい工具で、幅広の沈線文的な文様を横環させているが、所々止めて先端を深く刺突している。地文は、いずれも節の大きい斜縄文である。

第44号（第31図126）、第29ないしは32号（第30図87）の例も、小破片で判然としないが同様なものかと思われる。

141は、断面四角形かと思われる棒状工具で深い沈線文を横走させた例である。破片内では、部分的に深く刺突した部分はない。しかも、色調は明褐色を呈し今迄の例とは若干異なっている。

142は、口唇部直下に貼付文を巡らして肥厚帯を作出し、口唇上と貼付文およびその境目に、先端がささくれた状態で、多少斜めにそいだ断面不整四角形的な棒状工具による刺突文が連続的に施されている。貼付文下には、同様の工具で、横走および逆V字状に浅い沈線文が施されている。

143は、口唇部を欠損するが、垂下する貼付文と横環する深い2本の沈線文および、その間に連続

的に施された円形の刺突文がある。貼付文上にも、それに対して直交して、同様の深い刻目が施されている。刺突文でみると沈線文のものも、工具は中空の先端がややささくれたままの丸棒状工具でのようである。地文は節の狭長な斜縄文である。

144は、口唇部片で、破片内では縄文の施文は認められない。口唇部下に貼付によって肥厚帯を作り、肥厚帯の口唇部よりの方に中空の丸棒状工具を器面に対してねかせて、連続的に刺突した文様がある。この肥厚帯下には、同様の工具で深い沈線文を横環させている。

第160号(第36図323)の例と発掘区の145は、1段の撚糸原体を単軸にまいたものを押捺した低い貼付帯を口唇部下に施し、この上に絡縄体圧痕文がある。第160号の貼付文は、殆んど剝脱しており、口唇部には中空——しかも中の穴が大きく周囲の管の幅が薄い工具による刺突文を施している。145は、口唇部上は、貼付文上と同様の絡縄体圧痕文がある。貼付帯直下から斜行縄文地の上にも、同様の圧痕文が約2cm間隔で、破片内で3条横環している。

146は、小破片で全体の文様構成は不明であるが、作業部分が断面V字形の幅の狭い工具を器面から完全にはなすことなく、間隔をおいて連続的に刺突している。

第160号ピットの第36図324も、口唇部は欠失するが、145に比べてやや太い1段の撚糸原体による絡縄体圧痕文が、破片内で3条横環している。

147は、口唇部上には、先端がささくれた棒状工具による刺突文が連続的に施されており、口唇部には、先端の鋭い工具で横にひっかいた、幅0.5～1mm程の沈線文(?)が不規則に走っている。

148は、今迄述べてきた例とは焼成がかなり違い、灰黄色を呈し、胎土にも夾雑物をあまり含まない。口唇部上には、147と同様の工具による刺突文が巡り、口唇部下1～1.5cm程は地文はなく、ここに径5mm、深さ3～4mm程の円形刺突文が施されている。工具は、中空のものであったかどうかは判然としないが、断面が丸いものである。

これらの破片は148例を除いて、胎土、色調などは第3類土器に近く、地文も第3類と同様なものもあるが、これらのうちの幾つかは、粒の大きい斜縄文の例である。

第5類(第53図149)

この類は1片のみである。

149は、XV-H-21区から出土したもので、口唇部直下に貼付による肥厚部を作出し、この上に地文と同様の縄文を施したものである。口唇部の断面はコの字状で四角く、口唇部上は無文である。

色調は白っぽい明黄灰色を呈し、胎土には繊維は含まない。

その他

149, 151, 第14号(第31図123), 第48号(第31図133), 第51号(第31図147), 第150号(第35図303)は、地文のみの胴部片である。

150は、無節の斜縄文、151は、第一種結節のある羽状縄文であるが、他はすべて単節(1段撚り)の斜行縄文である。この内、151は第1類に伴うものであろう。

152～154, 第52号ピット(第31図149)の例は底部位の破片である。いずれも心持ち張り出しがある。地文はいずれも斜縄文で、第52号ピット出土例には底面に地文と同様の縄文がある。これらは、前述した第2, 3類に伴うものかと思われる。色調は赤褐色でやや器面が光沢をもっている。

以上のような型式的特徴を有した土器は、どこに類例を求められるであろうか。

第1類は、0段の撚糸原体による絡縄体圧痕文という点から、円筒土器上層式に類似を求めることができ、特に札幌市N309遺跡(上野・高橋編1975)出土土器の内、第I群E類とK類に対比される資料かと思われる。122, 123はE類, 124はK類に相当する。E類は、大きく「サイベ沢Ⅵ式」、K類は「サイベ沢Ⅶ式」(吉崎1965)に含まれようか。

第2類は、地文の羽状縄文を重視すれば、縄文中期中葉～後半の時期では、サイベ沢Ⅴ, Ⅵ式からサイベ沢Ⅶa式(森田・高橋1967), トコロ第6類, 伊達山・入江第Ⅲ類などの余市式系土器群などのいずれかに含まれるものである。また、高橋(1972)が、サイベ沢Ⅶ式と同一か、やや地方的要素が強まった同筒土器とした「智東B式土器」も羽状縄文を主体とするようである。この内、トコロ第6類と余市式系統の土器群とは本類は対比できない。従って、円筒土器上層式の範疇に含まれる可能性が高い。弁状の大きい突起という点からも、このことはいえるであろう。また、口唇部直下に貼付帯を巡らし、突起下に垂下する貼付文を施す手法は、同筒土器上層式の伝統であり、しかも口縁部には貼付文が特でない例は、サイベ沢Ⅶ式に至ってはじめて認められるものである。具体的には、島牧郡島牧村栄磯岩陰遺跡(峰山・金子ほか1973), 浦河郡浦河町東白泉遺跡(橋本1969b), 札幌市N309遺跡第I群G, J類などに若干認められる。なお、同遺跡の第6号竪穴住居址状遺構出土の半完形土器(上野・高橋編1975, p.24, 第11図3)は、報告では第Ⅱ群の範疇に含めたが、これは間違いで、第I群に含まれるものであった。また、第Ⅱ群としたもののうち、第48図253～259の資料も上述の半完形土器と共に、第I群中に含まれるかと思われる。本類は、この資料に非常に近いものである。ただ、貼付文上の施文具が、指頭ないしは2本の指でつまみ出したものみの例は初見である。ただN309遺跡の第6号竪穴住居址状遺構の例には、半截竹管の内面を押捺したもの以外に、指頭の押圧が垂下する貼付文上に2ヶ所ある。また、栄磯のI群1類の資料中にも、突起から垂下する貼付文の下端と上部に指頭の押圧がある例がある(報告の第6図1, 2, 4, 第5図3)。おそらく本類を含めて、これらはほぼ「サイベ沢Ⅶ式」頃に対比できるものと思われる。

なお、札幌市手稲町砂山遺跡(石川1967), 同市白石神社遺跡第1号竪穴住居址褐色土層出土土器(加藤・上野・羽賀1973)などに、貼付文上に直交して指頭の押圧が認められるが、これと本類の押捺とは違うもので、本類のは押捺の長軸は貼付文に平行し、かつ深く押圧し、爪痕が多くの場合残っている。

第3類は、半截竹管を多用し、口唇部に刺突があり、縄文々々のある例は、札幌市白石神社発掘区第I群, 石狩郡石狩町花畔M33遺跡(紅葉山砂丘上)(上野編1974, p.84, 第46図)などにある。しかし、縄文々々という要素を除けば、いわゆる「天神山式」(高橋1972)に対比できると思われる。

この仲間は、札幌市平岸天神山遺跡（菊池 1967）、同市平岸坊子山遺跡（畑 1966）、同市N 309 遺跡第Ⅱ群、同市白石神社遺跡第1号竪穴住居址床面および床面直上出土土器、沙流郡平取町平取小学校、荷負小学校傍、小平の諸遺跡（河野本道 1900）、勇払郡早来町安平A遺跡（野村 1973）、岩内郡岩内町柏木遺跡（大場・桐井 1958）などで出土している。この仲間は、貼付文と突起の有無で2つに細分される可能性もあるが、時期的には、サイベ沢Ⅶ式とかトコロ第6類に近い位置が与えられるかと思われる。

第4類は、文様のモチーフとか、焼成、胎土、色調など第3類に類似した点が多いが、施文工具には、第3類でみられたように半截竹管は殆ど用いられず、平篋ないしは丸棒状工具が多く、これを間隔を開けて刺突している。また貼付文のある場合には、これに直交して同様の工具で刻目をつけるのも1つの特徴かと思われる。

類似の資料は、恵庭市柏木川遺跡4号住居址（高橋編 1971）から完形土器が出土している。また、同遺跡の第5号住居址、第3号住居址などの資料も同類のものかと思われる。また、器形が若干異なるが、檜山郡上ノ国町大安在B遺跡Eトレンチ出土の完形土器（倉谷・小笠原 1972）も、これに近い仲間かと思われる。また、近い所では、札幌市白石神社遺跡発掘区の第Ⅰ群の一部（報告の第20図6、7など）も入るかと思われる。時期的には、羽状縄文がない所からサイベ沢Ⅶb式からあまり遠くない時期に位されるかと思われる。

なお、148は小さな円形刺突文が巡るが、同様の例は、前述した石狩町M 33遺跡でも天神山式土器の中に1点含まれていた。これは、トコロ第6類との近い関係を示唆してくれるものではあるまいか。また、同様に円筒土器上層式系の土器群をトコロ第6類との近縁関係を示唆するものには、札幌市N 309遺跡の第Ⅰ群1類（報告の第45図159～163）土器がある。これは、肥厚帯があつて、その直下に円形刺突文ではなく、絡縄体による半弧状の圧痕文が横環しているもので、桑原（1966）が指摘するとおりトコロ第6類は、円筒土器上層式系統の土器群の強い影響下のもとに出現した可能性が高いことを示唆するものかと思われる。

おそらく、この第4類は、「天神山式」、「智東B式」とか称される円筒土器上層式の地方型式と直接的な脈絡をもった土器群で、従って、第3類に後続する土器群かと思われる。

第5類は、円形刺突文の有無は不明であるが、伊達山式ないし入江第Ⅲ類（吉崎 1965）に対比できるもので、余市式土器かと思われる。

すなわち、以上の土器群は、サイベ沢Ⅵ式併行（第50図122、123）と余市式土器（同図149）が若干数のみで、あとはすべてサイベ沢Ⅶ（a、b）式併行ないしその直後位の時期に比定されるもので、時期的にかなりまとまりがあるようである。（上野 秀一）

(3) 縄文晩期末～続縄文期（第Ⅲ、Ⅳ群）

第Ⅲ群土器（第54図～第59図、図版46～48A）

第Ⅲ群土器としたものは、縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭にかけて位置すると思われる土器である。その概要については、次の15類に分けて記す。

第1類 (第54図155～159, 第27図113, 第34図240, 252)

沈線による連続三角形の文様を主体とすることによって、変形工字文に似た文様を作りだしている一群である。155～158は、おそらく同一個体の土器の破片であろう。いずれも縦の刻みを有する貼瘤が数ヶ所に見られる。器形は、浅鉢形であろうかと思われる。

本類に属するものの好例は、第113号ピット出土土器(第27図113)に見られる。口縁の状態は、その全形がないために定かではないが、おそらく平口縁となろうか。器形は、口縁から胴部中程まで直立し、以下かなり急速にすばまり、さらに、ややゆるやかな傾斜を見せて底へと連なる。底面は、やや丸底の不安定な土器である。

文様は、口縁部と底部では、横走る沈線と地文としての縄文が見られる。胴部の文様は、上下の無文帯によってはさまれ、横走沈線によって囲まれる菱形を描く数条の沈線が主体となる。この菱形の中央部に、刻みの見られる上下に長い貼付帯が見られる。この貼付の中央には穿孔が施される。この沈線によって描かれる菱形の左右の角と、次の菱形に連なる箇所が、あたかも変形工字文を思わせる文様を描き出している。底面にも全体的に縄文が見られる。器高約19cmである。

この類の出土土器は、それ程数が多くなく、第98号ピット出土土器(第34図240)、第100号ピット出土土器(第34図252)などにわずかに見られるのみである。ただ、単に口縁部の文様から見ると、第Ⅲ群第10類とするものの一部は、胴部に本類と同様の文様を有するものが混じっている可能性も、十分に考えられる。

第2類 (第54図160～169, 第30図90, 108, 110, 第35図316)

数本の沈線により、三角形の文様を主体的に描くものである。口唇部と頸部に横走してめぐらす沈線の間を、波状の数本の沈線を割りつけることによって、三角形の文様を作るものである。文様そのものは、第1類土器の如く整然としたものではなく、やや粗雑な感じがする。167～169の如く、口唇の突起に沿って文様を構成するものも本類土器としたが、やや問題もあろう。

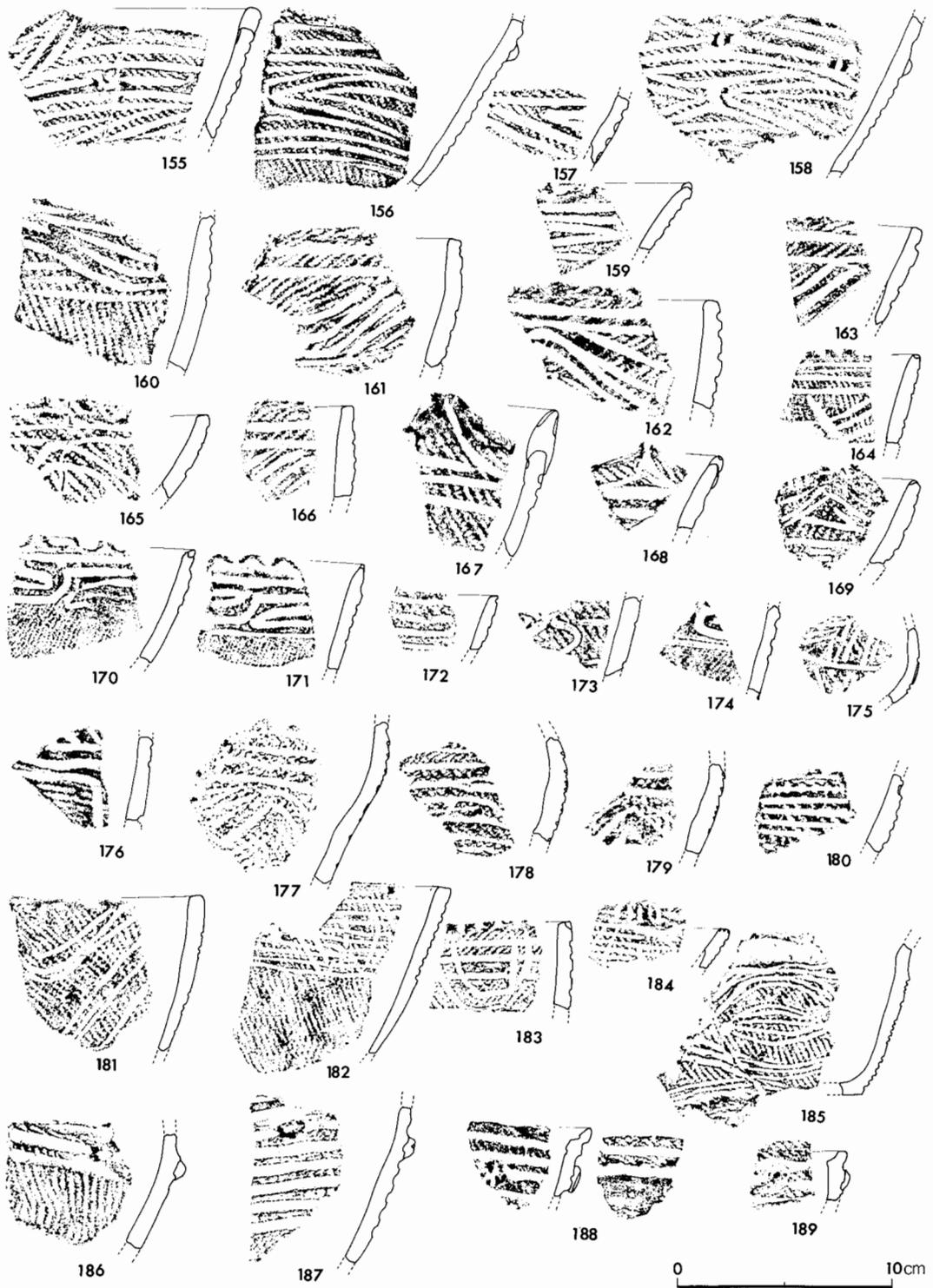
器形は、平口縁の深鉢形を呈するものが多く見られるが、165のような浅鉢、167～169のような突起を有する深鉢形の土器もある。口唇部は、無文のものが多く、竹管様の工具の側面による截痕のあるもの(164, 169)もわずかに見られる。

遺構からの出土例としては、第29号ピット(第30図90)、第33号ピット(第30図108)、第34号ピット(第30図110)、第157号ピット(第35図316)出土土器などが挙げられよう。

第3類 (第54図170～174, 176)

地文としての縄文と沈線文を主体とするもの。特に沈線による入組文を主体としたものは、その一部が工字文に近い文様を描き出す。170, 171は、口唇に竹管様工具による刻みが施文される。遺構からは本類として明確に分類できるものは出土していない。

第4類 (第54図175, 177～180)



第 54 图 发掘区出土土器拓影图 (5) (第 III 群)

沈線と地文の縄文、および沈線間に見られる竹管工具による円形刺突の組合せからなるもの。沈線による文様の構成は、第2類土器に近似する。器形は、口縁部に膨みの見られるいわゆるキャリパー状に近い形をとるものかと思われる。本類の好例となるものは、遺構からは全く発見されていない。

第5類（第54図181～185、第31図150、第33図205、213、228、231、第34図234、235、第35図298、第36図320、321）

やや細めの沈線と地文としての縄文を主体とするもので、三本一組の沈線による波状連続文を描くもの（181）、横走する数条の沈線を、2本1組の弧状の沈線により区画するもの（182～184）などがある。器形は、いずれも平口縁の深鉢形であり、183は、口唇に竹管様工具の側面による刻みが見られ、184は、線縄文により刻みがつけられる。これらの土器に対し、185はやや異った様相を示す。横走する平行沈線により区画される文様帯中に、同じく沈線による横長の楕円形の文様を重孤文風に描き出している。器形は、底径の大きな浅鉢形となろうか。

本類としたものは、遺構からもかなり発見されている。第52号ピット（第31図150）、第81号ピット（第33図205）、第84号ピット（第33図213）、第95号ピット（第33図228、231）、第98号ピット（第34図234、235）、第146号ピット（第35図298）、第159号ピット（第36図320、321）などから出土している。

第6類（第54図186～189、第55図190～196、第28図3、第34図238、第36図342）

横走する太い沈線を主体とし、この沈線を結節するような状態で、縦の刻みのみられる貼瘤を有するもの。188、190は、口唇上にも縄文を施文し、内面に2条の横走沈線とか縄文が施文される。191は、口唇および内面に縄文が施文される。192、196は、頸部に無文帯を配する。193、194は、以上のものとは異なり、刻みの見られない貼瘤をつけるものであり、第7類土器と共通する要素が強い。

器形は、いずれも深鉢形で、196のみが頸部が（く）の字に彎曲する形態を示す。

本類土器は、第2号ピット（第28図3）、第133号ピット（第34図238）、第185号ピット（第36図342）などに見られる。ただ、第185号ピット出土土器（342）の文様を見ると、第2類とした土器のうち第54図168に相通ずる文様も見られる。168は、本来第6類として取り扱うべきものであるかもしれない。

第7類（第55図197～199、第36図349）

いわゆる舟形の器形を呈すると思われるものを本類とした。舟形の先端にあたる部分を肥厚させるか、あるいは縦の貼付帯をつける。197、199には、穿孔が行なわれている。文様は貼付、あるいは肥厚部分を中心とす菱形の文様が主体である。太くやや粗雑な沈線によるもの（197）、やや細い沈線と帯縄文様の文様によるもの（198、199）がある。器形も口縁部に若干膨みの見られるもの（197）、口縁部が直立し、頸部で（く）の字状に彎曲するもの（199）がある。

遺構からの出土例は、第194号ピット（第36図349）で一点出土しているのみである。

第8類（第55図200, 201, 227, 第29図50）

地文としての縄文と、やや細い数条の横走る沈線の見られるもの。第5類土器の沈線に近い施工工具による沈線が多い。227は、口唇に刻み目を有し、裏面にも横走沈線が施文される。表面の横走沈線上には、意識的に施文したと思われる刻みが一ヶ所見られる。器形は、深鉢形である。

遺構からは、第21号ピット（第29図50）から一点出土している。

第9類（第55図202～204）

横走る短い沈線を連続的に用いるもの（202）、縦走る沈線と円形工具による刺突を配するもので、口唇に刻みのつけられるもの（203）、口唇部にめぐらす横走沈線と、これより垂下する波状沈線を配し、口唇を広く内側に突出し、縄文と沈線を施文するもの（204）がある。

本類土器は、遺構からの出土土器中にはその好例を見ることができない。

第10類（第55図205～226, 第27図20ほか）

地文としての縄文と、やや太い工具により施文される横走沈線を主体とするもの。本遺跡からの出土土器のうちで、第13類に次いで多く見られる土器である。

口唇が無文のもの（205～208, 215）、口唇に中空な円形工具による刺突の見られるもの（218）、口唇に刻みと縄文を施文するもの（209, 210）、口唇に直交して縄線文を施し、刻み目状にしたもの（213）、円形工具の側面による刻みをつけるもの（211, 212, 214, 225）、縄文を施文するもの（219～221）、口唇に直交する縄線文と、内面に横走る縄線文をつけるもの（216）、内面に横走沈線の見られるもの（217）などがある。

器形は、単純な深鉢形が主体を占めるが、口縁部がやや彎曲するもの（214）、胴部に若干の膨みが見られるもの（224）もある。

遺構からの出土例も多く、その個々については記述しないが、おおよそ前述の諸特徴からとらえることができるかと思われるが、これらの中でも、第113号ピット出土の大形破片（第27図20）は、口縁に2条の沈線をめぐらし、口唇から底部へと直線的な形態の深鉢形で、やや揚底となる。器高は、約15cmである。

第11類（第32図162, 178, 第55図228）

非常に堅緻な焼成で、表裏ともに滑沢をおびており、太い沈線により工字文を形づくるものである。

本類の好例となるものは、第67号ピット出土土器（第32図178）に見ることができる。178は、いわゆる台付の浅鉢で、口縁部に4個の大形突起を有するものであろう。突起頂には、刻みのある、いわゆるB状の小突起が見られ、文様は、やや変形の工字文が主体となる。大形突起の内面は、沈



第 55 图 发掘区出土土器拓影图 (6) (第 III 群)

線により区画される。177, 228 ともに一部に朱の塗布がうかがわれる残滓が認められる。

小破片ながら第 56 号ピット出土土器（第 32 図 162）も本類に入れることができよう。

第 12 類（第 56 図 230～232, 第 28 図 27, 第 30 図 96）

無文土器の一群である。わずかに口唇に縄線文による刻みの見られるもの（230）が一例見られる。231, 232 は、皿形に近い器形となろうか。

遺構から発見された無文のものでは、表面に整形痕の認められるもの（第 28 図 27）もある。第 29 号ピット出土土器（第 30 図 96）は、深鉢形土器の好例である。

第 13 類（第 56 図 233～238, 第 29 図 56, 57, 第 30 図 101, 第 35 図 317, 第 36 図 330）

地文としての縄文と、沈線に似せた横走縄線文による文様を有するもので、口唇に縄文を施文するもの（233）、刻みをつけるもの（235, 236, 238）、刻みと横走沈線を施文するもの（237）などがある。237 は、縄線文の下端に半截竹管様の工具の内面を用いた、粗雑な波状沈線を施文する。器形は、いずれも深鉢形である。

遺構内からの発見数は非常に少なく、第 19・20・21 号ピット（第 29 図 56, 57）、第 30 号ピット（第 30 図 101）、第 157 号ピット（第 35 図 317）、第 177 号ピット（第 36 図 330）などがある。第 177 号ピット出土の土器は、237 の土器に近似するものである。

第 14 類（第 56 図 239～255, 第 57, 58 図, 第 26 図 8～10, 第 27 図 19, 21 ほか）

土器の表面に地文としての縄文のみを施文する一群である。大きく分けて数種類に分類できるようである。

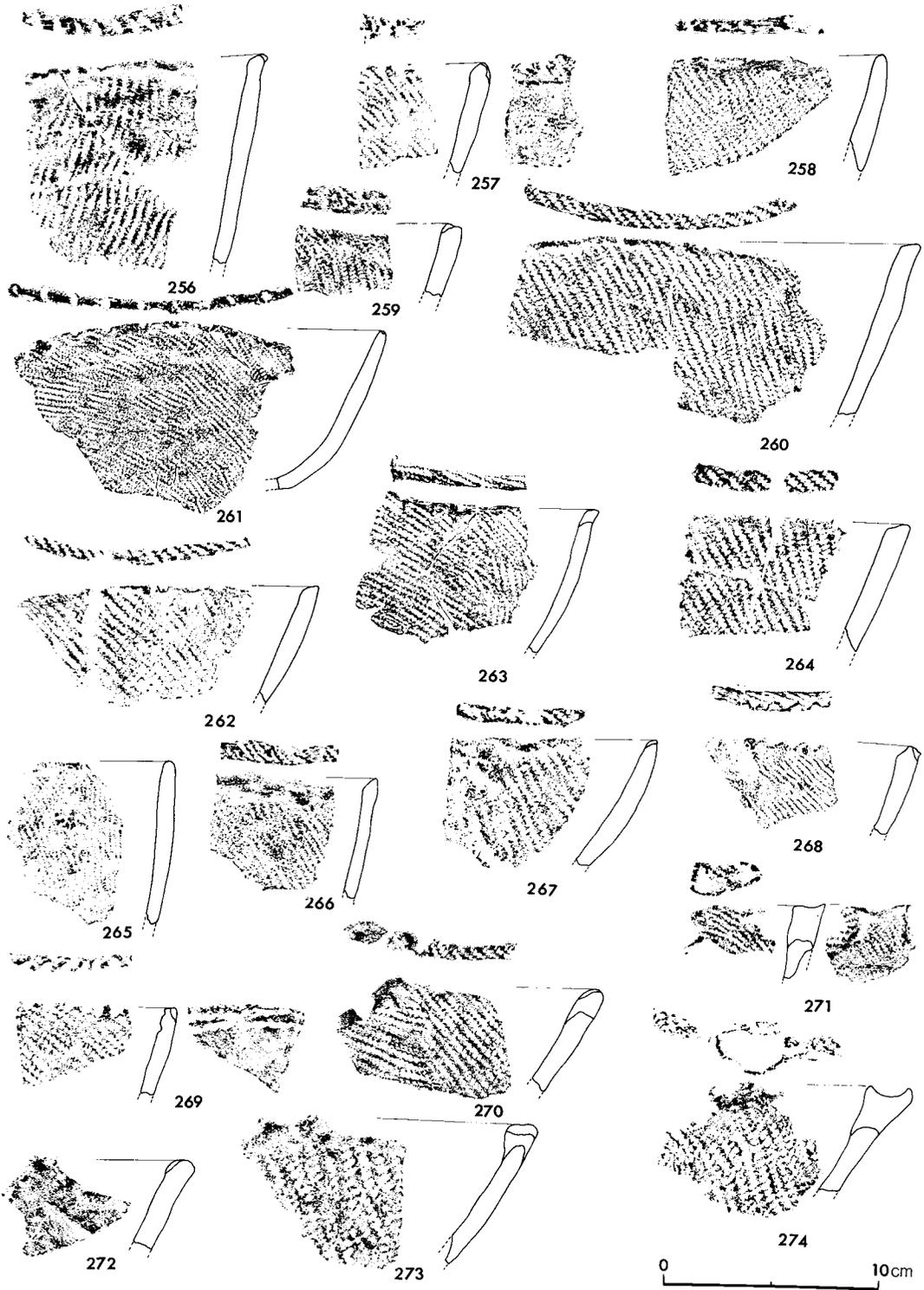
1 つは、口唇上に撚糸圧痕の見られるもの（231～251）で、これらのうちで 240, 241, 242 は、小突起を有し、その突起部分にのみ数条の撚糸圧痕を施文する。また、突起部分にのみ、口唇に直交する撚糸圧痕を施文し、他の部分には、口唇に沿って撚糸を押捺するもの（239）、口唇に直交して撚糸を押圧するもので、さらに縄文を施文するもの（246, 247）、同じく撚糸圧痕の見られるもので、これを指紋状に施文するもの（248, 249）などがある。249 は、竹管様工具の側面による押捺が併用される。251 は、口唇の平行する撚糸圧痕と、裏面に 2 条刺突文をめぐらしているものである。

また、1 つはやや大形の突起を有し、その裏面に縄文と竹管による太い粗雑な沈線を配するもの（252～255）、口唇に直交して施文される縄線文と縄文を特徴とするもの（256～258）、口唇に縄文の施文されるもの（259, 260, 262～267）、口唇に直交して縄線文のつけられるもの（261）、竹管様工具の側面による刻みと縄文を口唇に施文するもの（268～270）である。269 は、裏面にも 2 条の縄線文が施文されている。

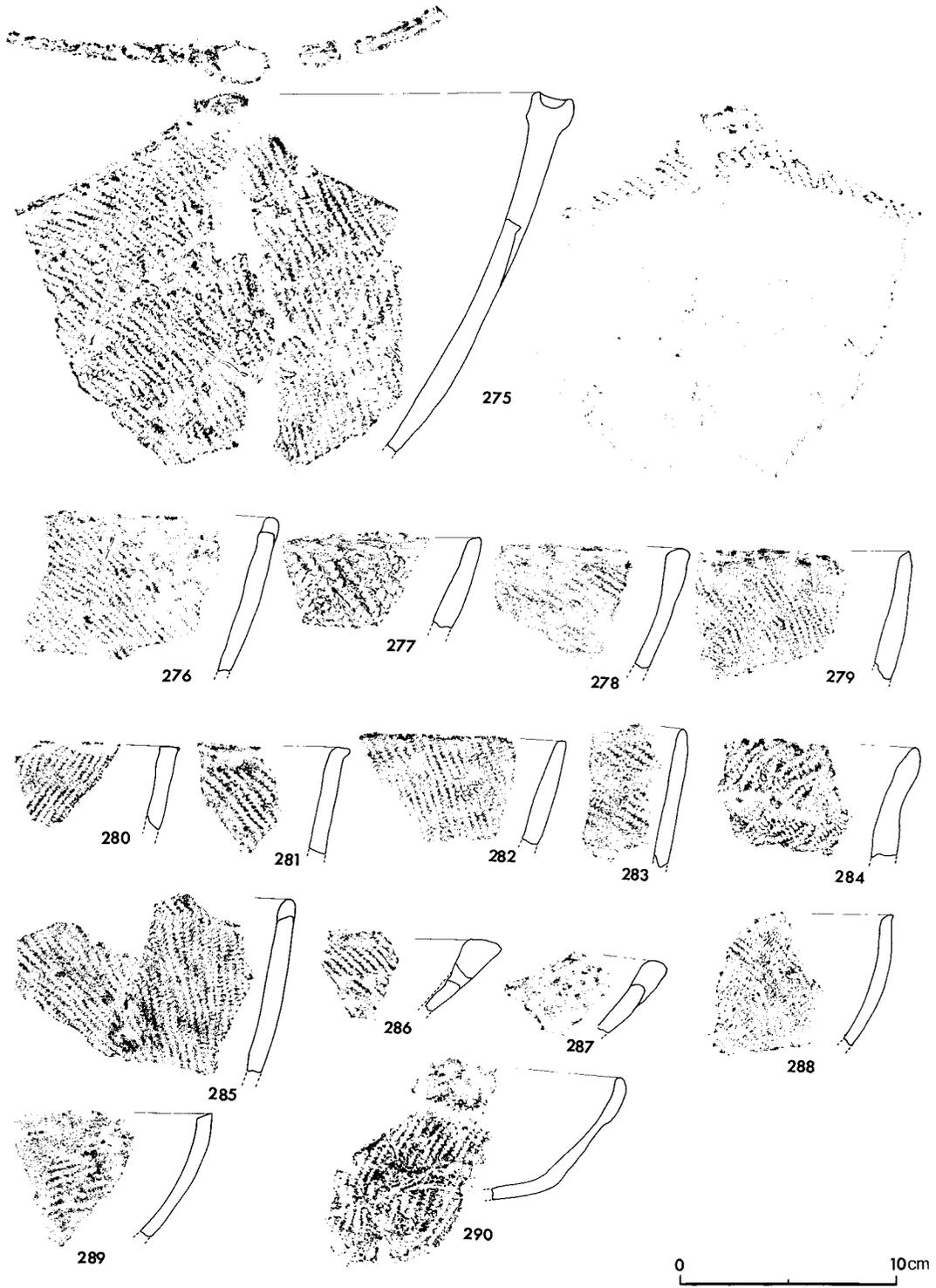
また、271～275 は、いずれも口径の大きく広がる浅鉢形の土器で、4 個の突起を有するものである。271, 274, 275 は、突起頂部を指頭で押捺したもので、口唇および裏面には縄文が施文される。276～290 は、表面の縄文のみを特徴とする一群である。



第 56 图 发掘区出土土器拓影图 (7) (第 III 群)



第 57 图 発掘区出土土器拓影图 (8) (第Ⅲ群)



第 58 图 発掘区出土土器拓影图 (9) (第Ⅲ群)

完形土器では、口縁に小突起を有し、底部に刻みの見られる浅鉢形土器（第27図24，XV-H-24）がある。

本類土器の器形は、深鉢形、浅鉢形、ボウル状に近い浅鉢形土器の三種である。

本類に属するものは、遺構からもかなりの量が出土している。その一つ一つについて説明を加えないが、完形土器あるいは復元完形土器となったものについてのみ簡単に記述する。

第19号ピット出土土器（第26図9）は、現存器高12.5cmの深鉢形土器で、口唇にも縄文が見られる。

第28号ピット出土土器（第26図8）は、器高約12.8cmの浅鉢形土器である。口唇部に縄文を施文し、底面にも縄文が施文される。同じく第26図10は、口径の大きな浅鉢形土器で、口縁がやや波状を呈するものと思われる。第100号ピット出土土器（第27図19）は、口唇に太い円形工具の側面による押捺を行ない小波状を呈する。器面には、縄文を施文しているが、その一部は整形により磨消されている。第180号ピット出土土器（第27図21）は、胴部下半を欠失する深鉢形土器で、口唇に縄文が施文される。

第15類（第35図307，308）

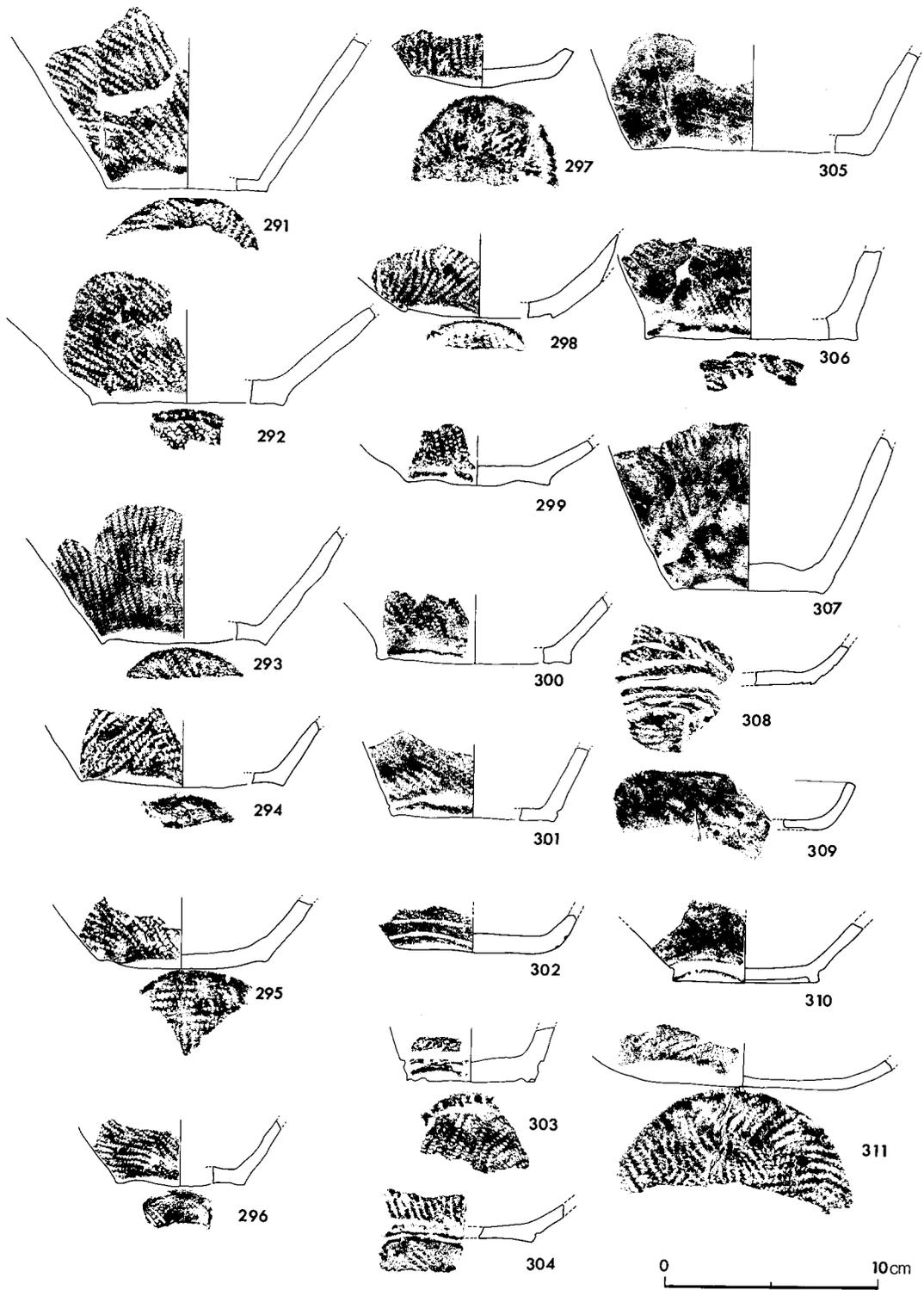
発掘区からは、一片も出土していないが、第154号ピットから出土した2片の同一個体の土器がこの類に入る。

器形は、口縁の形を見ると、円形あるいは舟形とはならず、やや方形を呈するものと思われる。文様は、口唇に円形工具による刻みと撚糸圧痕が見られる。器面には、指頭による押圧と思われる文様をもつ隆起帯をもち、その両側は、縄文を磨り消している。この縄文は、円形工具の先端による刺突により型どられている。

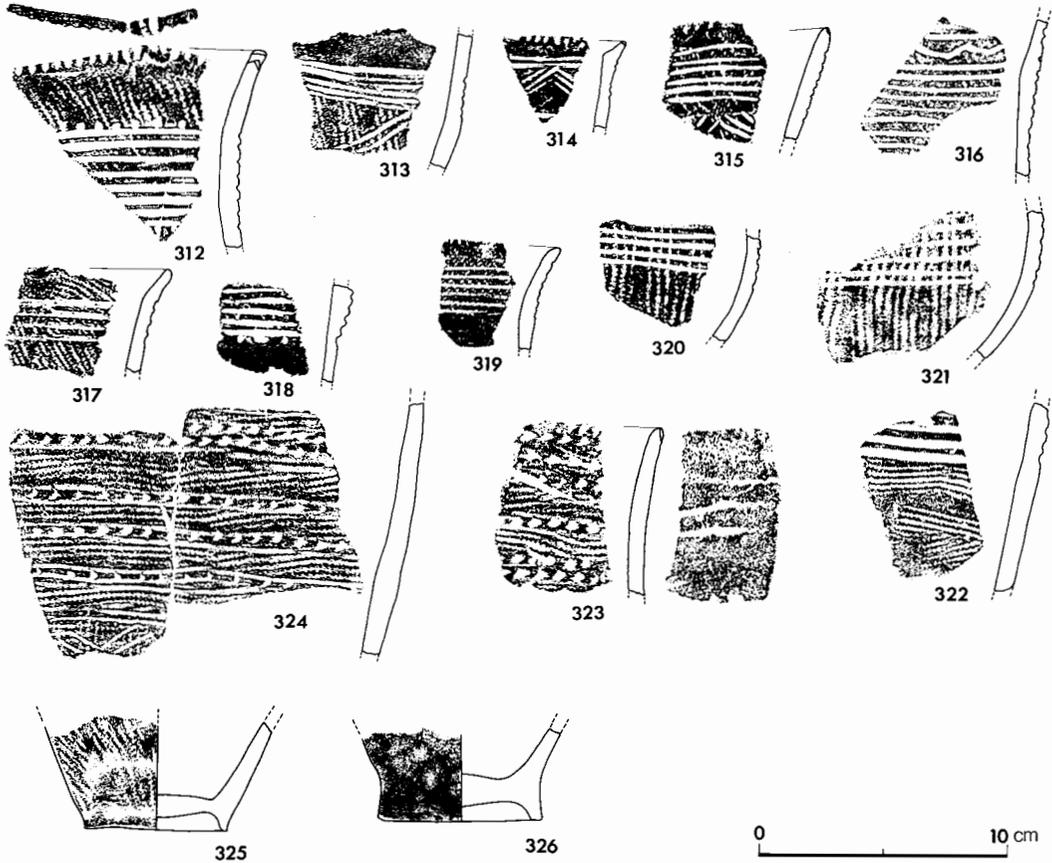
底部（第59図291～311，第26図1，12，第27図13）

291，292は、底の平坦な土器で地文としての縄文のみ施文され、底面にも縄文の見られるものである。292は、浅鉢形土器であろう。293～300は、やや揚げ底気味に作られ、底の中央部が丸味を帯びる形態を示す。299，300を除いて底面にも縄文が施文される。301～303は、胴部から底に移る部分に、1条ないし2条の沈線が見られ、特に303は底にも刻みと沈線、そして縄文が施文される。304は、前述の底部に類するものであるが、沈線のかわりに縄線文をめぐらす。305，307は、胴部下半より無文である。308は、おそらく舟形土器の破片であろう。胴部下半，底面ともに縄文と沈線による文様が見られる。309は、無文の浅いボウル状を呈し、310は、台付の浅鉢である。311は、やはり舟形土器の底部と思われる。

遺構出土のものでは、第1号ピット（第26図1），第46号ピット（第27図13）を除いて、浅鉢形，深鉢形土器の器形を問わず、いずれも底面に縄文が施文される。また底面の形態も平底のものと、やや丸味をおびるものの二者がある。第34号ピット出土土器（第26図12）は、胴部に2本1組の縦走沈線を配し、底面近くで横走する3本の沈線をめぐらす。底面は、十字に交差する沈線に



第 59 图 発掘区出土土器拓影图 (10) (第Ⅲ群底部)



第60図 発掘区出土土器拓影図(11)(第IV群)

より四分分割し、それぞれに沈線による文様を対称的につけている。

第IV群土器(第60図, 図版48B)

続縄文時代に位置することが明らかなものを本群とした。その出土量は極めて少ない。

第1類(第60図312~321, 325)

恵山式土器の概念の中で捉えられるものである。頸部の直立する甕形土器で、口縁には、刻みの見られる小突起を有し、口唇の刻みと、頸部の横走刺突によってはさまれる8条の沈線が見られるもの(312)、横走沈線と鋸歯状沈線の施文されるもの(313~316)、横走沈線を主体とするもの(317~321)などがある。325は、揚げ底の底部である。

第2類(第60図322~324, 326)

後北式土器として捉えることができるものである。沈線によってはさまれる刺突文と縄文を主体

とし、胴部下半には2本1組の沈線による鋸歯状文の見られるもの(324), 324と同様な土器であり、裏面に縄線文の見られるもの(323), 沈線と帯縄文によるもの(322)がある。326は、本群第1類、または第Ⅲ群土器の中においても捉えることができるが、胎土、焼成などから本類とした。

以上、本遺跡出土の第Ⅲ群、第Ⅳ群土器としたものについて、その概略を記してきた。次にこれらの土器が、道央部における編年のなかで、どのような位置におかれるものであるかについて簡単に触れてみたい。

第Ⅲ群土器の編年的位置を求めるのに、最も示唆に富む土器として、第11類とした土器のうちで第67号ピット出土の土器(第32図178)が挙げられよう。この土器は、おそらく台付の浅鉢形(高坏形)を呈するであろうと思われる表裏ともに滑沢をおびた精製土器である。大きな波状口縁を呈し、波頂部に刻みのあるやや発達した突起が見られ、口唇と口縁に沿う沈線および沈線による工字文風の文様が特徴的である。このような土器の発掘調査による資料は、現在のところその報告例は全く知られていない。

本遺跡の第Ⅲ群土器、あるいは他の群の土器とも全く趣きを異にするものであり、その文様・胎土・焼成などから明らかに本州の大洞系の土器を製品として移入したものと考えられよう。この土器の編年する位置は、多くの識者によれば大洞A'式よりやや新らしく、二枚橋式よりもやや古いのではないかとの見方が一般的なようである。^(註)

この土器と他の第Ⅲ群土器がどのような関係にあるかについては、発掘調査時にこの両者が共伴するものであるか否かについて決定しうる証は、全く何ら得られていない。ただ従来の発掘調査による晩期末葉から続縄文期初頭の遺跡から発見されている土器から見ると、この両者は同一時期か、あるいは極めて近接した時期の所産として捉えることができるようである。

たとえば、本遺跡の第Ⅲ群各群土器のうち、第1類土器は、千歳市ママチ遺跡(石川・佐藤1971)に類するものが見られ、第2類土器は、東川町幌倉遺跡(佐藤1966)、妹背牛町メム川遺跡(高橋・野村1972)出土のものに類似するものが見られる。第3類土器は、やや文様の構成は異なるが、円形の刺突を沈線の末端に配する手法は、やはりメム川遺跡の一部の土器に見られ、第5類土器は、大狩部遺跡(藤本1960, 1961)から出土している。第6類土器は、ママチ遺跡、長沼町タンネトウ遺跡(野村1962)に見られ、第7類土器としたものは、北海道の該時期に極めて特徴的な舟形を呈する土器で、前述の遺跡のほかにも栗山町鳩山遺跡(野村1964, 1965)の道央部の例を始め、白糠町オンネチカップ遺跡(沢・岡崎1966)など道東域にも広く見られる。第10類、第12類以降の土器も前述の遺跡から一般的に発見されている。

前述の各遺跡は、いづれも晩期末葉から続縄文期初頭に位置する編年を有するものであり、その現状は、タンネトウL式土器→大狩部式土器への移行で捉えるのが一般的なようである(吉崎1965)。そして晩期後半の土器は、ともすればタンネトウL式土器として一括して捉えられる傾向にあった。

しかし、極めて時間的・空間的に近接しているタンネトウ遺跡、ママチ遺跡、そして本遺跡第Ⅲ

群土器の三者についてのみ比較検討してみた場合、いわゆるタンネトウ遺跡出土の一群には、道南地方の大洞C₂-A式土器と近い関係にある日ノ浜式土器の共伴が見られるところより、その位置するところは自ずから決定することができよう。そして、本遺跡第Ⅲ群土器は、その共伴する大洞系の土器によって大洞A'式と二枚橋式の間位置づけられることは動かせない事実と言えよう。

このような事実からママチ遺跡出土の土器を見ると、タンネトウL式土器に見られるような工字文風の文様と刻みを有する貼瘤文の組合せを有する土器、太い工具による波状沈線を有する土器などが見られるとともに、沈線による変形工字文を形づくる本遺跡第1類土器に近似するものの存在も見る事ができる。しかし、ママチ遺跡出土のものには、本遺跡第2類、第5類に見られるような土器が存在しないこと、本遺跡第9類とした太い工具による波状沈線の出土頻数が本遺跡より多く、よりタンネトウL式土器に近い要素が見られる。このように概観した結果に基づいての大胆な編年を組み立てれば、道央部においてはタンネトウL式土器→ママチ遺跡出土土器→本遺跡第Ⅲ群土器といった変遷をたどるものと推測することができようか。そして、新冠町氷川遺跡（愛下・橋本ほか1975）に見られるような、本遺跡第2類、第11類を主体とする土器と、第11類の工字文がより北海道的なものへと変化したことをうかがわせる一群の土器の定着へと変化していくのかもしれない。

以上のように見ると、本遺跡第Ⅲ群土器については、従来その位置と性格を明確にされていなかった一群として理解することができ、本報告の中では便宜的に「西岡式土器」と仮称しておきたい。ただこの「西岡式土器」の中にも第1類、第6類土器と第2類、第5類土器のようにやや趣きを異にする土器が見られ、今後さらに検討を加えなければなるまい。

そして、さらに問題となってくるのは、「西岡式土器」にある程度共通する要素を有する土器を出土する幌倉沼遺跡、メム川遺跡出土の土器の扱い、太い波状の沈線土器を主体とする鳩山遺跡第3地点出土の土器、あるいは続縄文時代初頭に位置づけられている太狩部式土器、氷川遺跡出土土器との関連などについてもタンネトウL式土器、ママチ遺跡出土土器などとともに総合的に比較検討を加えなければなるまい。前述の各遺跡出土土器には、それぞれにわずかながら組成の変化が認められるが、それらの時間的、空間的な関係について今後鋭意検討を加えていきたい。

本報告の中にあっては、結論ばかりを先走り、説得力の十分な説明を加えられなかったが、前述の問題なども含めて「道央部における縄文晩期終末から続縄文初頭の諸問題—特に仮称「西岡式土器」を中心として—」（仮題）とでも題する駄文を一年以内に発表して、問題解決の一助にしたいと考えている。

（加藤 邦雄）

註：この土器については、磯崎正彦、伊藤玄三、富樫泰時、橘善光、鈴木克彦、野村崇、森田知忠、福田友之の諸氏より種々有益なる御教示をいただいた。

第2節 土製品について（第61図，図版49A・B）

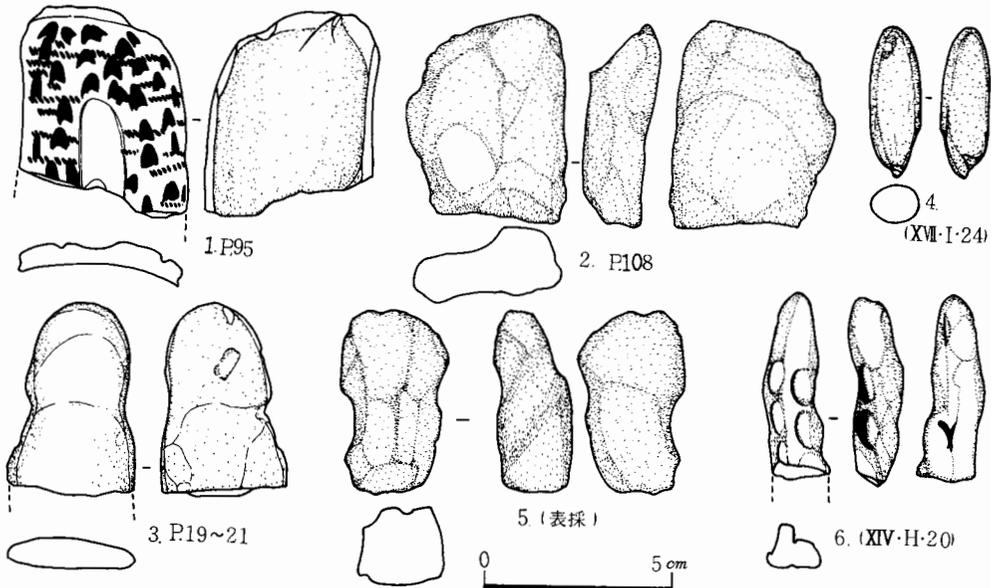
土製品ないし土製品様のものは、遺構と発掘区から各々3点出土しているが、第95号ピット出土例を除いては、土製品というよりは、土器製作時における巻上げ用の粘土紐を焼いたものである。

第95号ピット出土例（第61図1）は、下部を欠失しているが、現存部の平面形は、左図面左縁が、やや内反り気味、右縁がやや外反り気味で、上端は丸くカーブしているものである。断面形で見ると表面（左図面）は中央がやや盛り上がるようにカーブし、裏面は表面と同じように中央部がややへこむようにカーブしている。厚さは5 mm程で薄い。表面には、先端がややささくれだった半截竹管を用いて、中央部を除く一面に刺突が施されている。図で幅広く示された刺突文は、竹管の外面を押捺したもの、左側などにある幅の狭い刺突文は竹管の側面を押捺したものである。この竹管の刺突を施文後に、横に細い縄文原体を押捺している。中央部は指頭によって勾玉形状にへこみがつけられており、その下端には、直径5 mm程の貫通する丸穴が開けられている。

文様のモチーフからいくと、前述した第Ⅲ群の土器に特徴的に認められるものであるが、この資料が果して、土器の一部なのか、あるいはそれ自身土製品として作られたものか、そして土製品であれば、どういう性格のものかは、これだけの資料からは判然としない。

さて、粘土紐を焼いた資料は5点出土している。いずれも、粘土を掌中で握ったり、丸棒状にこねたもので、挿図では明瞭に示しえなかったが、図版に示した通り、爪痕や指紋がついている。

第108号ピット出土例（第61図2）は、一番大きいもので、左図面上部と下端は剥脱しているが、側面図に示した所は掌中に握ったような形態で、左図面左下と上の左側に指紋が残っている。下の



第61図 土製品実測図

は、大きさからいって親指かもしれない。

第 19～21 号ピット出土例（第 61 図 3）は、糸巻の形をした扁平なもので、左図面側はなめらかであるが、右図面側は平坦で、小礫とか砂の押圧痕が所々ある。

発掘区出土例（第 61 図 4～6）の内、4 は粘土をこねて、断面楕円形に丸くこね上げた資料である。5 は、掌中で握ったもので、両側面に指の太さ程のへこみがある。全体の厚さも手で握って、丁度いい大きさである。6 は、4 と同様に丸棒状にこね上げたものであるが、図示した三面に、各々 3 個ずつ縦に並んで、明瞭な爪痕が深く残っている。また、右図面上部には指紋の一部がついている。爪痕の大きさは長さ 1 cm 程で小さく、焼成時に多少縮少していると思われるが、親指以外の爪痕かと思われる。

以上の資料は、焼成からいってその伴出時期は、Ⅲ期の所産かと思われるが、これらは焼けているとはいえ、形態上でも特にまとまりはなく、あくまでも土器製作時に作る粘土紐が、たまたま焼けたものと解するのが、一番妥当な見解かと思われる。しかし、後述する黒耀石製の棒状原石とも関連して、今後注意すべき資料かもしれない。

（上野 秀一）

第3節 石器群について

本遺跡からは、遺構内から93点、発掘区から276点に及ぶ石器群が出土している。石器の器種は、石鏃、石銛および石槍、ナイフ状石器(縦形石匙、靴型石器)、各種の削器と搔器、フレーク・コア、両面体石器、黒曜石棒状原石、石斧、石錘、擦石、各種の砥石、石鋸、石皿、台石、敲石など多様である。これらの石器群は、そのほとんどは、器種型式から判断して、Ⅲ期に伴うものであるが、幾つかⅠ期の所産の資料がある。ただし、Ⅱ期の資料については、本遺跡においては斯期のもと断定できるほど型式学的に明確なものは少なく、抽出することが困難であった。

なお、石器全点の計測値と石質に関しては、第6、7表に一覧表にして示した。

1 石 鏃 (第62図1~21, 23, 24, 図版50, 第37図1, 5, 8, 21, 23, 第38図28, 31, 37, 41, 第39図51, 53, 図版38, 39)

本遺跡発掘区より出土した石鏃は、すべて黒曜石製のもので、有茎石鏃6点、柳葉形石鏃1点、無茎石鏃14点の計21点である。素材面の残っているものでみると、素材は縦長剥片が7例で、横長剥片は、わずかに1例であった。

有茎石鏃は全体に逆刺の弱いものがほとんどである。1は、縦長剥片から製作されたもので、茎部先端を欠損しているが、全長5.9cm、尖頭部の指数は3.5と狭長なものである。入念な両面加工で、尖頭部は側縁にややふくらみを持たせた形に仕上げている。2は、逆刺の抉りがほとんど認められず、茎部は正三角形である。3は、尖頭部先端、茎部ともに欠損している。2、3共、尖頭部の指数は2.0と2.5でやや長い。

4は、尖頭部指数が1.2とかなり幅広い形態で、太くて長い茎部を有することから銛先の可能性も考慮する必要があるかもしれない。a面右の逆刺が小破損後に、焼けている。5は、尖頭部先端を大きく欠損しており、尖頭部のa面右側が少し抉れていて、全体として不整形である。また、この部分は刃つぶれが著しい。また、b面中央にある剝離の稜線は使用により摩滅しており、短軸方向に散発的な擦痕が認められた。6は、尖頭部を半欠しており、形態は不明であるが、大形のものと思われる。逆刺は非常に弱く、尖頭部から茎部へとなだらかに続いている。7は柳葉形で、胴最大幅は下半部にあつて、不明瞭ながら茎の作出が認められる。素材は、横長剥片で、打面がa面左中央縁に残っている。全体にやや粗い加工で、a面右下部縁とb面左上部および右下部縁はやや背の高い加工である。

無茎石鏃は、尖頭部の指数が1.5になる17のような幅広いものを除くと、全体に1.8~2.3の間に集中し、尖頭部が長い例が多い。8は、先端部を欠損しているが、やや厚味があり、基底に浅い抉りが入っている。9は、両面中央に幅広く縦長剥片の素材面を残し薄い。基底の抉りは浅く、入念な加工である。10は、a面左側縁を一部欠損している。基底の抉りはやや深い。11は、a面の一部に原石面、b面中央に幅広く縦長剥片の素材面を残している。a面右逆刺を欠損しているが、基

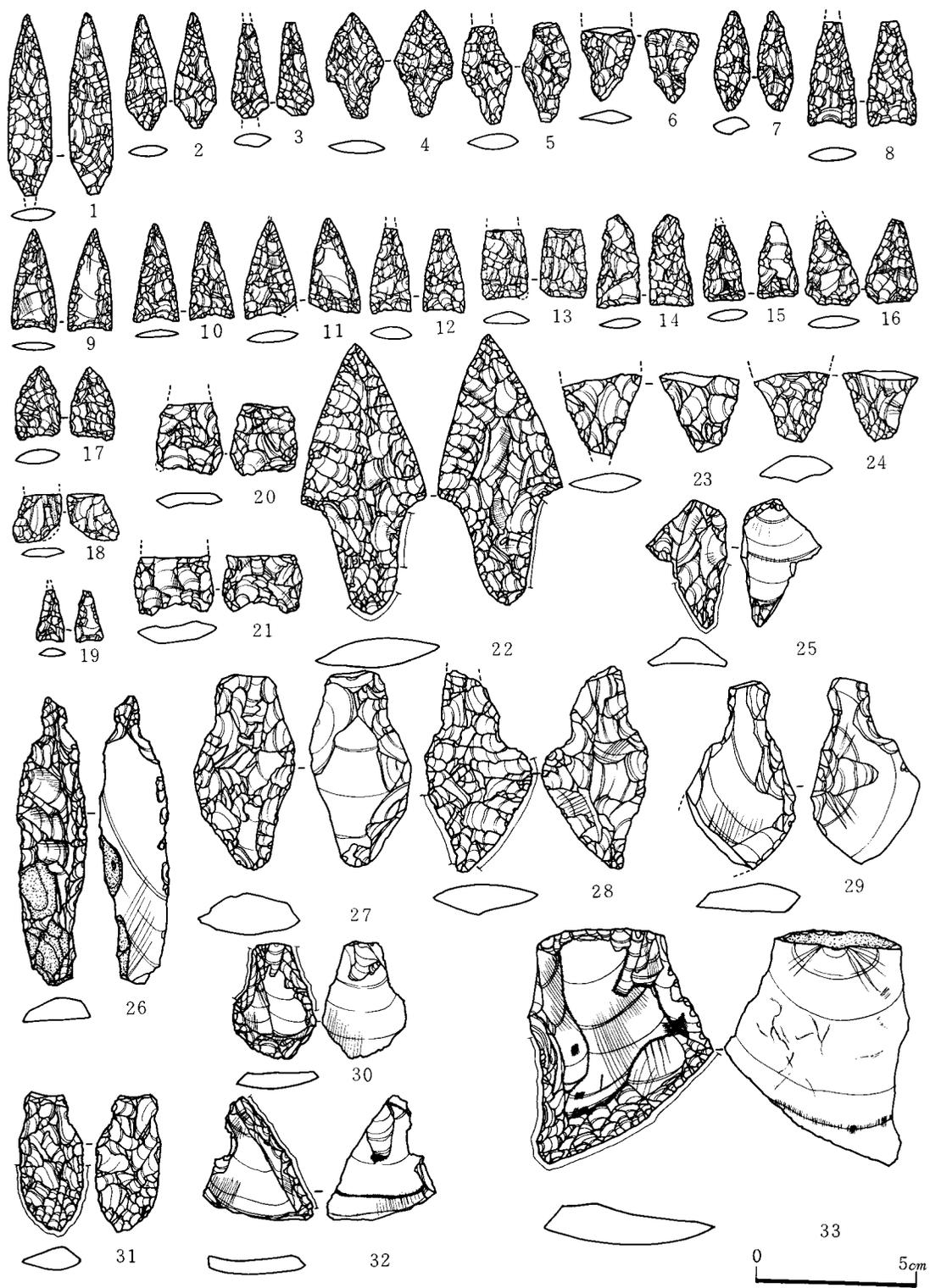
底の抉りはやや深い。側面観は、ややカーブしている。12は、先端が欠損している。全体に厚みがあり、基底の抉りは、非常に浅いものである。13は、尖頭部を大きく欠損しており、欠損後強度に焼けている。基底の抉りは浅い。14は、全体に大まかな加工で、尖頭部には鋭さが感じられない。基底は平らである。15は、今迄のに比べやや小形で、側面観が幾分かカーブし、b面中央には縦長剥片の素材面を幅広く残している。基底は平らである。16は、尖頭部の指数が1.8とやや幅広で、大まかな両面加工である。b面中央に、縦長剥片の素材面を残している。逆刺の部分は短いながら一つの面を作っており、全体に不整の五角形を呈している。先端を小破損している。17は、全長の割に幅があり尖頭部の下半部まで幅広で、全体に五角形に近い形態を呈している。基底の抉りはやや浅い。18は、尖頭部とa面右逆刺部分を大きく欠損している。逆刺は丸味がある。19は、全長約1.9cmと非常に小形で先端を小破損している。側面観はややカーブしていて、基底には抉りが入っている。

20、21ともに尖頭部の上半部を欠損しているが、かなり大形のものであったと思われる。21の方は、基底の抉りが深い。大きさから判断すると、この2点は石銚の機能を持ったものかもしれない。

遺構から出土したものは、有茎石銚4点、無茎石銚7点、柳葉形銚1点の計12点で発掘区同様、全例黒曜石製である。第44号ピットのS-1(第38図28)は、発掘区の第62図1とほとんど同形で狭長な形態を呈するが、前者の方が、断面にやや厚みがあり、尖頭部側縁のふくらみは少ない。尖頭部先端と茎部を欠損している。石質も両者共に赤色の混じった黒曜石である。第4号ピットのS-11(第37図8)は、第62図3に近いが逆刺はより強く、全体に薄い。茎部を欠損している。第2号ピットのS-1(第37図5)は、断面がa面側に盛り上がった半月形を呈する。入念な両面加工で素材は判別し難い。逆刺はあまり強くなく、太い茎を有する。第52号ピットのS-1(第38図31)は、横長剥片を素材としたもので、a面右上部縁には切断面が残り、また全体に側縁は背の高い加工で、尖頭部から茎部にかけてのエッジは摩滅している。逆刺は弱く、茎部先端を小欠損している。

無茎石銚は、全体的特徴として、入念な加工で基底に浅い抉りがあり、外側にふくらんだ尖頭部を有するものである。第54号石組のS-32(第37図1)は、尖頭部が五角形に近い形態で、基底の抉りは、幅広でやや深い。入念な両面加工で、素材は不明である。第3号ピットのS-1、第26号ピットのS-1、第104号ピットのS-2、第107号ピットのS-1(第37図6、21、39図51、53)は、両面ないしb面中央に幅広く素材面を残す薄形のもので、第107号ピットの横長剥片を除く3点は、縦長剥片から作られたものである。第107号ピット例は、発掘区の第62図9の例と類似し、両面に素材面を残しており、基底の抉りや厚み、加工なども似ている。第3号ピットのS-1は、側面観がb面側にややカーブしている。第26号ピットのS-2、第104号ピットのS-2は、両面に素材面を残し、側縁加工のみの例である。

第33号ピットのS-1(第37図23)は、a面側が盛り上がった半月形の断面を呈し、厚みがある。基底の抉りは、浅いものである。横幅が広く、尖頭部の指数1.4である。第95号ピットのS-1(第38図41)は、全長4.5cm、最大幅2.0cmとかなり大形である。入念な両面加工で素材は不



第 62 図 発掘区出土石器実測図 (1) (石鏃・ナイフ状石器)

明であるが、基底の抉りは深い。発掘区の第 62 図 20, 21 は上部を大きく欠損しているが、大きさなどの点で、同種のものかと思われる。いずれも、石銛先の用途を考慮せねばならないかもしれない。柳葉形鏃は、第 77 号ピット（第 38 図 37）の 1 点のみである。a 面側に盛り上がった半月形の断面を呈し、a 面は入念な加工であるが、b 面に原石面を残し、加工も rough である。

なお、発掘区の第 62 図 4～6 例を除いては、瀬棚町南川遺跡の報告（土田・上野 1976）で示した通り、その形態と組み合わせから縄文晩期末から続縄文期初頭（本遺跡のⅢ期）の所産かと思われる。また、発掘区の第 62 図 20 と 21, 第 95 号ピットの S-1 などは、前述した通り大きさからいって、石銛先としての用途を考慮せねばならないかもしれない。

2 石銛および石槍（第 62 図 22, 図版 50, 第 37 図 9, 第 38 図 32, 図版 38）

石銛ないし石槍と思われるものは、発掘区から 1 点、遺構から 2 点出土している。石質はいずれも黒耀石である。

発掘区から出土した第 62 図 22 は、入念な両面加工で、左右対称の整った形態である。尖頭部の指数は、1.25 と幅広で、側縁にやや丸味を持たせた形である。太くて長い柄部を有し、両面の右側に刃つぶれがみられる。柄部基底は、やや尖っている。全体に大形で尖頭部が広いことから、第 62 図 28 例と同様のナイフ状石器の可能性もある。

遺構から出土した 2 点の内、第 4 号ピットの例（第 37 図 9）は、上部を欠損しているため、本来の形は不明であるが、入念な両面加工で、右側のみ弱い逆刺がある。柄部は先端が尖っている。欠損後、全体に軽く熱作用を受けている。第 62 号ピットの S-2（第 38 図 32）も入念な両面加工で、素材は不明であるが、逆刺はなく。尖頭部先端を欠損している。柄部 a 面右縁には細部加工が施されている。大形の石鏃とも考えられる。

3 石 錐（第 62 図 25, 図版 50, 第 39 図 52, 図版 39）

25 は、やや部厚い縦長の剥片から作られた有柄石錐である。a 面下部に背の高い加工を施し、b 面下端から上に短い狭長の剥離を 3 本入れ、刺突部分を作成している。刺突部分の断面は三角形を呈する。なお、b 面のバルブは negative である。黒耀石製。

第 104 号ピットの S-1（第 39 図 52）は、a 面右側に原石面を残し、半両面加工で、a 面下部と b 面全面に入念な加工を施し刺突部分を作成した、有柄の錐である。b 面上部に一次剥離面が残っており、やや幅広の縦長剥片から作られたものであろう。上端と a 面左側縁に刃つぶれが認められる。

4 ナイフ状石器（第 62 図 26～33, 図版 50, 第 37 図 12, 第 38 図 29, 図版 38）

発掘区からは、計 8 点のナイフ状石器が検出されている。

26 は、小さいつまみと縦に長い刃部を有するもので、いわゆる縦形石匙と呼ばれるものである。入念な片面加工で、つまみ部分は b 面側にも加工があり、a 面右側縁の加工の方が背が高い。刃つ

ぶれは a 面右側縁に著しい。石質は、硬質頁岩である。

27～33 は、いわゆる「靴型石器」といわれるものか、それに近い形態を呈したナイフ状石器である。27, 28, 31 は、両面ないし半両面加工で、いずれも太い柄を有し、他端に尖頭部を作出しているものである。27 は、半両面加工で、b 面側は、柄部と右側縁にのみ粗い加工がある。素材は、部厚い縦長剥片である。a 面右側縁が左に比べて背の高い加工であり、刃つぶれも、より右の方が著しい。側面観は、a 面側にカーブした形である。尖頭部先端は、丸く鋭さはない。瑪瑙質頁岩製である。28 は、両面加工で、やや幅広の刃部をもち、尖頭部先端は鋭く a 面右には、やや丸みのある突き出しを作出している。柄部と刃部の境には浅いくびれが認められる。柄部上端を一部欠損する。黒曜石製。29, 30, 32, 33 は、側縁加工で、太いつまみないし柄を有している。31 も、両面加工で太い柄と丸みを帯びた刃部を有し、全周に入念な加工を施している。a 面右側縁は背の高い加工であり、刃部に刃つぶれがみられる。なお、柄部上端は原石面である。29 は、泥岩製で、つまみがあり、a 面両側縁と b 面つまみ付近に加工がある。素材は横長剥片で、b 面にバルブが残っている。刃部下端は欠損している。30 は、太い柄と丸い幅広の刃部がある。a 面側縁全周にやや背の高い加工がある。a 面中央に走る稜線は、少し摩滅しており、両側縁の刃つぶれが著しい。黒曜石製である。32 は、三角形の剥片の側縁を刃部として加工し、他方の上部にくびれを入れたものである。刃部の刃つぶれは顕著で、b 面のリングの稜線は摩滅している。33 も側縁加工で、a 面左側縁から下(刃)縁にかけて背の高い加工が施されている。a 面右側縁の小剥離は散発的で使用痕かと思われる。大形で、a 面左下に尖頭部を作出している。a 面上部はやや細くなっており柄部としたものであろう。a 面左側縁から下縁にかけての刃つぶれが著しい。また、a 面中央の剥離稜線は著しく摩滅しており、傷痕もみられる。b 面には全面に肉眼でも判別できるほどの不連続な短い傷痕が認められる。

遺構からは、2 点検出されているが、ともに黒曜石製である。第 9 号ピットの S-1 (第 37 図 12) は、半両面加工で b 面に幅広く横長剥片の素材面を残している。上部を欠損しているため形態は不明であるが、全体に a 面左に片寄った形の尖頭部を有することなどから、ナイフ状石器の刃部と推定されよう。第 50 号ピット (第 38 図 29) の例は、a 面右側縁を大きく欠失するが、左側縁上部に深い抉りを入れた石器である。a 面上部と、b 面上部から右側縁にかけて加工がみられるほかは、両面に縦長剥片の素材面を幅広く残している。刃つぶれは、a 面左側縁から上端にかけてと、b 面右側縁に著しい。また、a 面右を欠損後、b 面左側縁に細かい使用による刃こぼれが認められる。

なお、これらのナイフ状石器は、発掘区の第 62 図 26 例を除いて、瀬棚町南川遺跡の分類に従えば、縄文晩期末から続縄文期初頭のタンネトウ L 式～大狩部式の段階 (I 期) (土田・上野 1976, p 156) に伴うものと同形で、典型的な靴型石器になる段階の前のタイプである。26 例は、縄文早期～前期 (本遺跡の I 期) に伴ったものであろう。

5 搔器 (第 64 図 63～88, 102, 155, 156, 図版 51, 第 37 図 2, 7, 10, 15, 24, 27, 第 38 図 33, 34, 49, 第 39 図 57, 66, 図版 38, 39)

発掘区からは、黒曜石製26点、硬質頁岩製3点の計29点、遺構からは11点出土している。後述する削器と同様に、加工・形態の点で大きく3つのタイプに分類することができる。

I：形態はほぼ円形で、側縁の半周ないし全周に背の高い二次加工のあるもの。加工の部位によって、次の4種に細分される。

- a) a面下半部のみに加工が施されたもの。
- b) a面上下部に加工が施されたもの。
- c) a面のほぼ全周とb面の一部に加工が施されたもの。
- d) a面下部とb面上部に加工が施されたもの。

II：形態はコーナーを持つ四角形で、側縁の二～四縁に背の高い二次加工のあるもの。加工の部位により、さらに下記の6種に細分される。

- a) a面の下部と左右側縁にかけて、ぐるりと加工が施されているもの。
- b) a面左側縁とb面左側縁から下部にかけて加工のあるもの。
- c) a面下部とb面両側縁に加工のあるもの。
- d) a面ないしb面の下部にのみ刃部を作出したもので、両側縁は切断面か原石面で、ほとんど加工のないもの。
- e) a面の左側縁から下部にかけてと、b面の両側縁の上部に若干加工のあるもの。
- f) a, b両面の一側縁に、各面部位を違えて加工のあるもの。

なお、この細分の内a)～c)は結果的に三縁にわたって二次加工が施された例で、基本的に同一タイプと思われる。同様に、d), e)の2種もL字状に二縁に加工があるもので、同種類のものである。

III：縦長剥片の一端に背の高い二次加工を施したもの。

Iタイプ

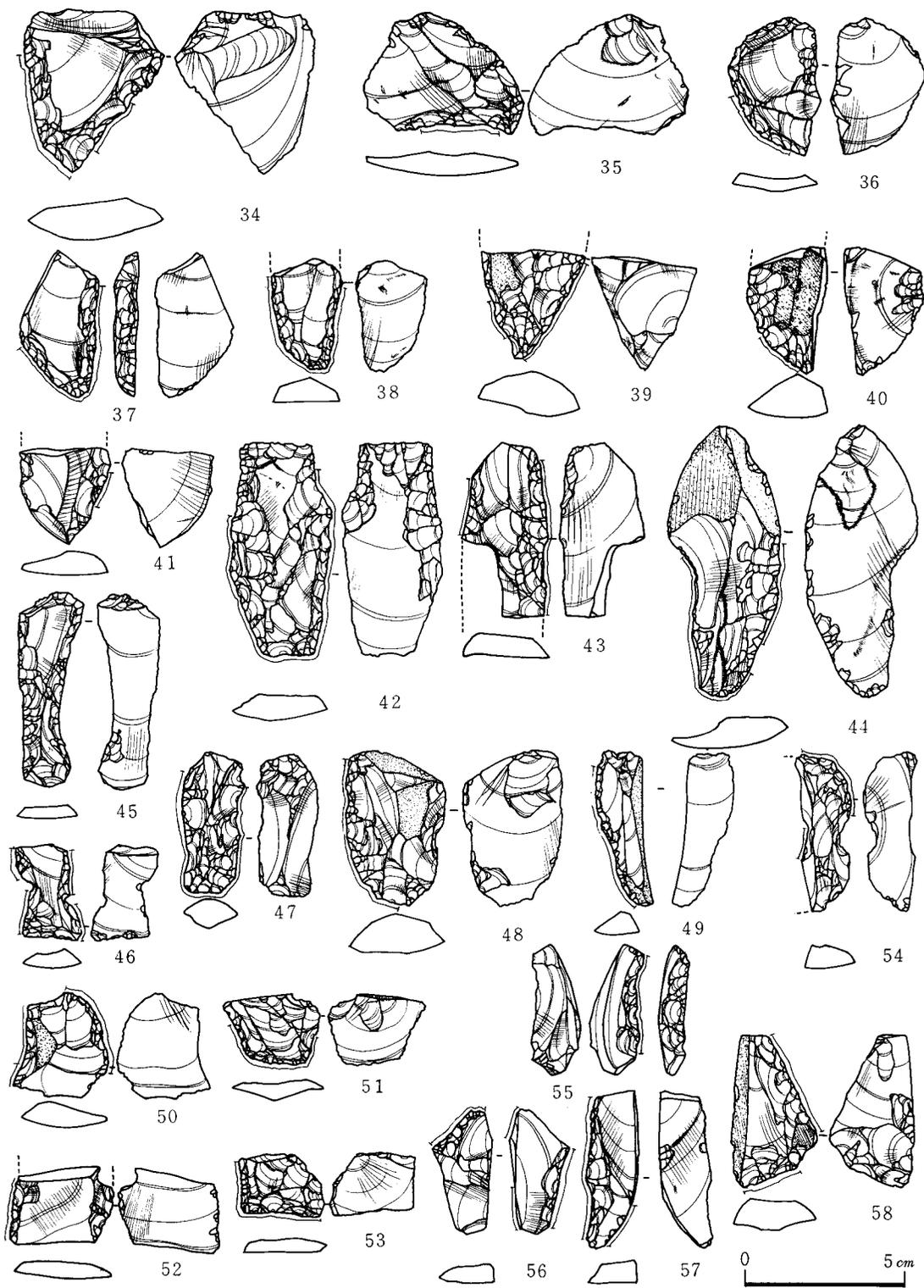
a) 70, 71, 73, 76～80の8点で、素材はすべて寸の短い剥片である。

71, 73の2点は上部を欠損しているが、73は欠損による切断面に、b面側からの使用による微細な剥離が認められる。a面に原石面の残っているものは76, 78, 79の3点であった。77, 80は、全面に軽い熱作用を受けているが、加工は焼けた後に入れたものである。77, 78, 80は、幅のある背の高い加工で、70, 71, 73は、幅が狭くて背の高い加工である。76, 79はやや刃角の浅いものである。

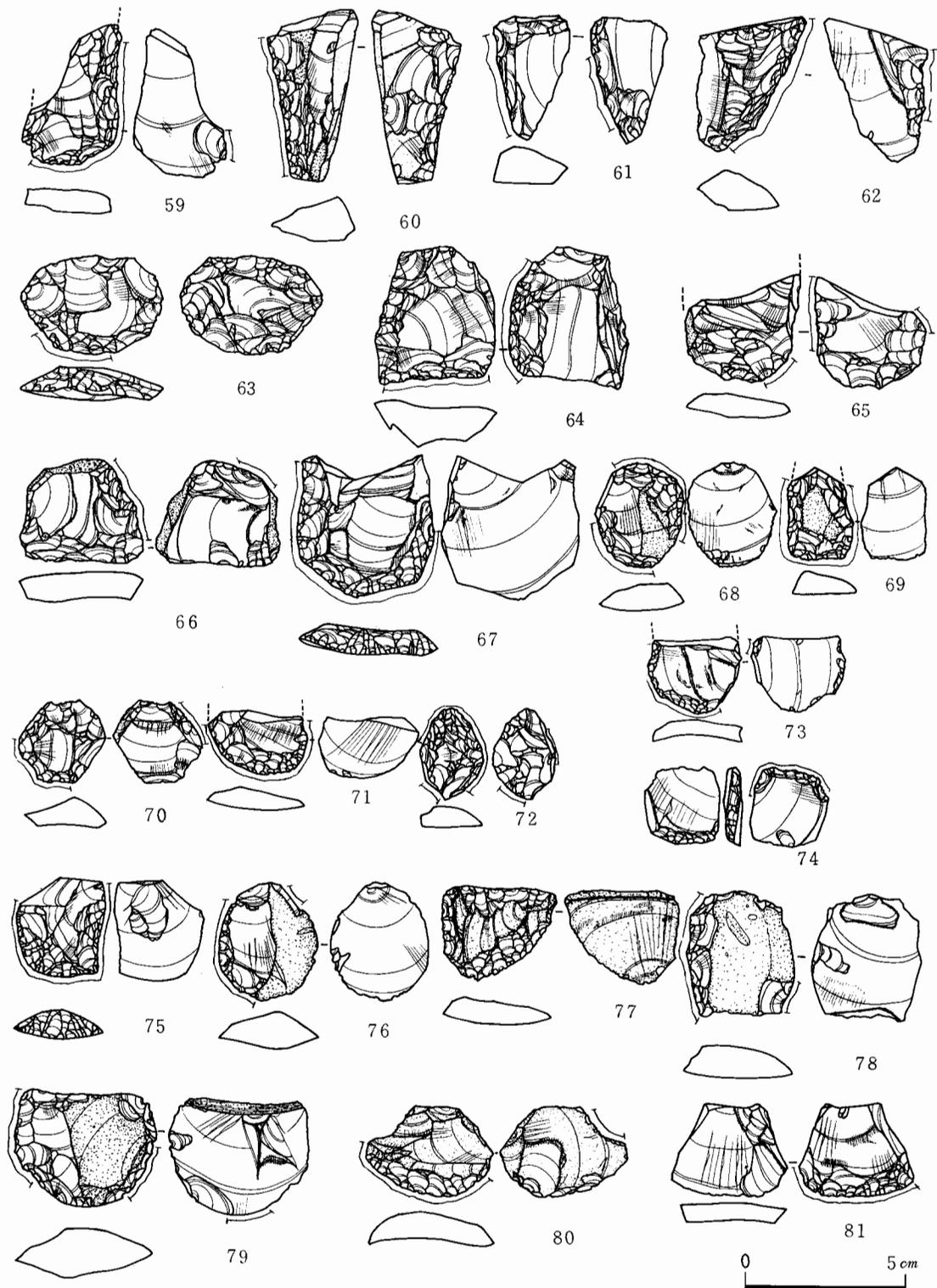
b) 68の1点のみであるが、素材は寸の短い縦長剥片である。a面中央に原石面を残し、幅のある背の高い加工が施されている。a面左側縁上部に切断面がある。b面上部のバルブ付近は使用により摩滅している。

遺構からは、第41号ピット(第37図27)の1点が出土している。寸の短い剥片から作られたもので、加工は、a面上部と下部に剥離が入っているが、下部の方が刃角は高い。左側面は切断面であるが、細かな使用痕がある。また、右側面は打面であるが、ここにも剥離が入っている。

c) 72の1点のみである。b面の加工は粗いが、ほぼ両面加工である。a面左側縁上部に切断面がある。刃角は高く、素材は横長剥片である。



第 63 图 发掘区出土石器实测图 (2) (削器)



第 64 图 发掘区出土石器实测图 (3) (削器·搔器)

d) 63 は、寸の短い縦長剥片から作られたもので、全体に大まかな加工を加えたのちに、a 面下部と b 面上部に刃部を作出したものである。刃角は高く、断面も厚い。

II タイプ

a) 67, 69, 75, 84 の 4 点が発掘区から出土している。そのうち、67, 69, 84 の 3 点が欠損しており、原石面を残すものは 69 の 1 点である。素材は、縦長と寸の短い縦長剥片である。全点、入念な加工が a 面左側縁から下部、右側縁へとぐり施されたもので、特に下部刃部の刃角の方が左右側縁よりも高い。

遺構からは、第 16 号ピット (第 37 図 15)、第 33 号ピット (第 37 図 24)、第 67 号ピット (第 38 図 34) から各 1 点ずつ出土している。15 は、寸の短い剥片から作られたもので、a 面の左側縁から下部、右側縁にわたって入念な加工を施し、刃角は高い。a 面中央には幅広く原石面を残している。b 面は、使用により光沢がなくなるほど摩滅していて、不連続な傷もみとめられる。24 は、厚みのある剥片から作られたもので、a 面中央に原石面を残している。a 面のほぼ三周にわたって直角に近い、背の高い加工が施されており、三縁とも使用による刃つぶれがあるが、特に両側縁のものが著しい。34 は、全面に強度の熱作用を受けているため、素材の種類・加工などは判別し難い。

b) 74 の 1 点のみで、素材は不明であるが、a 面下部縁、b 面上部縁に背の高い加工、a 面右側縁の切断面に両面からの剥離が入っている。

c) 65 は上部が欠損しているが、切損面には細かい使用痕が若干ある。a 面左側縁に原石面が残る。加工は、a 面全面に大まかな加工が入り、下部を細部調整している。また、b 面側は左側縁から下部、右側縁へとつづく加工が施されている。

遺構から出土した例は、第 133 号ピット (第 39 図 57) の 1 点である。硬質頁岩製で、寸の短い剥片を素材とし、a 面右側縁と上端には原石面を残している。a 面左側縁下部から下部縁にかけて、やや背の高い刃部が作出され、また b 面右側縁にも浅い加工がみられる。

d) 81, 83, 85, 87, 88 の 5 点で、81 は、b 面側に加工があるが、ほかは a 面側である。

81 は、両側縁が切断面で、刃部は上部から両側縁の下端まで作出されている。上端には幅広い打面があるが、原石面のままである。83 は、打面と a 面左側縁が原石面で、刃部は下端に施されているが、a 面右側縁にも浅い剥離が入っている。なお、a 面上端と左側縁および b 面の剥離は、直接刃部作出の剥離とは関係はない。85 は、上下端に、刃角の高い加工があるが、いずれも刃縁は concave している。a 面左は切断面、右は原石面と打面が残っている。刃縁の状態からみると削器の可能性もある。

87 は、素材が部厚い縦長剥片である。素材の長軸一側縁、a 面下端に刃部作出のための幅広で背の高い剥離があり、a・b 両面の上部には、上端の幅広い原石面からの剥離が入っている。両側縁は切断面であるが、この切断は、b 面右側縁の狭長な剥離を除いては、切断面ですべての剥離は切られており、すべての加工を入れた後に切断されている。なお、a 面右の切断面は、上部に打点が残っている。88 は、素材がやや幅広の縦長剥片で、その下端に背の高い加工がある。両側縁は、やはり切断面である。なお、85, 87, 88 の石質は、硬質頁岩である。

遺構からは、第98号ピット(第38図49)、第184号ピット(第39図66)で各1点出土している。49は、a面下部に背の高い刃部を作出している。a面左側縁は刃部作出後に入った切断面、下部右は刃部作出前に入った切断面である。上端には原石面を残している。66は、薄く扁平な剥片から作られたもので、b面下部と右側縁下部に刃部作出の剥離が入っている。刃角はあまり高くない。上端とb面左側面上部は切断面であるが、左側面のものは剥離後に切断されたものである。

e) 66の1点のみであるが、素材は寸の短い剥片で、断面形はやや部厚い。加工は、a面右側縁から下部にかけてとb面の上部、そして下端に若干施されている。b面両側縁と上端に原石面が残っている。

遺構出土のものは、第60号ピットのS-1(第38図33)の1点である。縦長剥片から作られ、b面左側縁から下部にかけてやや背の高い加工が施されている。使用による刃つぶれが認められる。なお、b面右側面は切断面であるが、細かい使用痕がある。

f) 64, 86, 155, 156の4点である。64は、部厚い剥片から作られたもので、a面下部縁に背の高い剥離があり、a・b両面左側縁にも加工が入っている。a面左側面は切断面である。b面の右側縁の稜線は、かなり激しく摩滅している。86は、b面下部に背の高い剥離が入っている。a面には右側縁から下部にかけて浅い剥離が入っている。なお、上部は切断面であるが、細かい使用痕が認められる。加工のある部分の刃こぼれと、両面の摩滅が著しい。

155, 156は、小形で寸の短い剥片を素材としたものである。155は、b面下部に短い背の高い剥離が入っており、a面上端は切断面で、不規則な小剥離がある。156は、b面上端の打面に原石面を残しており、b面下部に背の高い剥離が入っている。b面左側縁は切断面で剥離が若干入っている。また、a面には、左側縁に大きい剥離がある。

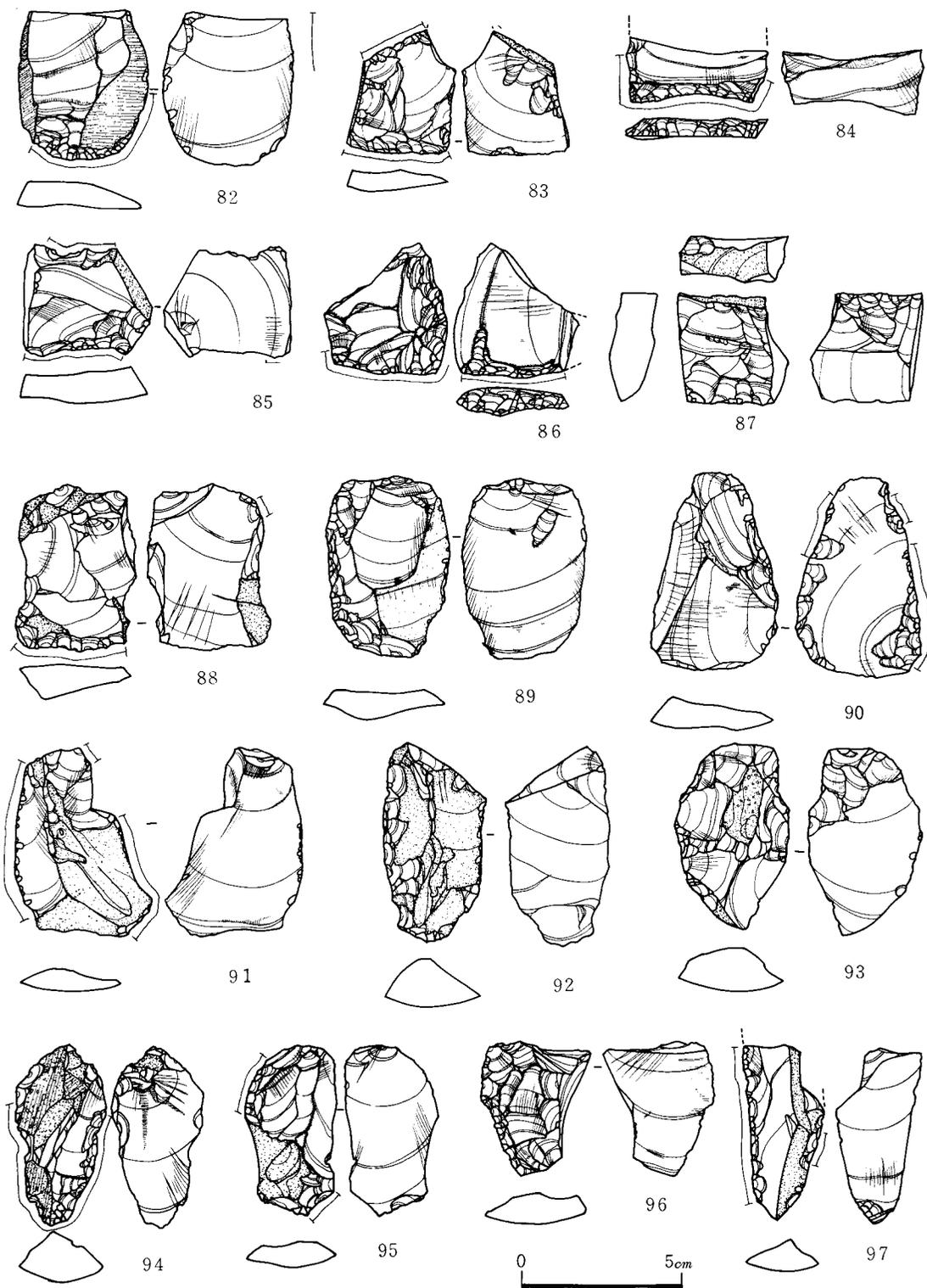
Ⅲタイプ

遺構から出土した2点のみである。第92号石組のS-33(第37図2)は、横長剥片を素材としたもので、a面に幅広く原石面を残している。a面下部から両側縁に背の高い加工があり、a面左側面は、上端から縦長の剥離面で構成されており、この面にも細かい剥離がある。刃部中央は、一部欠損している。第3ピット(第37図7)の例は、厚みのある縦長剥片を素材としたもので、a面には原石面を残している。a面左側縁から下部にかけてと、右側縁の一部に背の高い加工があり、b面左側縁にも若干加工が認められる。下部の刃縁の刃つぶれが著しい。

搔器は、以上のⅢタイプ11種に分けて説明したが、この内、Ⅰタイプはroundないしthumb scrapbrといわれるものに相当する。Ⅱタイプは、後述する削器のまとめの項で触れている諸特徴の内、(1)と(3)の特徴を備えたもので、縄文晩期から続縄文期初頭にかけて特徴的な器種型式かと思われる。

Ⅲタイプは、縄文文化～オホーツク文化期まで幅広く認められる型式で、縦形搔器(end scraper)といわれるものに相当し、現在の知識では特に時代を確定することはできない。

6 削器(第63図、第64図59～62、第65図89～97、第66、67図、第68図146～154、157～164、図版50～53、第37図3、4、11～14、16、17、20、22、25、26、第38図35、36、38、39、42～44、



第 65 图 发掘区出土石器实测图 (4) (搔器·削器)

48, 50, 第39図54~56, 58, 64, 65, 67~69, 図版38, 39)

発掘区からは、103点の削器が検出されている。石質は、黒曜石94点、硬質頁岩4点、瑪瑙質頁岩3点、硅岩、泥岩各1点ずつで、黒曜石が圧倒的優位を占めている。削器も、搔器と同様に、加工・形態の点から大きく次の4タイプに分類することができる。

I : a・b いづれかの両側縁ないしは両面の両側縁に二次加工のあるもの。

II : a・b いづれか一面の一側縁に二次加工のあるもの。

III : 両面と上・下端の四周側縁にわたって二次加工のあるもの。

IV : I~IIIタイプに包括することのできないもの。

Iタイプ

Iタイプは48点で、さらに6種に細分することができる。

a) a面両側縁にのみ加工のあるもの……43, 48, 50, 52, 89, 92~95, 97, 99, 101, 105, 107, 109, 120, 121, 130, 133, 134, 147, 151, 161, 162, 164の25例

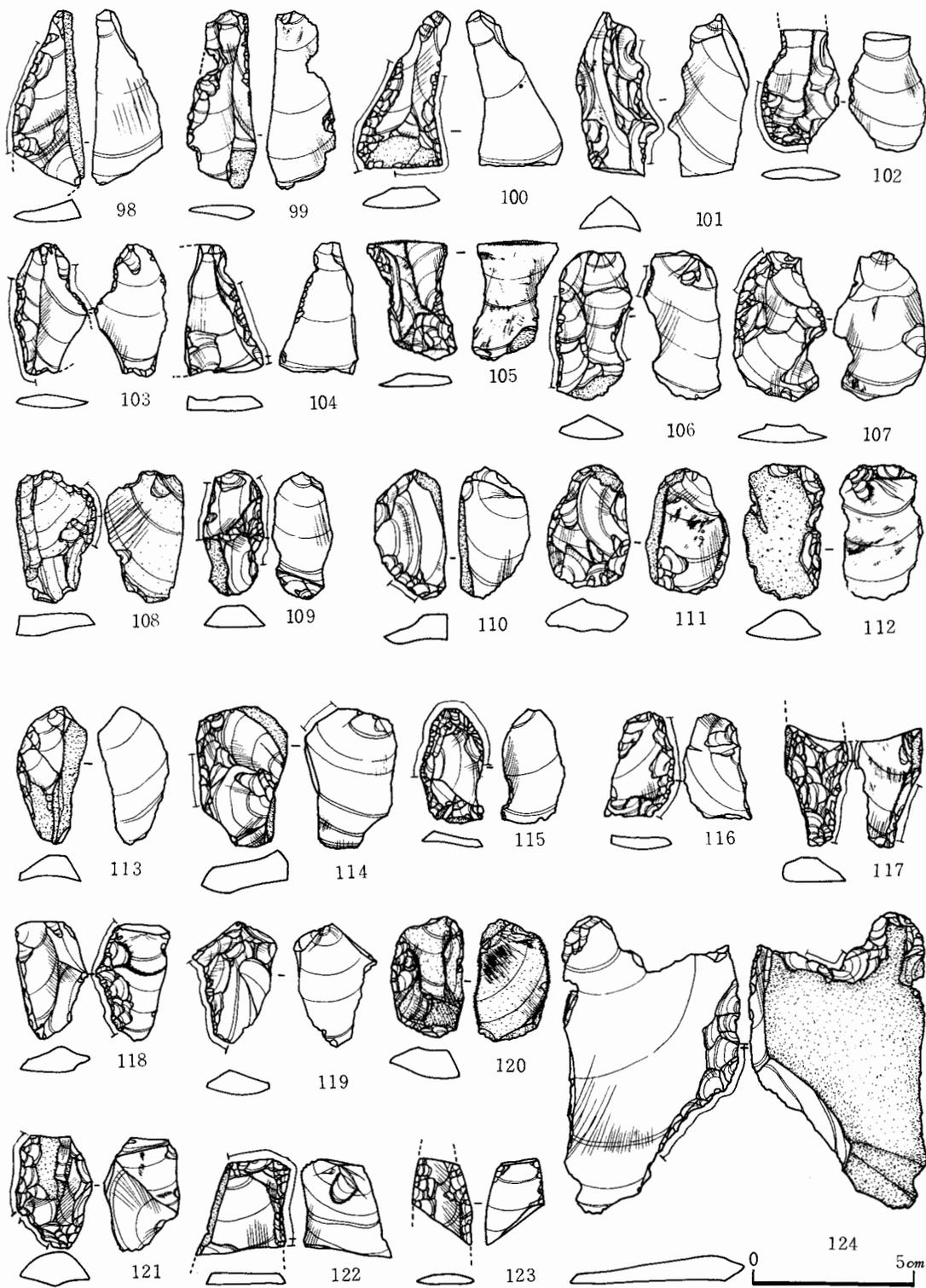
そのうち、欠損しているものは、43, 52, 97, 99, 151, 161, 162の7点である。素材は、縦長剥片と寸の短い剥片(52, 130, 147, 151, 162)で、バルブの高まりの残っているものが多い。高まりを除去する剥離が入っているものは、43, 48, 93の3点である。刃角の高いものは、43, 48, 50, 94, 97, 121, 130で、断面は43を除いて三角形を呈し、厚みのあるものである。また、134, 161, 164は、下部末端は尖っていて、161を除けば刃角も高い。そのほかのものは、全般に扁平で刃角の浅いものであり、いずれか一側縁の加工が不規則な小剥離のものもあり、これは加工というよりも使用痕的なものであろう(89, 92, 94, 95, 121, 133)。89, 105, 109のa面にある剥離の稜線は摩滅しており、散発的に擦痕も認められる。

遺構出土の例では、第54号石組S-1, S-2(第37図3, 4), 第20号ピット(第37図17), 第113号ピットS-2(第39図55)などが入る。3と55の2点は、下部を欠損しており、また55のa面には原石面が残っている。素材は、全点縦長剥片で、3, 17, 55は、a面側縁に幅が狭く背の高い加工があるが、3のa面上部のものは加工というよりも使用痕であろう。4は、b面の両側縁に加工があり、下部には使用痕がみられる。

b) a面左右側縁とb面一側縁の一部に加工のあるもの……44, 91, 103, 106, 101, 111, 115, 117, 123の9例

このうち103, 117, 123の3点は欠損しているが、全点縦長剥片を素材とし、115, 123を除くほかは、バルブ部分が残っている。また、原石面が、44, 91, 102のa面と111, 118の側縁に残っている。111と117は背の高い加工であるが、ほかは、刃角は浅い。117, 123のa面側の加工はほかに比べると入念で、特に123は上下部を欠損しているが、尖頭器かナイフ類であったかもしれない。軽く焼けている。44のb面上部剥離稜線と111のa面剥離稜線は摩滅しており、加えて不連続な擦痕も認められる。

遺構出土例では、第6号ピット(第37図10)と第40号ピットのS-1(第37図25)の2点がある。10は、やや幅広の剥片から作られたもので、a面右側に切断面があり、細かい使用痕が認め



第66图 发掘区出土石器实测图(5)(削器)

られる。a 面左側縁と下部、b 面下部左に加工があるが、刃角は浅い。a 面左の刃縁は、使用による細かい刃こぼれがある。25 は、縦長剥片から生産されたもので、上部を大きく欠損している。a 面両側縁と b 面左側縁の一部に刃角の浅い加工がある。断面形は、扁平である。

c) a・b 両面の両側縁に加工があるもの……158 の 1 例

硬質頁岩製で下部を欠損している。全体に扁平で縦長剥片から作られ、b 面にバルブの高まりを残している。加工は、a 面右側縁と b 面右側縁のものはやや入念であるが、ほかは簡単な加工で、刃角は浅い。

d) a 面の一側縁と b 面左右両側縁に加工のあるもの……90, 124 の 2 例

90 は、横長剥片を素材としたもので、b 面左側縁と右下部のバルブ部分に加工が入っており、刃角は浅い。124 は、a 面の側縁を除く全面に原石面を残しており、大形の縦長剥片から製作されたものである。上部につまみ様のものの作出が認められる。

e) a・b 両面の各々一側縁に、a, b 面相對して加工のあるもの……61, 62, 137, 141, 144 の 5 例

欠損のあるものは、144 の 1 点である。素材は、61, 137 が横長剥片、141, 144 は寸の短い縦長剥片、137, 141 は、バルブ部分を残している。141 は、断面形が扁平で刃角も浅い。そのほかは、みな刃角の高いものである。61, 62 は、下部に尖頭部を作出しており、62 は上端にも打痕がみられる。137 は全面に熱作用を受けている。

f) a 面両側縁に加工があり、下部末端に尖頭部を作出しているもの……34~41 の 8 例

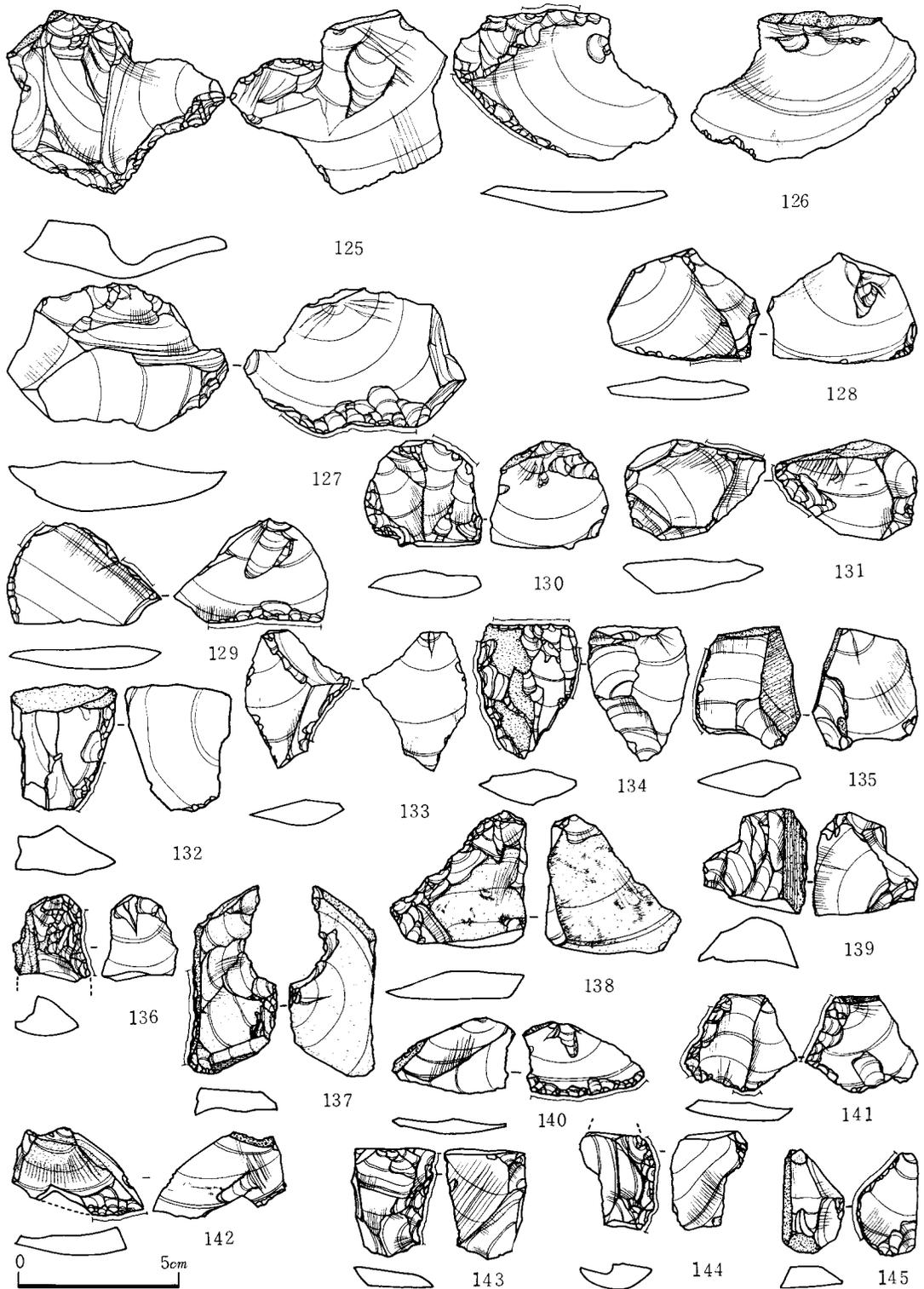
欠損品は 38~41 の 4 点である。すべて、縦長剥片と寸の短い縦長剥片を素材としたもので、断面は、34~38 がやや扁平で、39~41 は厚みのある三角形を呈する。刃角はみな一様に高い。34 と 36 は、上端にも加工が入っている。35 の a・b 両面にある剥離の稜線は摩滅しており、b 面には散発的に擦痕が入っている。40 は、a 面左に切断面があり、その側縁には使用痕と思われる不規則な小剥離が入っている。

II タイプ

剥片の一側縁にのみ加工がある II タイプの例は、合計 37 点で、3 種に細分することができる。

a) a 面の一側縁にのみ加工があるもの……49, 54, 57, 96, 98, 108, 110, 112~114, 116, 119, 122, 132, 135, 136, 138, 139, 142, 143, 146, 148, 150, 152, 153 の 25 例

欠損品は、98, 122, 136, 142, 146, 148, 153 の 7 点である。素材は 54, 132, 142 の 3 点が横長剥片であるが、あとは縦長剥片と寸の短い縦長剥片である。刃角の高い加工を施しているものは、54, 57, 96, 112, 119, 138, 142 の 7 例である。a 面に原石面を残しているものは、112, 113, 135, 136, 148 の例で、そのほかに a 面左右いずれかの側縁に a 面と直交する原石面を残しているものが、かなりみられる (49, 98, 108, 110, 114, 122, 139, 153)。同様にいずれか一側面が切断され a 面と直角に交わった面があるものもあり、その側縁は使用による刃こぼれが認められる (54, 57, 96, 116, 138, 142, 148, 152)。形態的には、全般に狭長なものが多く、139 は素材が部厚いものである。108 は全面が軽く焼けている。



第 67 图 发掘区出土石器实测图 (6) (削器)

遺構では、第7号ピット(第37図11)、第12号ピットのS-1(第37図13)、第15号ピット(第37図14)、第28号ピット(第37図22)、第88号ピット(第38図35)、第71号ピット(第38図39)、第95号ピット(第38図43、44)、第111号ピット(第39図54)、第113号ピット(第39図56)、第137号ピット(第39図64)、第194号ピット(第39図68、69)の諸例が入る。

素材は縦長剥片が9点、寸の短い縦長剥片が1点、横長剥片が3点である。欠損品は、13と39の2点で、いずれも上部を欠失したものである。石質は、11がホルンフェルス、44、69が硬質頁岩でそのほかは、黒耀石製である。a面に原石面を残すものは、13、43、54、56、69の5点である。14、22、35、39、43の5点は、a面左側縁に、そのほかはa面右側縁に加工がある。13と69は、大きな剥離の加工で刃角も浅いが、ほかはみなほぼ90度の角度をなす背の高い加工である。14、43、44、54の一側縁は切断面で、不規則な細かい剥離がみられる。64は、加工が判別できないほど全面が焼けている。

b) b面の一側縁に加工のあるもの……55、118、127、131、140、145、154、163の8例

素材は、55、127、140の3例が横長剥片である以外は、縦長剥片か寸の短い剥片である。欠損品は、145、163の2点である。55は、刃角が高くb面左側縁は切断面で、b面側からの細かい使用痕が認められ、右側縁の刃部の刃こぼれも著しい。縦長剥片の例のうち、154はb面の右側縁に加工があるが、あとは左側縁に加工のある例である。いずれも刃角は浅い。なお、127のa面側にも一部加工がある。また、145はa面左側縁に原石面を残している。

遺構からは、第25号ピットのS-1(第37図20)、第40号ピット(第37図26)、第77号ピット(第38図38)、第98号ピット(第38図48)、第103号ピット(第38図50)の各ピットから5点出土している。。

素材は、縦長剥片が3点、横長剥片が2点で、石質は全点黒耀石製である。38は、a面の右側縁に大きく刃角の浅い加工があるほかに、b面左側縁に不規則で細かな剥離がみられる。そのほかは、b面側の一側縁に幅が狭く刃角の浅い加工がみられる。50を除くほかは、みな一側縁が原石面となっており、小さな刃こぼれが認められる。50は、一側縁が切断面であるが、ほかと同様にごく小さな剥離がみられる。

c) 両面の表裏一側縁に向かいあって加工があるもの……60、104、157、159の4例

157を除く3点が欠損品である。素材は、157の横長剥片を除いてみな縦長剥片であるが、60はほぼ半両面加工に近く、一次剥離面はわずかしか残っていない。刃角は、a面が背の高い加工で、b面は浅い。4点とも、加工部位の反対側の側縁は切断面である。

Ⅲタイプ

Ⅲタイプは、発掘区では11点出土しており、3種に分けられる。

a) a面四周縁、b面の上部と側縁の一部に加工のあるもの……42、45、47の3例

42、45は縦長剥片、47は横長剥片を素材としている。42は、特に入念な加工で、上部はくびれて一段細くなって柄部を作出しており、搔器的な機能をもっていたかもしれない。45は、狭長で中央側縁がくびれている。a面は入念な側縁加工で、中央部は断面が三角形を呈し、刃角は高い。b面

の加工は上端・左側縁の一部にあるが、上端のものはバルブの高まりを除去する剥離かと思われる。47も、a面は入念な加工で、刃角は高く厚みのある断面を呈している。

遺構からは、1点出土している。第19号ピットのS-2（第37図16）は、縦長剥片を素材としている。a面上面の加工は背の高いものであるが、あとは原石面である。

b) a面の両側縁と下部にのみ加工のあるもの……46, 51, 53, 59, 100, 149の6例

欠損品は、59のみである。素材は縦長剥片と寸の短い剥片で、51と149の2点にはバルブ部分に加工が入っている。59の背の高い加工を除いては、全点扁平で浅い刃部で、b面下部に使用の際の小さな刃こぼれを呈するものが多い。149は、一側縁にa面と直交する原石面を残している。

c) a面の一側縁と下端に背の高い入念な加工を施したもので、b面にも一側縁ないし下端に加工があるもの……58, 160の2例

160は、上部を欠損しているが、2点とも素材は縦長剥片である。

遺構出土の第95号ピットS-14（第38図の42）は、横長剥片を素材としており、a面上面の加工のほかは原石面である。幅が狭く、刃角の高い加工で、上部は切断面となっている。

IVタイプ

IVタイプは5点で、加工部位が種々であるが、点数が少なく、一括して扱う。特徴は、一連の加工が多くの場合コーナーを境に加工面が変わっているものである。……56, 125, 126, 128, 129の5例

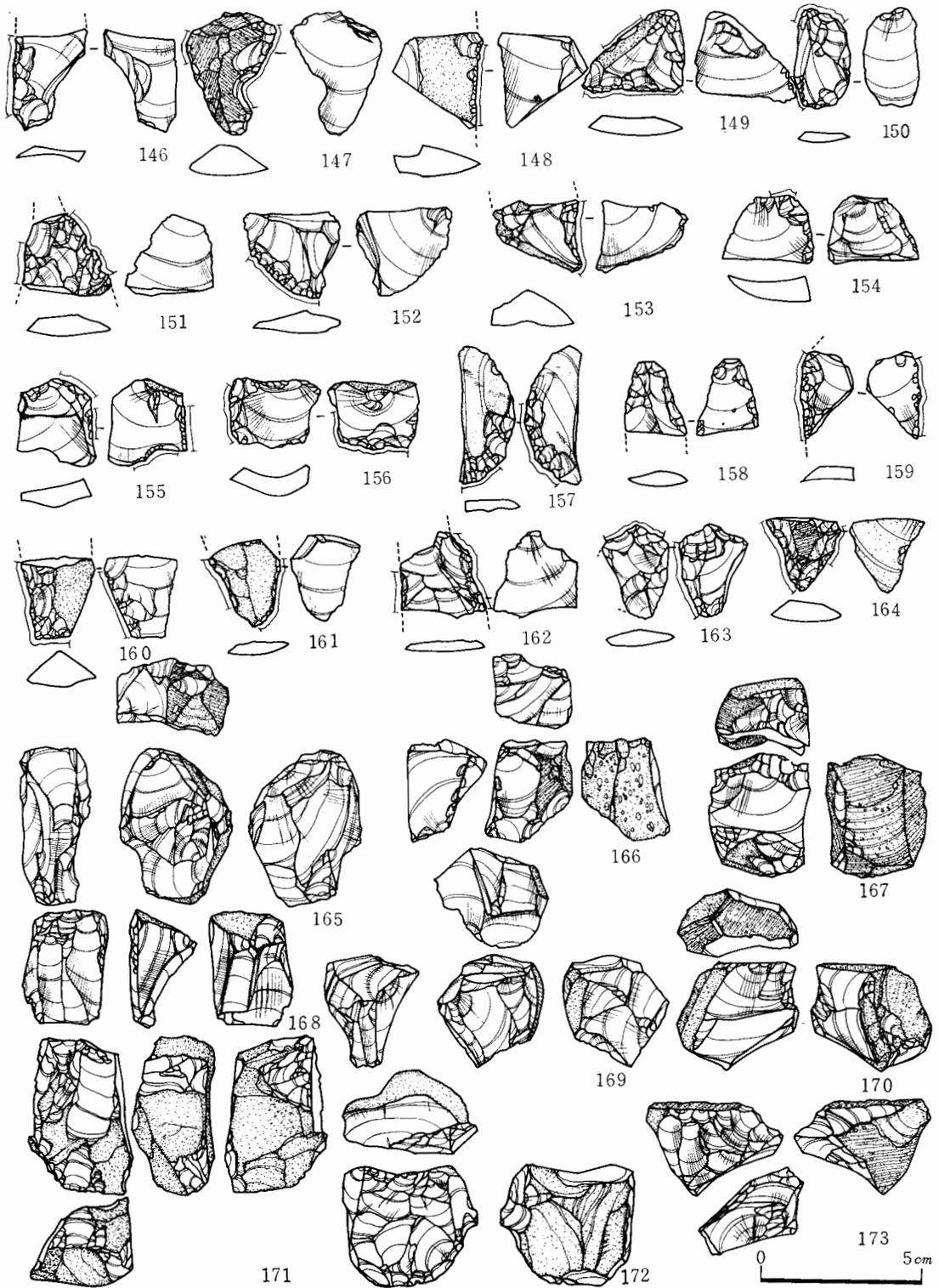
56は、横長剥片から作られたもので、a面左側縁上部とb面右側縁下部にやや背の高い加工を施したものである。また、a面右側縁は切断面で、使用による刃こぼれがa面側から入っている。125は、大形の寸の短い剥片を素材としたもので、a面右側縁とb面左上部に背の高い加工が入っている。稜線は使用により摩滅している。126は、横長剥片を素材としたもので、打面には原石面を残している。加工は、a面左側縁とb面左下部に若干刃角の浅い加工がみられる。a面下部には、朱色の物質が少量付着していた。128は、寸の短い縦長剥片で、a面右側縁には原石面がある。a面右側縁下部とb面右側縁下部に若干の加工がみられるほかは、使用による不規則な小剥離があるだけである。129も、寸の短い剥片を素材としたもので、加工はa面左側縁とb面下部に施されている。

遺構から出土したものは、第133号ピット（第39図58）の1点である。硬質頁岩製で、横長剥片を素材としており、a面左に原石面を残す。a面右側縁上部に刃角の高い加工、またb面左側縁下部に背の低い加工がある。なお、a面側の刃縁は深く concave している。

以上、4タイプ13種以上に細かく分けて説明してきたが、これらに共通する諸特徴をまとめてみると、

- (1) a面側縁と共にb面にも加工がある……I b), I c), I d), I e), II c), III c), IV
- (2) b面側縁にのみ加工がある……II b)
- (3) 四角形の形態を呈し、その二～四縁に加工がある……III a), III b), III c), IV

の3つになる。(1)のa面側に加工があると共にb面側にも加工(inverse retouch)があるという特徴は、縄文早期末～前期初頭のいわゆる「石筥」という器種型式にも認められる(上野編1975)が、



第 68 図 発掘区出土石器実測図 (7) (削器・フレーク・コア)

削器とか搔器に顕著に認められるようになるのは、縄文晩期から続縄文期(初頭)にかけてである。同様の傾向は、札幌市S 153遺跡の資料中にも数多く認められた。(2)のb面側にのみ加工があるという傾向も、この時代の特徴で、素材に対する加工部位の規則性が、この時期になって崩れてきて、多様性を帯びてくるようである。ただし、恵山期には、この傾向はなく、素材に対する加工部位に規則性をもっている(土田・上野 1976)。

(3)の傾向も、同様に搔器に関してもいえることで、全体に四角形に近い形態の削器が、この時代に増してくるようである。

7 フレーク・コアー(第68図165~175, 177~179, 図版53, 第38図46, 47, 第39図59~61, 図版39)

フレーク・コアーは、発掘区から14点、遺構から5点出土している。石質は、黒耀石16点、硬質頁岩3点である。

これらのフレーク・コアーは、以下の2つのタイプに分類することができる。

I: 素材は、主に高さ3~4 cm程の小形の角礫を用い、全体に厚い例が多く、断面形は長方形を呈する。多くの場合、上面に幅の広い打面を持ち、この打面からほぼ直角に近い角度で、寸の短いやや幅広の縦長剥片を生産している。打面は、原石面のままの例と原石面に細かな調整剥離を加えた調整打面のもの、大きな1枚の剥離からなる平坦打面のものなどがある。背面は、原石面のままの例が多いが、背面側からも剥片を生産しているものもある。また、上設打面に対して、その反対側の下部端からも剥片を生産している場合もあるが、下設打面は、上設のそれに比較して狭いもので、生産している剥片も小さい例が多く、作業面調整の剥離である可能性もある。側面は原石面か、上、下端からの縦長の剥離とか、横方向の細かな調整の剥離が施されている。なお、このタイプは、作業面の高さが打面の短軸の長さの2倍~1.5倍、長軸の長さの1~1.5倍の例が多いが、内2例(第69図174, 第38図47: 第95号ピット)は、これとは違い、作業面の高さに比べ打面の長軸の長さが長く約2倍近くもあり、縦断面も三角形を呈し、生産している剥片も小形のものが多い。……165~168, 170~174, 177, 178, 第95号ピット(第38図47), 第133号ピット(第39図59)

II: 素材は4~6 cmの小形の円礫を用いたものも多く、断面形は楕円形ないしは円形を呈している。打面は、規則的に設置されている例は少なく、2~3回、90°の角度で打面を転位し剥片を生産している。打面は、原石面の場合とか、各々の作業面を打面として用いており、打角はIタイプに比べて鋭角である。生産している剥片も、寸の短い小さい剥片が多い。……169, 175, 179, 第95号ピット(第38図46), 第133号ピット(第39図60, 61)

Iタイプ

Iタイプは、発掘区から11例、遺構から1例の都合12例ある。

165は、上面およびa面右側面は原石面、左側面は古い剥離面からなり、上面の原石面を打面として、a・b両面から剥片を生産している。なおa面下部の剥離は、左側面から入れられたものであ

るが、剥片生産とは直接的に関係しないものかもしれない。

166は、剥離が数多く入った上面を打面として、ほぼ直角に近い角度でa面中央から剥片を生産している。その下には、下からの剥離が1枚入っている。この剥離面を打面として、a面左側面に下から剥離が入っている。背面およびa面右側面は原石面である。

167は、高さ4cm、幅3cmほどの角礫を素材とし、上面を打面からほぼ直角に近い角度で、a面側から剥片を生産している。中央上部にある幅広い剥離が最も新しいものであるが、上面の打面調整の横からの剥離で、バルブは失われている。背面および側面は原石面のままである。

168は、前2例と異なり背面は大きな3つの剥離で構成されており、上面の断面形は三角形を呈している。打面は、原石面と背面から作業面への小剥離からできている。作業面はa面で、打面から約70°の角度で縦長の剥片を3枚以上生産している。作業面上部は、打面からの小剥離が数多く入っているが、これは、作業面調整のための剥離であろうか。なお、a面左側の剥離は下からのもので、上設打面からの剥片生産を行う以前に、下にも打面が存在し剥片を生産していた可能性もあるが、この剥離は小さく、明確ではないがpositiveの可能性もあり、本来上設打面のみであったことも考えられる。

170は、上面の打面は原石面で、背面および側面は原石面と切断面である。作業面はa面で、剥離はすべて上から入っている。

171と172は、硬質頁岩製である。171は、高さ5.0cmほどの角礫を素材にしている。a面中央の上にある縦長の剥離痕は、図示していないが原石面と小剥離からなる上面を打面としてほぼ直角の角度で剥がされたもので、下の小さい剥離は下部の原石面を打面に、やはりほぼ直角の角度で剥がされたものである。背面は原石面であるが、一部横からの小剥離がある。右側面は節理面、左側面は上の打面から縦長の剥離を入れているが、所々節理面が残っている。172は、背面は原石面、側面は原石面と上ないし横からの小剥離からなり、打面は上面のものは大きな1枚の剥離、下面は2枚の剥離からできている。作業面はa面であるが、一面に細かい剥離が入っていて、どのような剥片を生産したのかは、現在明らかにはできない。

173は、上面の打面は原石面、背面は原石面とpatinaの非常に古い面、側面は原石面と横からの幾つかの大小の剥離から構成されている。a面の作業面には、縦長の剥片を取った痕が左側に残っているが、この後、打面から小剥離が数多く入れられている。

177と178は、今までの例と違い円礫を素材としたものである。177は、背面からa面左側面にかけては原石面、右側面は下端からの縦長の剥離が入っている。a面の作業面の剥離の内、上からのものは、b面上端に示した剥離を打面としてほぼ直角に、また下からの細かい数多くの剥離は、b面下端の剥離を打面としてやや鋭角の角度で入っている。178は、背面は原石面、a面左側面はpositiveの上からの古い剥離面、右側面は左側面と同一の上からの剥離面と下からの剥離からなっている。a面中央にある剥離痕は、上面の原石面を打面として入っており、また図でははっきりしないが、下の原石面を打面として、短い剥離が1枚下から上へ入っている。

174および第95号ピット（第38図47）の例は、いずれも上面の打面は原石面で、作業面の高さ

に比べ、極端に横に長いものである。a面の作業面からは、寸の短い小さい剥片を生産している。b面からも、a面ほど規則的ではないが剥片を取った痕がある。いずれも、縦断面は三角形を呈し、特に第95号ピット例は、a面下部の両側縁に細かい調整があるところから、何かの両面加工の石器の未成品の可能性もある。なお、この石器のb面左の剥離痕はpositiveで、一次剥離面かと思われる。

第133号ピット出土例(第39図59)は、硬質頁岩製で上面の1枚の大きな剥離面を打面とし、a面から剥片を生産したもので、下面には原石面を残している。素材は円礫であった可能性がある。両側面および背面は、いずれも横からの1枚および数枚の剥離で構成されている。これら3面の剥離は、単なる側面および背面調整とも考えられるが、打面を転位して剥片を生産した痕である可能性もある。

IIタイプ

この仲間は、発掘区と遺構から各々3点出土している。

169は、上面を打面としてa面から剥片を生産し、さらにa面を打面としてb面から剥片を生産したものである。お互いの打面のなす角度は直角である。また、上面の打面も、a面から剥片を生産する以前に、a面側を打面として剥片を幾つか取った痕がある。打角はいずれもやや鋭角である。なお、a面右側面には原石面を一部残しており、素材が円礫であったことが判る。全体の形としては、円錐形に近い。

175は、a面上の大きい剥離は、b面上部に示した原石面と剥離のある面を打面として、下の剥離はb面下部を打面として、鋭角な角度で剥取されたものである。また、a面左側面はa面上の剥離、右側面は下の剥離を打面として剥取されている。また、b面にも、a面左側面の剥離が入る以前に剥片を生産した痕がある。上面のflatな原石面から推察すると、素材は角礫であったろうか。なお、a面右側面には細かい二次加工があり、これ自身残核を利用したscraperであったのかもしれない。

179は、柱状多角形の礫を素材にして、a・b両面を打面に、各々a・b両面から鋭角な角度でやや寸のつまった小剥片を生産している。ただし、これは生産している剥片の大きさからいって何かの両面加工の石器の未成品の可能性もある。

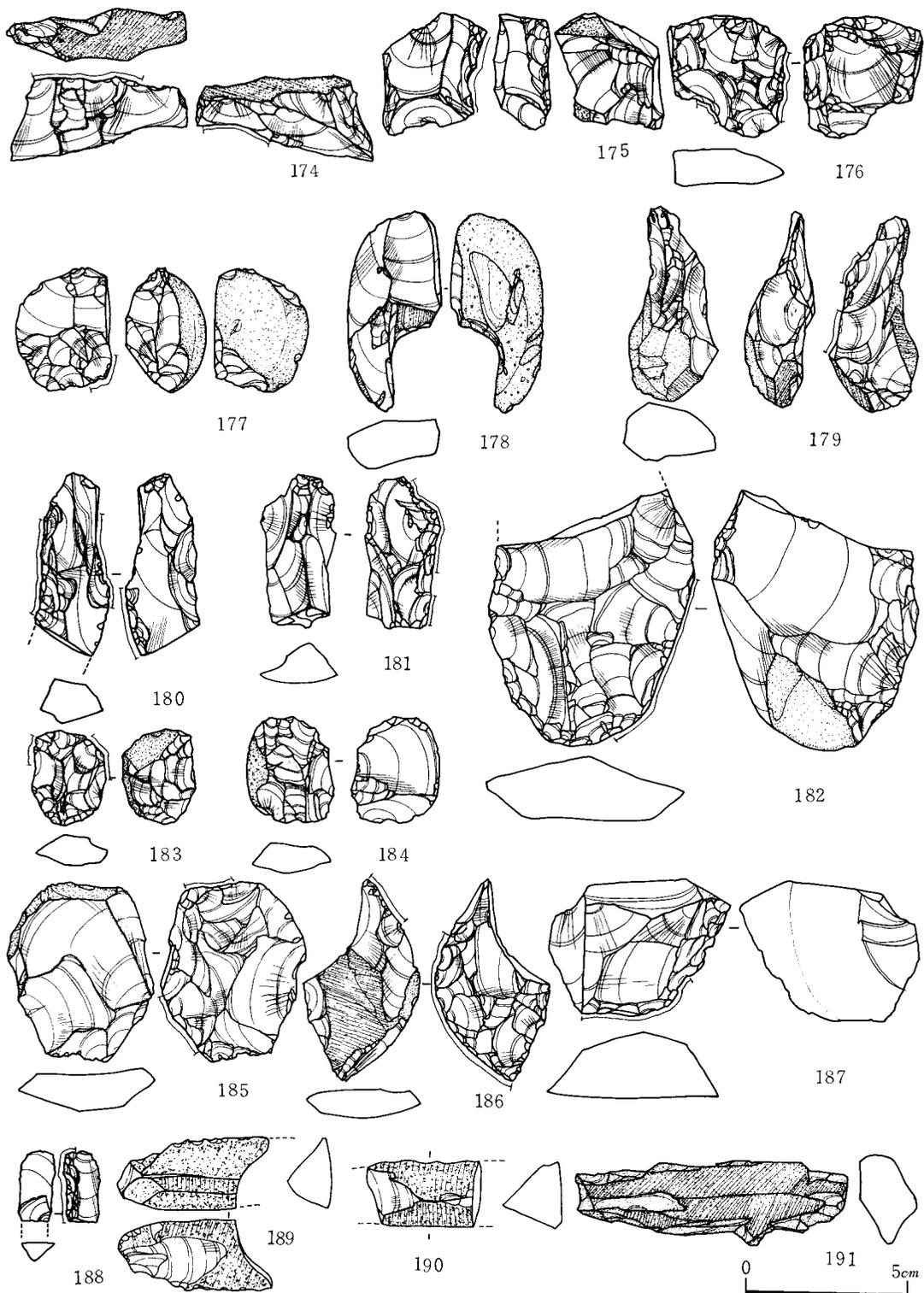
第95号ピットの例(第38図46)は、b面の原石面の両側縁からa面に剥離を一面に入れたもので、a面上部に一次剥離面のpositiveな剥離が一部残っている。

第133号ピットの例(第39図60、61)の内、60の方は、b面右にある原石面からa面に横からの剥離、b面は、上面の狭い原石面から下に剥離が入っている。なお、a面右側面は切損面である。61は、b面の両側縁からa面に鋭角な角度で剥離を入れたもので、b面もa面の剥離が入る以前に、a面側からb面に入れられた剥離である。

以上、3点の遺構から出土した資料は、175と同様、何らかの両面加工の石器の未成品の可能性もある。

8 両面体石器 (第69図176, 180~186, 188, 図版53, 第37図19, 第38図40, 45, 図版38)

両面体石器は、発掘区から9点出土しているが、182の泥岩を除くほかは、すべて黒曜石製である。



第 69 図 発掘区出土石器実測図 (8) (フレイク・コア・両面体石器・スポール・黒耀石棒状原石)

加工は、半両面～両面加工で、これ自身石器として用意されたものではなく、すべて半・両面加工の石器の未成品と思われる。

180, 181 は、厚みのある柱状形を呈し、半両面加工で、両面に不規則で大まかな加工がある。さらに、180 は a 面左側縁、181 は b 面右側縁に細かな加工が施され、刃つぶれもみられる。180 は下部を欠損しており、欠損前に全面に軽い熱作用を受けている。

182 は、大形で上部を欠損しており、b 面下部に原石面を残す。両面加工で、a 面下部と b 面右側縁に細部調整が認められる。

183 は、b 面左側縁から上部にかけて原石面を残すほかは大まかな両面加工である。a 面左右側縁の一部に刃つぶれがみられる。

184 は、b 面は大きな剥離であるが、両面加工のもので、a 面側の剥離も大きいものであり、左側縁に原石面を残している。

185 は、半両面加工で、b 面上部に若干原石面を残す。a 面の加工は、下部に大きいのが若干入っているのみである。また a 面の剥離稜線は摩滅している。

186 も、半両面加工で、a 面中央に幅広く原石面を残す。a 面右上部側縁と b 面左側縁に刃つぶれらしきものがみられ、また a 面左上部の欠損面にも細かな使用痕がある。a 面下部を尖らせていることから尖頭器類の未成品の可能性もある。

188 は、断面が三角形を呈する剥片である。b 面側面に剥離があるが、これは、上端からの縦長の剥離で切られており、側面加工ないし片面加工の石器の側縁を剥がしたスポールかと思われる。

176 は、b 面中央に一次剥離面を残す以外は、両面共種々の角度から、やや大きめの剥離が入っている。フレーク・コアの可能性もあるが、全体に扁平で、また剥離も不規則で小さい。

遺構からの出土品は、黒耀石製で、いずれもかなり入念な両面～半両面加工である。

第 24 号ピットの例（第 37 図 19）は、上下部を欠損しており形態は不明であるが、両面加工で a 面両側縁に、不規則な細部調整がみられ、上部左右側縁には刃つぶれも認められる。また、a 面中央の稜線は摩滅している。

第 90 号ピットの S-1（第 38 図 40）は、上部を欠損しているが、両面に入念な加工を施したもので、欠損部を除く全周に刃つぶれがみられ、下端は特に著しい。b 面上部に一部残る素材面から縦長剥片から作られたものであろう。a 面下部両側縁に挟りがあり、その上が逆刺のような状態になっているが、どのような器種型式に属するかは明らかではない。

第 95 号ピットの S-15（第 38 図 45）は、断面四角形で、両面に主に上と下からやや大きめの剥離が入っている。a 面右側面と上端の右は、切断面ないし欠損面である。フレーク・コアの可能性もあるが、明確には断定できない。

9 黒耀石棒状原石（第 69 図 189～191，図版 53，59 B，第 39 図 62，図版 39）

本遺跡では、発掘区から 3 点、遺構から 1 点の黒耀石製の棒状原石が出土している。

189 は、断面が三角形で、a 面右を欠損しているが、長さは 4.8 cm，最大幅 2.2 cm である。三面

に原石面を残すが、b面左から大きな剥離が1本とb面の上と下の両側縁（稜上）に細かい刃こぼれが認められる。

190も同様に断面三角形で、両端を欠損している。図中央にある稜に小剥離が認められる。

191は、長さ8.5cm、最大幅2.7cmの断面多角形の棒状原石である。図示した面と裏面に黒耀石特有のガサガサした原石面を残し、また右側面と上下端は、非常にpatinaの古い面である。この部分は、長軸方向に稜線が走っている。全面にうすく赤色土の付着が認められた。

第131号ピットのS-1（第39図62）は、長さ7.3cm、最大幅1.6cmで、上端も含めて全面がガサガサした原石面に覆われた、クサビ形の原石である。断面は四角形である。朱色の物質が一面に付着している。壙中央部、配石のあるレベルの壁よりから出土した。

このような、黒耀石の棒状原石は、夕張郡栗山町鳩山第3地点（野村1964）、上川郡東川町幌倉沼遺跡（佐藤1966）、千歳市ママチ遺跡（石川・佐藤・金山1971）、雨竜郡妹背牛町メム川遺跡（高橋・野村1972）などで出土している。いずれの遺跡も、時期は本遺跡と同様に縄文晩期末から続縄文期初頭の土器に伴ったものである。

鳩山第3地点では、土壙墓の底部から多くの土器・石器と共に1点出土している。大きさ18×7cm、厚さ1.8cmで、板状のものである。報告者は、この資料は加熱後分割されたものと述べている。

幌倉沼の例は、SW7号の土壙墓の底部から、長さ8.5～5cm、厚さ1～0.5cm程の非常に細い例が8点まとまって出土している。

ママチ遺跡でも、第9号墓穴（Pit 82）の壙口部より2点出土している。大きさは、9.5～7.5cm、厚さ1.8～0.9cmである。また第10号墓穴（Pit 83）の壙口部からも、12点出土している。長さ13～23cm、厚さ1～2cmで、断面形は角形で、全面風化した粗面であると報告されている。なお、D-23区の石鏃の集積内からも1点出土している。

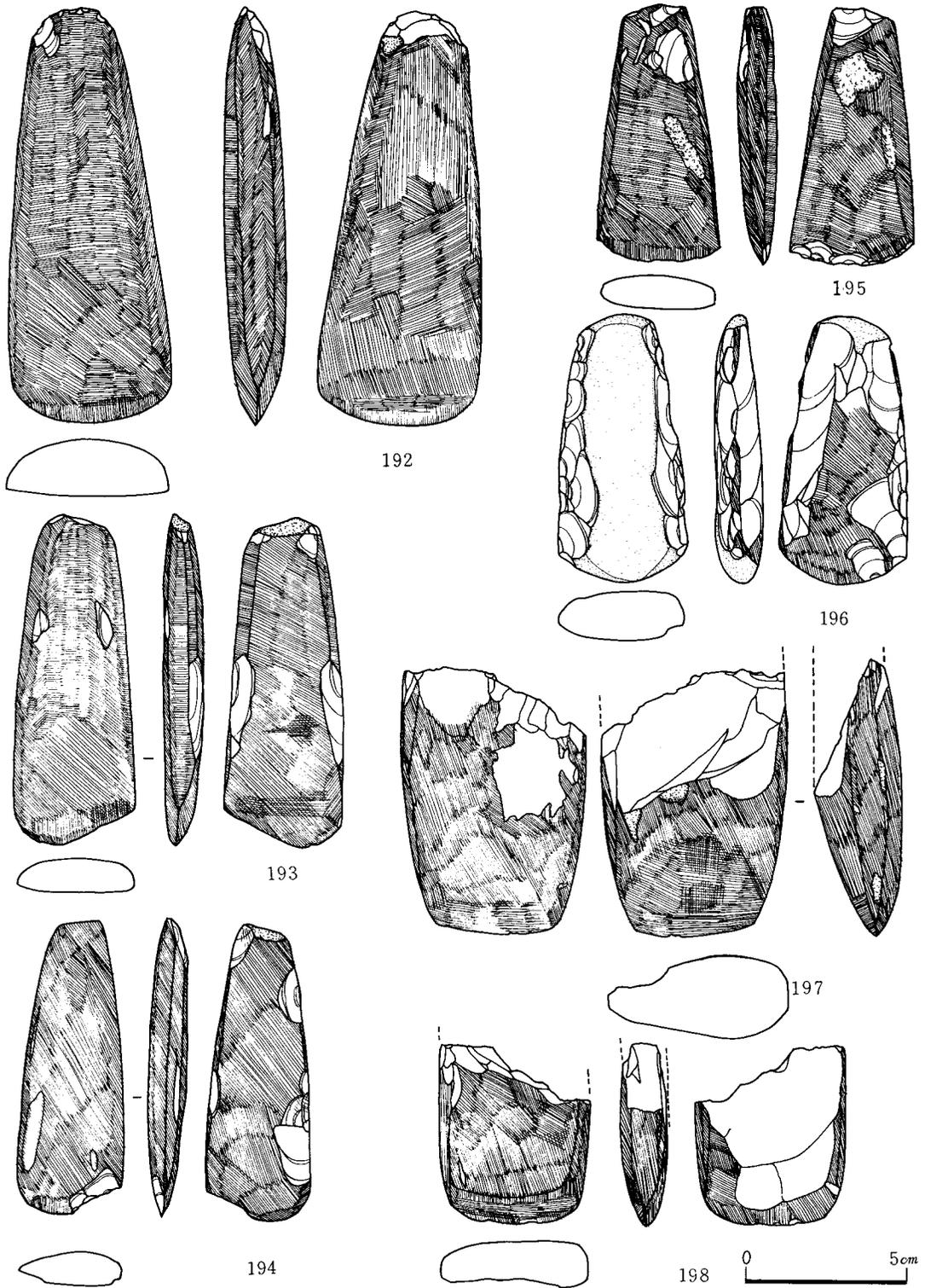
メム川遺跡では、ピットII内から、長さ6cm、直径1cmの棒状の黒耀石が出土し、全面に細かい擦り痕が残り、稜線が丸味を帯びていると報告されている。

以上でみると、長さ23～5cm、厚さ2～0.5cmで、長さは9cm前後のものが多いようである。各報告者は、この資料について加熱後分割されたとか、擦って整形しているとか述べているが、少なくとも本遺跡例は、原石面と非常にpatinaの古い面から構成されているだけで、何ら人為的な作業は施されていない。しかも、赤色土が塗られている。

なお、このような黒耀石の棒状ないし板状原石が、ある限られた時期の、しかも墓壙に副葬される例が多い事実と、このような形態の原石がどこで、どのような形で産するのかといった問題は、今後追求していかねばならないことである。

10 石 斧 （第70図、第71図199～206、図版54、第39図63、図版39）

発掘区から15点、遺構から1点の計16点出土している。石質別では、緑色片岩が圧倒的に多く12点、黒色片岩が遺構出土の1点のみ、そしてホルフェルスが3点であった。16点のうち10点が



第70图 尧掘区出土石器实测图(9) (石斧)

欠損品であるが、重量は完形品で見ると 50~80 g の間にやや集中している。

192 は、原材を荒割りした後、入念に研磨したものであるが、b 面上端に原石面を微かに残す。断面はカマボコ型を呈している。刃部は片刃的で、a 面側には長軸方向に明瞭な使用痕が認められる。柄頭は、繰り返しの pressure で、小剥離が入り摩滅している。重量は 200 g である。

193 は、棒状原石を荒割りして全面を研磨したものである。a 面は、原石面に近い面、b 面は全体に平坦であるところから節理面かと思われる。両面に剥離痕が若干残っている。断面は、やや薄いカマボコ型である。刃部は、a 面右側がカーブしており、中央に長軸方向の顕著な使用痕が認められる。b 面刃部左側は、再砥ぎした面である。両刃的で、重量は 79.6 g であった。

194 は、原材を荒割りして研磨したものである。a 面は凸状で、b 面は平坦な面であり、断面がほぼカマボコ型に近い形態をしている。刃部は両刃的で、a 面に顕著な長軸方向の使用痕が認められ、また、右側に刃こぼれのようなやや大きい剥離がある。重量は、48 g である。

195 は、棒状の原石を原材にして、それを荒割りして入念に研磨したものである。b 面は、原石面を軽く研磨しただけである。刃部は両刃的で、a 面にはかなり顕著な使用痕が、b 面は刃こぼれがあるが、b 面のものは再加工のための剥離である可能性もある。重量は、51.5 g であった。

196 は、未成品であるが、棒状原石の両側縁に敲打を加えて形を整え、b 面と側面を軽く研磨している。

197 は、上部を大きく欠損しているが、現存重量は 150 g で、断面も厚みがあり、かなり大形のものかと思われる。b 面と c 面の所々に、小さく原石面を残している。刃部は、b 面に再砥ぎした痕が認められ、b 面と一線を画した面を作っているが、使用痕などはみられない。

198 は、ホルンフェルスの原材を荒割りして研磨したものであるが、197 同様、上部と b 面側を大きく欠損している。a 面刃部は、再砥ぎされており、刃稜が使用により著しく摩滅している。

199 は、柄部破片である。断面の厚みは、2 cm とかなり厚く、c 面に剥離痕を多少残すほかは、全面を入念に研磨している。b 面下部に擦切の溝が認められることから、擦切手法で製作されたものかもしれない。

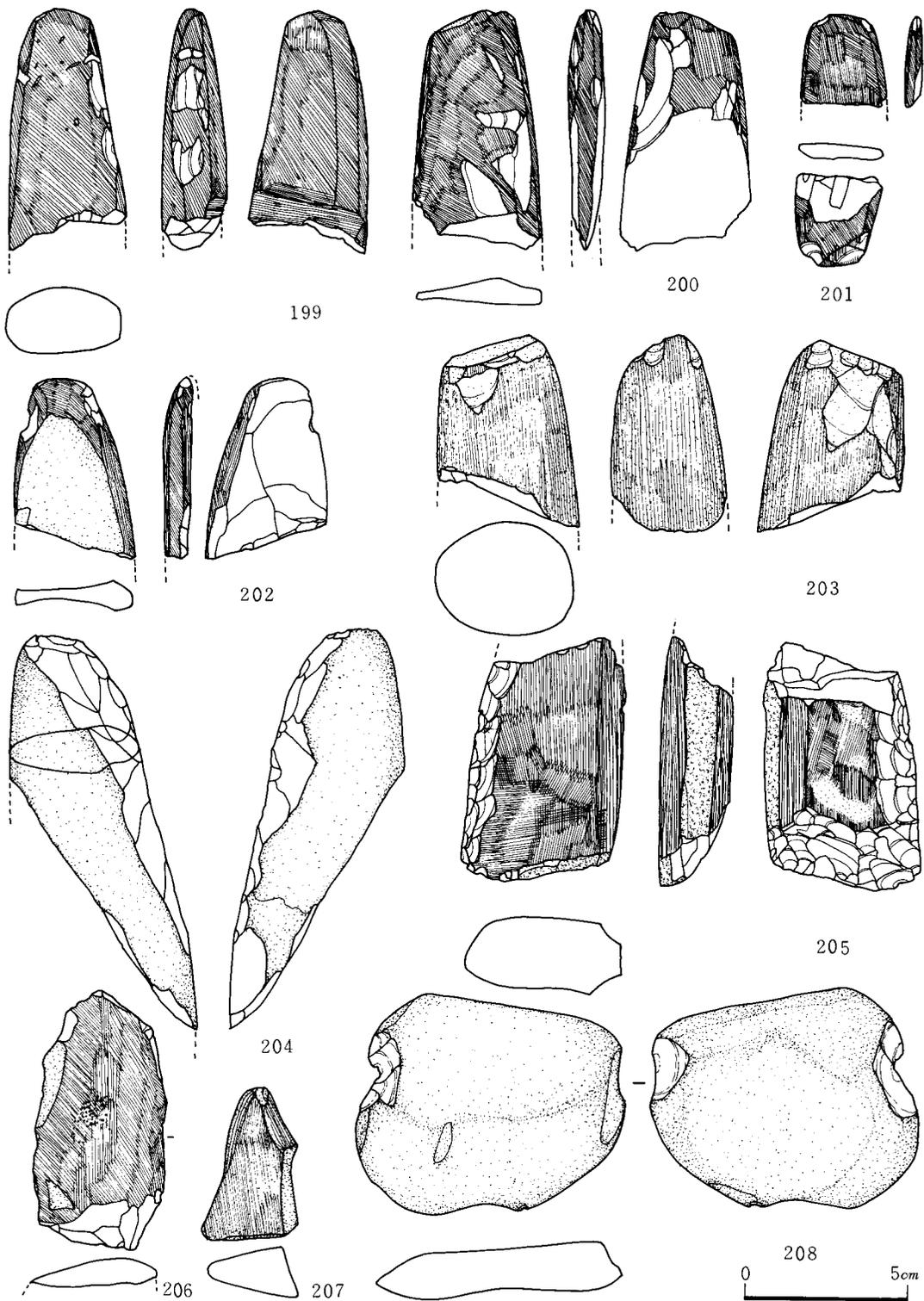
200 も同じく柄部破片であるが、全体に扁平である。原材を荒割りして研磨したもので、柄頭に原石面を残す。また、a 面左側は原石面にかなり近い面と思われる。

201 は、柄部の小破片で、原材は不明である。断面は非常に扁平で 5 mm しかなく、小形品であったろうと思われる。

202 は、石質がホルンフェルスであるが、a・b 両面と下部を大きく欠損しているため、原材その他は不明である。原材を荒割りし、細かく繰り返し敲打した後に、粗く研磨したもので、柄頭には原石面を残している。

204 は、棒状原石を荒割りしただけの未成品で、下部を欠損している。

205 は、同様に未成品で上部を欠損している。石質がホルンフェルスで、a 面は節理面を研磨した面、b 面は所々に原石面を残している。a 面左側縁と b 面右側縁、そして下部に敲打整形した痕がみとめられ、また c 面には、両側に擦切による溝がある。中央は擦切後に切断した面である。



第71图 発掘区出土石器実測図(10) (石斧・石錘)

206は、b面が剥がれたもので、本来の形態は不明であるが、a面中央に、1.2×1.3cmの範囲に鋭利なものによってつけられた細かい傷痕が認められる。なお、同様の傷痕は瀬棚町南川遺跡（土田・上野 1976、P.159～163）の石斧においても数多く認められた。

遺構からは、第138号ピット（第39図63、S-1）から1点出土している。上部とb面を大きく欠損している。原材を荒割り、研磨したもので、a面両側縁に剥離痕が残っている。刃部は、a面に大きくカーブしており、両刃である。a面の刃部には、長目の散発的な使用痕、b面側には、短い使用痕が顕著に認められる。

11 石 錘 （第71図208、第72、73図、第77図271、図版55、第37図18、第38図30、図版38）

発掘区からは、19点の石錘が出土しており、その石質の内訳は、複輝石安山岩7、泥岩6、変朽安山岩3、石英安山岩2、砂岩1で、概して安山岩系のものが多い。大きさは、長軸が8.0～6.0cmの大形のもの、6.0～5.0cm前後の中形のもの、4.0～3.5cm前後の小形のものほぼ三種類がある。222を除くほかは、みな礫の長軸の両端を打ち欠いて綱懸を作出している。

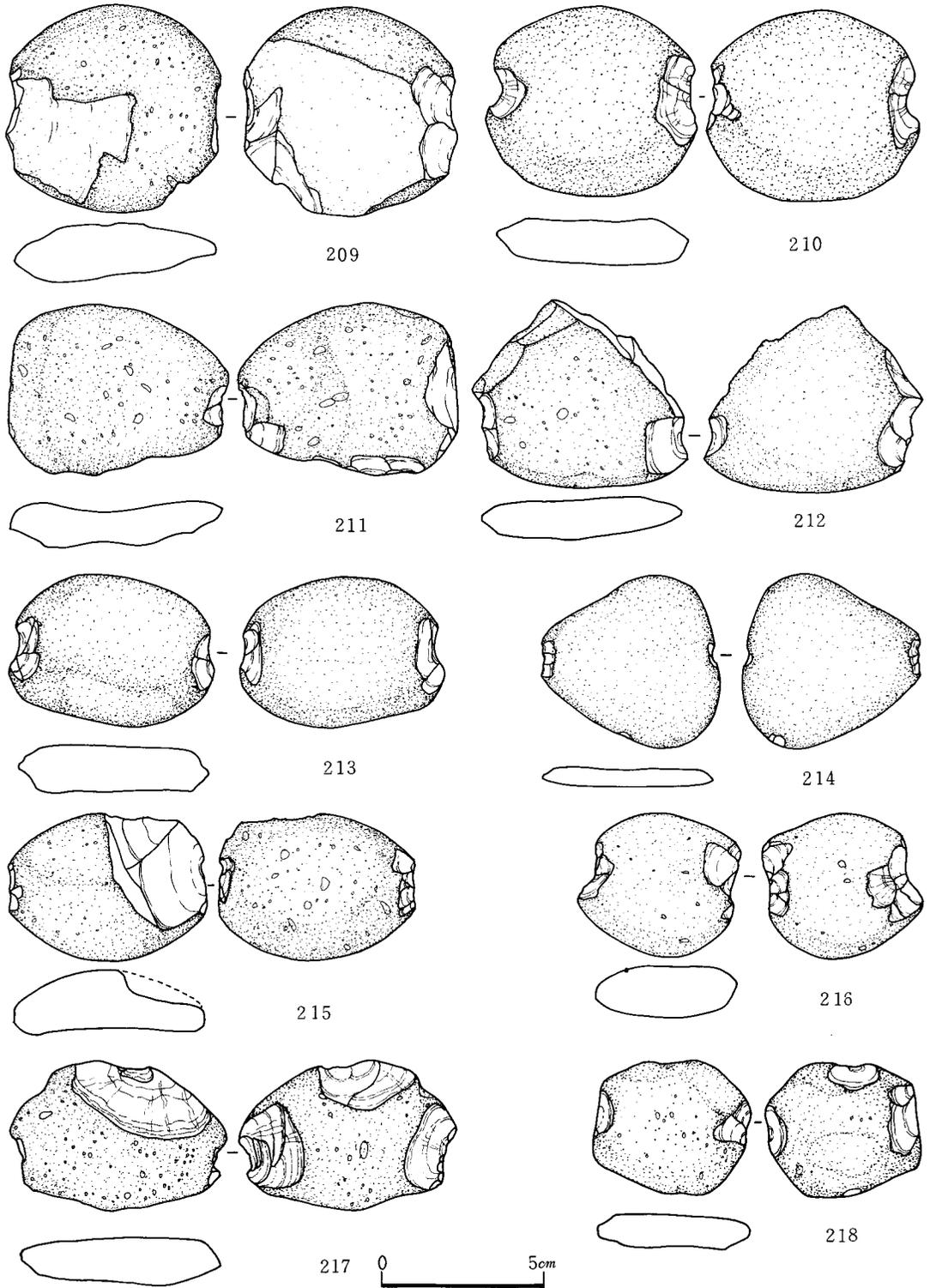
大形のもの、208、209、219～222の6点で、重量は80～150gの間に収まるものである。209は、扁平なほぼ円形の礫を利用したものであるが、b面のほとんどが剥脱している。219は、b面側の打ち欠き部分に、大きめの剥離が3～5面ある特異な例である。221は、一端がすばまった形の扁平な円礫を使ったもので、b面中央に4.0×3.0cmの範囲に擦ったあとが認められ、ややくぼんでいる。剥離を入れた後に擦っているもので、砥石として再利用ないし副次利用したものであろうか。この他に、砥石の項で述べるが、1例石錘の様な打ち欠きのある泥岩を砥石として利用したものが出土している（第76図261）が、 $\frac{3}{4}$ を欠失しているため、石錘を利用したものかどうか断定はできない。222は、短軸の両端に打ち欠きの部分がある例である。

中形のもの、210～215、217、226の8点で、重量は40～80gの間に包含されるものである。そのうち212は、一部を欠損した扁平な礫の両端に打ち欠きを入れたものである。214は、大きさは中形であるが、非常に薄いため、重量は25.9gと軽い。形態は、一端がすばまった形のもので打ち欠きは極く浅い。215は、a面右上半を大きく欠損している。217は、長軸両端と短軸の一端の計3カ所に剥離が入っているが、短軸の一端のものは形態を整えるための剥離の可能性が高い。226は、b面が全体に剥脱している。

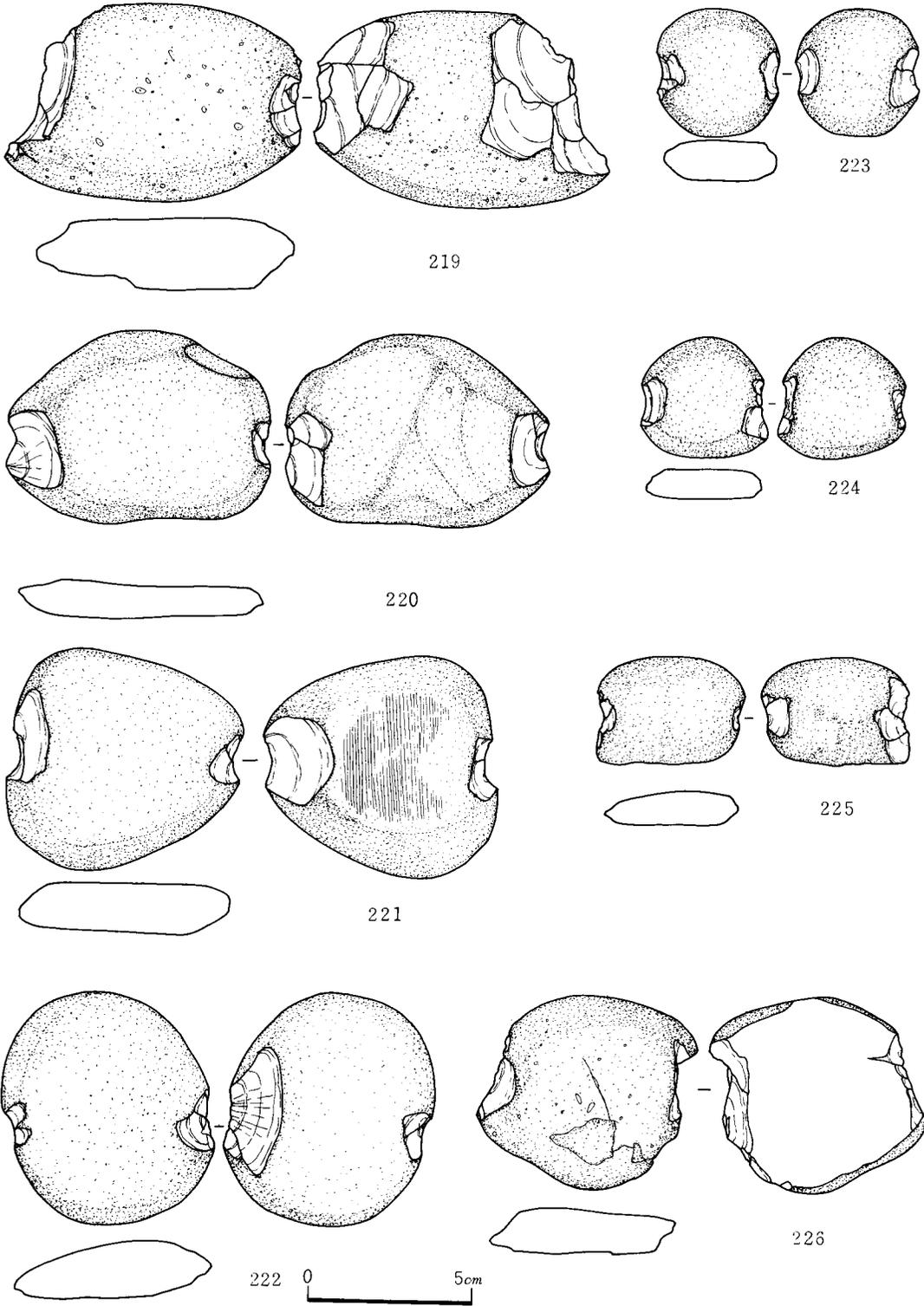
小形のもの、216、218、223～225の5点で、重量は、ほぼ20～40gの間に入る。216、218の打ち欠きは、全体の大きさに比べてかなり大きく、218は、217と同様に剥離が上部にある例である。223～225は、打ち欠きが小さい。

全体を通してみると、大形のものほど、打ち欠きは大きく、全体に粗雑な印象を受ける。また、一面が剥がれたものがあるが、これは重量あるいは形態を調整するために人為的に行ったものなのか問題の残るところである。

第23号ピットのS-1（第37図18）は、重量69.6gで中形の部類に入る。長軸の両端に打ち欠きがあり、一端は剥離が数多く入っている。



第 72 図 発掘区出土石器実測図 (11) (石錘)



第 73 图 発掘区出土石器実測図 (12) (石錘)

第 58 号ピットの S-1 (第 38 図 30) は、6.5×9.5 cm、重量 150 g と大形で扁平なものである。やはり長軸の両端に打ち欠きがある。

第 77 図 271 は、12.8×9.6 cm の扁平な楕円形の円礫の短軸両端に打ち欠きがある。また、両面の長軸端上下にも大きな剝離が入っている。石錘としては、本遺跡の中では特異な形態を呈している。

これらの石錘の資料は、第 77 図 271 の例を除いては I 期の時期に伴ったものかと思われる。従って、石錘を出土した第 23 号、第 58 号ピット (いずれも D 型) も、I 期の所産である可能性がある。

12 擦石 (第 74, 75 図, 第 76 図 250~255, 図版 56, 57, 第 40 図 71, 72, 74, 75, 図版 40-1~4, 43-4, 57 B)

発掘区より 29 点、遺構より 4 点の計 33 点が出土している。うち、発掘区出土の 13 点は欠損品である。石質は、複輝石安山岩 12、変朽安山岩 11、角閃石安山岩 5、石英安山岩 3、凝灰質砂岩、礫岩各 1 点という内訳で、そのほとんどが安山岩系である。形態は、全点断面形が三角形を呈するが、厚み、大きさなどの点から、以下の二つに分類することも可能である。

I：断面がほぼ正三角形を呈し、厚みのあるもの……230~241, 244, 245

II：断面が狭長な二等辺三角形で、やや扁平なもの……242, 243, 246~255

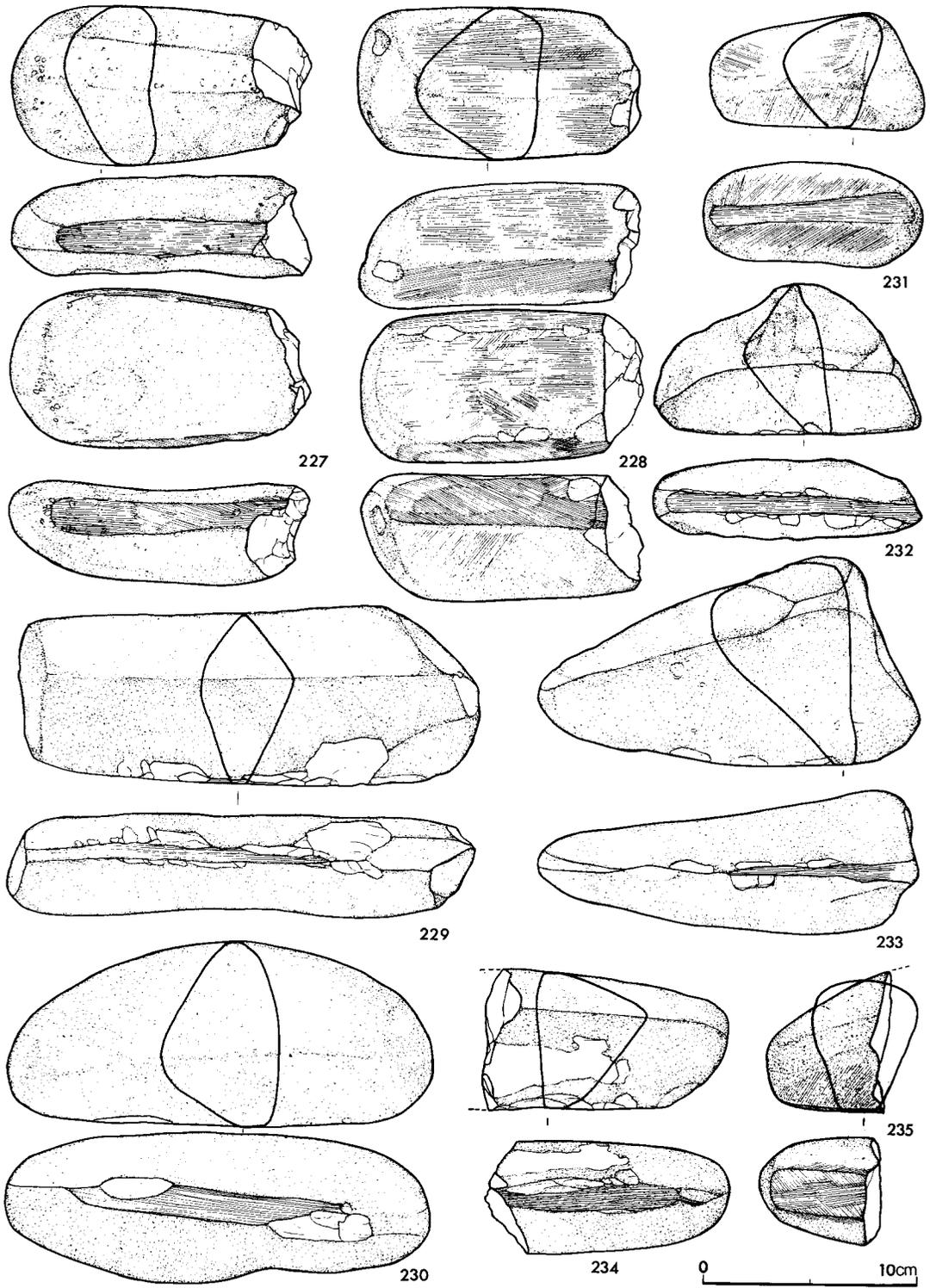
また、重量から、① 200~350 g, ② 550~650 g, ③ 800 g 以上の三グループに大別でき、①は 5 点、②は 4 点、③は 9 点で、800 g 以上の例がやや多い。擦面の数は、227 が二面、228 が三面である以外は、一面のみで、その幅は 0.5~2.0 ほどである。

擦面が二面ないし三面あるもののうち、227 は、第 74 号ピット付近から出土したもので、両端の稜を擦面としており、その幅は、1.6 cm で比較的広い。228 も同様であるが、二稜のほかに a 面の稜も、他の稜ほど顕著ではないが、軽く擦っており、また、平坦な面も二ヶ所擦られている。なお、稜の擦面の両側に古い剝離痕が若干残っている。

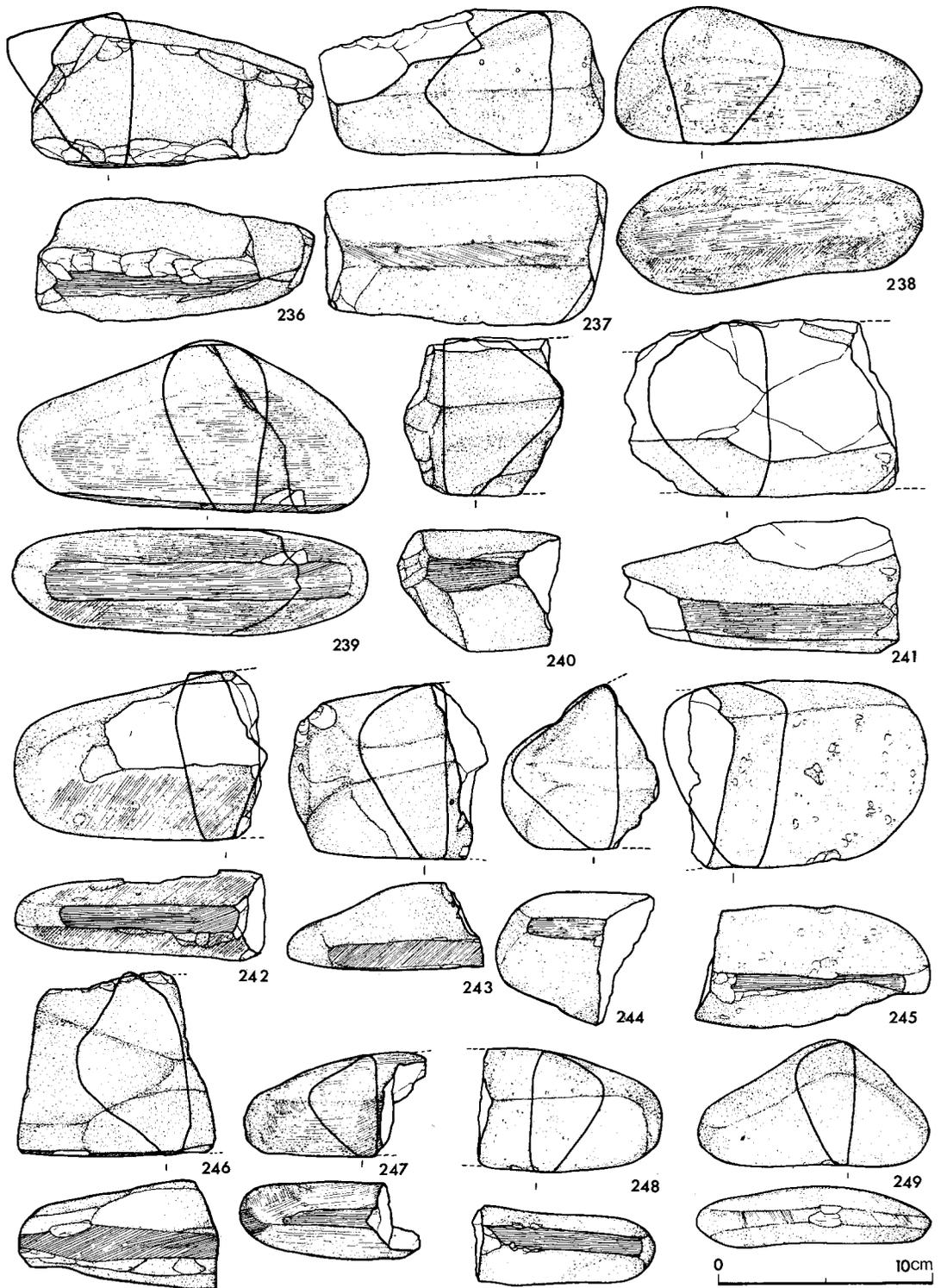
擦面が一面あるもののうち、229 は、断面が不整形のひし形を呈するもので、擦面の幅は 0.6 cm、長さ 13.5 cm である。擦面の部分には剝離がみられるが、これは擦る前の段階に入られたものである。

I のグループのうち、擦面の部分に敲打痕が認められるものは、230, 232~234, 236, 239, 240 の 7 例で、239 は擦面の両側の平坦な面も擦っている。擦面幅は、239, 240 の敲打痕がそれほど顕著でないものに関しては、1.5~1.8 cm とやや幅広であるが、そのほかは 0.8~1.3 cm の間に収まるものである。また、231, 235, 237, 238, 241, 244 の 6 例は、敲打痕はなく、擦面幅は、237 の 1.2 cm, 244 の 1.0 cm を除くと 1.5~2.0 cm の間で幅が広いものである。245 は、石質の関係で擦面にある凹凸が剝離なのかどうかは判別し難い。擦面は、0.8 cm である。235, 238 の擦面の両側にある平坦な面は擦られており、238 の一面は平らである。

II のグループは 12 点で、擦面に敲打痕のあるものは、246, 250, 251, 252, 254 の 5 点で、擦面幅は、254 の 0.3 cm を除くと 1.3~2.0 cm と幅広く、I のグループとやや趣を異にしている。自然礫をそのまま使用し、敲打痕のないものは、242, 243, 247~249, 255 の 6 点で、擦面の幅は、242



第 74 图 发掘区出土石器实测图 (13) (擦石)



第75図 発掘区出土石器実測図(14)(擦石)

が1.4 cm, 243が1.5 cmのほかは0.7~1.0 cmの間に収まる。251, 253は, a面左端に横からの剥離が入っている。また, 一面を一部軽く擦っている。255の擦面は全体にconvexしており, 発掘の際に付けられた新しいものの可能性もある。242の擦面をはさむ二面にも擦った痕がうかがえる。

遺構からは, 4点出土している。第38号ピット(第40図71), 第39号ピット(第40図74), 第140号ピット(第40図72), 第156号ピットのS-1(第40図75)の4点は, いずれも, I・IIタイプの中間的な厚さをもつものである。擦面の両側に敲打痕が認められるものは, 71, 72, 73の3点である。71は, a面全面に剥離が認められるが, その面はかなり摩滅している。擦面の幅は, 72が1.0 cmであるほかは, 1.8~2.0 cmと全般に幅広い。

第156号ピットのS-1には, 擦面のほかはa面左に5×3.2 cmの範囲に細かく敲打して平坦になった部分がある。また, 発掘区の250も, 礫の長軸両端に, 丸味を帯びるほど敲打した細かい痕がある。235, 251は, 不明確であるがやはり礫の一端に繰り返しの敲打による摩滅痕が若干みとめられる。

このほかに, 図示しなかったもので, 図版43-4は, 断面が楕円形の部厚い河原石を利用し, 一面が6.4×5.9 cmの範囲に擦られて平坦になっている。面はflatであるが, 擦石か砥石かは明確ではない。図版57 B下列左は, 断面三角形を呈し, 図版に示した面は, 全面軽く擦っていて, convexしている。また, この面の長軸の両端の稜には, 敲打痕がみられる。この石器は, 擦石の未成品か, あるいは砥石のいずれかと思われる。重量は1.4kgである。

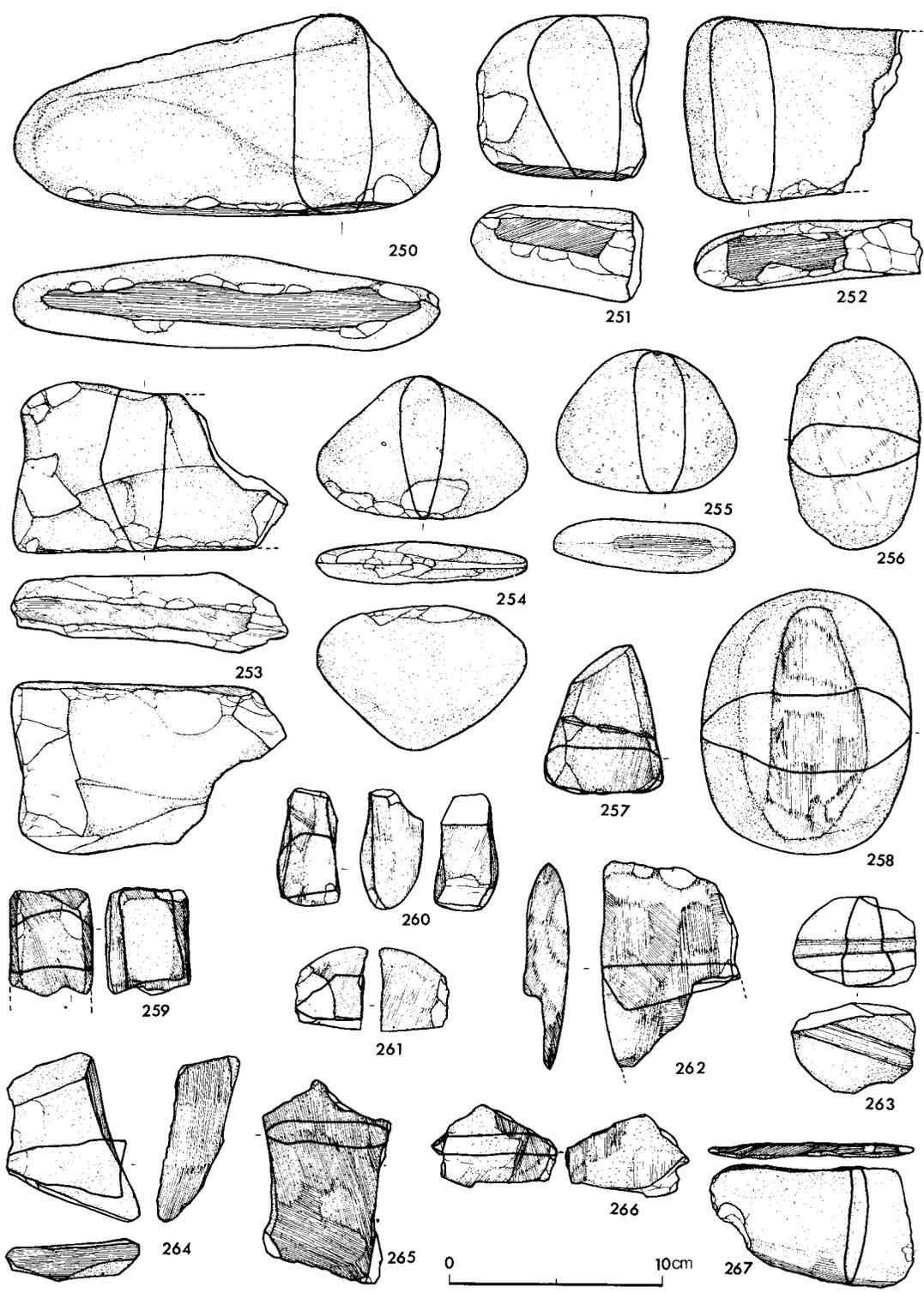
この断面三角形の一稜ないし三稜を擦面とした石器は, 前述の石錘と同様に縄文早期~前期初頭の土器に特徴的に伴うもの(上野編1975)で, 本遺跡の分類に従えばI期の所産かと思われる。

なお, この擦石は, 発掘区から出土したものがほとんどであるが, 一部III期の土壙(墓)内から, 配石に転用されて出土している。

13 砥石 (第71図207, 第76図256~266, 269, 図版58, 第40図70, 73, 76, 図版40-7~9, 43-2)

発掘区からは13点出土しているが, そのうち258が硬質頁岩製であるのを除いて, ほかは砂岩と粗粒砂岩製である。

207は破片であるが, 断面三角形で両面と側面を砥面としている。砥面は全体にconcaveしている。256, 258は, やや扁平な円礫の一面を砥面としたものである。258の中央部はconcaveしており, 長軸方向に擦痕が認められる。また, 256は, 砥面が浅い2本の溝になっている。257は, 接合したもので粗粒砂岩製のものである。図示した面の中央を砥面としており, 浅くconcaveしている。259も, ややきめの粗い砂岩製のもので下部は欠損している。a・b両面と面側面および上端面を砥面としているが, 特にb面は中央が浅くくぼんでいる。260は, c・d面がconcaveしており, a面は2つの砥面によって構成されている。261は, 四半分の小円礫を使用したもので, a・b両面を砥面とし滑らかになっているが, 砥面は平坦である。また, a面下部は, 切断ないし欠損した面であるが, ここも浅く擦っている。a面左には, 打ち欠き様の剥離が入っており, 石錘を二次利用した



第 76 图 発掘区出土石器実測図 (15) (擦石・砥石・石鋸)

可能性も考えられる。262は、図示した二面を使用しているが、いずれの面もやや concave 気味の flat な面である。263は、粗粒砂岩製のもので、非常に脆いが、有溝の砥石である。a・b両面中央に各1条の溝がある。264は、a面右側面と下部側面を砥面としており、右側面はやや concave、下部側面はやや convex している。265は、a面全面を砥面としており、下部と左上部の二カ所が特にくぼんでいる。b面は、右側を一部使用しているが、ほとんどは原石面である。266は泥岩製のもので両面をほぼ全面にわたって使用しており、いずれも flat な面である。269は、14.1×5×4.4cmの長方体で、砥面は図示した面のみである。中央が全体にくぼんでいる。泥岩製である。

遺構からは、4点検出されている。第9号ピットのS-1(第40図76)は、大形で、重量も980gと重い。ほぼ全面を砥面として使用しているが、a面とその上面、側面が主要砥面であったようで、かなり concave している。泥岩製である。第131号ピット(第40図70)のものは、粒子の粗い砂岩製で図左側と上部を欠損している。砥面は図上面と下部側面、右側面の三面である。a面右側は黒ずんでいる。第190号ピットのS-1(第40図73)は、泥岩製のものである。a面上部の砥面は短軸方向の擦痕がみられ concave している。b面右側は長軸の方向に使用しており、やはり concave し、全体に扁平である。

図示していないが、第28号ピットのS-1(図版43-2)は、大きさ24.3×18.2cm、厚さ7.4cmの扁平な礫である。一面に10×2.5cmの範囲に細長く concave した面がみられることから、砥石の機能を果たしたものであろうと思われる。

この内、有溝砥石と本遺跡では検出できなかったが、軽石製の砥石は瀬棚町南川遺跡(土田・上野1976)で述べた如く、縄文晩期から続縄文期にかけての特徴的な器種型式である。

14 石 鋸 (第76図267, 図版59A)

泥岩製で、両面ともに研磨調整されている。刃部はV字状に研磨されているが、それほど鋭利ではない。また、上面も擦った面である。全体に扁平である。

15 石 皿 (第77図268, 270, 図版59A, 第40図78, 第41図79~83, 85, 第42図86, 図版41-1~4, 42, 43-1, 58)

268は、石英安山岩の板状の礫を素材として、a・b両面を使用しているが、擦痕は散発的であまり使い込んではいない。使用面は平坦である。また、a面下部には一部敲打痕があるが、これは面取りであろうか。大きさは、33.4×11.6cm、厚さ3cmである。270は、熔結凝灰岩製のものである。大きさは17.6×8cm、厚さ3.8cmの扁平なものである。この268と270は、グリッドXV-G-21の第IV層から並んで出土したもので、所属時期はI期かと思われる。

第41図83は、割れて出土したものが接合した例である。石質は安山岩で、側面と裏面(図版58)を繰り返し敲打して面取りしている。a面左上部に、8×3cmの範囲に concave している部分があるが、全体には convex している。29.2×14.2cm、厚さ9.6cmの長楕形の円礫を原材としている。

遺構から出土したものは、計10点ですべて配石に転用されたものである。

第21号ピット(第40図78)のものは、遺構の中から2つに割れ、接して出土したものである。使用面はa面で、中央がややconcaveしている。また、a面上部側縁から右側縁にかけて、面取りが行われている。

79は、第20号(S-3)と第50号(S-2)の、別々のピットから出土した配石が接合したもので、石質は安山岩である。a面左側はconvexしており、a面右側は、concaveしている。また、a面右から下部にかけての側面には面取りがされている。大きさは、24.8×15.2cmであるが、a面右側は一部欠損している。

第25号ピットのS-2(第41図82)は、安山岩のやや扁平な礫で、a面は全面convexしており、b面は両側縁から中央に向かってconcaveしている。図示面左側面は面取りされている。

第40号ピットのS-2(第41図80)は、同様に安山岩質の厚みのある円礫を素材にしている。a面の上面全面が、使用により平坦になっている。b面、四周の側面は全面滑らかに面取りしている。大きさは、19.4×18.8cm、厚さ8.6cmである。

第103号ピットのS-9(第41図81)は、安山岩製の石皿破片である。a面は擦っており平坦になっている。

第167号ピット(第42図86)の例は、複輝石安山岩で、47×29cm、厚さ10.6cmの扁平な大形礫である。一面全面を使用しており、中央がくぼんだ、滑らかな面となっている。側面は、原石面のままの所が多く、特に面取りはしていない。

第186号ピットのS-1(第41図85)は、安山岩製の石皿破片で、a面が全体にくぼんでいて、側面は、滑らかに面取りされている。

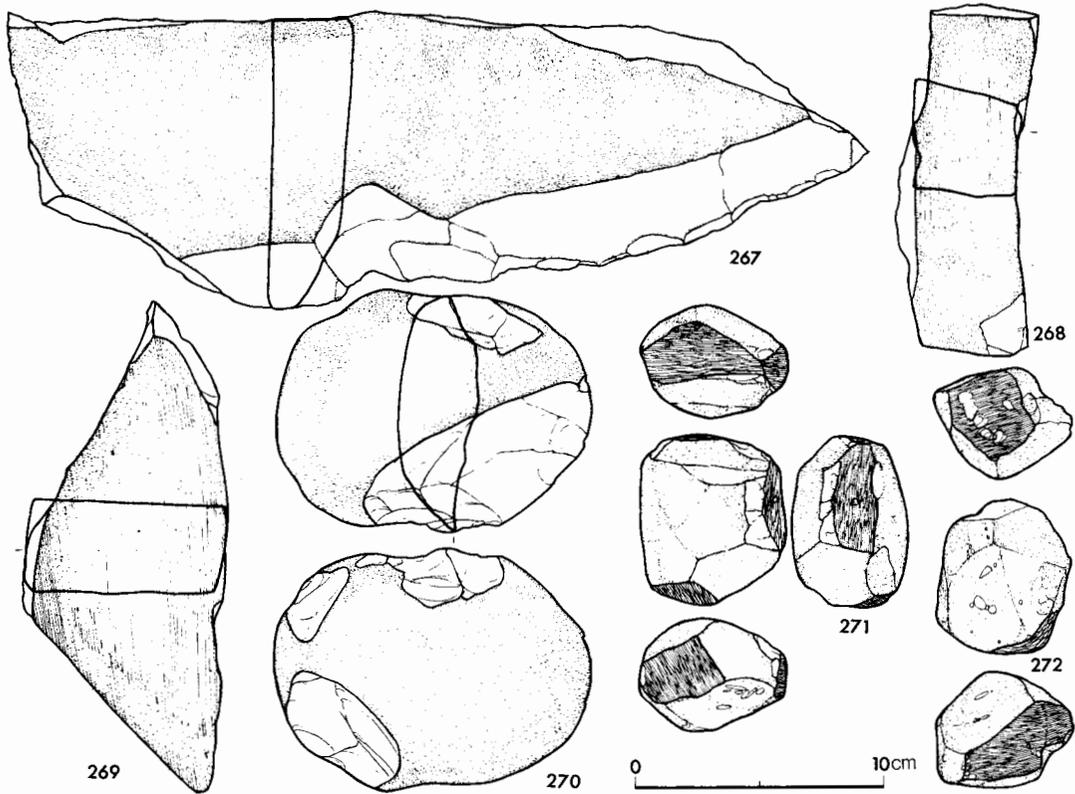
第7号ピットのS-1(図版42-2)は、一部を欠損しているが、大きさ26×12.5cm、厚さ8.5cmのやや扁平な円礫の一面に使用した痕がある。一面の側縁側に約10×8cmの範囲に擦られて平坦になった部分があるが、それほど顕著ではない。面取りは特にない。

第42号ピットのS-1(図版43-1)は、大きさ32.5×22.5cm、厚さ13.5cmのかなり大きな礫である。表面の風化が激しく、使用の痕を認めることは難しいが、周囲にぐるりと面取りが行われている。

第98号ピットのS-1は、実測図・図版ともに示さなかったが石皿破片と思われるもので、一面をやや軽く擦っている。

第10号ピット壙外出土例(図版41-4)は、石皿の破片で、擦面は平坦である。側面は、面取りされている。

以上の石皿の資料の内、安山岩とか複輝石安山岩質の部厚い大形円礫を素材にし、その側面を繰り返しの敲打で面取りし、主に上面のみを使用した例は、おおむねⅢ期の時期に伴ったものと思われるが、発掘区の168、270例の如く、石英安山岩とか熔結凝灰岩製の板状石を利用し、特に面取りがないものは、出土層位からいってもⅠ期の所産かと思われる。同様の例は、S256遺跡(上野編1975)の遺構内外からも出土している。特に同遺跡の第2号竪穴住居址状遺構からは、遺構中央床面について大形の板状石皿が出土し、そのすぐそばに断面三角形の擦石、底部位土器片がおかれ、



第 77 図 発掘区出土石器実測図 (16) (石皿・石錘・砥石・敲石)

また少し離れて炭化したクルミとか炭化物を多く入った小ピットが穿たれていた。この出土状態は、石皿と擦石の関係など道具の利用の一端を示していて興味深いものである。

16 台石 (第 41 図 84, 図版 40-3, 60-3)

台石は、第 40 号ピットから出土した S-3 の 1 点のみである。複輝石安山岩の扁平な礫を利用したもので、a 面の図示した範囲に敲打した痕が認められるが、くぼみは浅い。大きさは、 14.8×13.8 cm、厚さ 6.0cm のもので、重量は 2.1kg であった。

17 敲石 (第 77 図 272, 273, 図版 59, 第 40 図 77, 図版 40-6, 43-5, 60-2, 4, 5)

発掘区から出土したものは 2 点で、共に厚みのある丸い硅岩の河原石を利用したものである。大きさはほぼ同じで、272 が 6.9×5.9 cm、厚さ 4.5cm、273 が 6.2×5.2 cm、厚さ 4.5cm である。

272 は、a 面の上下、右側面の三箇所が繰り返しの敲打により平坦になり、本来持っていた原石面の光沢が失われ、ザラザラとした感触である (図版 60-4)。

273 は、a 面上面と、下面から右側面にかけての 2 箇所が使用されており、面の状態は 272 と同様

である（図版 60-5）。

遺構からは、2点検出されている。第15号ピットのS-1（第40図77）は、ピット底面に副葬されていたもので、ひょうたん形をした複輝石安山岩の河原石を利用している。a面下部の面は、軽く擦られており平坦になっている。b面中央には、縦長に5.0×1.5cmの範囲に傷（敲打痕）があり、中央が特にくぼんでいる。a面は、b面ほど顕著ではないが、散発的に敲打痕がある。また、a面右側面にも4.0×1.0cmの範囲に敲打痕があり平坦になっている。擦石の擦面の可能性も考えられるが、それほど摩滅してはいない。

第81号ピットのS-1（図版43-5, 60-2）は、大きさ14.1×11.0cm、厚さ5.5cmのやや扁平な楕円形の河原石を使用したものである。一面の中央部に、6.0×2.6cmの範囲に横に細長く敲打の痕が認められ、部分的にくぼんだ箇所もある。重量は、1.05kgで台石として用いられたものかもしれない。

さて、以上各器種毎に記載を進めてきたが、これらの石器群は、型式の違いからみても、大きく2つの時代のものであるようである。

1つは、I期の縄文早期～前期初頭の資料で、この中には、ナイフ状石器としたものの内のつまみのある縦形石匙、搔器の内Ⅲタイプのもの、すべての石錘と擦石、板状の石皿が入る。ただし、搔器（縦形）は、II期にも共通した型式があり明確ではなく、また削器の内、Iタイプのa面側縁に加工のある例などは、幅広い時期にある型式で、I、II期の所産の資料も幾つかあると思われる。同様にフレーク・コア、石斧、一部の砥石、石鋸、台石、敲石なども、今回の資料に限ってみると特に型式の特徴が明確ではなく、その所属時期は必ずしも明確ではない。

もう1つは、III期の縄文晩期末～続縄文期初頭の資料である。茎が短かく尖頭部が長い有茎石鏃、挟りが浅く三角形ないし不整五角形を呈する無茎鏃、大形無茎鏃、太い柄を有し靴型石器に近い形態を呈するナイフ状石器、削器の内、特徴的にb面にも加工のあるI、II、IVタイプの例と四周にわたって加工のあるⅢタイプの例、搔器の内、roundないしthumb scraperに属するIタイプの例と形態が四角形で削器と同様にb面側にも加工があるIIタイプの例、黒耀石の棒状原石、扁平片刃石斧、有溝砥石、面取りのある部厚い石皿などが、この時期のものである。このような器種型式上の特徴とその組成からみると、このIII期の資料は、瀬棚町南川遺跡において試みた時代区分（土田・上野1976, p. 171）でいう第II段階の(1)の中へ入り、さらに細かくみると、この前半期のタンネットウL、大狩部、緑ヶ丘式の時期に相当すると思われる。

なお、II期の縄文中期の資料については、明確には抽出できなかった。

（土田亜佐子・上野 秀一）

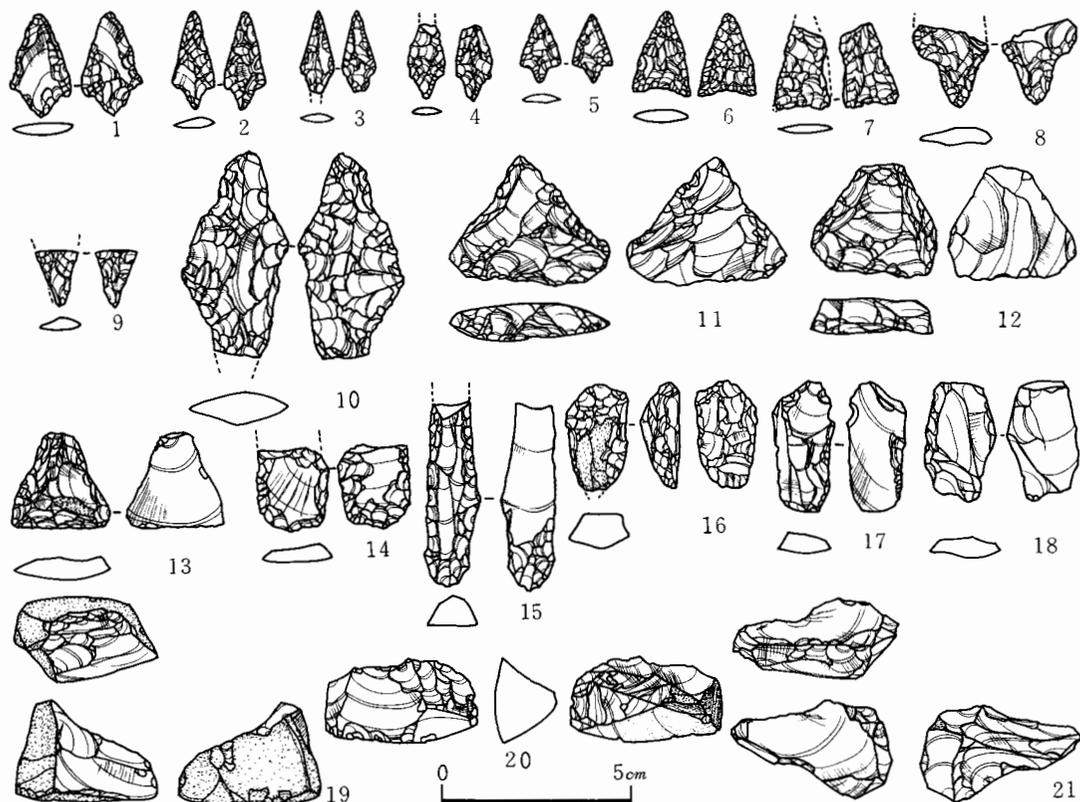
(付) T210遺跡A・B区表採の石器について(第78図, 第8表)

第78図に、今次発掘地点の北西側のA・B両区から表採した石器のすべてについて図示した。これらの資料のほとんどは、本報告の分類のⅢ期第Ⅲ群土器に伴ったものである。

1～9は、石鏃である。1～5, 8, 9は有茎石鏃であるが、うち1～5は、いずれも茎は小さく、それに比べて尖頭部がやや長いものである。しかも、全体の傾向として、小形のものが多く、8は、やや大形の資料であるが、尖頭部上半が欠失していて、本来の形態は伺い得ない。9は、茎部破片である。6, 7は無茎石鏃で、今次発掘地点出土例と同形のものである。

10は、ナイフ状石器である。両面加工で、柄部を作出している。しかし、柄は細くまだ典型的な「靴型石器」になる前のタイプである。

11～14は、搔器である。うち11～13の例は、平面形が三角形に調整されており、その三縁に背の高い加工が施されている。なお、11と12のb面にも幾つかの剝離が入っている。14は小形品で、平面形が四角形に仕上げられていて、a, b両面の3側縁に二次加工がある。上端は、切損後に、a面側には剝離が入っている。



第78図 T 210 遺跡A・B地区表採石器実測図

15～18は、削器と思われるものである。15は、上端のバルブ側を欠損するが、a面の両側縁と下部に背の高い加工が入っている。また、b面下部にも剥離がある。16は、b面中央に原石面を残すが、あとは細かい剥離が入った半両面加工の石器である。しかし、b面側はflatで、両側縁は細かい刃こぼれがあり削器的用途を考慮してよいかと思う。17、18は縦長剥片の側縁に不規則な剥離が入ったものである。

19～21は、フレーク・コアである。いずれも、前述した分類に従えば、IIタイプに属するものかと思われる。

石質は、15が硬質頁岩、18が硅岩であるが、あとはすべて黒曜石製である。

(上野 秀一)

結 語

以上、長々と述べてきたが、本遺跡は縄文晩期終末から続縄文期最初頭の土壙墓群を中心とした遺跡である。それに、縄文早期～前期初頭の土壙墓と縄文中期の土器の資料も出土している。また、明治以降の資料であるが、遺跡内でみつかった炭焼窯址に関しても、そのあらましを述べた。

土壙は、全部で151基あり、それに21基の石組と3基の溝状遺構がみついている。

151基の土壙の内、6基(A II型、D型各3基)は、縄文早期～前期初頭の所産か、その可能性のあるもの、21基は古い時代の土壙として幾つか疑問のあるもので、残りの124基が、ほぼ縄文晩期終末から続縄文期最初頭の土壙(墓)であろうと判断された。21基の石組に関しても、その位置する層準からすべてこの時期の所産と考えられる。溝状遺構に関しては、本遺跡ではその時代を知るすべはなく不明である。

縄文早期～前期初頭の土壙墓については、確実なものは第15号ピットのみで、あとは遺物が出土しなかったり、新しい時代の遺物の混入(?)があり、明確なものではなく、またプランとか層堆積も問題の多いものである。

この時期の土器に関しては、貝殻条痕文が主体となるグループと撚糸圧痕文が主体となるグループで、大きく2つに分けられた。前者は、ほぼ縄文早期中葉、後者は早期末ないしは前期初頭に位されよう。

最近、札幌市域でも、この時期の資料が急激にふえ、S 256遺跡(上野編 1975)では竪穴住居址も検出されている。その遺跡のあり方としては、遺跡の範囲が非常に狭く、そこから出土する土器は、多くの場合単一型式の資料である。ただ、現段階では、この一遺跡というものが、セツルメント・パターンのどの部分であるかは、必ずしも明らかではないものが多い。しかし、今後の資料増加と詳細な発掘を通じて、野幌丘陵におけるこの時期の生活圏の問題と土器の編年も次第に明らかになるものと思われる。

さて、縄文晩期末から続縄文期初頭の土壙(墓)と石組に関しては、第4章第2、3節で述べた如く、数多くの興味ある事例が提供されている。

要約すると、平面プランは、円形ないし楕円形を基調にしている。規模は70~100cm程の大きさのものが多く、深さは20~30cm台のものが多いが、稀に10cm台で浅いものと、40~70cmの深いものがある。配石が、その半数以上のものに認められるが、そのあり方としては、壙底~壙央にあるものと、石組として壙口~壙外にあるものがある。また、配石の1/2以上は焼けており、焼土も壙内外で数多く認められた。赤色土(いわゆるベニガラ)は、5基で認められたが、札幌地域での発見例は、これが初めてである。小ピットも、幾つかの例に穿たれているが、この内壙外の北か南にある径30cm以上のものは、葬送儀礼に関連した付属ピットである可能性がある。土器は、主に壙

底と配石中に破片で数多く見い出され、一部墳口にあるものもあった。これは、墳口にあるのが一般的傾向である縄文後期のあり方から、墳底への副葬が主になる恵山文化以降との過渡的なあり方を示すものかもしれない。石器も、主に墳底部近くから、数は少ないが、多くの土壌でみつかり、遺物の副葬は、薄葬ながら半数以上のものに認められる。

土壌群の分布のあり方は、配石、石組、焼土、赤色土の多いX、Y、Z配石群が中央に空間（広間）をおいて、ほぼ楕円形ないし平行に分布し、それをとり囲むように、配石の比較的少ない土壌群からなるグループが分布している。

以上のような事実は、分布の問題は別にして、同時代の他の遺跡の土壌墓と同じ傾向を指摘できるかと思われる。

土器に関しては、第Ⅲ群としたものは縄文晩期終末から続縄文期最初頭のほぼ単一時期のもので、移入された大洞A'式～二枚橋式頃の精製土器を共伴するところからその時代もかなり明確に確定でき、本報告書の執筆者の一人加藤は「西岡式」なる型式名の設定を提唱している。石器群は、土器と同様に、縄文早～前期初頭の資料と縄文晩期末～続縄文期初頭のもの両者があることが、その器種型式から判断される。しかし、縄文中期のものに関しては、抽出することはできなかった。

なお、今回の報告では、遺構の事実記載を表方式で記載した。そのため、充分意を尽せない部分も多かったが、第4章の第2節と第3節で、なるべくその不足を補うように努めた心算である。

また、T 210遺跡の今次発掘地点の遺跡の性格は、今迄繰り返し述べてきた如く、住居地域ではまた、縄文晩期末から続縄文期初頭の土壌墓が、舌状台地上に、ある一定の配列をもって分布している「墓域」である。このように、墓域が住居地域から離れて群集墓という形で分離されるのは、縄文後期の段階から認められるが、特に縄文晩期末から続縄文期にかけては群集墓の発見数に比べて、それを残した人達の居住区域とか遺構は、ほとんど明らかにはされていない。この理由は、居住地域が、墓域からかなり離れた場所にあるとか、あるいは我々が予想もしなかったような低地とか傾斜地にあるとか、さらには遺構の掘り込み面が浅く、かつ黒色土層中に掘り込んでいるために確認が難しいなどが考えられよう。従って、今後これらの時期の調査に当たっては、かなり幅広い地域を対象に調査を行なわねばならないものと思われる。

北海道の古墳墓については、重松和男（1971、1972）の仕事がある。研究史と道内における古墳墓すべてについてのデータ分析と集成を行っているが、このような仕事は、実証的考古学を目指すには、欠くべからざることで、氏に対しては深く敬意を表したいと思う。ただ、若干の「誤植」と時代認定にやや疑問があるものがあるが、膨大でしかも概報がほとんどの現状ではやむおえないことであろう。

筆者も、本報告書の中で、追確認として、縄文晩期末から続縄文期初頭の土壌墓について、資料集成と分析を試みようとした。しかし、結果は、氏のデータと多くは変るところはなかった。しかも、この時期を扱うことは、同時に縄文後期に顕著になる埋葬施設への石の利用の系譜をたどらずには、何にもいえないという結論に達し、その扱わねばならない資料の膨大さに、逃げだしたくなっているのが、正直な今の気持である。非常に興味深いテーマなので、今後とも、先学諸氏の教示を

うけながら学んでいきたいと思っている。

なお、今回の発掘調査は、調査に至る経過で記した如く、遺跡の範囲確定とその内容の予測に大きなミスがあったため、経費的にも、日程的にも非常に厳しい状態の下で調査を進めざるおえなかった。担当者である私としても、本調査に入る以前に試掘調査を充分に行わなければと考えつつも、調査着手前日まで前年度の報告書出版の仕事に追まわれ、調査着手そして予算策定の段階までに、その仕事を果せなかったのはまことに遺憾であった。多忙であったとはいえ、遺跡の範囲確定と予算の策定を、他の調査員にゆだねたままであったということは、実際担当者として深く反省し、今後の教訓にしたいと思っている。

上述の次第で、今回の調査では、調査着手後の試掘調査に多くの日数を費やし、また経費の関係で一切外部のアルバイトを動員することができず、すべて市の埋蔵文化財調査室のメンバーのみで事を運ばねばならなかった。しかも、その主体は、調査室内部で整理業務に従事することを主にする女子職員であり、さらに条件を悪くしたのは、今次発掘地点が、札幌市内では稀にみる、黒色土層が厚く堆積した場所で、所によっては1m以上素掘りをせねばならなかったという状態であった。しかも、遺構数は200に迫る多さである。現在、この時調査室にいたメンバーは、種々の事情で、我々のチームにはほとんどいないが、この方々には多くの負担をかけつつも、この仕事を遂行しえたことに対して、深く感謝の意を表したいと思う。

また、今回整理作業もかなり遅れてしまったが、このことは編集者自身の健康上の理由があったにしても、非力のなせる業であり、お詫びすると同時に、今度とも研鑽を重ねていきたいと思っている。

(上野 秀一)

第6表 T210遺跡遺構出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
37-1	第54号石組	石 鏃	24	12	3	0.9	Obs.	S-32
2	第92号石組	搔 器	48	28	10	17.9	Obs.	S-33
3	第54号石組	削 器	(31)	22	7	(3.0)	Obs.	S-1
4	"	"	29	37	7	8.5	Obs.	S-2
5	第2号ピット	石 鏃	31	12	5	1.2	Obs.	S-1
6	第3号ピット	"	31	15	4	1.3	Obs.	S-1 縦長剥片
7	"	搔 器	35	22	13	8.6	Obs.	
8	第4号ピット	石 鏃	28	13	3	1.0	Obs.	S-11
9	"	石 銛	(34)	23	4	(2.4)	Obs.	焼けている。
10	第6号ピット	搔 器	29	37	8	6.7	Obs.	
11	第7号ピット	削 器	52	19	4	6.4	Horn.	
12	第9号ピット	ナイフ状石器	(26)	23	4	(2.2)	Obs.	S-1 横長剥片
13	第12号ピット sp-1	削 器	(54)	35	9	(20.8)	Obs.	S-1
14	第15号ピット	"	41	19	3	2.2	Obs.	
15	第16号ピット	円形搔器	27	35	9	10.4	Obs.	
16	第19号ピット	削 器	51	27	12	14.9	Obs.	S-2
17	第20~22号ピット	"	36	25	4	3.4	Obs.	
18	第23号ピット	石 錘	57	68	18	69.6	Two py.-and.	S-1
19	第24号ピット	両面体石器破片	24	28	10	8.5	Obs.	
20	第25号ピット	削 器	37	22	4	3.9	Obs.	S-1
21	第26号ピット	石 鏃	28	13	3	1.2	Obs.	S-2 縦長剥片
22	第28号ピット	削 器	50	37	6	12.1	Obs.	
37-23	第33号ピット	石 鏃	(24)	21	6	(2.4)	Obs.	S-1
24	"	搔 器	37	35	16	18.1	Obs.	
25	第40号ピット	削 器	(22)	16	4	(1.1)	Obs.	S-1
26	"	"	24	39	5	5.3	Obs.	
27	第41号ピット	搔 器	26	32	6	4.8	Obs.	
38-28	第44号ピット	石 鏃	(50)	13	4	(3.2)	Obs.	
29	第50号ピット	ナイフ状石器	63	(23)	6	(7.1)	Obs.	縦長剥片
30	第58号ピット	石 錘	65	95	16	150.0	Two py.-and.	S-1
31	第52号ピット	石 鏃	27	13	4	1.3	Obs.	S-1 横長剥片
32	第60号ピット	石 銛	(35)	18	4	(20.)	Obs.	S-2

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
38-33	"	搔器	23	30	4	3.5	Obs.	S-1
34	第67号ピット	"	22	32	8	4.0	Obs.	
35	第88号ピット	削器	23	30	4	3.5	Obs.	
36	第65号ピット	"	66	28	12	22.0	Obs.	
37	第77号ピット	石 鏃	32	14	3	1.5	Obs.	
38	"	削器	54	32	12	25.9	Obs.	
39	第71号ピット	"	(45)	24	6	(4.9)	Obs.	
40	第90号ピット	両面体石器	(30)	24	8	(6.2)	Obs.	S-1
41	第95ピット	石 鏃	45	20	5	3.8	Obs.	S-1
42	"	削器	29	42	7	8.6	Obs.	S-14
43	"	"	28	39	5	5.8	Obs.	
44	"	"	41	35	8	12.3	Har.sha.	
45	第95号ピット	両面体石器	43	(56)	10	(15.7)	Aga.sha.	S-15
46	"	扁平石核	42	26	10	8.4	Obs.	
47	"	"	25	42	11	8.0	Obs.	
48	第98号ピット	削器	35	23	4	3.1	Obs.	
49	"	搔器	24	29	5	4.8	Obs.	
50	第103号ピット	削器	31	17	9	3.8	Obs.	
39-51	第104号ピット	石 鏃	28	15	3	1.2	Obs.	S-2 縦長剥片
52	"	石 錐	49	33	15	16.6	Obs.	S-1
53	第107号ピット	石 鏃	34	15	3	1.3	Obs.	横長剥片
54	第111号ピット	削器	35	16	8	5.7	Obs.	
55	第113号ピット	"	47	(24)	10	(9.6)	Obs.	
56	"	"	43	26	8	9.1	Obs.	
57	第133号ピット	搔器	37	38	12	21.0	Har.sha.	
58	"	削器	45	25	9	7.9	Har.sha.	
59	"	扁平石核	37	38	28	46.3	Har.sha.	
60	"	"	38	(26)	11	(12.7)	Obs.	
61	"	"	33	21	11	8.5	Obs.	
62	"	黒曜石棒状原石	73	18	16	22.6	Obs.	
63	第138号ピット	石 斧	(72)	50	16	(72.6)	Bl.sch.	刃部破片
64	第137号ピット	削器	31	15	6	2.8	Obs.	焼けている。

挿図番号	出土地区	名	称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
39-61	第160号ピット	削	器	45	24	7	11.5	Obs.	
66	第184号ピット	搔	器	22	24	3	1.9	Obs.	
67	第184号ピット	削	器	20	28	4	2.7	Obs.	
68	第194号ピット	"		43	23	7	5.4	Obs.	
69	"	"		56	49	12	41.1	Har.-sha.	
40-70	第131号ピット	砥	石	(46)	(32)	(26)	(43.4)	Sa.	
71	第38号ピット	擦	石	164	81	55	800	propy.	S-1
72	第140号ピット	"		166	92	46	600	Two py.-and.	
73	第190号ピット	砥	石	83	41	15	415	Mu.	S-1
74	第39号ピット	擦	石	143	81	58	900	Two py.-and.	S-1
75	第156号ピット	"		142	122	56	1420	Hor.-and.	S-1
76	第9号ピット	砥	石	101	96	74	980	Mu.	S-1
77	第15号ピット	敲	石	110	64	26	250	Two py.-and.	S-1
78	第21号ピット	石	皿	270	176	146	9850	And.	S-1とS-2が接合
41-79	第21.50号ピット	"		(248)	152	108	(4900)	And.	第21号ピット(S-3)と 第50号ピット(S-2)接合
80	第40号ピット	"		276	178	118	7000	And.	S-2
81	第103号ピット	石	皿破片	(88)	(67)	84	(650)	And.	S-9
82	第25号ピット	石	皿	194	188	86	4350	And.	S-2
84	第40号ピット	台	石	148	138	60	2100	Two py.-and.	S-3
85	第186号ピット	石	皿	(175)	(93)	96	(2340)	And.	S-1
42-86	第167号ピット	"		470	290	106	22000	Two py.-and.	
	第7号ピット	"		(260)	125	85	(5470)	?	S-1
	第28号ピット	砥	石	243	182	74	3470	?	S-1
	第42号ピット	石	皿	325	225	135	?	?	S-1
	第81号ピット	敲	石	141	110	55	1050	?	
	第98号ピット	石	皿破片	(103)	(58)	(56)	(600)	?	
	第108号ピット	"		(68)	(59)	(21)	(100)	?	
	第?号ピット	"		(100)	(65)	(32)	(330)	?	

第7表 T210遺跡発掘区出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
62-1	XV-H-13	石 鏃	(59)	13	4	(3.4)	Obs.	縦長剥片
2	XV-J-10	"	36	13	3	1.1	Obs.	
3	XV-J-8	"	(38)	12	3	(1.3)	Obs.	
4	XIV-I-24	"	33	18	4	1.8	Obs.	焼けている
5	XV-H-15	"	(37)	15	5	(2.1)	Obs.	
6	XV-H-12	"	(23)	16	4	(1.4)	Obs.	
7	XVI-I-25	"	31	11	5	1.4	Obs.	横長剥片
8	XVI-H-11	"	(37)	15	4	(2.1)	Obs.	
9	XIV-H-20	"	30	13	2	1.0	Obs.	縦長剥片
10	XV-H-19	"	29	14	2	0.8	Obs.	
11	XV-H-3	"	(30)	(16)	3	(1.2)	Obs.	縦長剥片
12	XV-I-17	"	(29)	13	3	(1.1)	Obs.	
13	XV-J-17	"	(21)	(14)	3	(1.2)	Obs.	焼けている
14	XIV-I-10	"	28	13	3	1.3	Obs.	
15	X 配石群	"	(25)	12	3	(0.9)	Obs.	斜長剥片
16	XV-I-12	"	(29)	16	4	(1.5)	Obs.	縦長剥片
17	表 採	"	21	14	4	1.1	Obs.	
18	XV-I-14	"	(15)	(13)	3	(0.7)	Obs.	
19	表 採	"	(19)	9	2	(0.3)	Obs.	
20	表 採	"	(20)	19	5	(2.4)	Obs.	
21	XV-J-16	"	(15)	24	5	(2.5)	Obs.	
22	XV-H-20	石 槍	84	38	10	20.9	Obs.	
62-23	XV-I-15	石 鏃 破 片	(24)	24	6	(3.2)	Obs.	
24	XIV-G-25	"	(22)	23	8	(3.2)	Obs.	
25	表 採	有 柄 錐	34	25	9	5.8	Obs.	縦長剥片
26	"	ナイフ状石器	91	21	7	14.4	Har.-sha.	
27	XV-G-20	"	61	31	13	22.7	Aga.-sha.	縦長剥片
28	XIV-H-20	"	(62)	33	9	(13.5)	Obs.	
29	XV-I-18	"	(59)	34	8	(14.7)	Mu.	横長剥片
30	表 採	"	36	26	5	5.3	Obs.	
31	XVI-J-16	"	42	19	7	8.4	Aga.-sha.	
32	XV-J-8	"	37	33	4	5.2	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
62-33	XV-H-8	ナイフ状石器	71	54	12	55.0	Obs.	
63-34	XIV-H-20	削器	51	44	12	20.8	Obs.	
35	X配石群	"	36	49	8	12.5	Obs.	
36	XV-H-11	"	42	27	4	6.1	Obs.	
37	XV-H-22	"	40	24	7	8.5	Obs.	
38	X配石群	"	(35)	22	8	(6.1)	Obs.	
39	XV-I-18	"	(34)	33	13	(10.6)	Obs.	
40	表採	"	(40)	25	14	(12.4)	Obs.	
41	XV-I-13	"	(30)	28	8	(6.4)	Obs.	
42	XV-H-7	"	62	31	8	19.1	Obs.	
43	XV-H-10	"	(55)	27	7	(9.5)	Obs.	
44	XV-G-23	"	85	35	9	23.4	Obs.	
45	XV-I-8	"	60	20	4	7.1	Obs.	
46	XVI-H-17	"	30	18	6	2.8	Obs.	
47	表採	"	45	19	9	7.8	Obs.	
48	XV-I-15	"	47	30	13	17.5	Obs.	
49	XV-J-19	"	48	14	7	4.2	Obs.	
50	XV-G-20	"	32	27	8	5.8	Obs.	
51	XV-J-14	"	22	29	6	3.2	Obs.	
52	XVI-I-6	"	(23)	32	5	(4.6)	Obs.	
53	XV-H-21	"	19	26	4	2.9	Obs.	
54	XV-K-23	"	49	(16)	7	(5.5)	Obs.	
55	XVI-H-40	"	40	15	8	4.9	Obs.	
56	XV-K-2,3	"	39	19	6	3.6	Obs.	
57	XV-I-20,25	"	47	16	7	6.9	Obs.	
58	XVI-H-1	"	48	27	9	11.4	Obs.	
64-59	XV-J-7	"	(40)	29	7	(9.3)	Obs.	
60	XV-H-8	"	53	26	14	18.1	Obs.	
61	XVI-J-16	"	38	24	12	7.7	Obs.	
62	XVII-I-17	"	38	32	12	13.4	Obs.	
63	Y配石群	搔器	32	44	10	14.0	Obs.	
64	XIV-H-24	"	38	42	13	22.6	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
64-65	XV-H-17	搔器	(29)	33	8	(8.2)	Obs.	
66	XV-J-7	"	39	32	12	15.8	Obs.	
67	XV-J-20	"	38	43	8	20.3	Obs.	
68	XV-H-11	"	32	27	8	7.8	Obs.	
69	XVI-I-25	"	(29)	20	7	(4.9)	Obs.	
70	XIV-I-14	"	25	26	9	5.1	Obs.	
71	XV-I-18	"	(20)	30	7	(4.3)	Obs.	
72	XV-H-22	"	29	20	6	3.8	Obs.	
73	XV-J-18	"	(24)	29	5	(4.5)	Obs.	
74	XIV-H-17	"	24	24	6	3.7	Obs.	
75	XV-H-21	"	31	27	9	8.2	Obs.	
76	X配石群	"	38	31	12	12.6	Obs.	
77	XVI-I-18	"	29	35	8	9.3	Obs.	
78	XV-J-14	"	39	33	10	16.3	Obs.	
79	XVI-H-21	"	36	43	15	23.0	Obs.	
80	XV-H-9	"	28	39	9	8.5	Obs.	
81	X配石群	"	29	34	5	9.2	Obs.	
65-82	XV-H-17	"	46	40	8	17.8	Obs.	
83	XIV-H-12	"	31	40	6	8.7	Obs.	
84	X配石群	"	20	43	6	5.6	Obs.	
85	XV-I-18	"	40	33	9	18.5	Har.-sha.	
86	XV-H-23	"	41	39	9	13.0	Obs.	
87	N W セクション壁	"	34	(33)	13	(21.3)	Har.-sha.	
88	XVII-I-12	"	51	36	10	24.1	Har.-sha.	
89	X配石群	削器	57	39	9	20.5	Obs.	
90	XVI-H-?	"	62	39	10	21.0	Obs.	
91	XV-H-14	"	57	40	7	15.9	Obs.	
92	XV-H-11	"	60	31	15	31.0	Aga.-sha.	
93	XV-J-8	"	58	36	14	27.8	Har.-sha.	
94	XVI-J-7	"	55	28	16	18.5	Obs.	
95	XV-H-10	"	53	28	8	12.7	Obs.	
96	XV-H-11	"	42	38	10	12.7	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
65-97	XV-H-23	削器	54	23	10	9.4	Obs.	
66-98	XV-J-20	"	(55)	22	6	(6.9)	Obs.	
99	XV-H-22	"	56	21	5	4.2	Obs.	
100	XV-I-12	"	49	26	6	6.7	Har.sha.	
101	XV-H-14	"	50	24	9	8.8	Obs.	
102	XV-H-13	搔器	(37)	24	4	(9.0)	Obs.	
103	XV-H-22	削器	41	(23)	4	(3.7)	Obs.	
104	XVI-H-17	"	41	(24)	5	(5.0)	Obs.	
105	XV-H-19	"	37	24	5	4.4	Obs.	
106	XV-H-2	"	47	22	8	7.9	Obs.	
107	表採	"	46	29	5	6.2	Obs.	
108	XV-H-19	"	42	25	6	7.5	Obs.	
109	XV-I-21	"	39	19	7	4.2	Obs.	
110	XIV-H-20	"	40	22	8	9.5	Har.sha.	
111	XIV-G-25	"	38	26	10	11.0	Obs.	
112	XIV-I-10	"	42	23	9	11.5	Obs.	
113	XV-J-19	"	43	19	7	5.6	Che.	
114	XV-H-10	"	44	28	8	10.8	Obs.	
115	XVII-I-21	"	36	19	3	3.6	Obs.	
116	X配石群	"	33	19	4	3.1	Obs.	
117	XIII-G-21	"	(35)	20	8	(5.5)	Obs.	
118	XV-H-13	"	37	21	8	5.3	Obs.	
119	XV-H-10	"	36	25	8	6.2	Obs.	
120	XVI-I-6	"	38	22	9	8.0	Obs.	
121	グリッター括	"	35	23	11	8.8	Obs.	
122	X配石群	"	(28)	26	4	(4.0)	Obs.	
123	XIV-I-15	"	(23)	18	3	(1.2)	Obs.	
124	XV-H-4	"	93	55	8	34.9	Obs.	
67-125	X配石群	"	53	64	15	39.7	Obs.	
126	XIV-H-25	"	45	62	6	22.8	Obs.	
127	Y配石群	"	43	68	15	42.8	Mu.	
128	XV-J-14	"	36	45	7	10.2	Obs.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
67-129	?-J-16	削 器	31	47	7	11.9	Obs.	
130	グリット一括	"	33	36	9	7.5	Obs.	
131	XV-H-11	"	31	43	10	9.9	Obs.	
132	XV-H-3	"	39	33	15	16.8	Aga-sha.	
133	XV-G-H	"	44	32	8	6.9	Obs.	
134	表 採	"	42	31	12	13.9	Aga-sha.	
135	XV-G-23	"	38	33	11	12.3	Obs.	
136	XV-H-21	"	(27)	23	12	(6.2)	Obs.	
137	XIV-H-20	"	53	26	7	11.9	Obs.	焼けている。
138	XV-I-18	"	42	42	9	15.6	Obs.	
139	XV-I-1	"	32	32	14	14.5	Obs.	
140	XVI-I-12	"	23	36	5	3.9	Obs.	
141	XVI-H-21	"	30	34	6	5.8	Obs.	
142	XV-H-11	"	(23)	38	7	(6.6)	Obs.	
143	XV-H-18	"	34	25	6	7.1	Obs.	
144	XV-I-8	"	(29)	22	8	(4.2)	Obs.	
145	XIII-F-23	"	32	19	6	4.0	Obs.	
68-146	XV-H-22	"	(29)	22	3	(3.2)	Obs.	
147	XV-I-2	"	38	27	10	8.1	Obs.	
148	XIV-I-15	"	(30)	(27)	10	(6.5)	Obs.	
149	XV-H-1	"	26	32	6	4.6	Obs.	
150	XV-H-19	"	31	17	3	2.7	Obs.	
151	XV-H-9	"	(25)	26	6	(4.2)	Obs.	
152	XIV-H-20	"	27	30	7	3.9	Obs.	
153	XV-I-G-5	"	(22)	26	10	(4.8)	Obs.	
154	XV-H-20	"	21	28	8	3.9	Obs.	
155	表 採 搔 器	"	20	24	6	4.5	Obs.	
156	XVII-I-24	"	21	29	6	5.3	Obs.	
157	XV-J-10	削 器	43	17	3	2.5	Obs.	
158	表 採	"	(23)	18	5	(2.4)	Har-sha.	
159	XV-J-9	"	(26)	(16)	4	(2.0)	Obs.	
160	XV-H-12	"	(25)	23	11	(4.8)	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
68-161	XVI-I-2	削器	(27)	22	4	(2.2)	Obs.	
162	X配石群	"	(25)	27	3	(2.1)	Obs.	
163	XIV-I-15	"	29	31	5	2.6	Obs.	
164	XV-I-22	"	23	21	6	3.0	Obs.	焼けている。
165	XVI-J-6	扁平石核	47	34	22	34.0	Obs.	
166	XV-I-16	"	30	25	21	19.7	Obs.	
167	XV-I-12	"	39	31	25	28.8	Obs.	
168	XV-J-6	"	36	25	20	13.1	Obs.	
169	XVII-H-7	"	34	33	30	25.6	Obs.	
170	XIV-J-15	"	34	36	20	23.3	Obs.	
171	XV-H-23	"	46	31	25	45.2	Har. sha.	
172	XVI-J-7	"	37	41	26	40.2	Har. sha.	
173	XV-K-2-3	"	35	32	20	21.0	Obs.	
69-174	XIV-H-2	"	24	52	16	12.6	Obs.	
175	XV-H-15	"	30	34	17	15.1	Obs.	
176	X配石群	両面体石器	38	37	11	17.1	Obs.	
177	?	扁平石核	29	38	25	28.1	Obs.	
178	X配石群	"	59	29	13	26.0	Obs.	
179	XV-G-12	"	60	28	18	24.0	Obs.	
180	XV-H-10	両面体石器	(56)	22	14	(12.1)	Obs.	
181	XV-I-15	"	48	22	13	12.2	Obs.	
182	XV-I-21	"	(70)	61	20	(98.8)	Mu.	
183	XV-J-8	"	30	23	9	6.1	Obs.	
184	表採	"	33	25	9	9.6	Obs.	
185	XV-J-1	"	55	42	11	30.2	Obs.	
186	XV-H-20	"	58	36	9	14.0	Obs.	
187	XV-H-23	削器or搔器	42	52	21	54.8	Horn.	
188	X配石群	スポール	(23)	11	6	(1.1)	Obs.	
189	XV-H-12	黒曜石棒状原石	(48)	21	14	(13.1)	Obs.	
190	XV-H-14	"	(35)	19	14	(15.4)	Obs.	
191	Y配石群	"	83	36	(16)	(38.7)	Obs.	
70-192	XV-H-3	石斧	130	50	18	200.0	Gr. sch.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
70-193	XV-G-2	石 斧	104	38	11	79.6	Gr. sch.	
194	XV-G-1	"	91	33	11	48.0	Gr. sch.	
195	XIV-G-20	"	80	38	11	51.5	Gr. sch.	
196	XV-G-2	"	84	40	15	69.1	Gr. sch.	未成品
197	XV-K-23	"	(82)	56	26	(150.0)	Gr. sch.	刃部破片
198	XV-H-22	"	(54)	47	15	(52.5)	Horn.	刃部破片
71-199	X 配石群	"	(69)	36	20	(70.5)	Gr. sch.	柄部破片
200	XVI-H-6	"	(72)	39	8	(40.5)	Gr. sch.	"
201	XV-H-6	"	(28)	27	5	(6.2)	Gr. sch.	"
202	表 採	"	(52)	36	9	(20.4)	Horn.	"
203	XIV-I-5	"	(55)	42	35	(145.0)	Gr. sch.	"
204	XVII-G-22	"	(82)	41	15	(82.8)	Gr. sch.	未成品
205	XV-J-19	"	(71)	46	22	(110.0)	Horn.	"
206	XVI-G-16	石 斧 破 片	(78)	(40)	10	(47)	Gr. sch.	
207	XV-J-10	砥 石	47	29	16	19.1	Sa.	
208	XV-J-14	石 錘	68	82	15	100.5	Two py.-and.	
209	XIV-I-10~25	"	65	65	18	89.5	Two py.-and.	
210	XV-I-22	"	59	65	14	71.3	Da.	
211	XV-I-15	"	53	67	13	52.5	Two py.-and.	
212	XV-H-24	"	59	62	12	59.1	Da.	
213	Y 配石群	"	46	63	15	69.5	Sa.	
214	X 配石群	"	54	55	6	25.9	Mu.	
215	XV-I-18	"	46	60	18	50.7	Propy.	
216	XV-I-25	"	45	48	16	39.5	Two py.-and.	
217	XV-H-9	"	47	66	15	45.1	Two py.-and.	
218	XIV-H-24	"	42	47	11	26.7	Propy.	
219	XV-J-8	"	61	89	22	150.0	Two py.-and.	
220	XV-J-7	"	59	81	11	75.5	Mu.	
73-221	XIV-H-10	"	68	71	15	100.5	Mu.	
222	XV-J-8	"	72	64	17	110.0	Mu.	
223	Y 配石群	"	40	37	12	22.6	Two py.-and.	
224	XIV-H-?	"	38	38	9	21.5	Mu.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
73-225	XV-G-25	石 錘	34	45	11	21.5	Mu.	
226	X 配石群	"	59	62	(14)	(64.1)	Propy.	
74-227	第74号ピット付近	擦 石	142	76	42	640	Propy.	
228	XV-H-14	"	132	74	58	880	Propy.	
229	XIV-H-?	"	213	84	44	1050	Two py.-and.	
230	XV-H-22	"	198	88	56	1230	Hor.-and.	
231	XVI-H-2	"	98	56	44	260	Two py.-and.	
232	XVII-G-21	"	122	71	37	340	Hor.-and.	
233	XVII-G-21	"	178	98	65	1000	Hor.-and.	
234	XV-G-13	"	(115)	66	51	(500)	Propy.	
235	XV-J-15	"	(55)	64	49	(200)	Propy.	
236	XVII-H-24	"	131	72	58	560	Tu.-sa.	
237	XV-I-21	"	129	69	59	650	Da.	
238	XIV-H-?	"	143	65	56	560	Two py.-and.	
239	XVI-H	"	163	77	49	860	Two py.-and.	
240	XV-J-20	"	(73)	73	38	(400)	Two py.-and.	
241	XV-I-22	"	(124)	81	58	(860)	Propy.	
242	XVI-J-19	"	(117)	79	40	(450)	Two py.-and.	
75-243	XVI-H-?	"	(93)	83	41	(370)	Congl.	
244	XV-J-8	"	(73)	78	49	(250)	Two py.-and.	
245	XV-J-3	"	(110)	88	56	(650)	Da.	
246	XV-G-12	"	(93)	87	51	(450)	Da.	
247	XVI-I-11	"	(70)	50	32	(150)	Two py.-and.	
248	XV-I-7	"	(86)	57	33	(210)	Two py.-and.	
249	XV-G-19	"	108	58	28	180	Two py.-and.	
76-250	表 採	"	200	93	36	1000	Propy.	
251	XV-I-16	"	(79)	76	41	(390)	Propy.	
252	XV-G-19	"	(101)	87	29	(400)	Hor.-and.	
253	XV-H-25	"	(127)	81	30	(410)	Propy.	
254	表 採	"	99	67	22	150	Propy.	
25	"	"	85	68	24	160	Propy.	
256	"	砥 石	100	62	25	160	We.-Tu.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
76-257	XV-I-15	砥石	66	56	23	110.3	Coa.-sa.	
258	XIV-G-22	"	123	99	39	600	Hor.-sha.	
259	XVI-I-3	"	49	39	27	74.2	Sa.	
260	XVI-H-17	"	56	28	29	59.7	Sa.	
261	XV-H-17	"	38	32	20	36.9	Sa.	
262	XIV-H-10	"	96	65	22	100	Sa.	
263	XVI-H-12	"	58	43	24	64.4	Coa.-sa.	
264	XIV-I-10	"	72	54	26	100	Sa.	
265	XVI-J-19	"	88	58	13	100	Sa.	
266	XV-J-7	"	36	59	10	28.5	Mu.	
267	XV-G-19	石鋸	93	55	9	50	Mu.	
77-268	XV-G-21	石皿	33.4	116	30	2050	Da.	
269	XV-G-24	砥石	141	50	44	370	Mu.	
270	XV-G-21	石皿	176	80	38	560	We.-Tu.	
271	XVII-H-24	石錘	128	96	33	510	Two py.-and.	
272	XV-H-21	敲石	69	59	45	230	Che.	
273	XV-H-16	"	62	52	45	160	Che.	
41-83	XV-G-16	石皿	292	142	96	4550	And.	S-1とS-2接合
	XVI-G-24	擦石(未成品?)	273	55	91	1400	?	
	表採	擦石	127	110	75	1550	?	

〔石質略号表〕

Aga.-Sha. (Agate-Shale) : 瑪瑙質頁岩, And. (Andesite) : 安山岩, Bl.-Sch. (Black-Schist) : 黒色片岩, Che. (chert) : 硅岩, Coa.-sa. (Coarse-sandstone) : 粗粒砂岩, Congl. (Conglomerate) : 礫岩, Da. (Dacite) : 石英安山岩, Gr.-Sch. (Green-schist) : 緑色片岩, Har.-sha. (Hard-shale) : 硬質頁岩, Hor.-and. (Hornblende-andesite) : 角閃石安山岩, Horn. (Hornfels) : ホルンフェルス, Mu. (Mudstone) : 泥岩, Obs. (Obsidian) : 黒耀石, Propy. (Propyrite) : 変朽安山岩, Sa. (Sandstone) : 砂岩, Tu.-Sa. (Tuffaceous-sandstone) : 凝灰質砂岩, Two py.-and. (Two pyroxene andesite) : 複輝石安山岩, We.-tu. (Welded-tuff) : 熔結凝灰岩

〔計測値〕 () でくくった計測値は欠損していることを示す。

第8表 T210遺跡A・B区出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
78-1	A 区	石 鏃	28	16	4	1.1	Obs.	
2	"	"	26	11	3	0.7	Obs.	
3	"	"	(22)	9	2	(0.4)	Obs.	
4	"	"	(20)	10	2	(0.5)	Obs.	
5	A or B 区	"	19	11	2	0.4	Obs.	
6	B 区	"	21	15	3	1.1	Obs.	
7	A 区	"	(21)	(15)	2	(0.8)	Obs.	
8	B 区	"	(20)	19	4	(0.4)	Obs.	
9	"	"	(15)	11	4	(0.4)	Obs.	
10	"	ナイフ状石器	(55)	26	9	(10.6)	Obs.	
11	"	搔 器	33	42	10	10.8	Obs.	
12	"	"	29	33	9	11.1	Obs.	
13	A 区	"	25	26	6	3.7	Obs.	
14	B 区	"	(21)	19	5	(2.2)	Obs.	
15	"	削 器	(48)	14	8	(6.6)	Har. sha.	
16	"	"	(28)	16	9	(4.3)	Obs.	
17	"	"	34	15	5	3.3	Obs.	
18	"	"	31	19	5	4.6	Che.	
19	"	扁平石核	26	28	22	20.6	Obs.	
20	A 区	"	22	40	17	12.7	Obs.	
21	"	"	24	41	21	12.4	Obs.	

引用・参考文献

- 愛下 淳・橋本 晋ほか 1975『新冠町氷川遺跡』新冠町教育委員会
- 五十嵐八枝子・熊野純男 1974「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13-2 所収
- 石川 徹 1967「札幌郡手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3 所収
- 石川 徹・佐藤一夫・金山拓夫 1971『ママチ遺跡』
- 井上 久・天間勝也・三宅徹也 1973「下田代納屋B遺跡第1次調査概要」『青森県立郷土館報』1 所収
- 上野秀一編 1974『N 293 遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅳ
- 上野秀一編 1975『S 256 遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅹ所収
- 上野秀一・高橋和樹編 1975『N 309 遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅹ
- 江坂輝弥 1956「各地域の縄文式土器—東北—」『日本考古学講座』3 所収
- 扇谷昌康 1961「門別町トニカ遺跡調査概報」『日高地方史研究』所収
- 扇谷昌康 1963「門別町トニカ墳墓遺跡について」『北海道の文化』特集号所収
- 扇谷昌康 1965「門別町トニカ墳墓群」『北海道の文化』9 所収
- 大谷敏三 1975「北海道縄文晩期における墓制について(1)」『先史』9 所収
- 大場利夫ほか 1955『函館市梁川町遺跡』
- 大場利夫・桐井力蔵 1958『岩内遺跡』岩内町教育委員会
- 大場利夫・扇谷昌康 1964「勇払郡鶴川遺跡」『北方文化研究報告』19 所収
- 大場利夫・棚瀬善一 1965『大樹遺跡』
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二 1973『白石神社遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅰ
- 加藤邦雄編 1976『S 153 遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅹ
- 菊池俊彦 1967「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3 所収
- 木村尚俊 1975「北海道考古学講座3, 縄文早期」『北海道史研究』9 所収
- 倉谷泰賢・小笠原忠久 1972『大安在B遺跡』上ノ国町教育委員会
- 黒崎康雄・宮夫靖夫 1962『浦河郡浦河町白泉遺跡の発掘について(第一輯)』浦河町教育委員会
- 桑原 護 1966「北筒式土器」『考古学雑誌』51-4 所収
- 河野本道 1974「平取地方の文化財」『平取町史』抜刷
- 札幌市教育委員会 1975『札幌市文化財調査報告書』Ⅱ
- 佐藤忠雄 1966『幌倉沼の墳墓』(東川町教育委員会)埋蔵文化財紀要1
- 沢 四郎ほか 1962『東釧路』釧路市教育委員会
- 沢 四郎・富水慶一 1966「オンネチカップ(西庶路)遺跡調査報告」『北海道白糠町の先史文化』1 所収
- 沢 四郎 1969「釧路川流域の先史時代」釧路叢書11『釧路川』所収
- 沢 四郎・西 幸隆 1973「北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』2 所収
- 沢 四郎 1974「縄文時代の釧路」『新釧路市史』1 所収
- 重松和男 1971, 1972「北海道の古墳墓について(1), (2)」『北方文化研究』5, 6 所収
- 高橋正勝 1967「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻土器について」『石器時代』8 所収
- 高橋正勝編 1971『柏木川』北海道文化財保護協会
- 高橋正勝 1972「北海道における縄文時代中期の終末(1), (2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』9, 10 所収
- 高橋和樹 1975『S 253 遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅹ所収
- 高橋和樹・内山真澄・土田亜佐子ほか 1976『瀬棚町南川遺跡』瀬棚町教育委員会
- 高橋稀一 1971「富良野市無頭川遺跡調査概要」『学田』3 所収
- 高橋稀一・野村 崇 1972『妹背牛町メム川遺跡』

- 竹田輝雄 1970『港大照寺遺跡—積石墳墓群の調査概報—』蘭越町教育委員会
- 土田垂佐子・上野秀一 1976「石器群について」『瀬棚町南川遺跡』所収
- 土居繁雄・小山内 熙 1956『5万分の1地質図幅説明書—石山』北海道地下資源調査所
- 名久井文明 1974「北日本縄文早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』60—3 所収
- 名取武光・峰山 巖 1961『大川遺跡』郷土研究 4
- 野村 崇 1962「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史』(下)所収
- 野村 崇 1964「栗山町鳩山墳墓遺跡(鳩山第3地点)の発掘調査」『栗山町の文化財』所収
- 野村 崇 1965「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」『石器時代』7 所収
- 野村 崇 1974「芦別市の先史遺跡」空知地方史研究協議会(『芦別市史』所収)
- 野村 崇・森田知忠・中田幹雄・平川善祥・山田悟郎 1976『札幌』北海道開拓記念館
- 畑 宏明 1966「札幌市平岸坊主山遺跡」"Aynu Moshiri" II 所収
- 橋本 晋 1969 a 「白泉遺跡発掘報告」『浦河町の遺跡』所収
- 橋本 晋 1969 b 「東白泉遺跡発掘報告」『浦河町の遺跡』所収
- 藤本英夫 1960「日高における縄文時代末期の墳墓」『北海道考古学誌』1 所収
- 藤本英夫 1961 a 「大狩部第1地点の墳墓遺跡」『せいゆう』6 所収
- 藤本英夫 1961 b 「北海道日高国新冠村大狩部の墳墓遺跡—第一次調査」『古代学』9—3 所収
- 藤本英夫・愛下 淳 1963「新冠郡新冠町字緑丘の墳墓について」『北海道の文化』特集号所収
- 松野正彦・佐藤忠雄・兼重達男 1971「北海道上川郡東川町の墳墓遺跡」『古代文化』23—1 所収
- 峰山 巖 1967「高砂遺跡の配石遺構」『北海道の文化』12 所収
- 峰山 巖・三橋公平 1966「高砂遺跡の配石遺構」『日本考古学協会昭和41年度大会研究発表要旨』所収
- 峰山 巖・金子浩昌・西本豊弘・上野秀一・百々幸雄・桐谷賢一 1973『栄磯岩陰遺跡発掘報告』島牧村教育委員会
- 森田知忠・高橋正勝 1967『サイベ沢B遺跡調査報告』市立函館博物館
- 横山英介・山田悟郎 1974『紅葉山43号遺跡』石狩町教育委員会
- 吉崎昌一 1965「縄文文化の発展と地域性—北海道」『日本の考古学』2 所収

図 版

土 器 縮尺 $\frac{1}{3}$

石 器 縮尺

図版59 B $\frac{1}{4}$

図版38~40, 50~55 $\frac{1}{2}$

図版41~43, 56~59 A $\frac{1}{3}$

図版44 A $\frac{1}{4}$

土製品 縮尺 $\frac{1}{4}$



遺跡付近の航空写真（1：12,500，昭和48年撮影）



A 遺跡遠景（南より）



B 遺跡全景（北西より）



A 遺構近景 (1) (北東より, X配石群とS2, S3群の一部)



B 遺構近景 (2) (南東より, S1群)



A 遺構近景 (3) (北西より, Y配石群の一部とS5群)



B 遺構近景 (4) (南西より, Y'群の一部)



A 遺構近景 (5) (南西より, Z配石群の一部とS7群の一部)



B 遺構近景 (6) (北西より)



B 第101号ピット (南より)



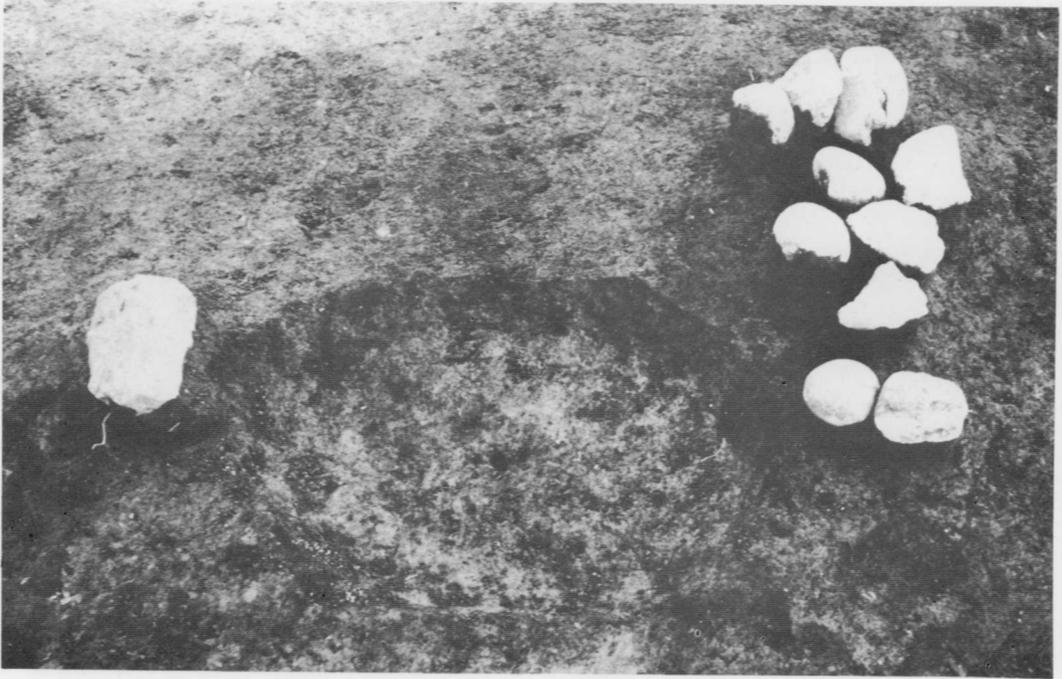
D 第5号ピット (北より)



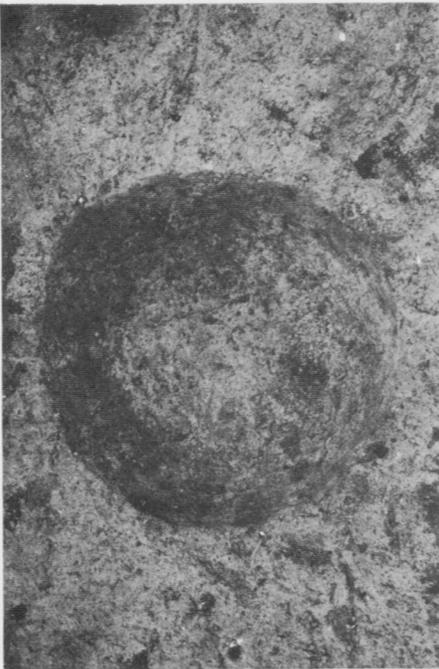
A 第46号ピット (東より)



C 第79号・第80号ピット (西より)



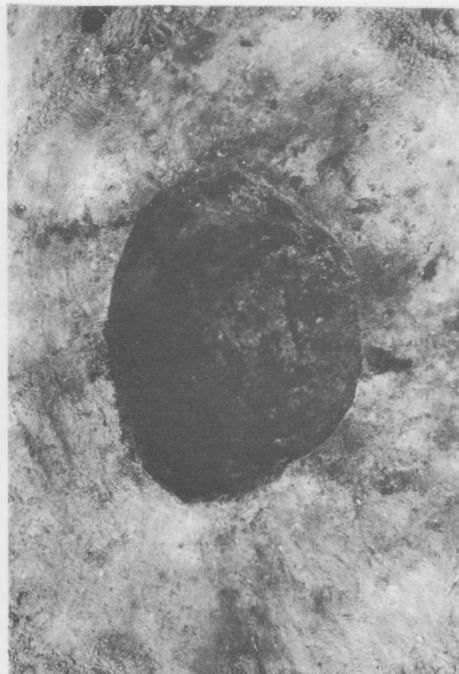
A 第18号ピット，第61号石組（北より）



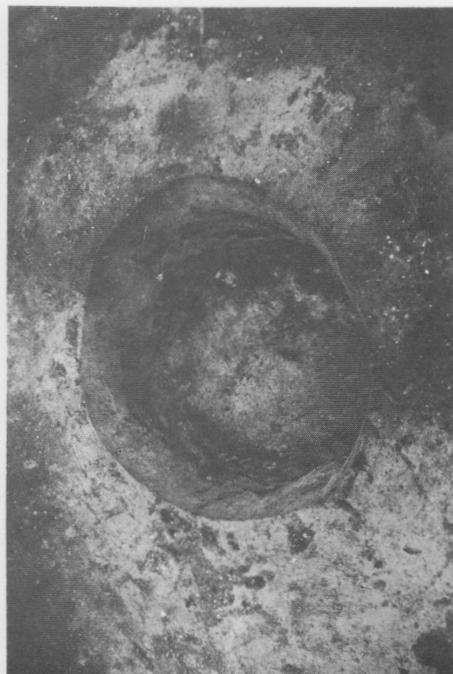
B 第82号ピット（南より）



C 第119号ピット（南より）



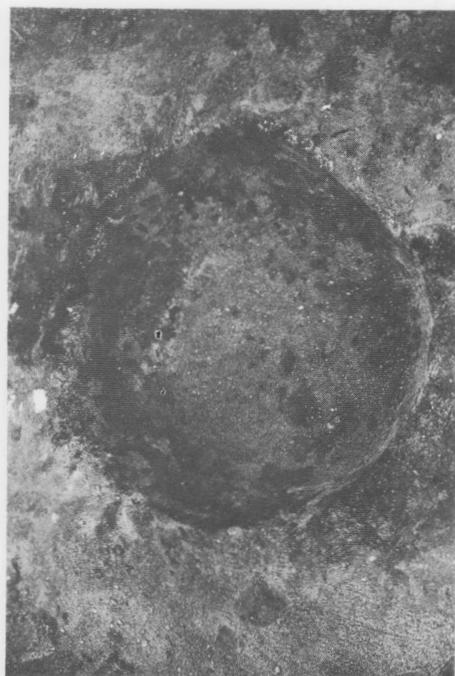
B 第52号ピット(東より)



D 第123号ピット(東より)



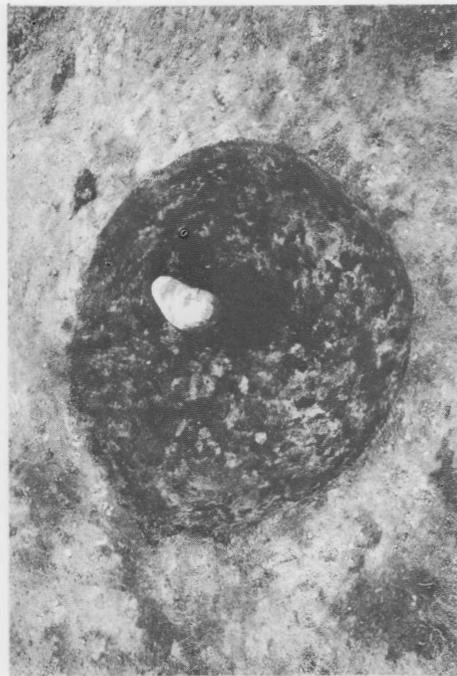
A 第143号ピット(南より)



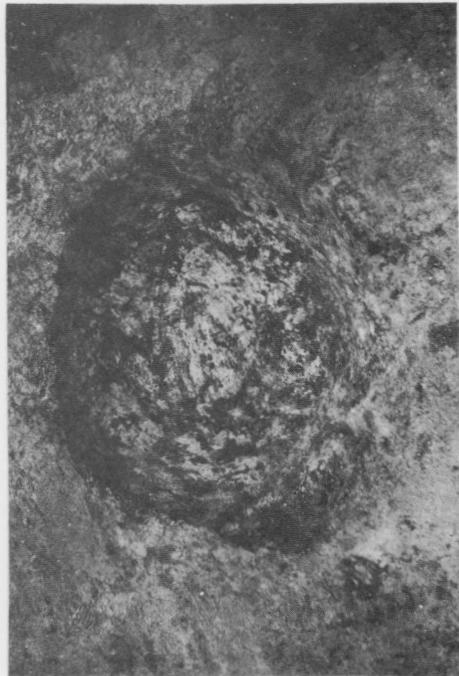
C 第184号ピット(南より)



A 第196号ピット (東より)



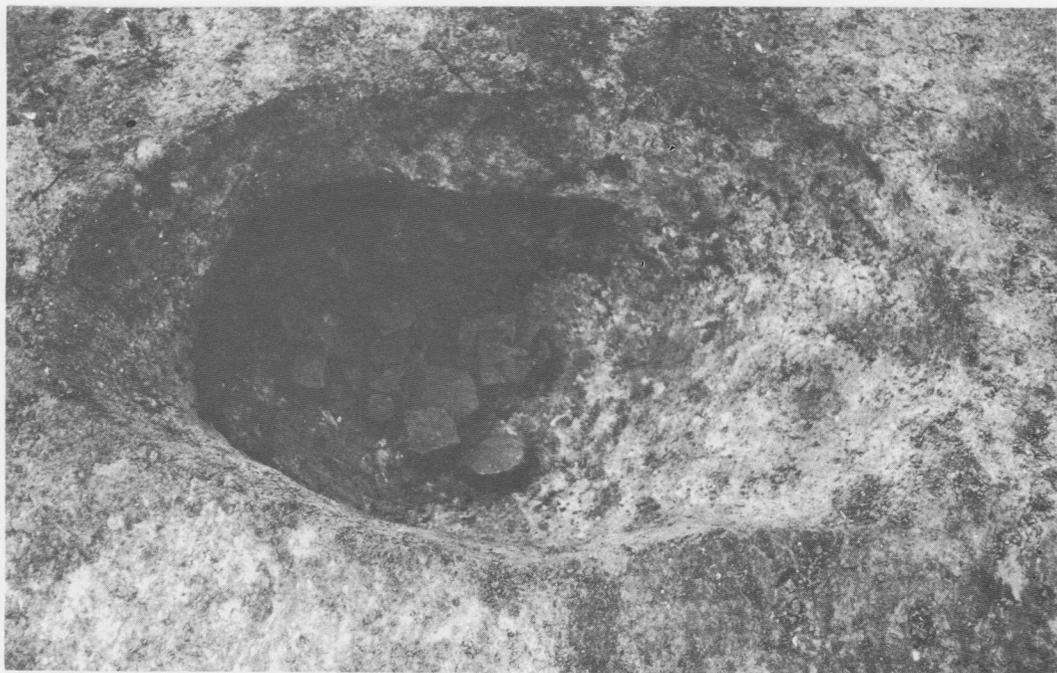
B 第182号ピット (南より)



C 第2号ピット (南より)



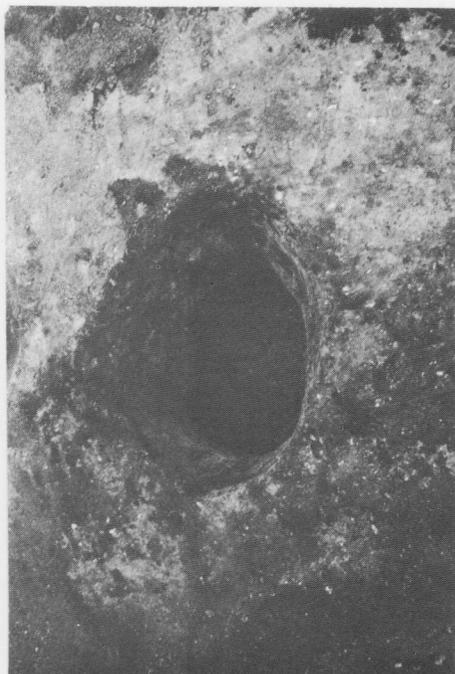
D 第146号ピット (南より)



A 第15号ピット（北より）



B 第8号ピット（北より）



C 第188号ピット（北より）



B 第56号ピット (北より)



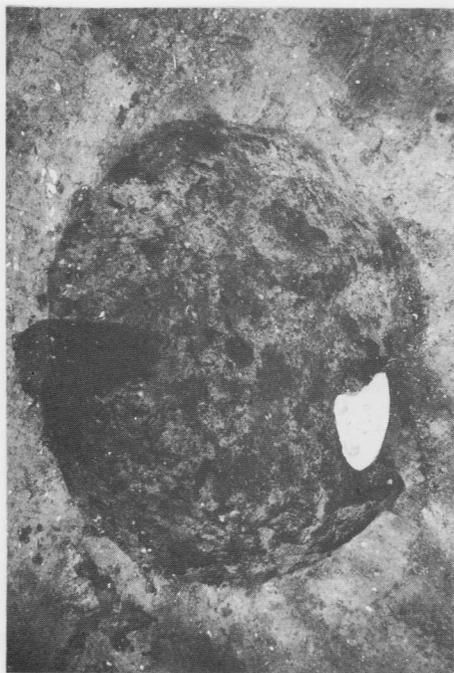
D 第30号ピット (北より)



A 第102号ピット (北より)



C 第142号ピット (南より)



B 第90号ピット (東より)



D 第124号ピット (東より)



A 第112号ピット (南より)



C 第110号ピット (南西より)



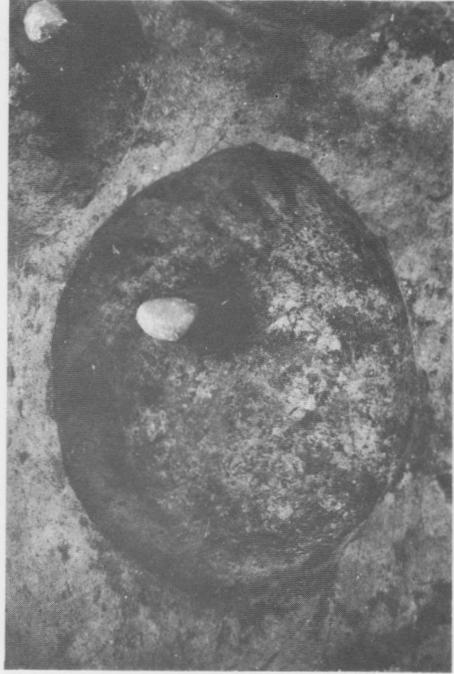
A 第111号ピット(西より)



B 第120号ピット(南より)



C 第9号ピット(北より)



D 第145号ピット(南より)



B 第65号ピット (南より)



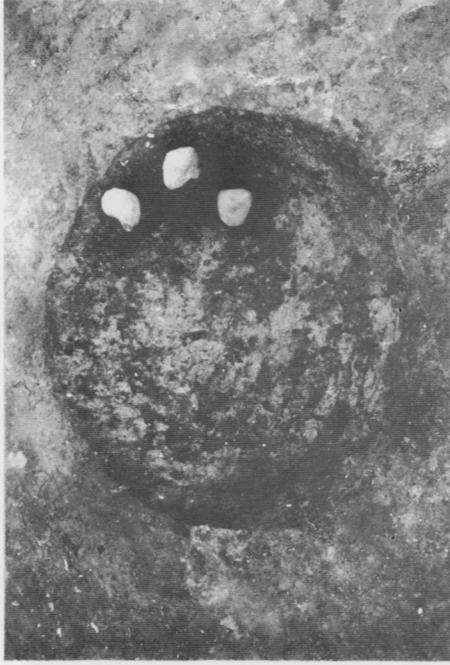
D 第178号ピット (南東より)



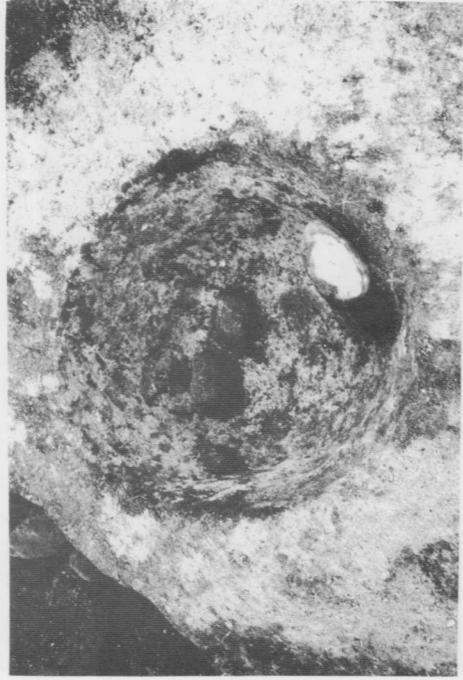
A 第158号ピット (南より)



C 第73号ピット (南より)



B 第160号ピット (南より)



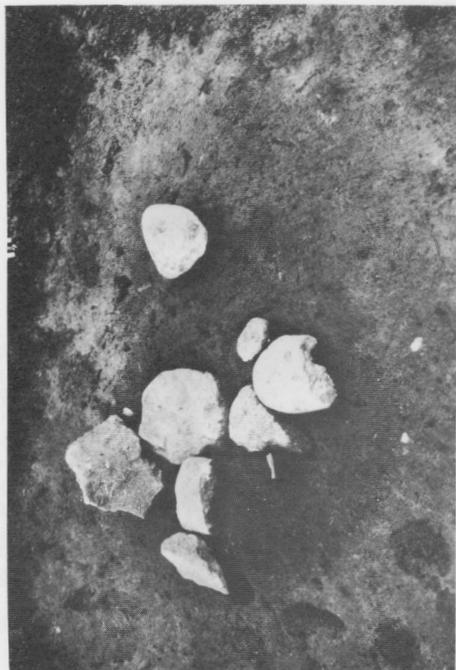
D 第189号ピット (南より)



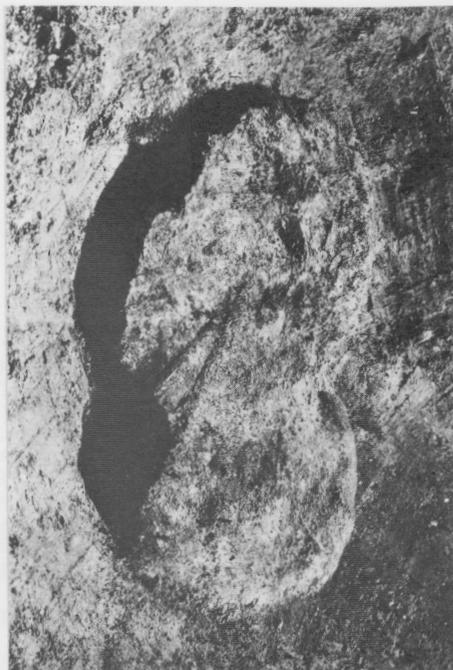
A 第162号ピット (南より)



C 第103号, 第122ピット (西より)



A 第13号ピット (南より, ピット発掘前)



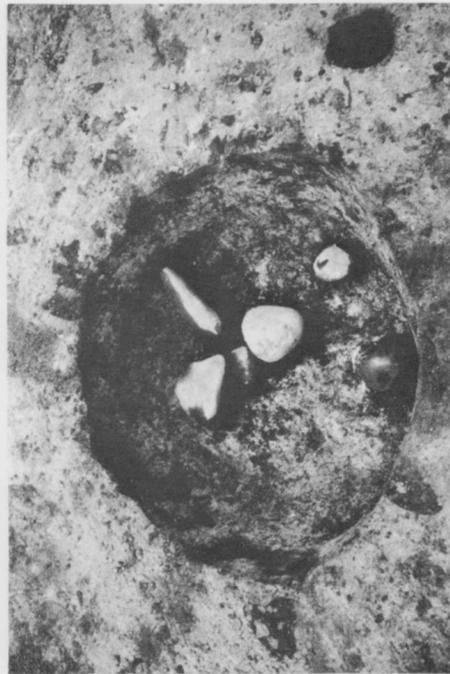
B 第13号, 第31号ピット (北より)



C 第1号ピット (南より)



A 第105号ピット (南より)



C 第95号ピット (南より)



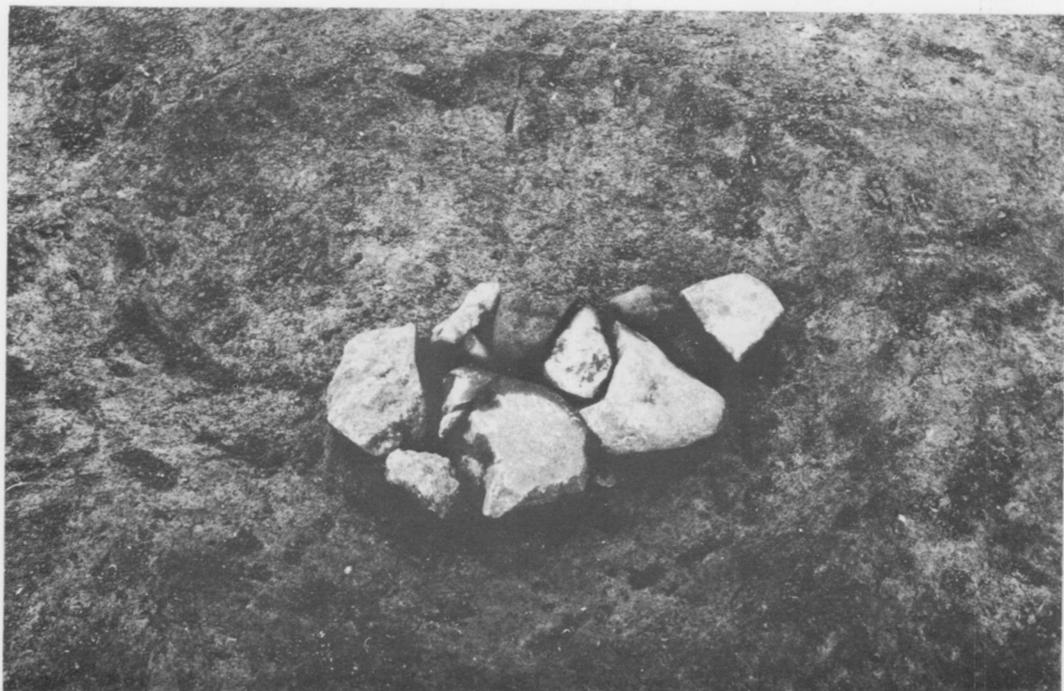
B 第190号ピット (南より)



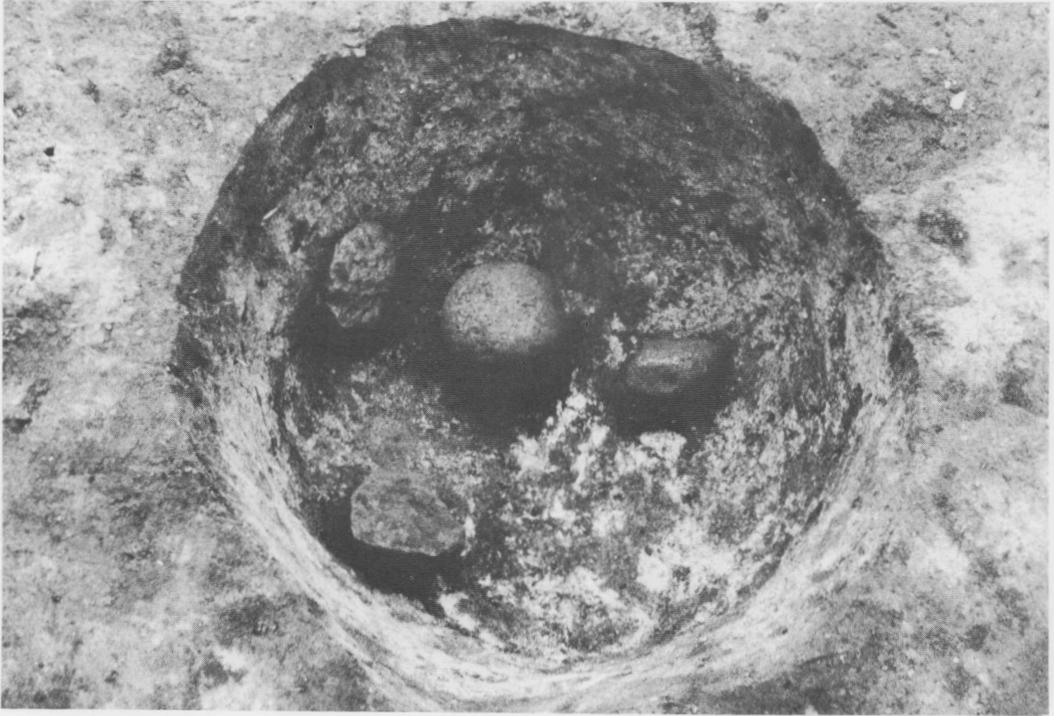
D 第144号ピット (南より)



A 第11号石組, 第12号ピット (東より)



B 第38号ピット (南より)



A 第98号ピット (南より)



B 第137号ピット (南より)



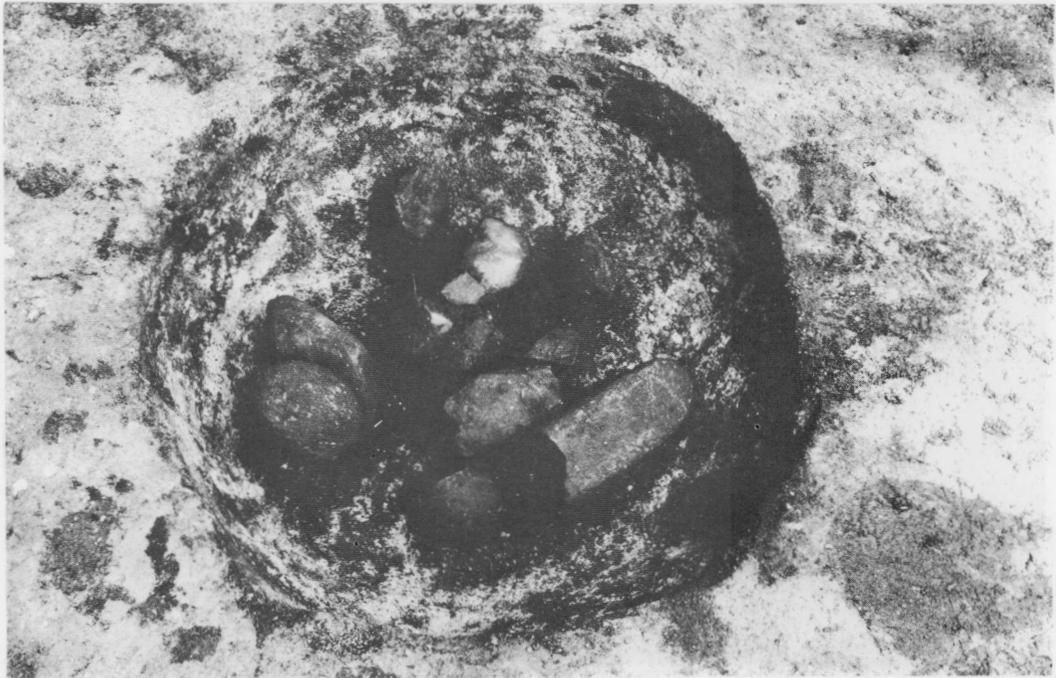
C 第187号ピット (南より)



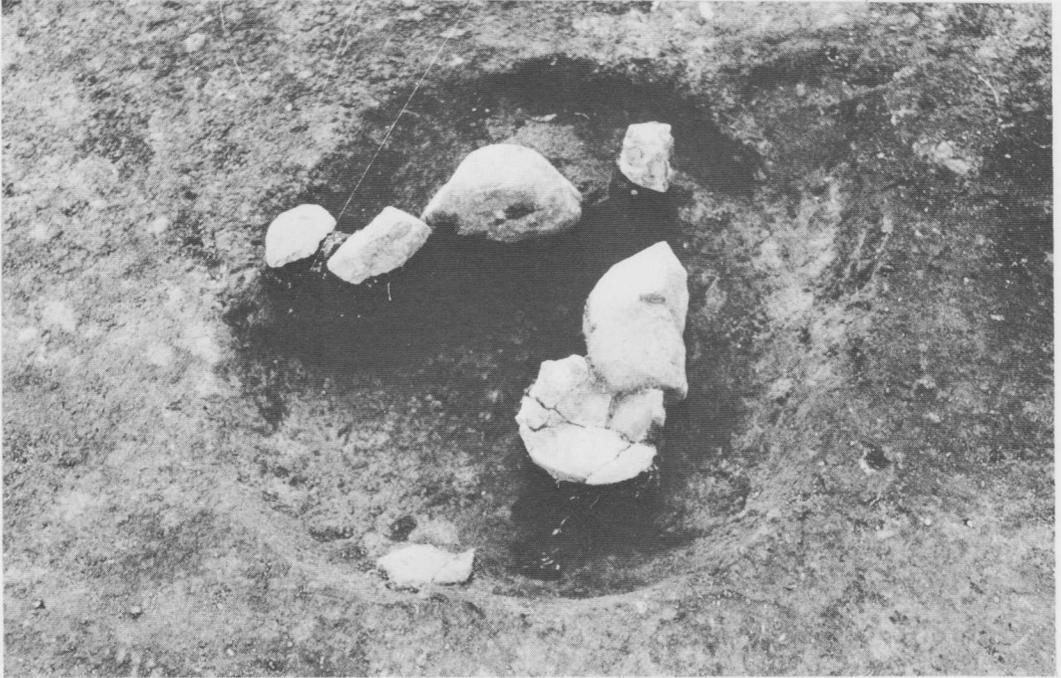
A 第40号ピット（東より、ピット発掘前）



B 第22号ピット（北より、ピット発掘前）



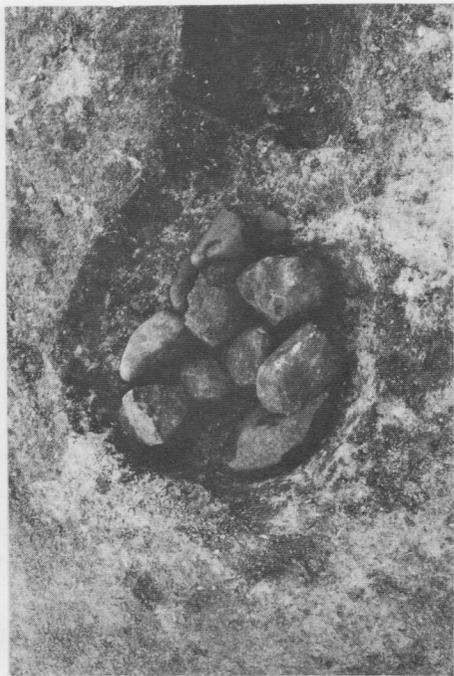
C 第4号ピット（北東より）



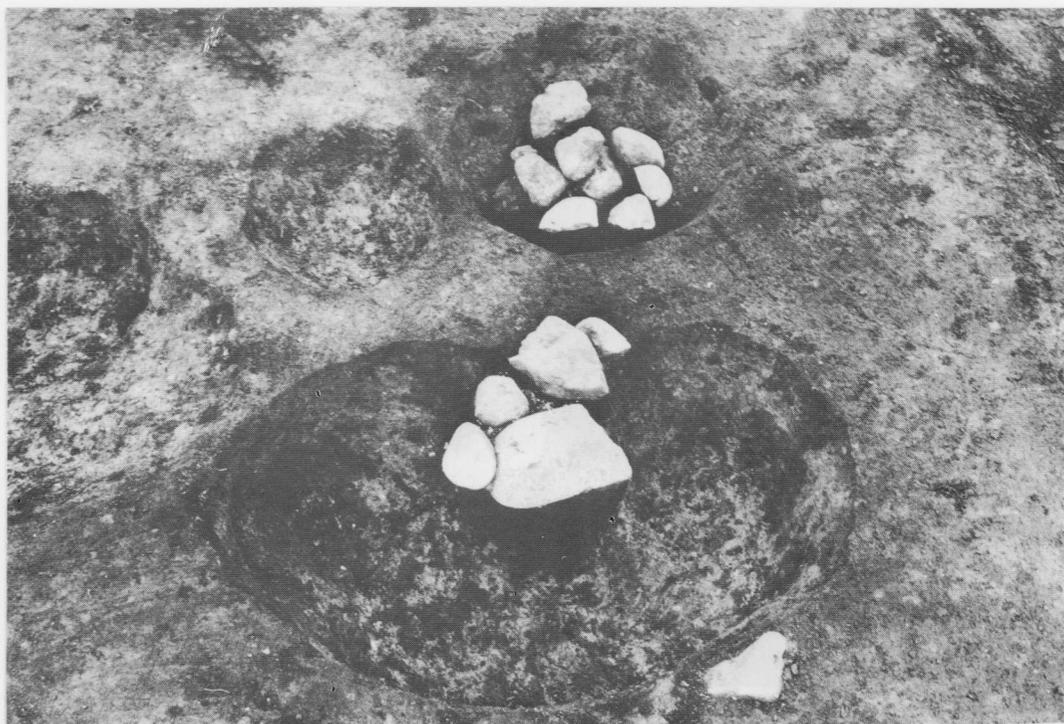
A 第22号ピット (東より)



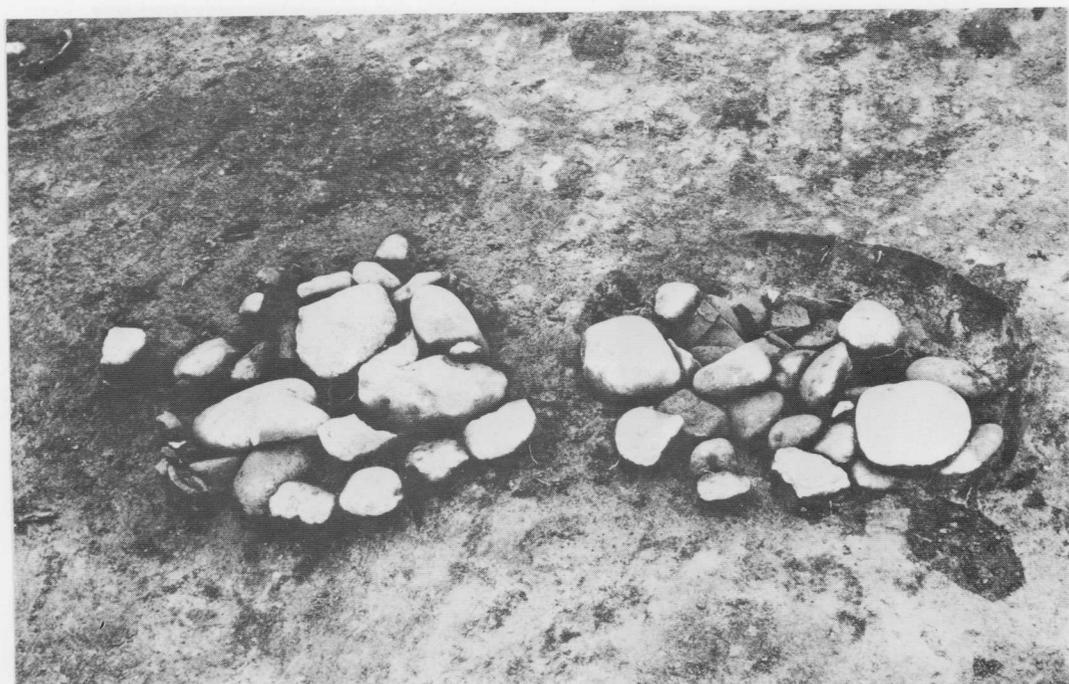
B 第149号ピット (南より)



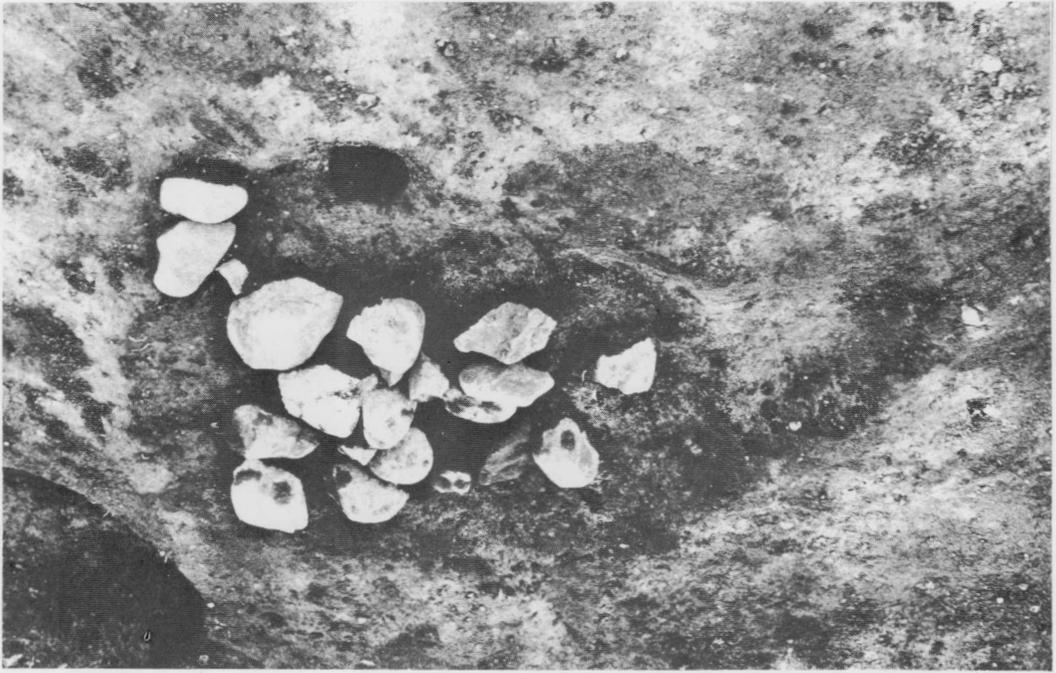
C 第197号ピット (東より)



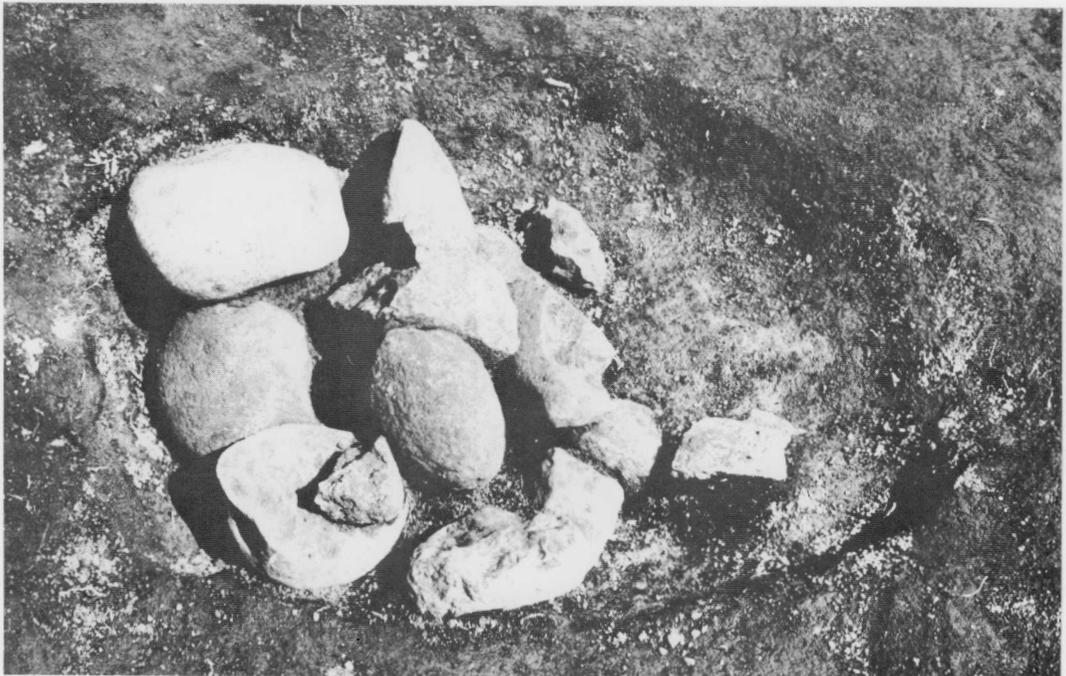
A 第23号, 第50号, 第64号ピット (西より)



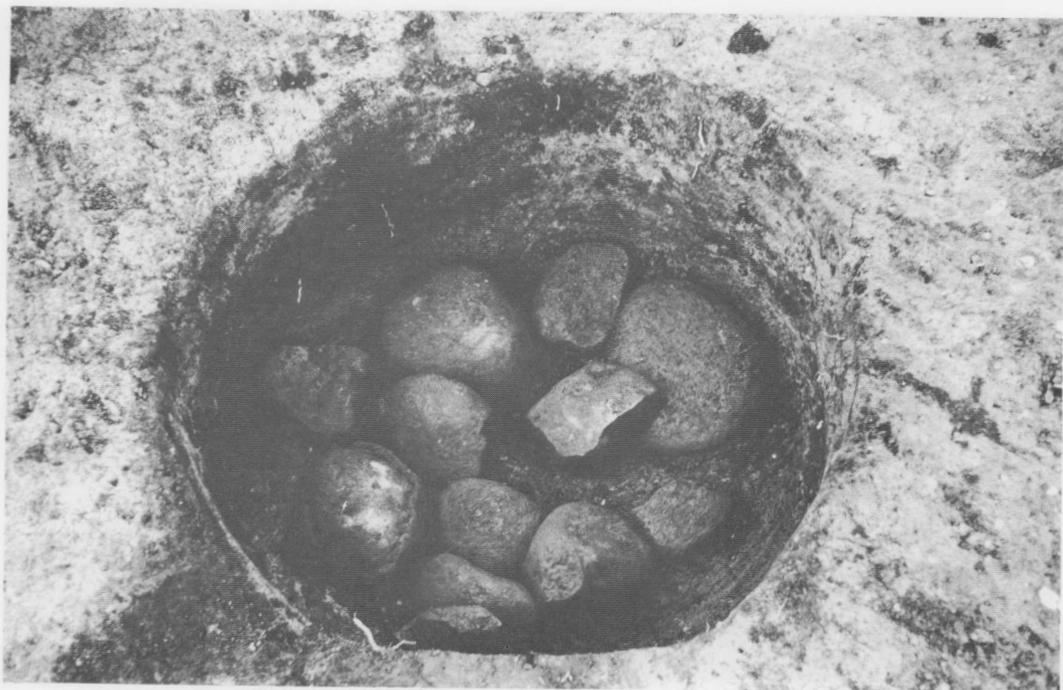
B 第19号, 第20号ピット (南東より)



A 第78号ピット (南より)



B 第70号ピット (西より)



A 第81号ピット (南より)



B 第133号ピット (南東より)



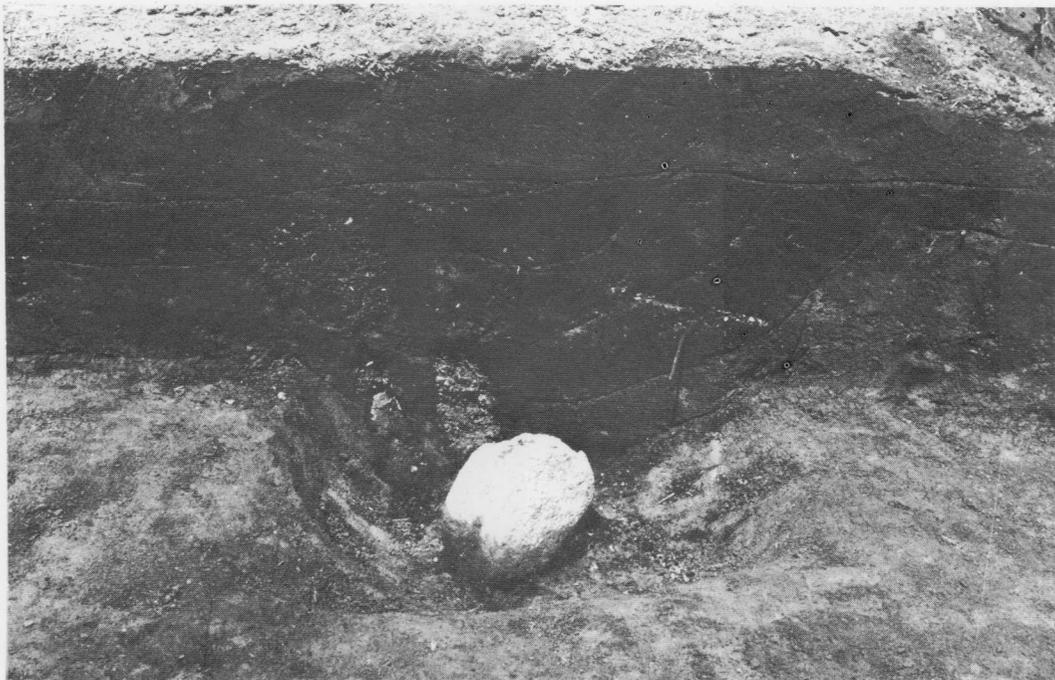
A 第180号ピット (南西より)



B 第88号ピット (北より)



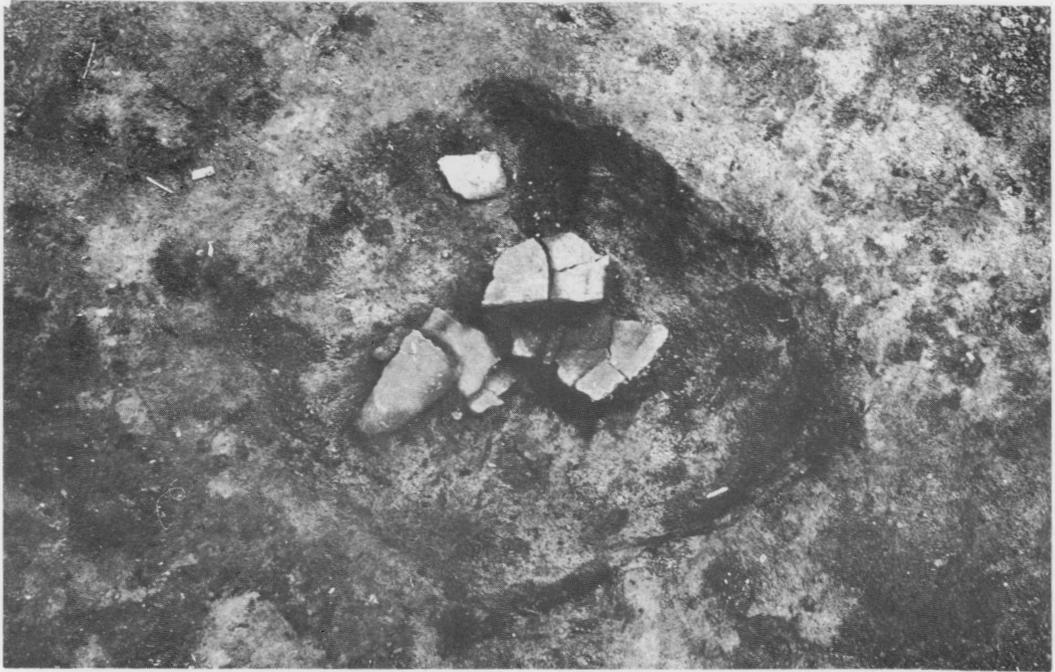
C 第76号ピット (南より)



A 第170号ピット (1) (東より)



B 第170号ピット (2) (南より)



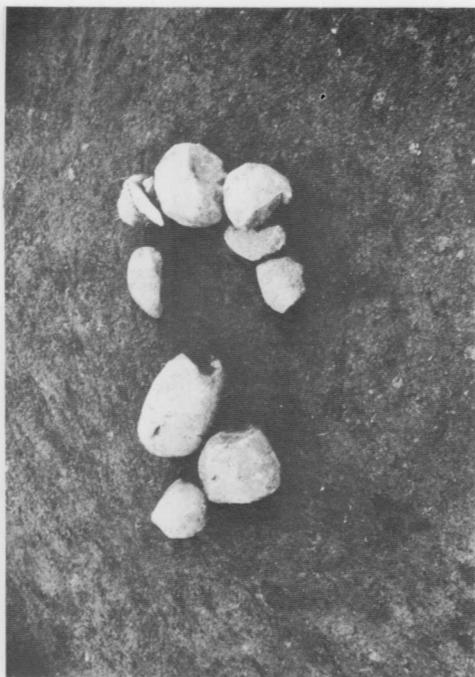
A 第100号ピット（北西より）



B 第93号ピット（南より）



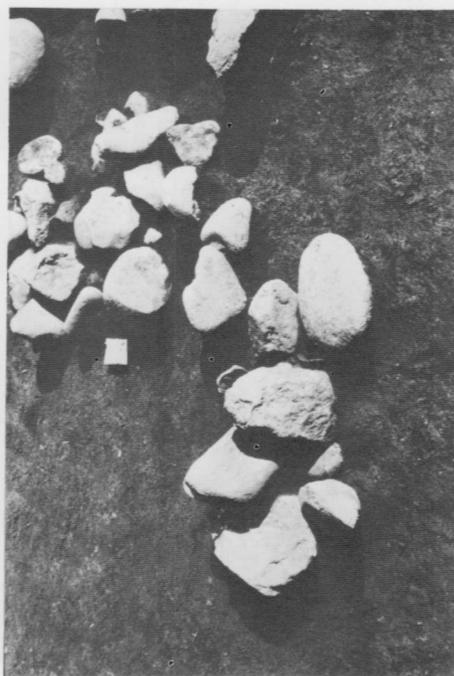
B 第32号石組 (北より)



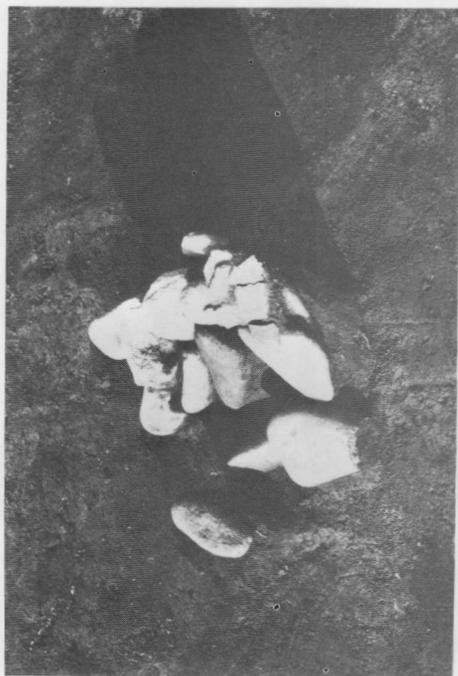
D 第27号石組 (北より)



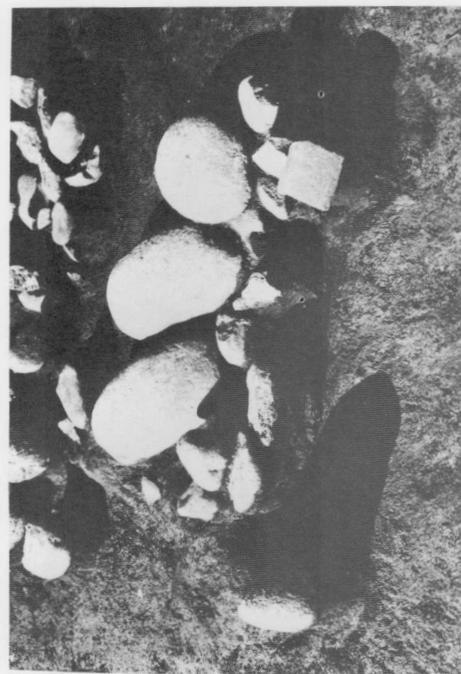
A 第116号石組 (東より)



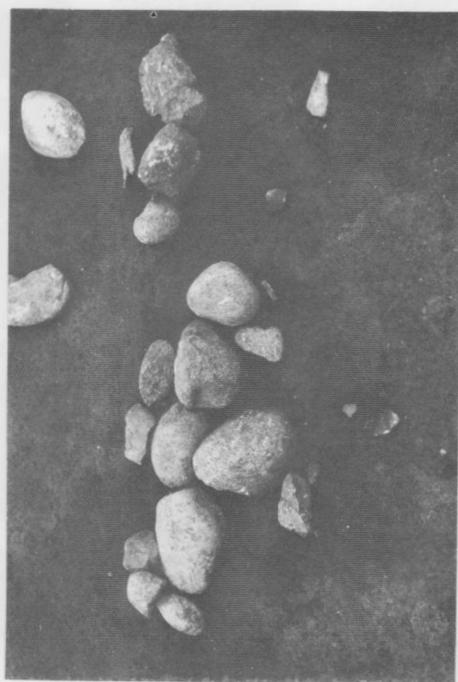
C 第28号石組 (西より)



A 第57号石組 (南より)



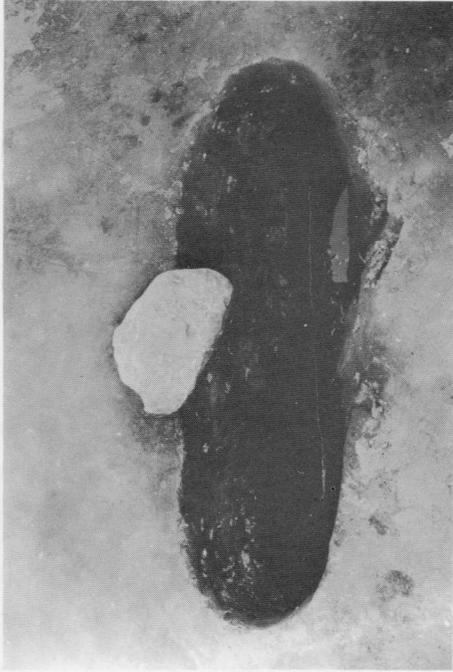
B 第43号石組 (南より)



C 第62号, 第35号石組 (南より)



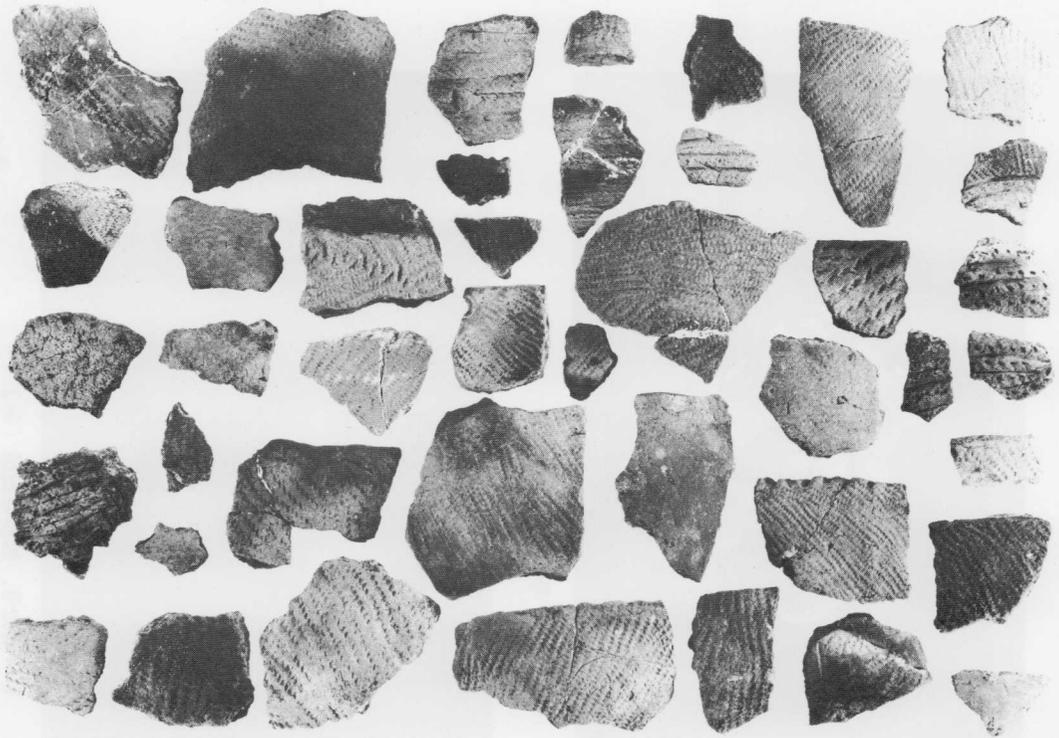
D 第39号石組 (東より)



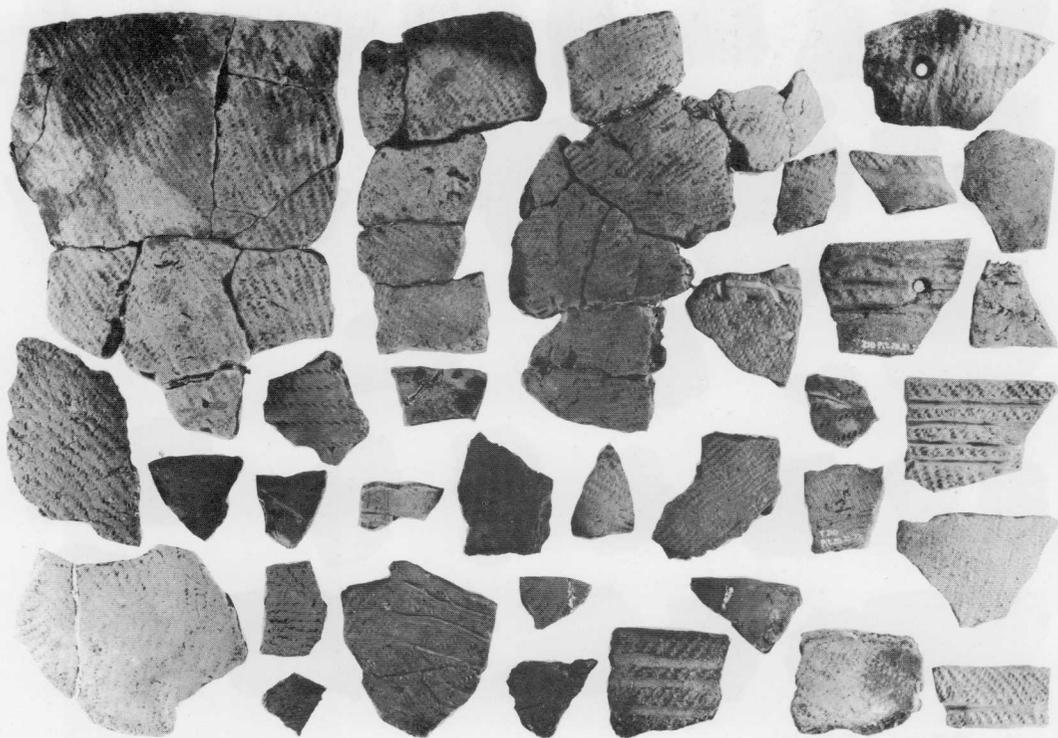
A 第167号ピット(南西より)



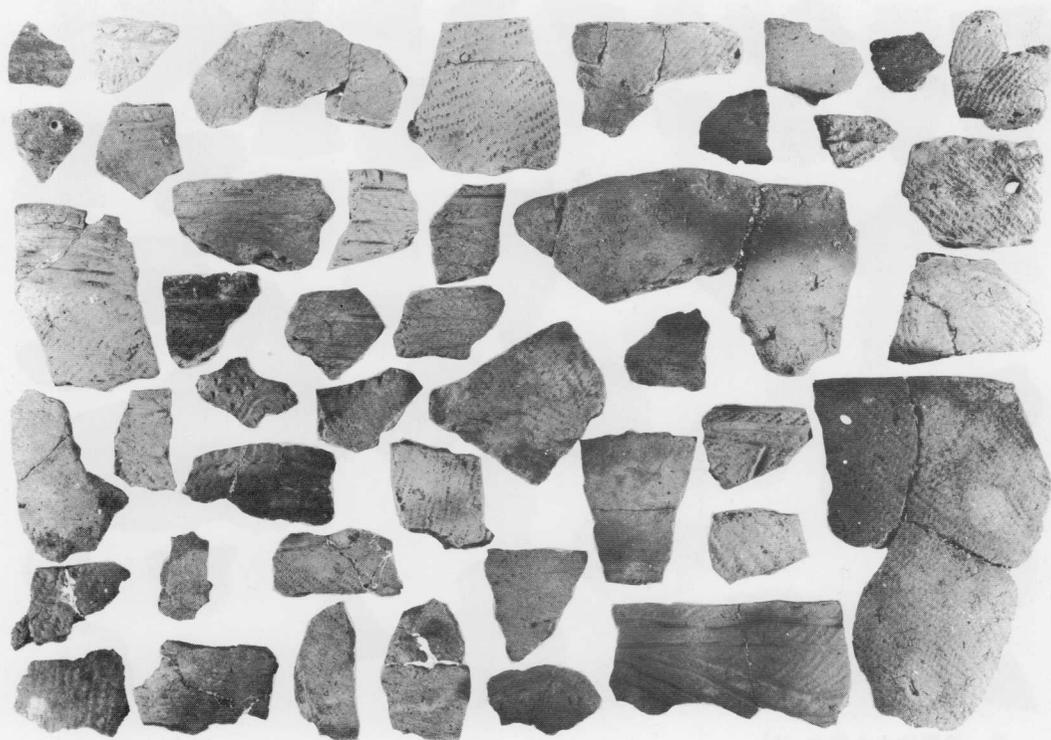
B 第171号ピット(西より)



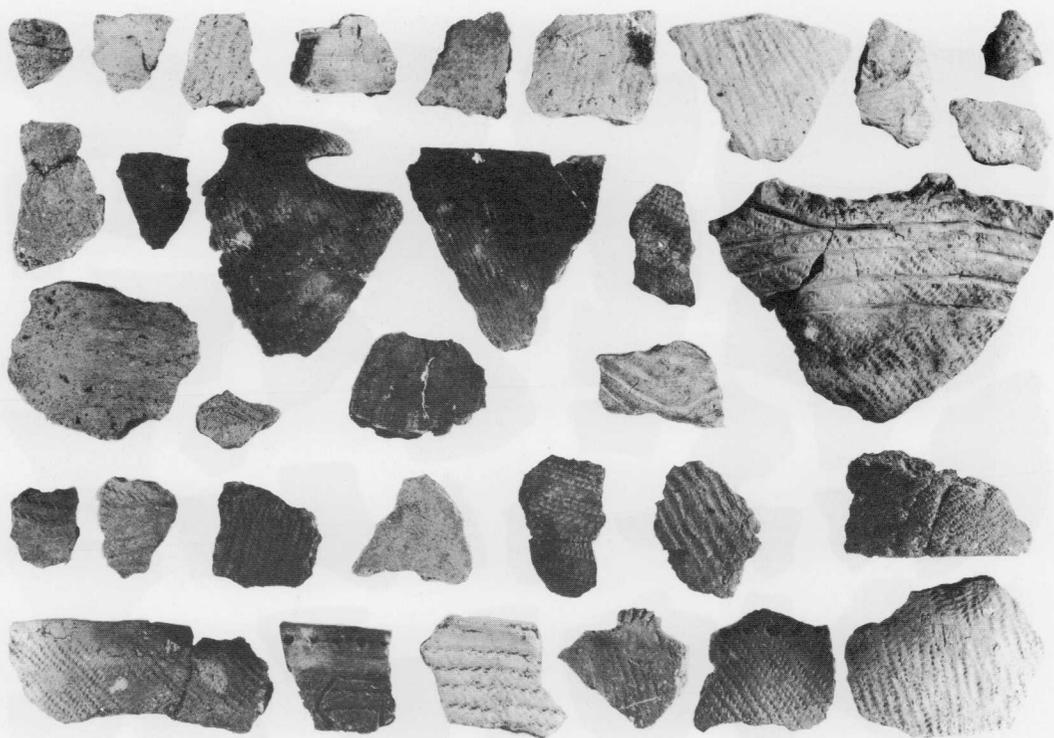
C 遺構出土土器片(1)



A 遺構出土土器片 (2)



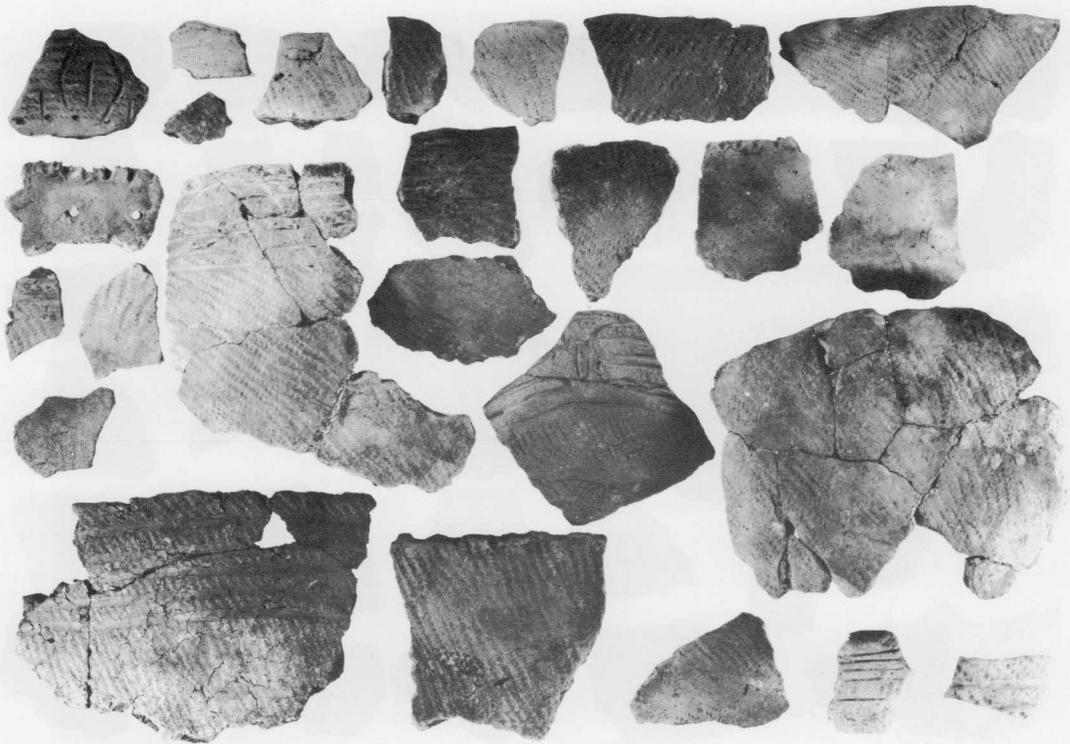
B 遺構出土土器片 (3)



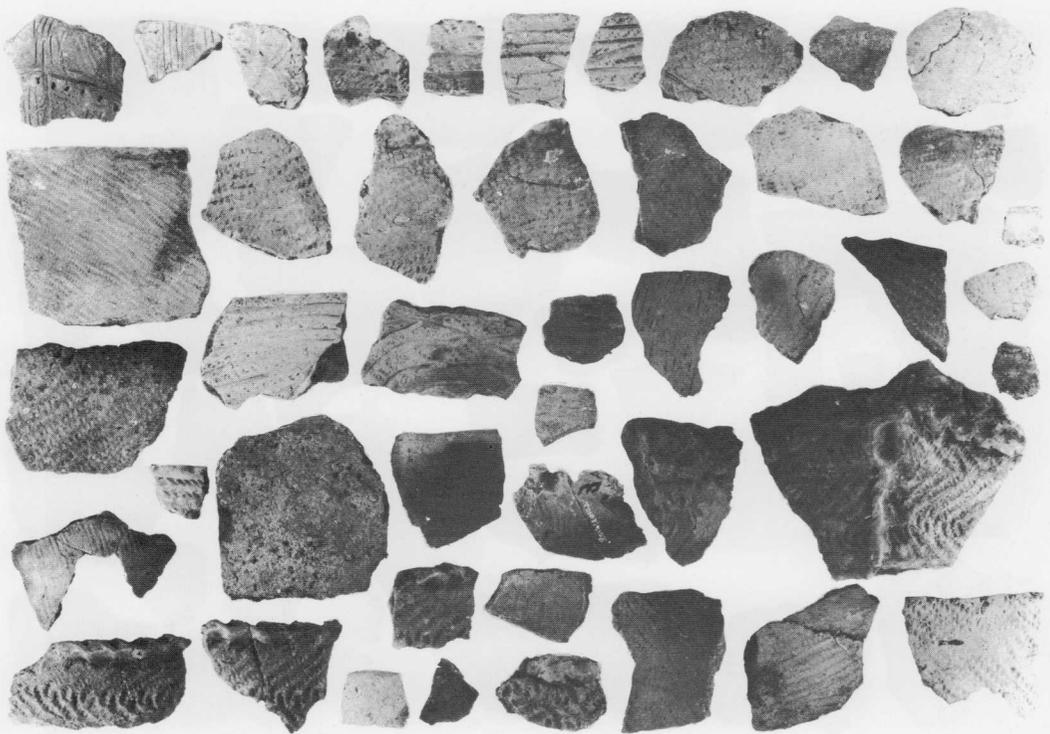
A 遺構出土土器片 (4)



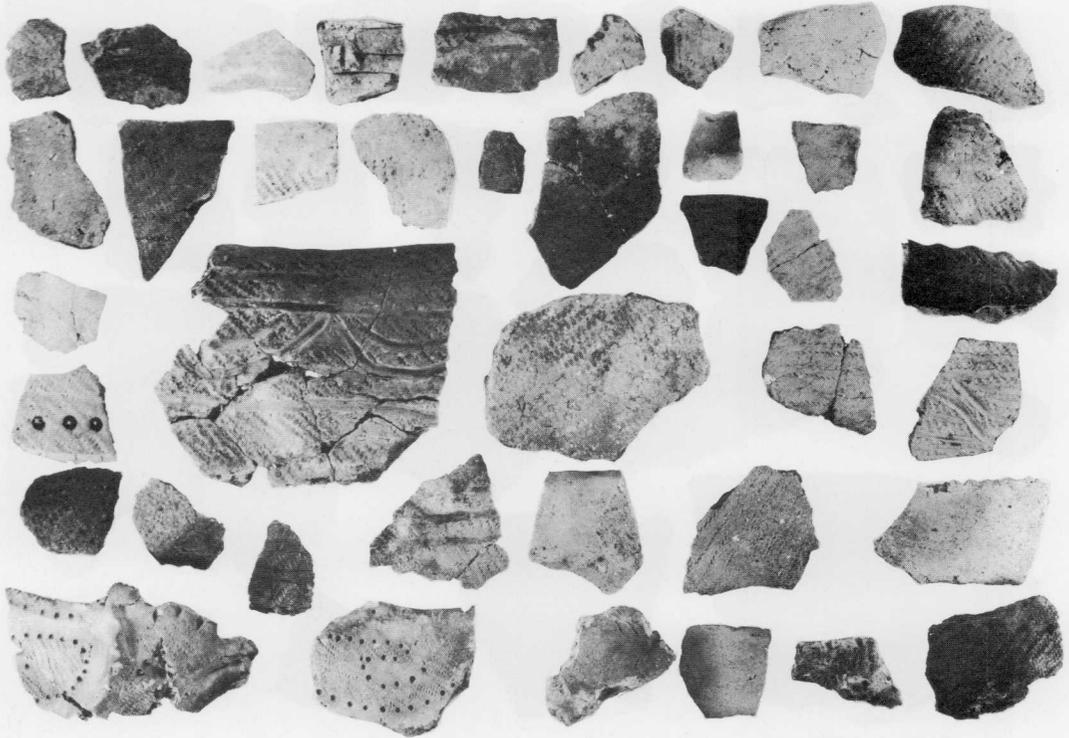
B 遺構出土土器片 (5)



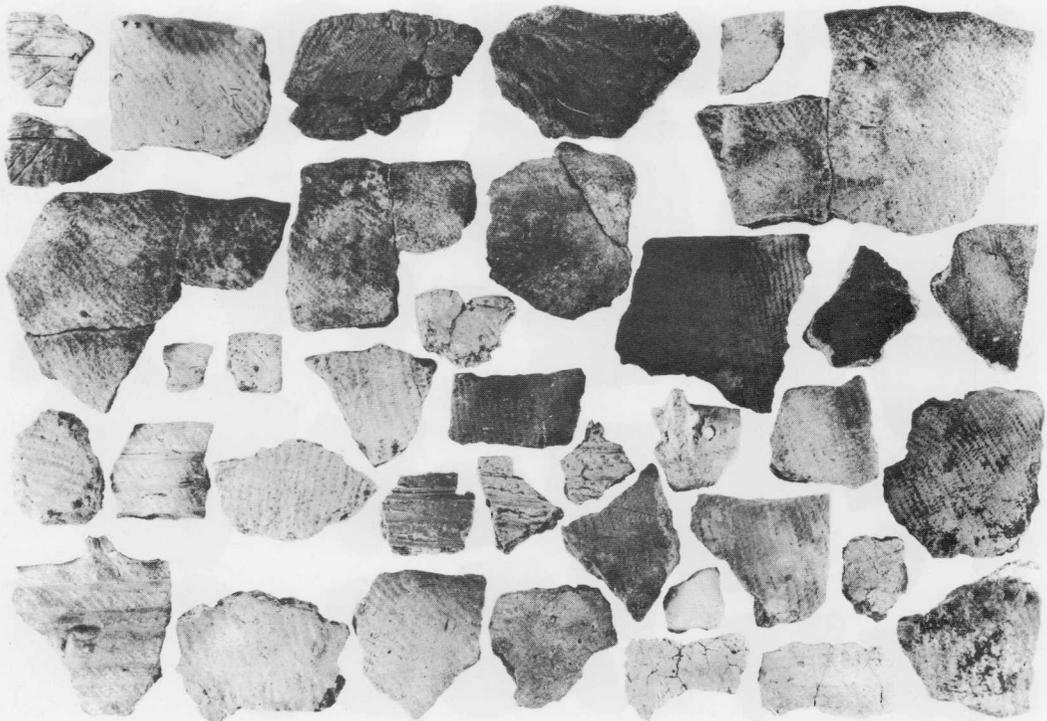
A 遺構出土土器片 (6)



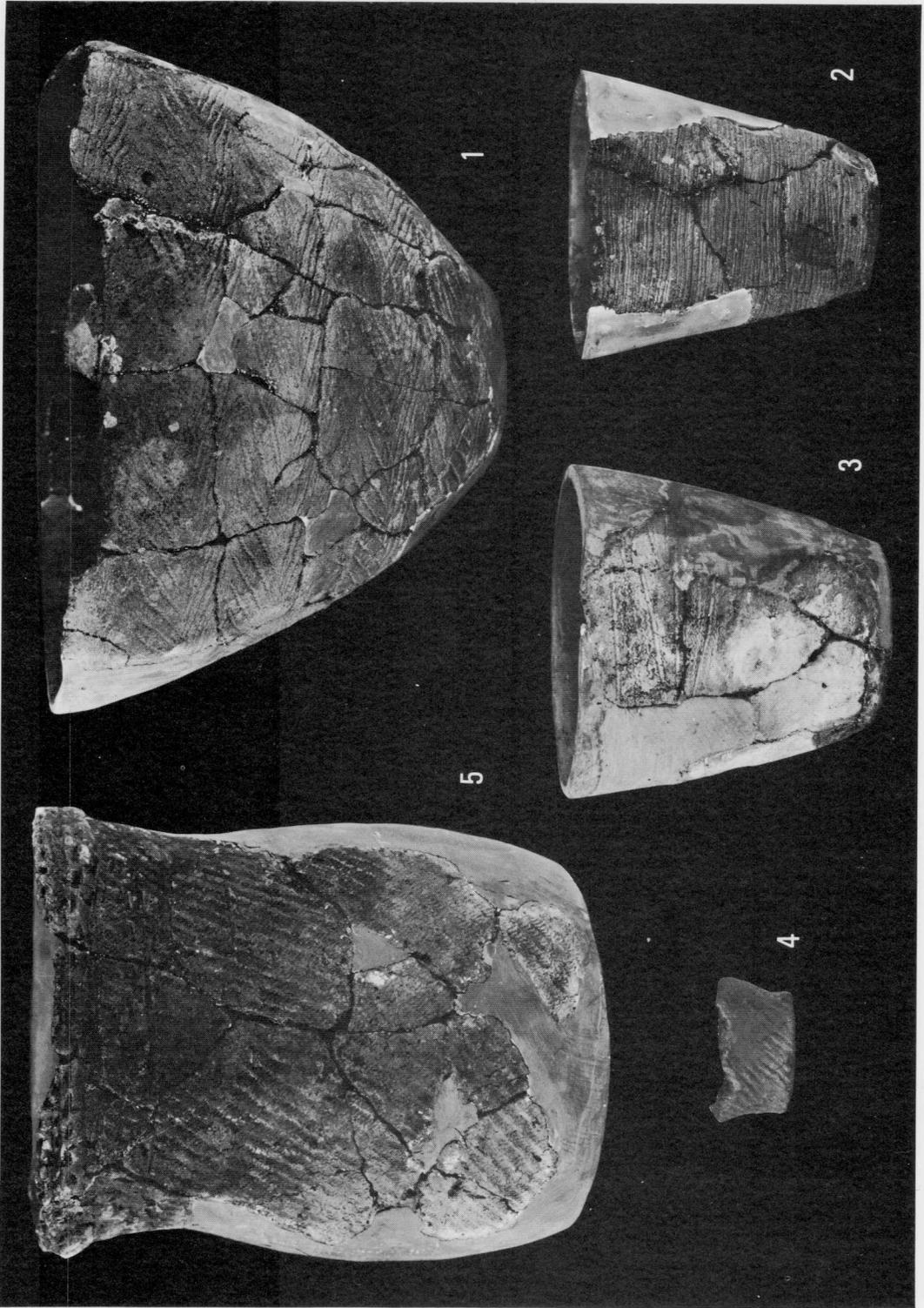
B 遺構出土土器片 (7)



A 遺構出土土器片 (8)

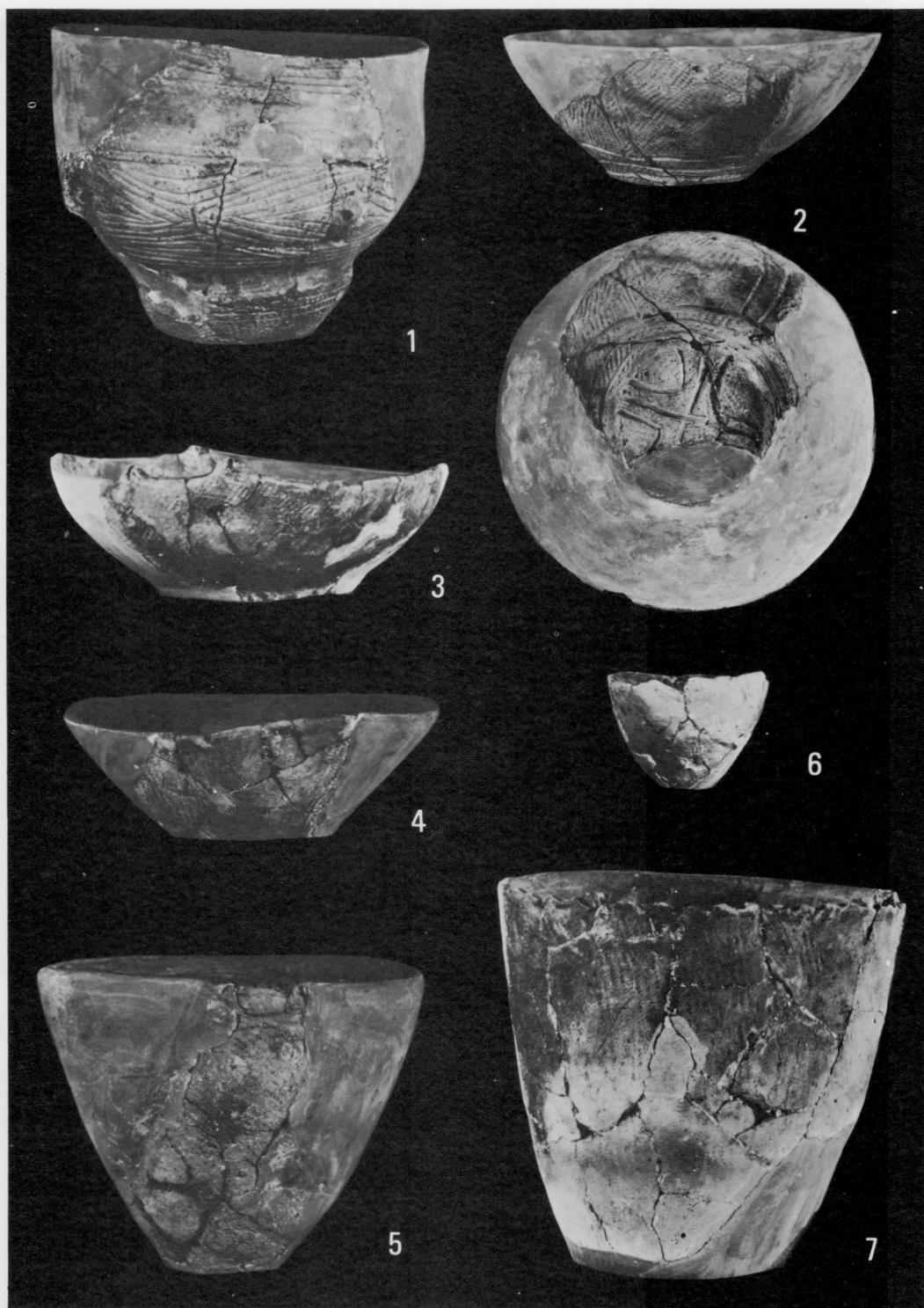


B 遺構出土土器片 (9)



遺構および発掘区出土土器(1)(I, II期)

(1:第15号ピット, 2:第76号ピット, 5:第116号ピット, 3, 4:発掘区)



遺構および発掘区出土土器 (2) (Ⅲ期)

(1 : 第 113 号ピット, 2 : 第 34 号ピット, 3 : 発掘区, 4 : 第 28 号ピット,)
(5 : 第 133 号ピット, 6 : 第 88 号ピット, 7 : 第 100 号ピット)



遺構出土土器 (3) (Ⅲ期)

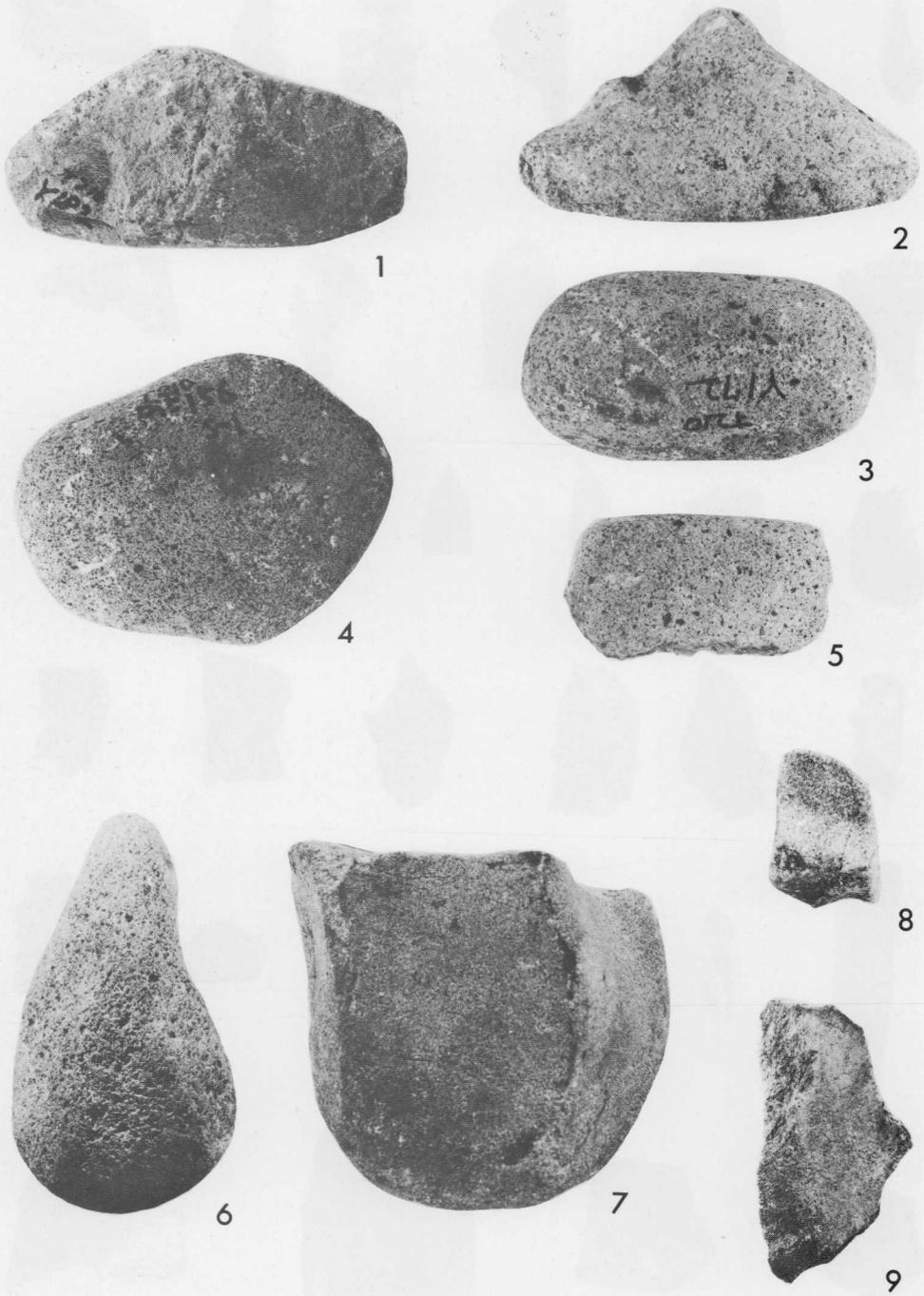
(1, 6: 第19, 21号ピット, 2: 第180号ピット, 3: 第28号ピット, 4: 第98号ピット,
5: 第4号ピット, 7: 第22号ピット, 8: 第16号ピット, 9: 第1号ピット)



遺構出土石器 (1)

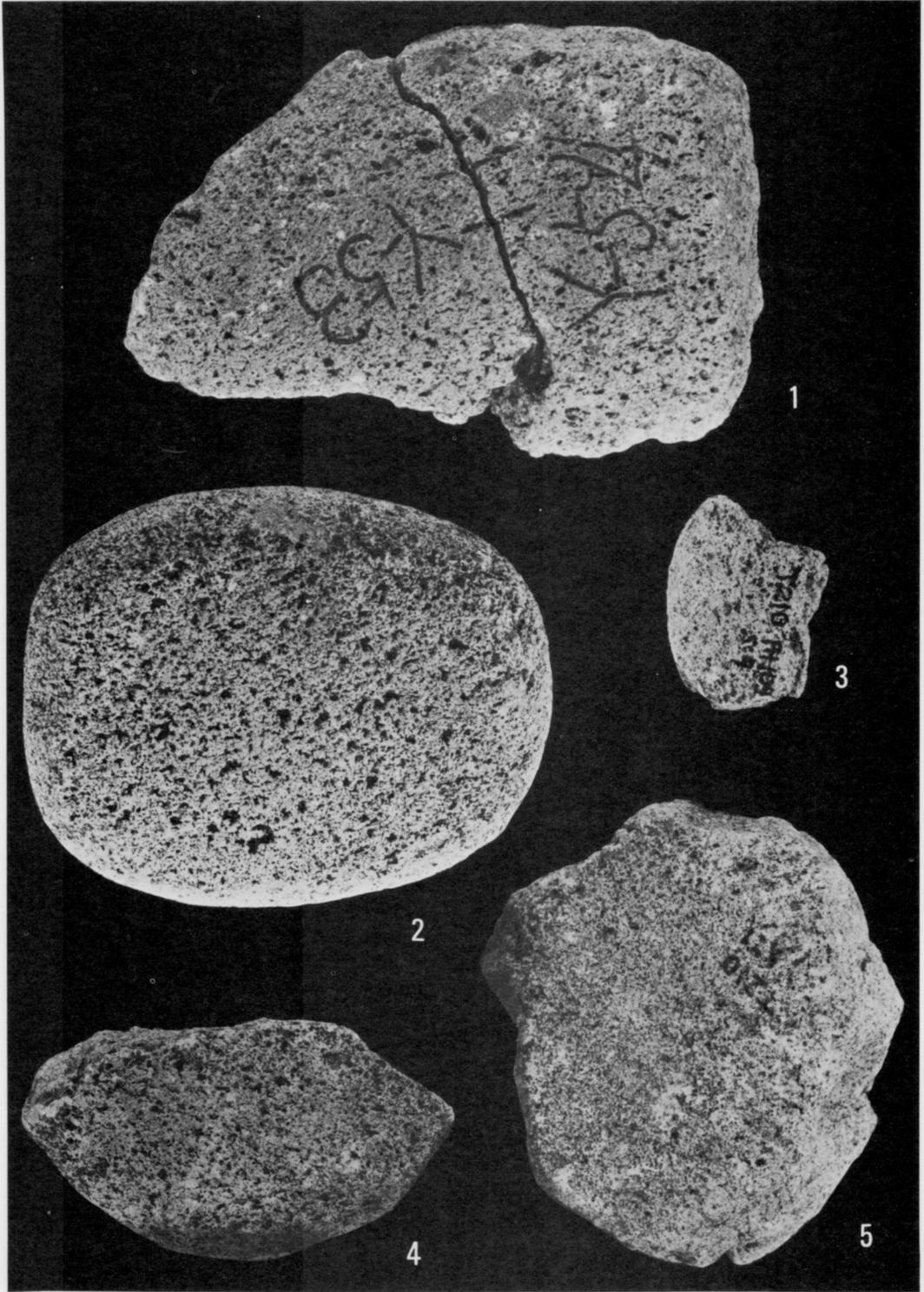


遺構出土石器 (2)



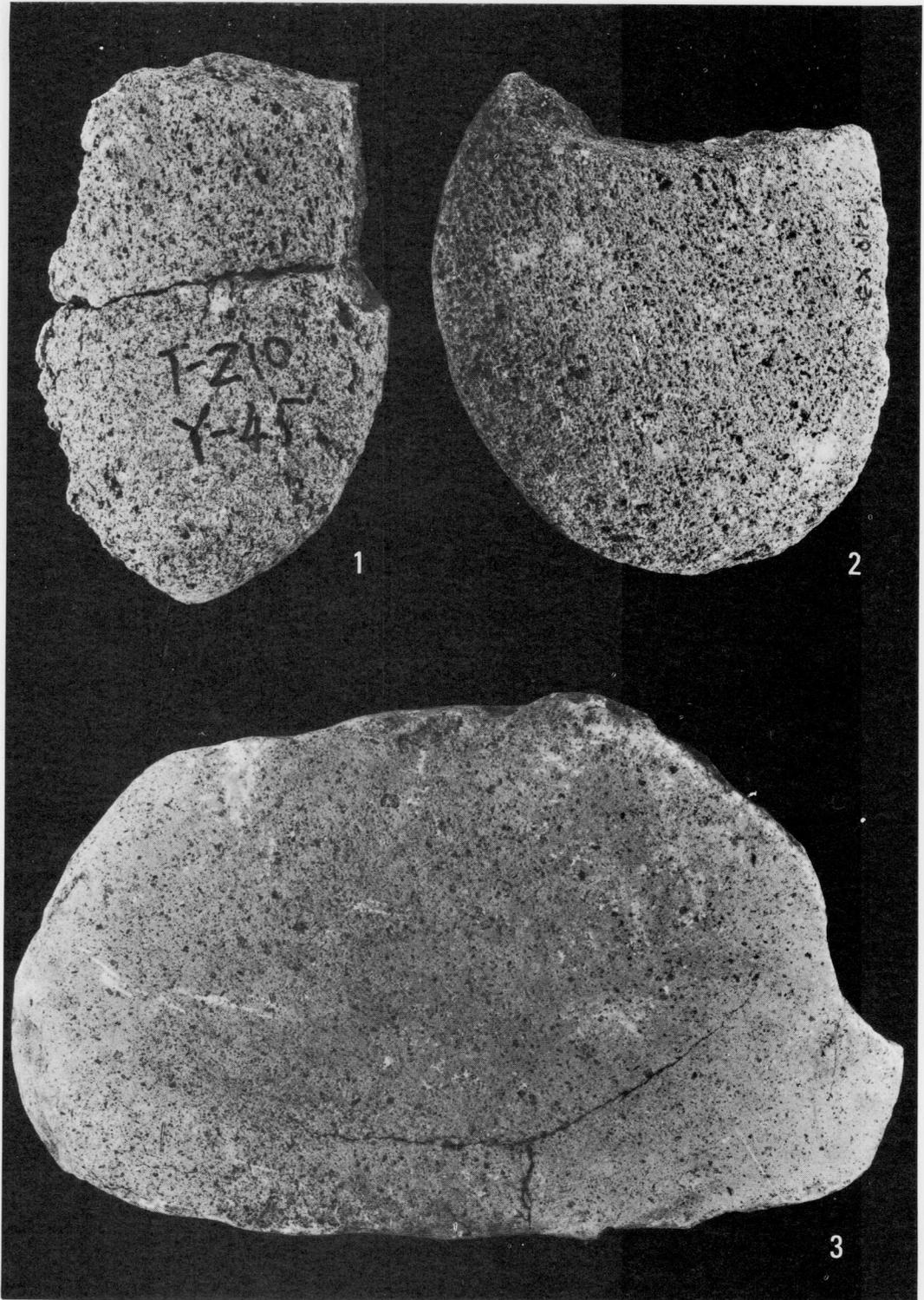
遺構出土石器 (3)

(1 : 第 38 号ビット, 2 : 第 140 号ビット, 3 : 第 39 号ビット,
4 : 第 156 号ビット, 5 : 第 186 号ビット, 6 : 第 15 号ビット,
7 : 第 9 号ビット, 8 : 第 131 号ビット, 9 : 第 190 号ビット)



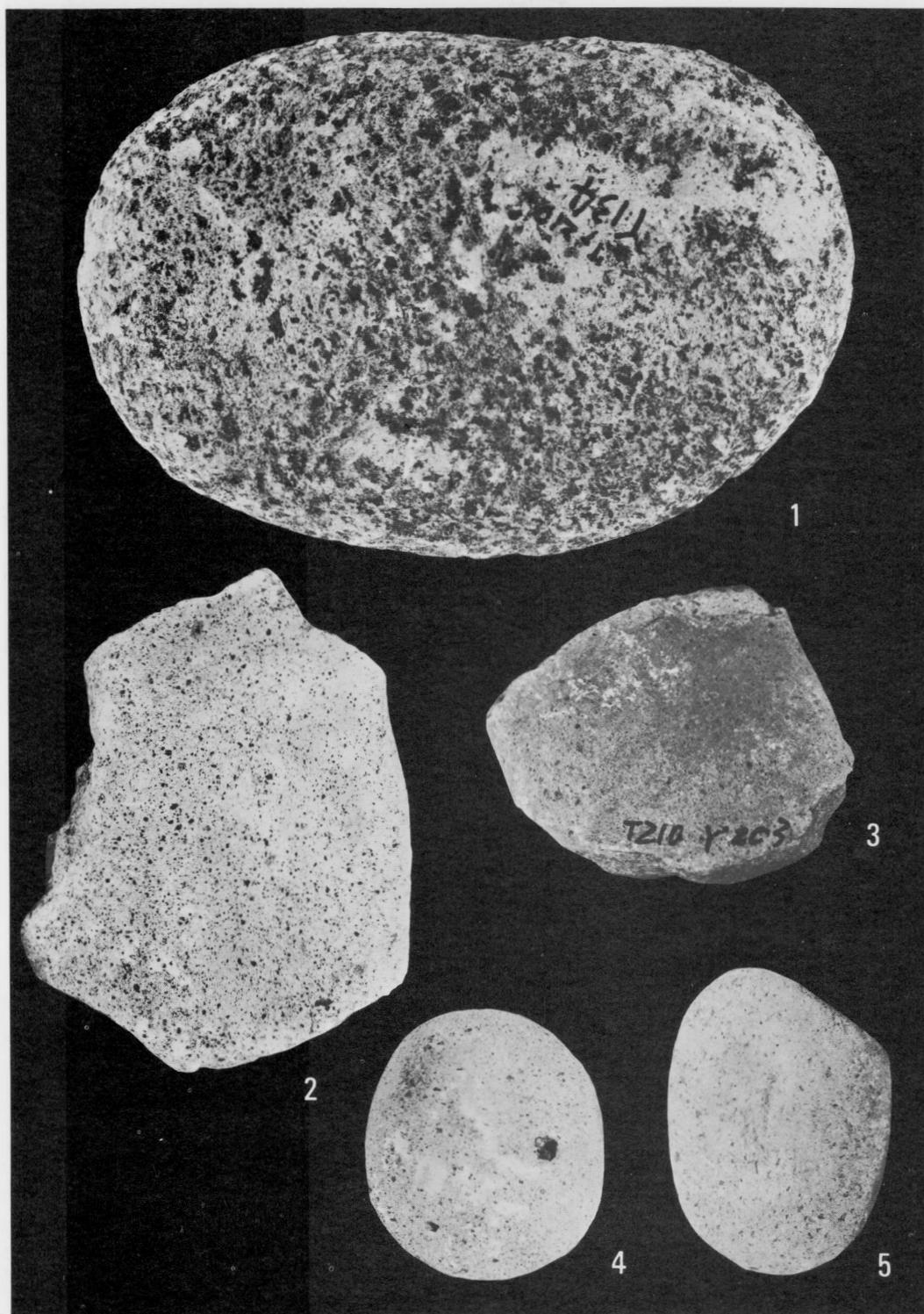
遺構出土石器 (4)

(1 : 第 21 号 ビット , 2 : 第 40 号 ビット , 3 : 第 103 号 ビット ,)
(4 : 第 10 号 ビット 域外 , 5 : 第 25 号 ビット)



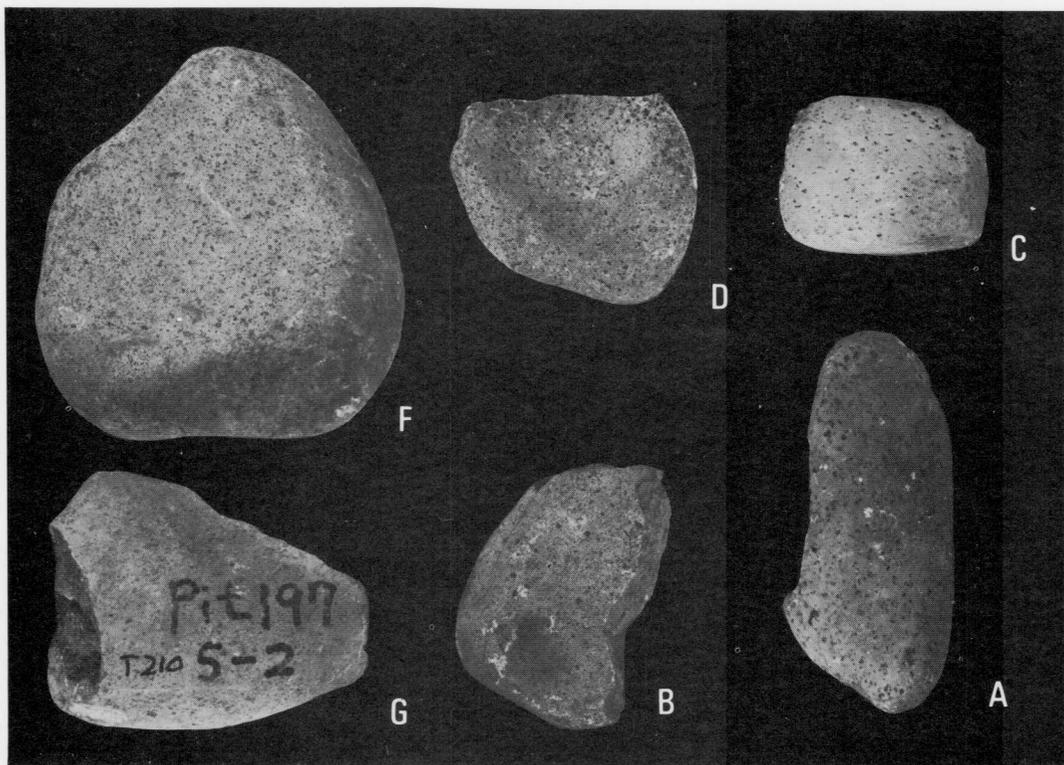
遺構出土石器 (5)

(1: 第21号, 第50号ビット, 2: 第7号ビット, 3: 第167号ビット)

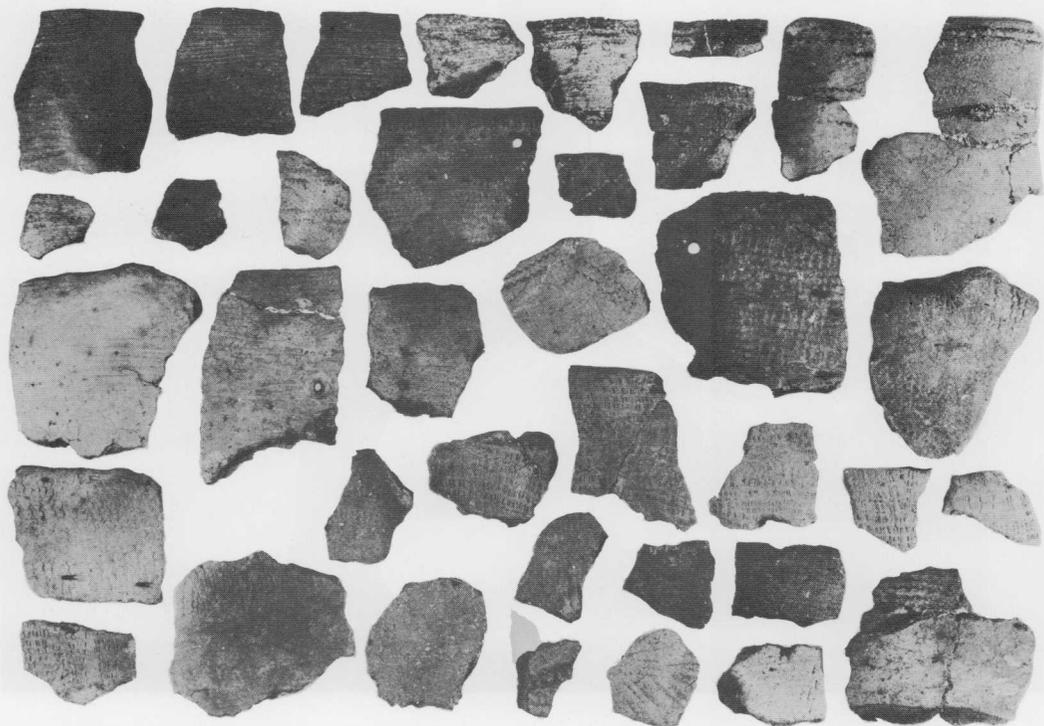


遺構出土石器 (6)

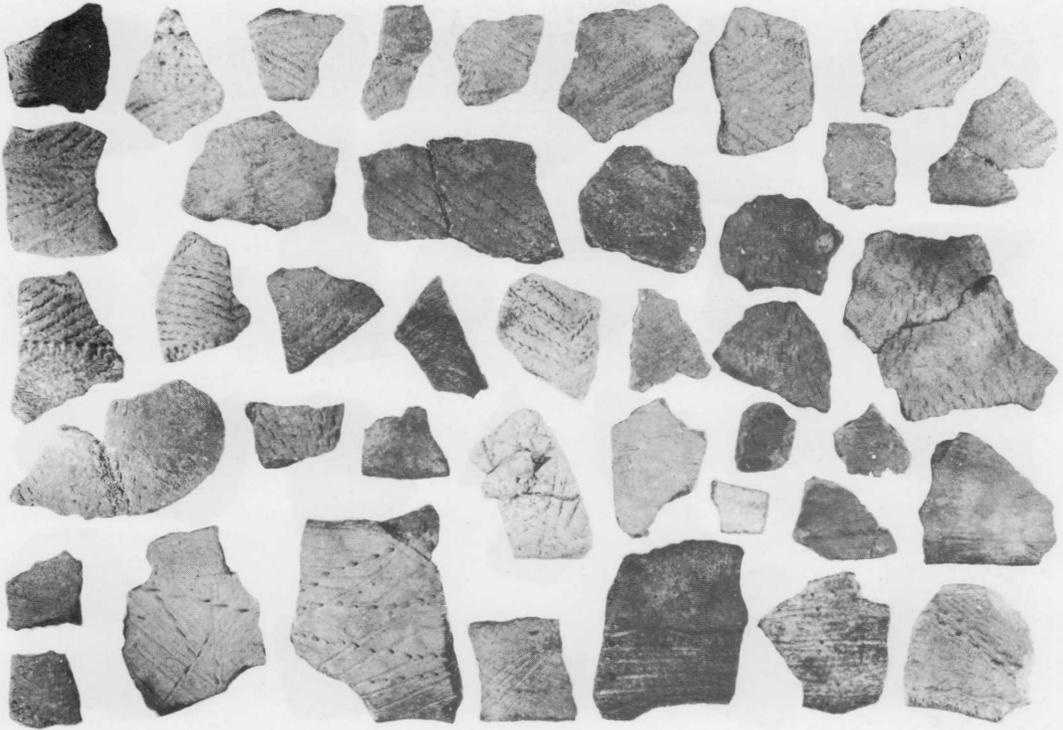
(1 : 第 42 号ビット, 2 : 第 28 号ビット, 3 : 第 40 号ビット (S - 3))
(4 : 発掘区, 5 : 第 81 号ビット)



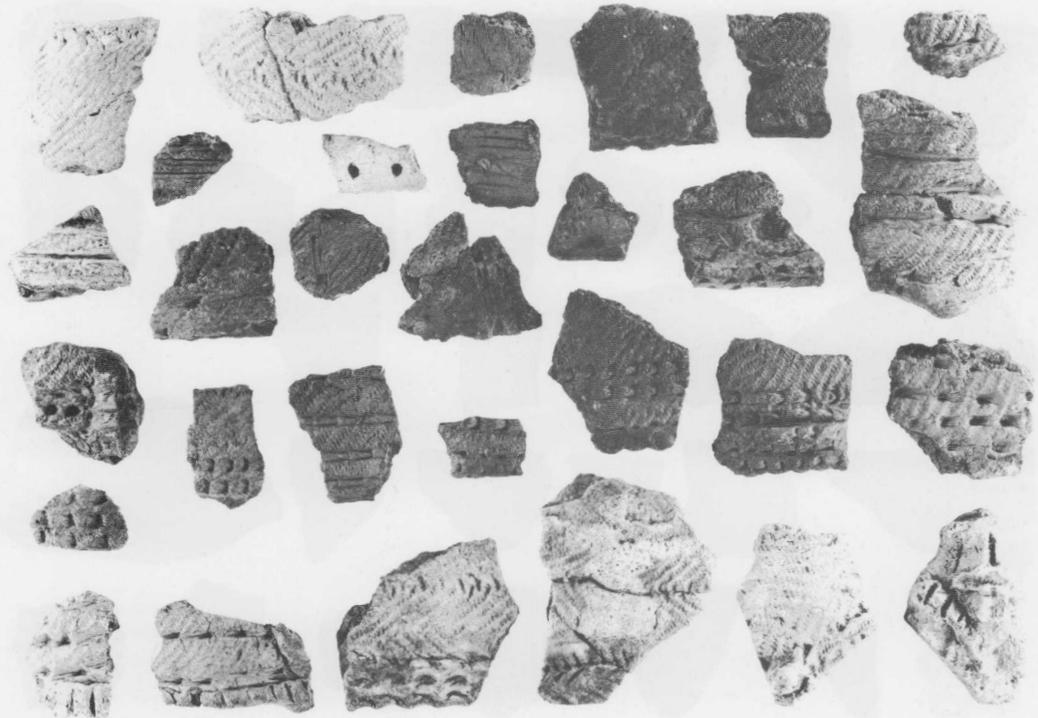
A 遺構出土配石(焼石) (A, B, C, D: 第42, 34, 32, 57号石組)
(F, G: 第113, 197号ビット)



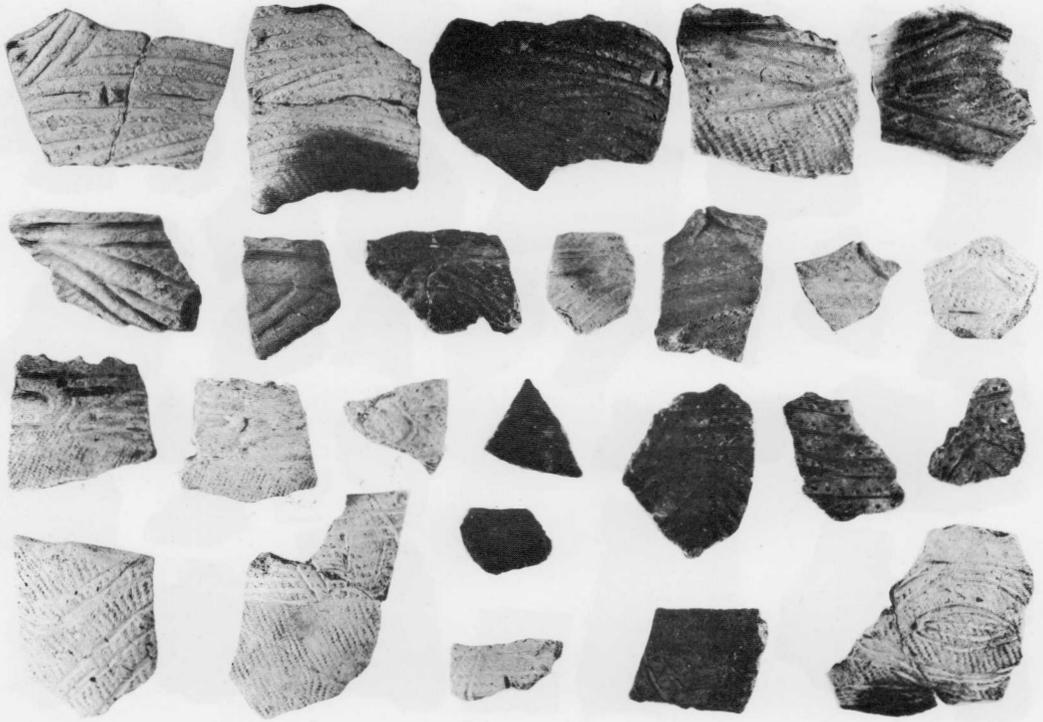
B 発掘区出土土器片(1)(第I群)



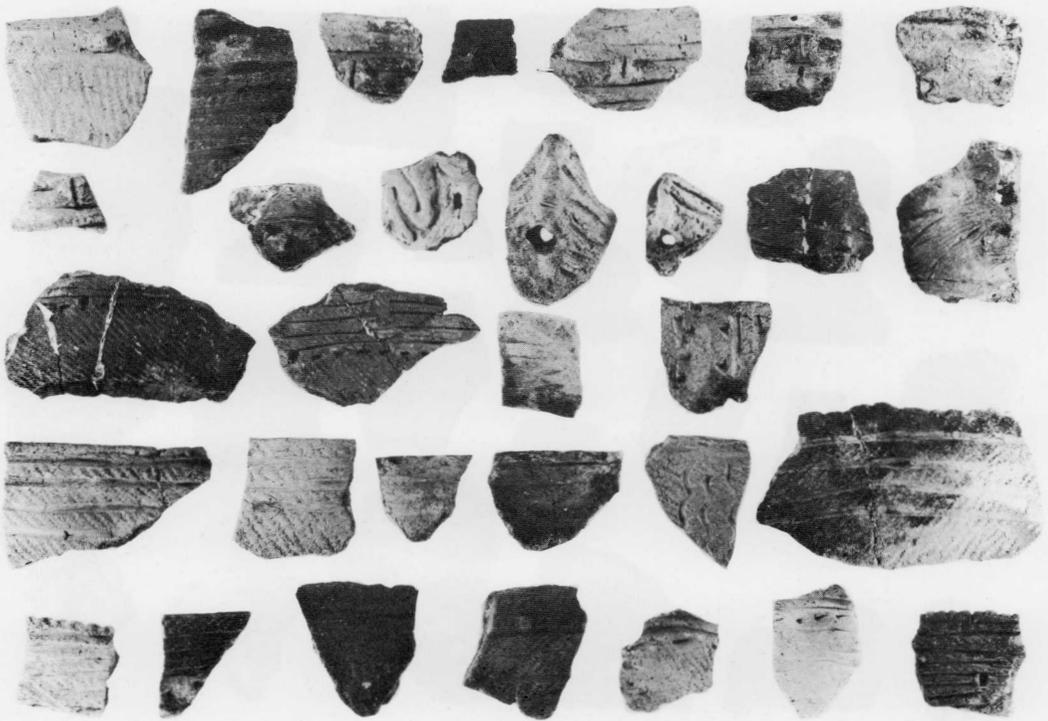
A 発掘区出土土器片 (2) (第I群)



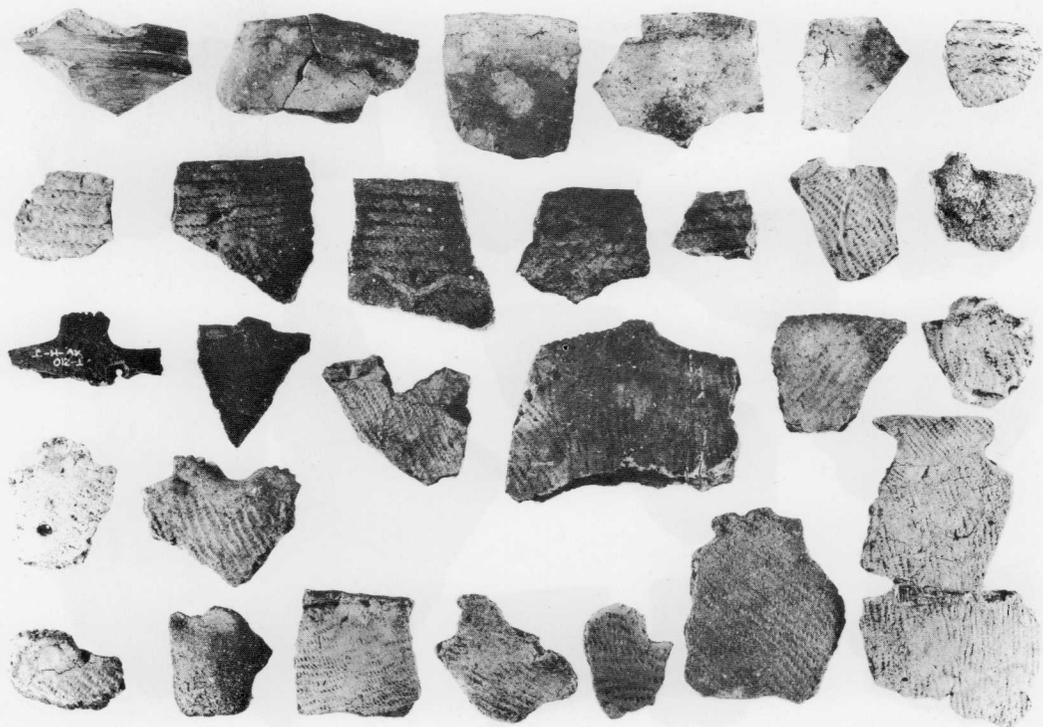
B 発掘区出土土器片 (3) (第II群)



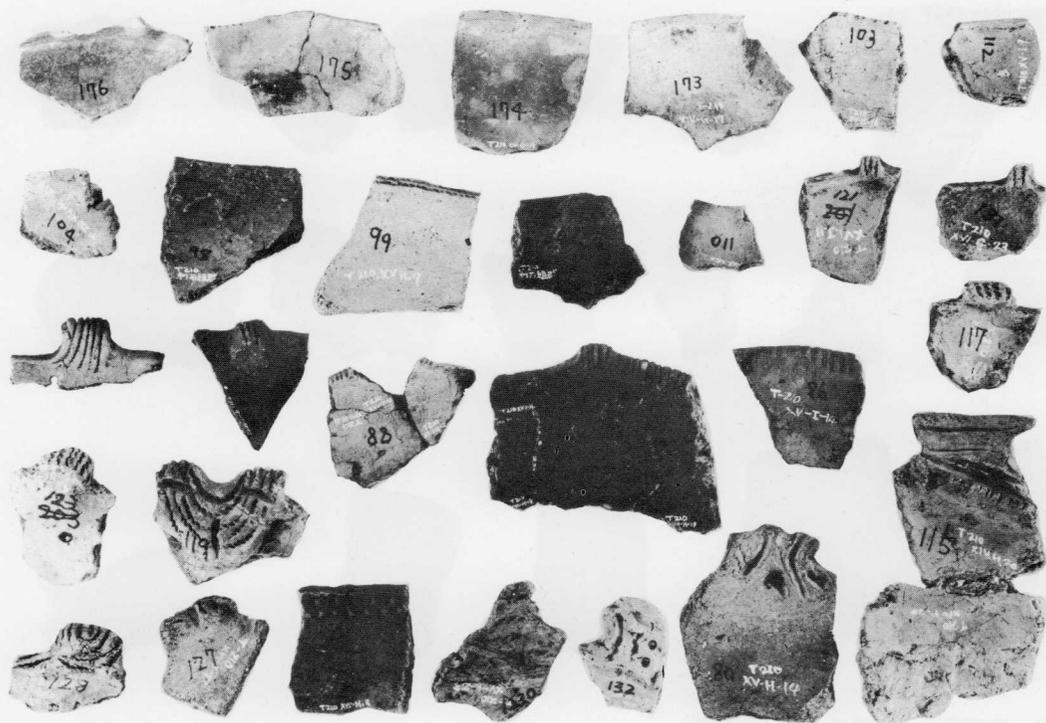
A 発掘区出土土器片 (4) (第Ⅲ群)



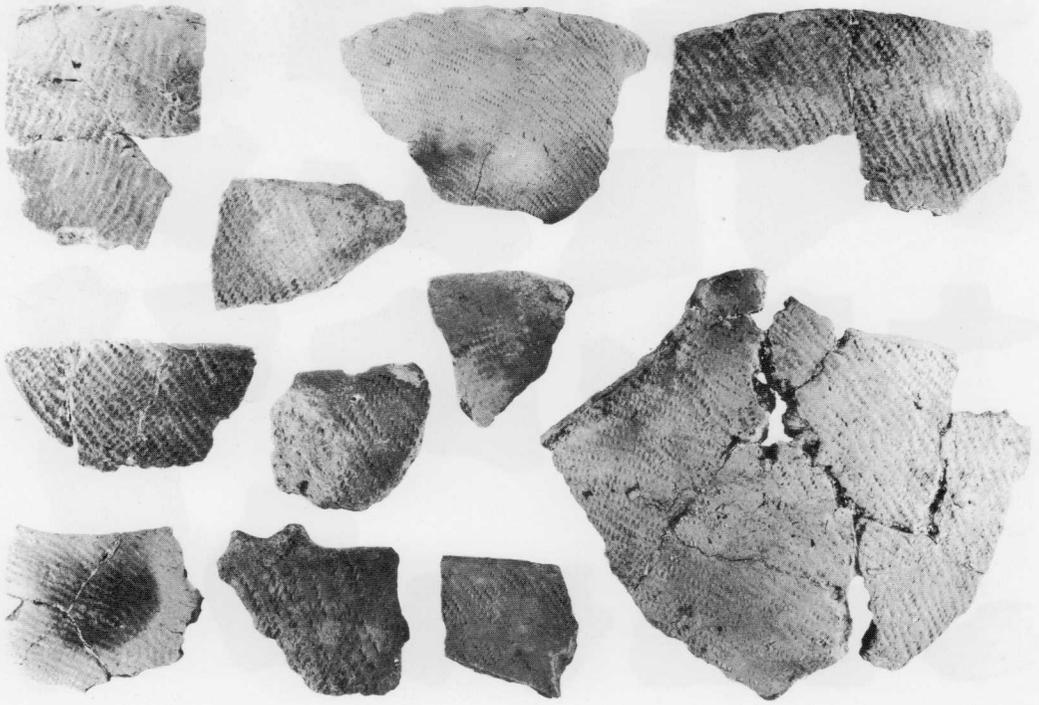
B 発掘区出土土器片 (5) (第Ⅲ群)



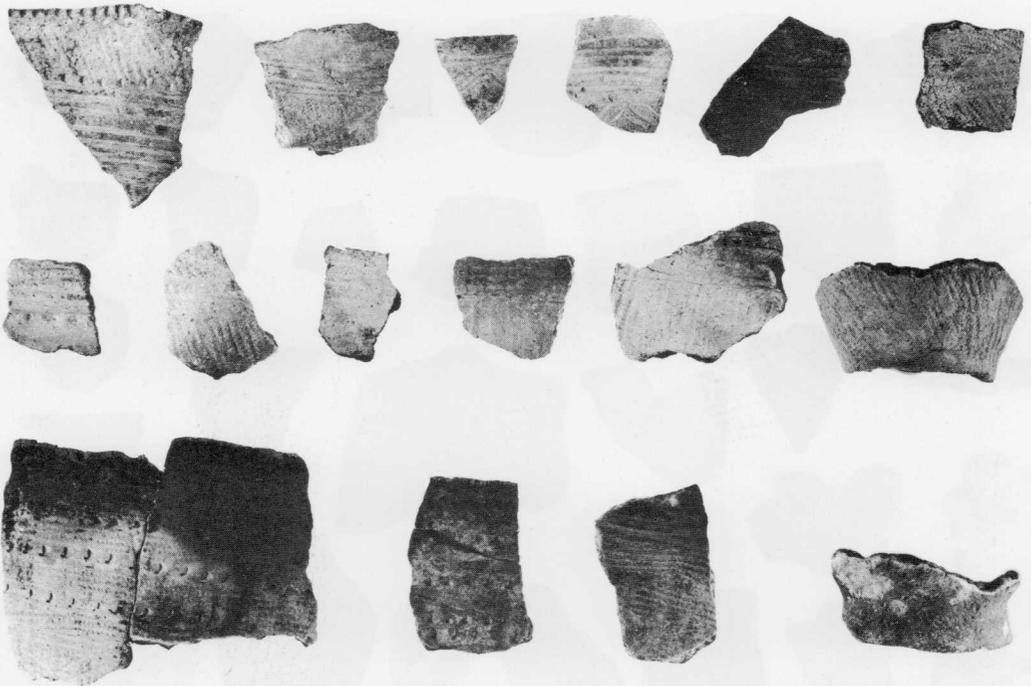
A 発掘区出土土器片 (6) (第Ⅲ群, 表面)



B 発掘区出土土器片 (6)' (第Ⅲ群, 裏面)



A 発掘区出土土器片 (7) (第Ⅲ群)



B 発掘区出土土器片 (8) (第Ⅳ群)

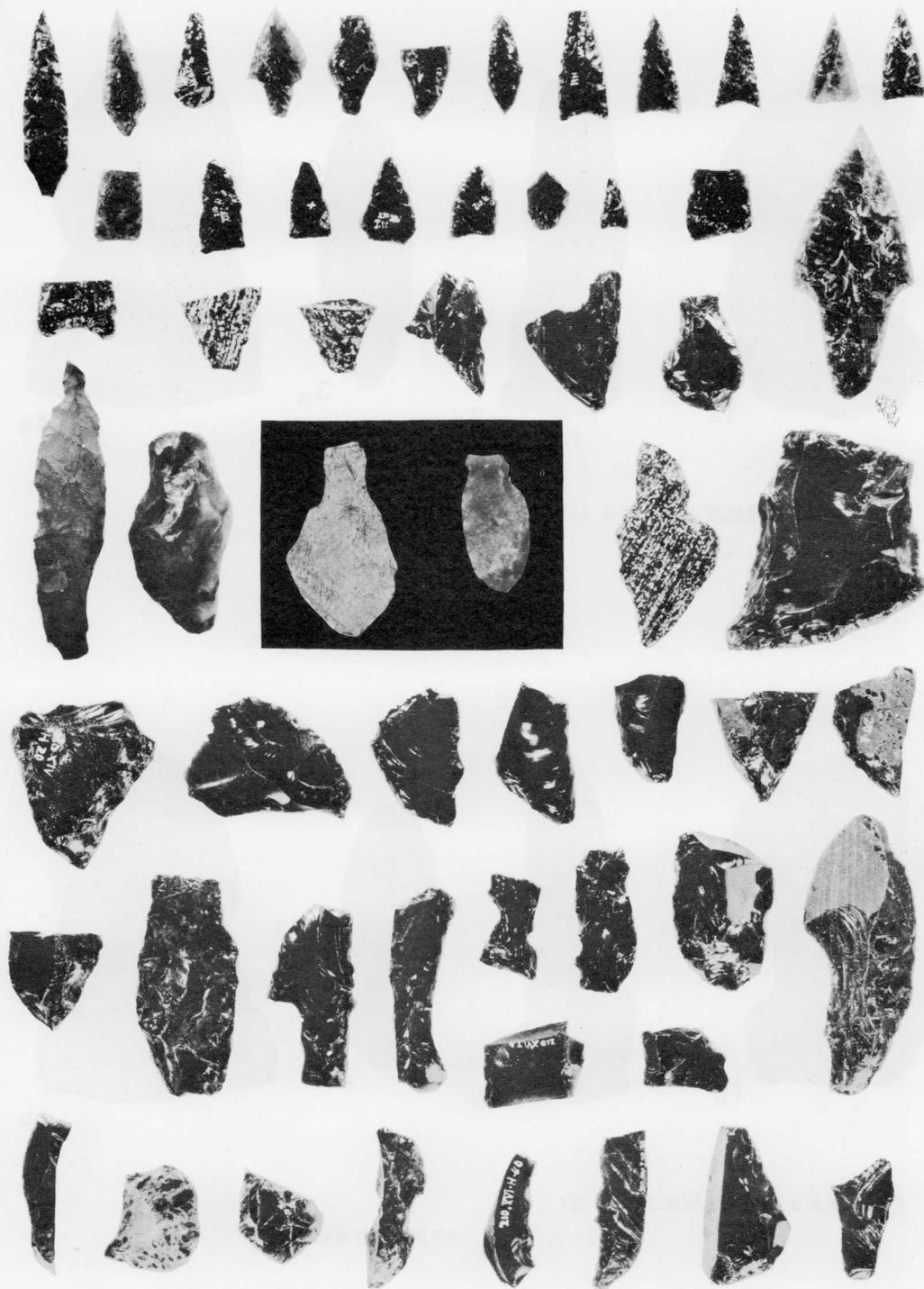


A 遺構および発掘区出土土製品 (1)

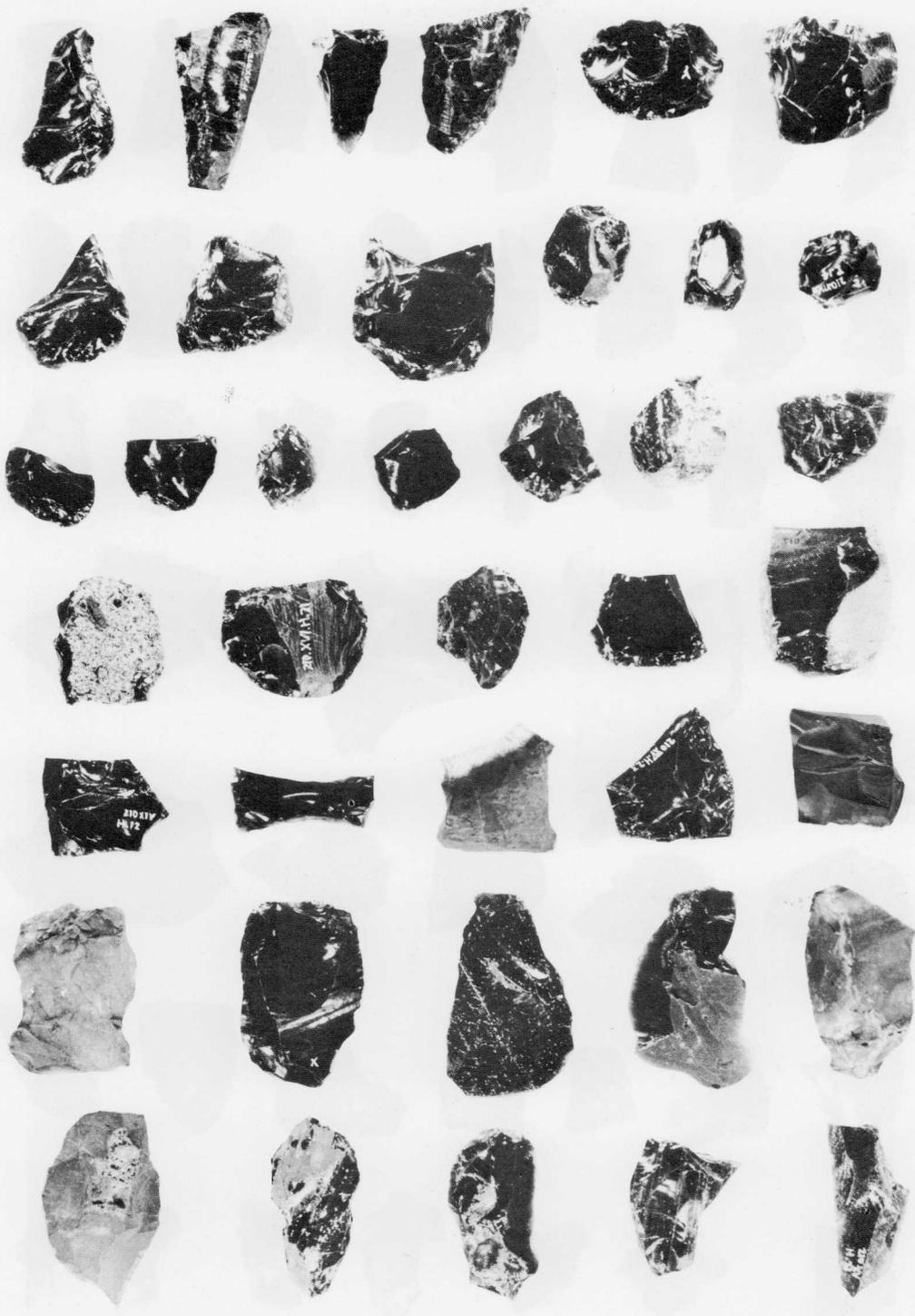


B 遺構および発掘区出土土製品 (2)

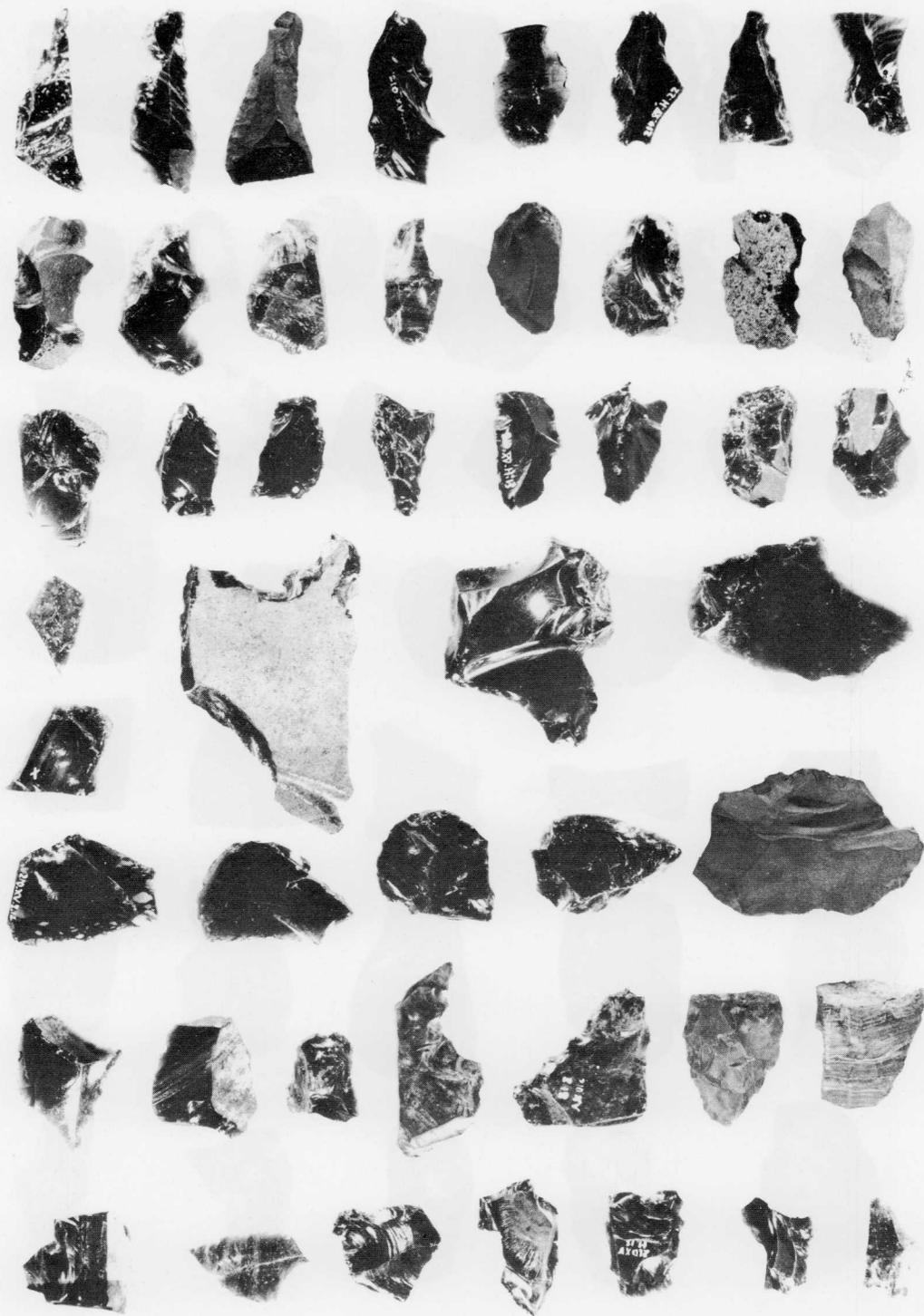
(1～3：発掘区， 4：第19～21号ピット)



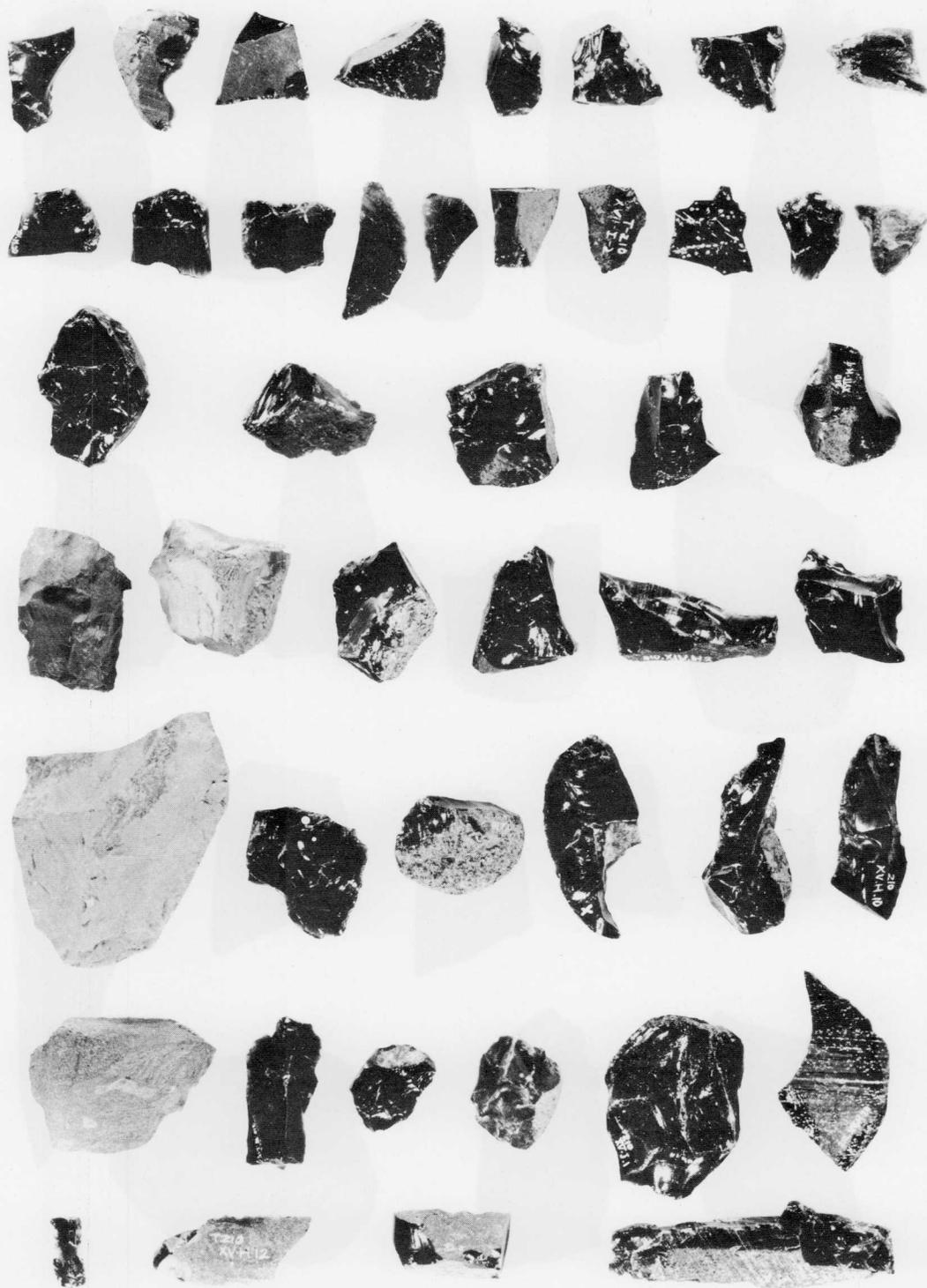
発掘区出土石器 (1)



発掘区出土石器 (2)



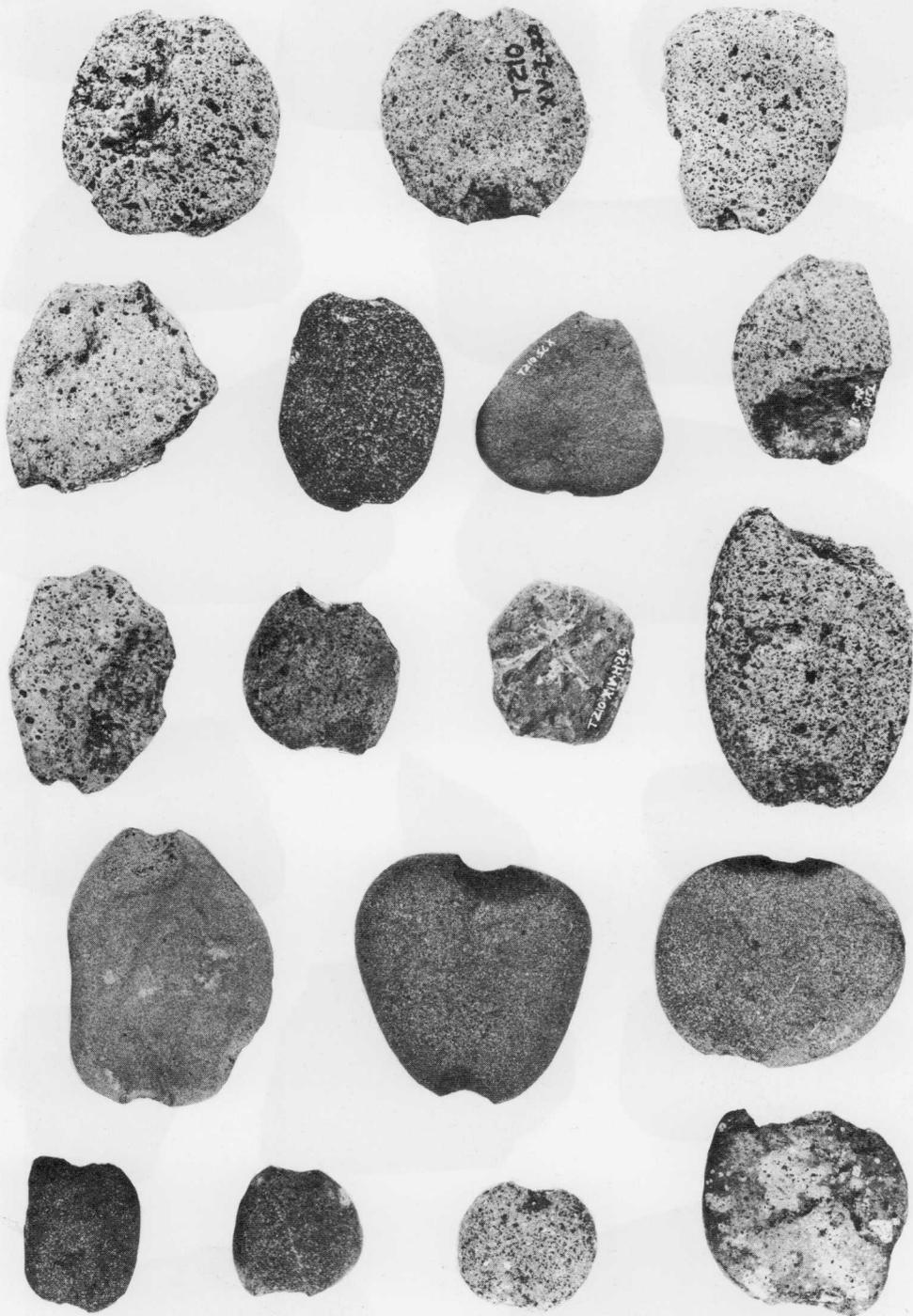
発掘区出土石器 (3)



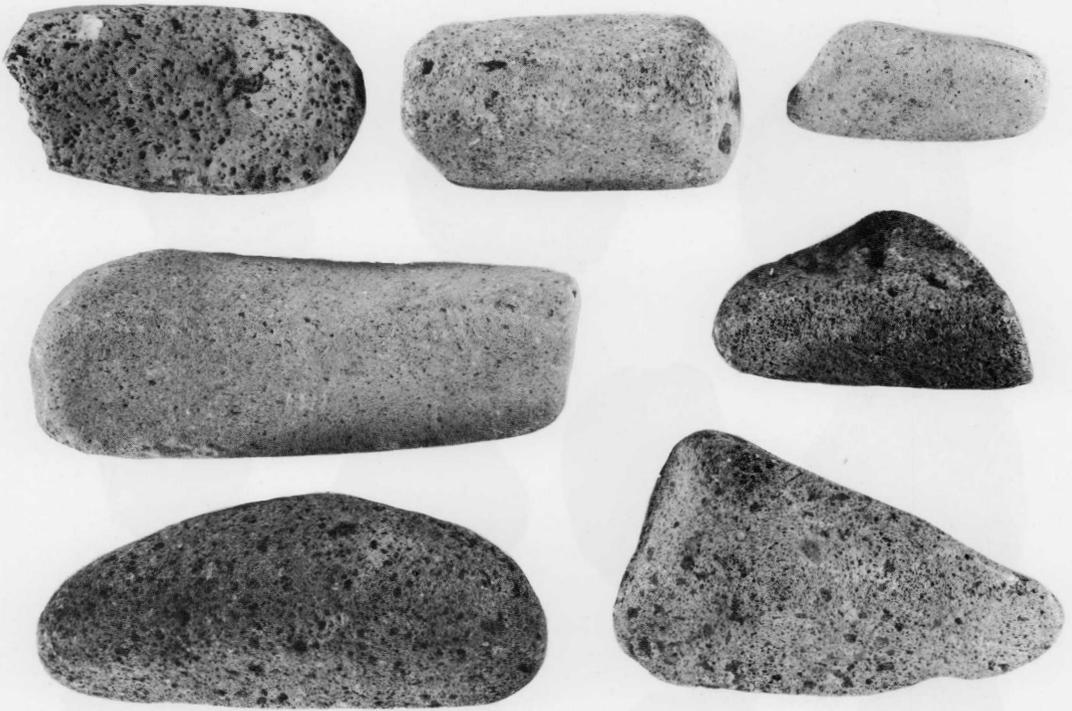
发掘区出土石器 (4)



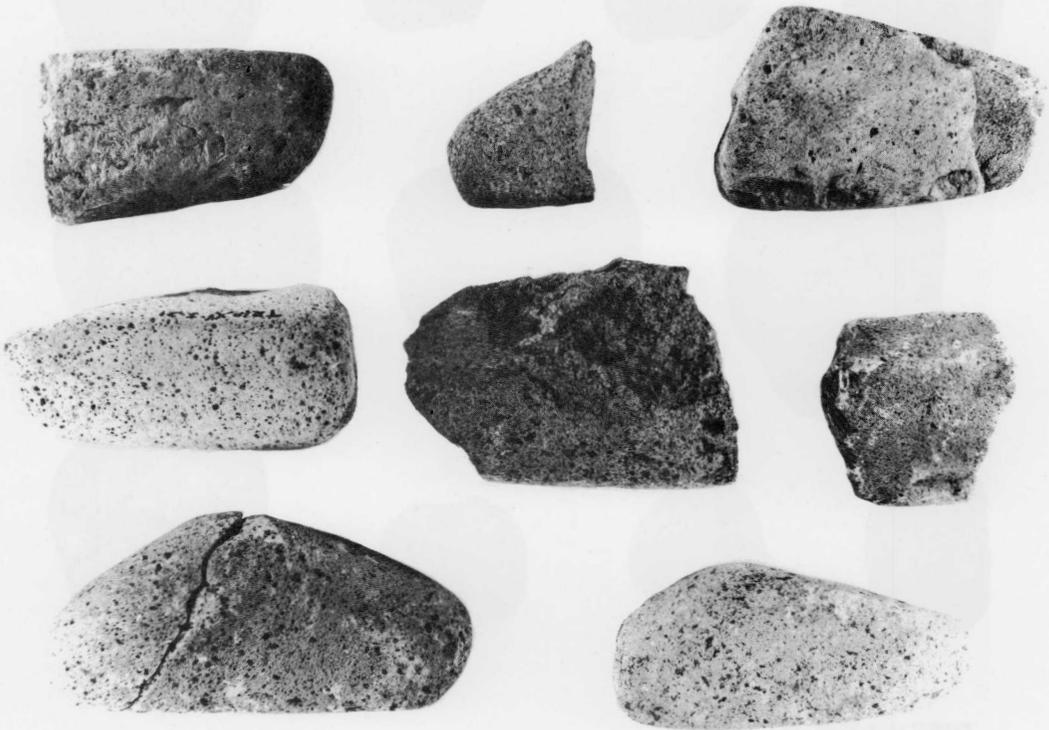
発掘区出土石器 (5)



発掘区出土石器 (6)



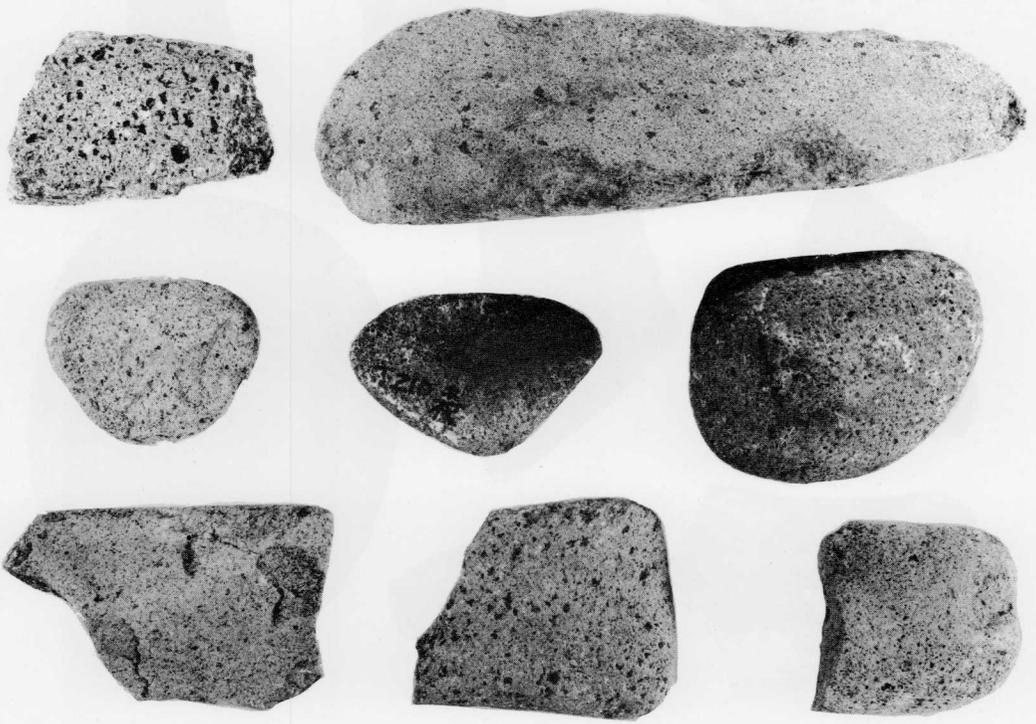
A 発掘区出土石器 (7)



B 発掘区出土石器 (8)



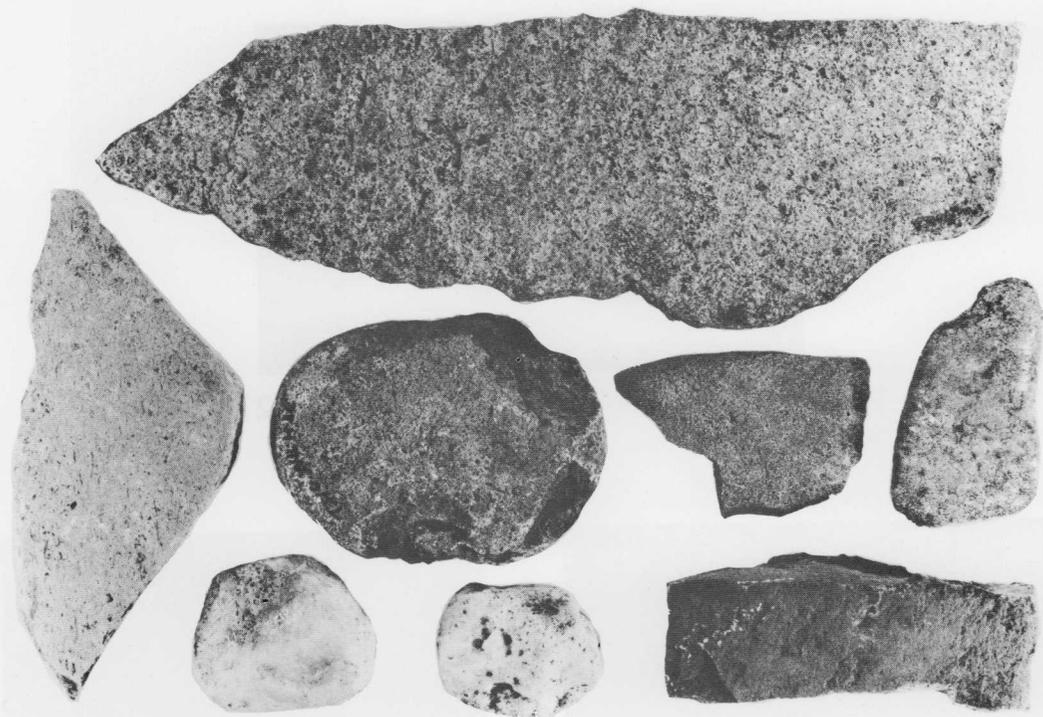
A 発掘区出土石器 (9)



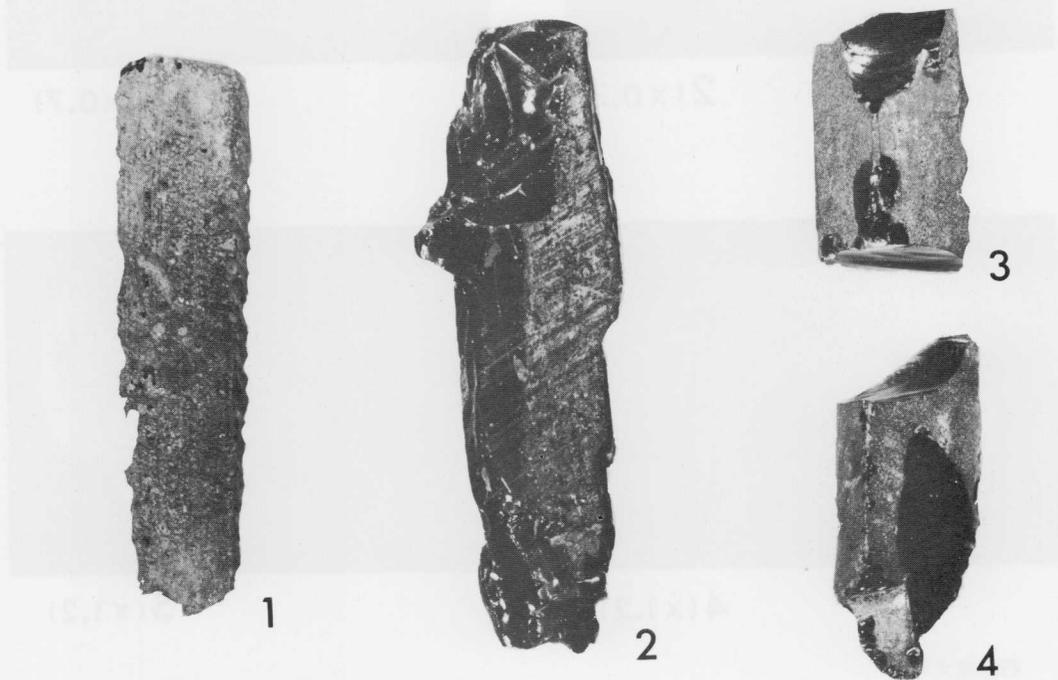
B 発掘区出土石器 (10)



発掘区出土石器 (11)



A 発掘区出土石器 (12)

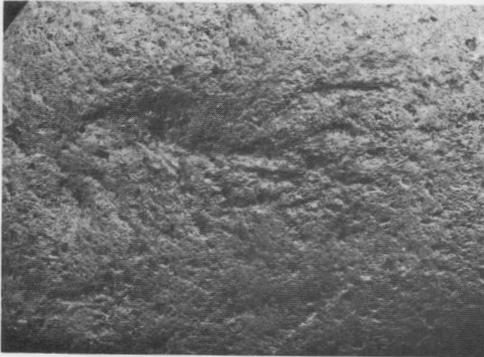


B 発掘区および遺構出土黒曜石棒状原石

(1: 第133号ピット, 2~4: 発掘区)



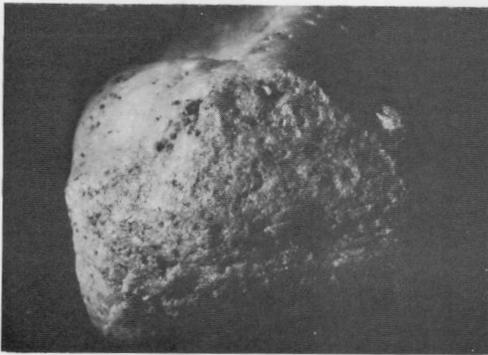
1(x2.2)



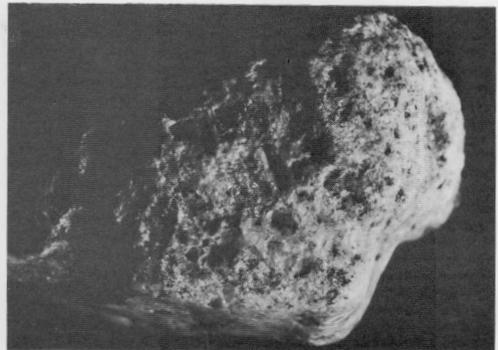
2(x0.7)



3(x0.7)



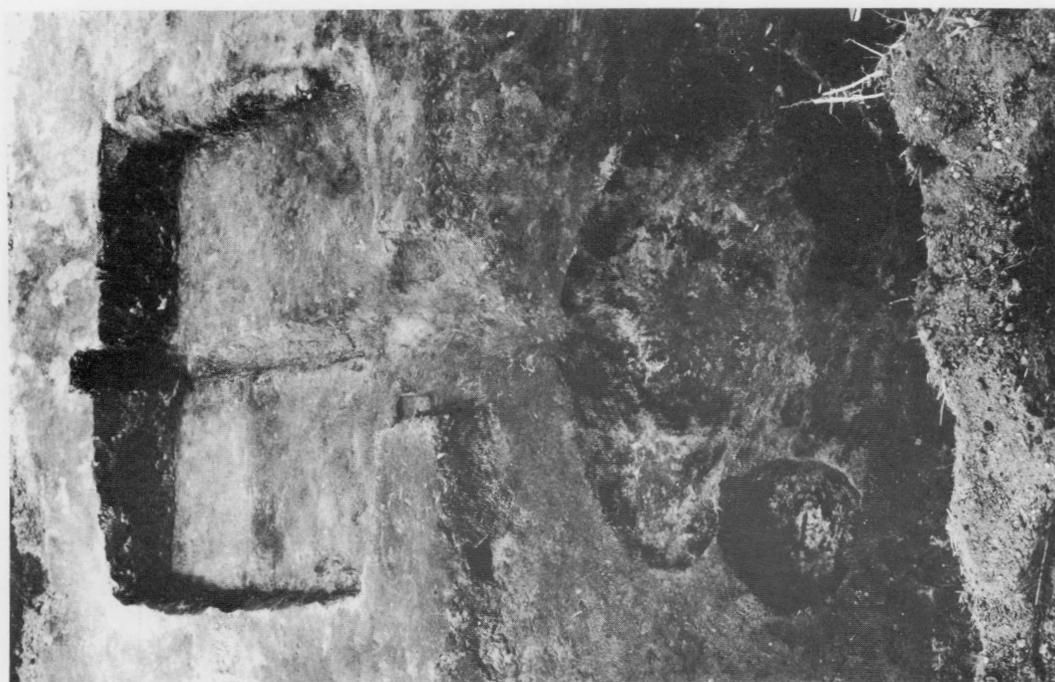
4(x1.2)



5(x1.2)

石器拡大写真

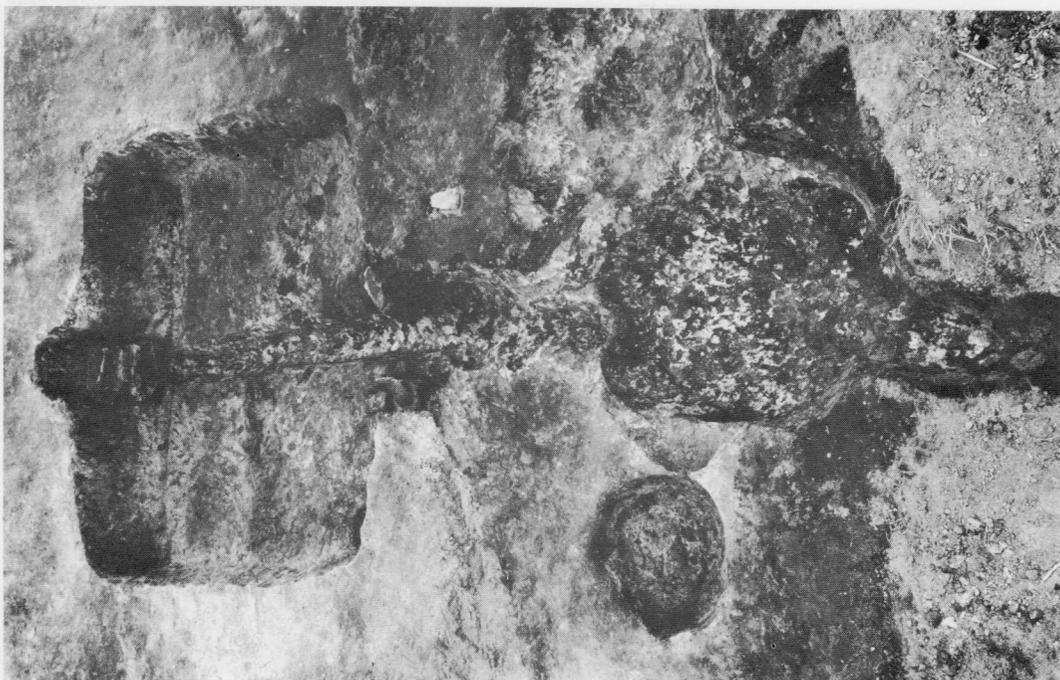
(2 : 第 81 号ピット (S - 1) , 3 : 第 40 号ピット (S - 3) 1 , 4 , 5 : 発掘区)
(1 : 第 71 図 206 , 4 : 5 : 第 77 図 271 , 172)



A 第2号炭焼窯址(1)(全景)



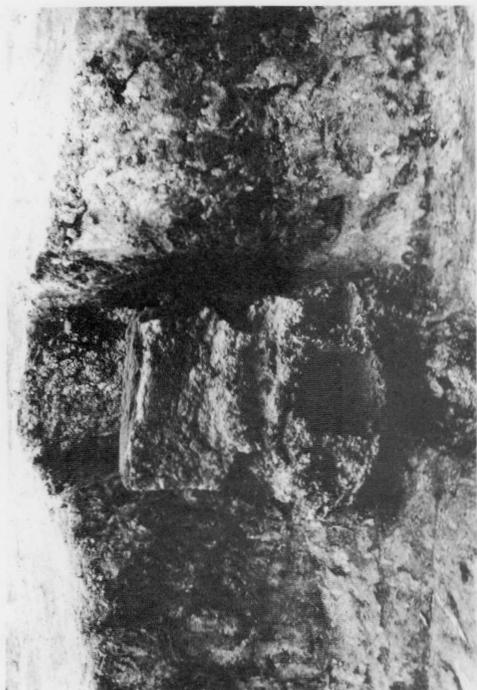
B 第2号炭焼窯址(2)(炊き口から煙道を望む)



A 第1号炭焼窯址(1)(全景)



B 第1号炭焼窯址(2)(吹き口から煙道を望む)



A 第1号炭焼窯址煙道(1)(正面より)



B 第1号炭焼窯址煙道(2)(上より)



C 第1, 2号炭焼窯址全景(南より)

札幌市文化財調査報告書 XIII

T 210 遺 跡

昭和51年 7 月24日印刷

昭和51年 7 月31日発行

発行者 札幌市教育委員会

札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 (協) 高速印刷センター

札幌市中央区北4条西3丁目

北洋相銀ビル6F

TEL 271-5101